博士論文

「老年的超越」をめぐる文化・心理・社会的関連要因に関する研究

── 「東洋的見方」が及ぼす影響についての分析と考察 ──

京都府立大学大学院
公共政策学研究科福祉社会学専攻

奥 村 幸 雄

要 約

本研究の目的は、高齢化が世界でも類をみない速さで進む日本において、西欧で提唱された老年的超越の考え方が日本人高齢者の「幸福な老い」の実現にどのような影響（効果）を及ぼすのか、文化的・心理的・社会的な視点をふまえて検討することである。

そこで、本研究における課題を、**文献検討**（Tornstam の老年的超越理論、日本の先行研究、≪東洋的なるもの≫の概念検討）をふまえて、**実証研究**（量的研究、質的研究）では、(1)日本版老年的超越質問紙改訂版（JGS-R）の再現性の検証、(2)老年的超越が幸福感に及ぼす影響の分析、(3)老年的超越の関連要因、中でも東洋文化的な要因による影響の分析、(4)当事者研究の視点に立った分析、といった四つの事項に設定した。

文献検討では、*“Gerotranscendence: A Developmental Theory of Positive Aging”*（Tornstam, 2005）に基づき理論の起源や枠組み、老年的超越の測定尺度、関連要因について整理するとともに、この理論を日本人に適用するにあたっての問題点や留意点について検討した（第１章）。また、日本における老年的超越の質的研究については、Tornstam の老年的超越理論の下位次元との関連、量的研究については、本研究のテーマと関連する論文を中心に、その成果の類似点・相違点や未検討事項について整理し、現時点での老年的超越研究の到達点を明らかにした（第２章）。さらに、≪東洋的なるもの≫の概念検討では、老い・東洋文化・ユング心理学に関する書籍から、「東洋」のイメージを象徴するフレーズを抽出し、KJ 法を用いて「東洋的な見方」の概念構造を検討した。これに基づき質問紙調査における設問項目や質問文、また、インタビュー調査におけるコード（概念的カテゴリー）の検討を行った（第３章）。

実証研究では、量的研究については質問紙調査、質的研究についてはインタビュー調査を実施した。調査対象者は、主として京都府在住の 60 歳以上の高齢者 363 人（高齢者大学受講生 294 人、その他 69 人）とし、有効回答数は 251 人（男性 140 人、女性 111 人、平均年齢 75.3 歳）であった。うち 17 人の後期・超高齢者（男性 7 人、女性 10 人、平均年齢 85.1 歳）は、質問紙調査に加えてインタビュー調査を行った。

老年的超越の測定尺度としては JGS-R を、主観的幸福感については PGC モラール・スケールを用いたが、東洋的見方については既存の尺度が見当たらないため、本研究において新たな測定尺度（<老い>に対する東洋的態度）を作成した。

老年的超越の関連要因分析では、老年的超越に影響を及ぼすと考えられる要因間の関係を縮約的に記述できる構造方程式モデリング（SEM）を採用した。モデルの構築にあたっては、測定された 30 個の変数（背景的変数：12 個、SWB の下位尺度：３個、JGS-R の下位尺度：８個、東洋的見方の下位尺度：７個）について、事前に２変数相関分析を行い、モデルに取り込む変数を絞り込むとともに、『老年的超越』『東洋的見方』『主観的幸福感』『活動性』『危機の経験』については、構成概念の考え方を導入し潜在変数として扱うことで因果関係検討の効率化を図った（文中、『　』は潜在変数を示す。以下同じ）。さらに、SEM 分析の結果、『老年的超越』への強い影響因となった『東洋的見方』と『主観的幸福感』について、その複合的な効果を分析するため、クラスター分析により調査対象者（*N*=237 人）の類型化を行うとともに一般線形モデルによる共分散分析を実施した（第４章）。

また、インタビュー調査の分析では、研究協力者 17 人の発話内容に基づき、「事例――コード・マトリックス表」を作成し、老年的超越の関連要因分析で明らかとなった３つの類型[クラスター１:低 SWB・低東洋的見方群/クラスター２:中 SWB・高東洋的見方群/クラスター３:高 SWB・低東洋的見方群]（SWB は主観的幸福感の略記）ごとに事例・コード分析を行った。コード分析では、12 項目のコード（概念的カテゴリー）に対応する 17 人の発話内容から老年的超越への影響因を分析するとともに、Tornstam の老年的超越理論の３つの下位次元との関連について考察した（第５章）。

結果と総合的考察では、冒頭の四つの研究課題のうち、(2)(3)(4)について、その概要を記す。もとより、量的研究と質的研究は相補的関係にあり、これらを統合した結果のエッセンスが**要因関連の概念モデル**（文末添付図）である。上段フレームは、SEM 分析の結果から有意な要因間の関係を抽出しスケルトン図で示している。下段フレームでは、量的研究において『老年的超越』との強い関連が認められた『主観的幸福感』と『東洋的見方』について、質的研究の事例・コード分析における関連する内容（「文化的幸福観」と「東洋的見方」）を対応させており、枠内には発話内容の一部を示している。

第１は、上段フレームに示すように、『老年的超越』に影響を及ぼす要因間の関連において「性別」による違いが認められた。男性では、直接効果が認められたのは、『主観的幸福感』『東洋的見方』『危機の経験』であり、『活動性』「暮らし向き」については、『主観的幸福感』を介して『老年的超越』に影響を及ぼす。「年齢」については、『老年的超越』への直接効果は認められなかったが、『東洋的見方』を介して間接的に影響を及ぼす可能性は否定できない。一方、女性では、『老年的超越』への直接効果が認められたのは、『主観的幸福感』『東洋的見方』「年齢」であり、「暮らし向き」については、『主観的幸福感』を介して『老年的超越』へ影響を及ぼす。

なお、『老年的超越』から『主観的幸福感』への影響については、双方向の分析でも男女ともに有意な正の影響は認められなかった。この点は、老年的超越が生活満足度（本研究では主観的幸福感）を高めるという Tornstam（2005）の仮説とは異なる結果であった。

第２は、『老年的超越』への強い影響因となった『東洋的見方』と『主観的幸福感』に関して、クラスター２が『老年的超越』の６つの下位尺度すべてにおいて得点が高く、『老年的超越』を肯定的に捉えている群であることが確かめられた。クラスター２の特徴は、『主観的幸福感』が中庸のレベルにあることであり、この場合に『老年的超越』の得点が高いということは、東洋文化の影響を少なからず受ける日本人高齢者の幸福感には、「バランス志向的幸福観」（内田，2020,p.67）の特徴が反映されていることを示唆するものである。

第３は、インタビュー調査の量的データの分析からは、全体的に年齢の高い者は、『老年的超越』も高い傾向がうかがえ、特に女性ではその傾向は明らかであった。一方、『主観的幸福感』に関しては、地域活動に積極的な女性の得点が総じて低く、インタビュー時の印象と大きく異なる結果であった。

第４に、**要因関連の概念モデル**の下段フレームは、「文化的幸福観」「東洋的見方」「文化的・社会的要素」の３つのカテゴリーで構成され、「文化的幸福観」と「東洋的見方」は相補的関係にあり、これらの背景には「文化的・社会的要素」として、生きた時代の精神、文化を構成する価値観・人生観が反映される。

「文化的幸福観」については、その発話内容から、身近な人や家族との関係性を重視する傾向が強く、内田（2021）がいう「関係志向的幸福」の定義に沿うものである。いずれも戦争という厳しい経験を経て心の奥深く「身体化」（上野，2008）された思いが言葉となって表われたものであろう。

「東洋的見方」については、先行研究（増井，2013）で日本人には明確に現れないとされていた Tornstam の老年的超越理論の「宇宙的次元」に関わる内容が多く抽出された。「無為自然」は、老子哲学の中心をなす概念であり、「あるがままに生きる/頑張りすぎない/足るを知る」などは、「文化的幸福観」のバランス志向的な幸福と通じるものがある。

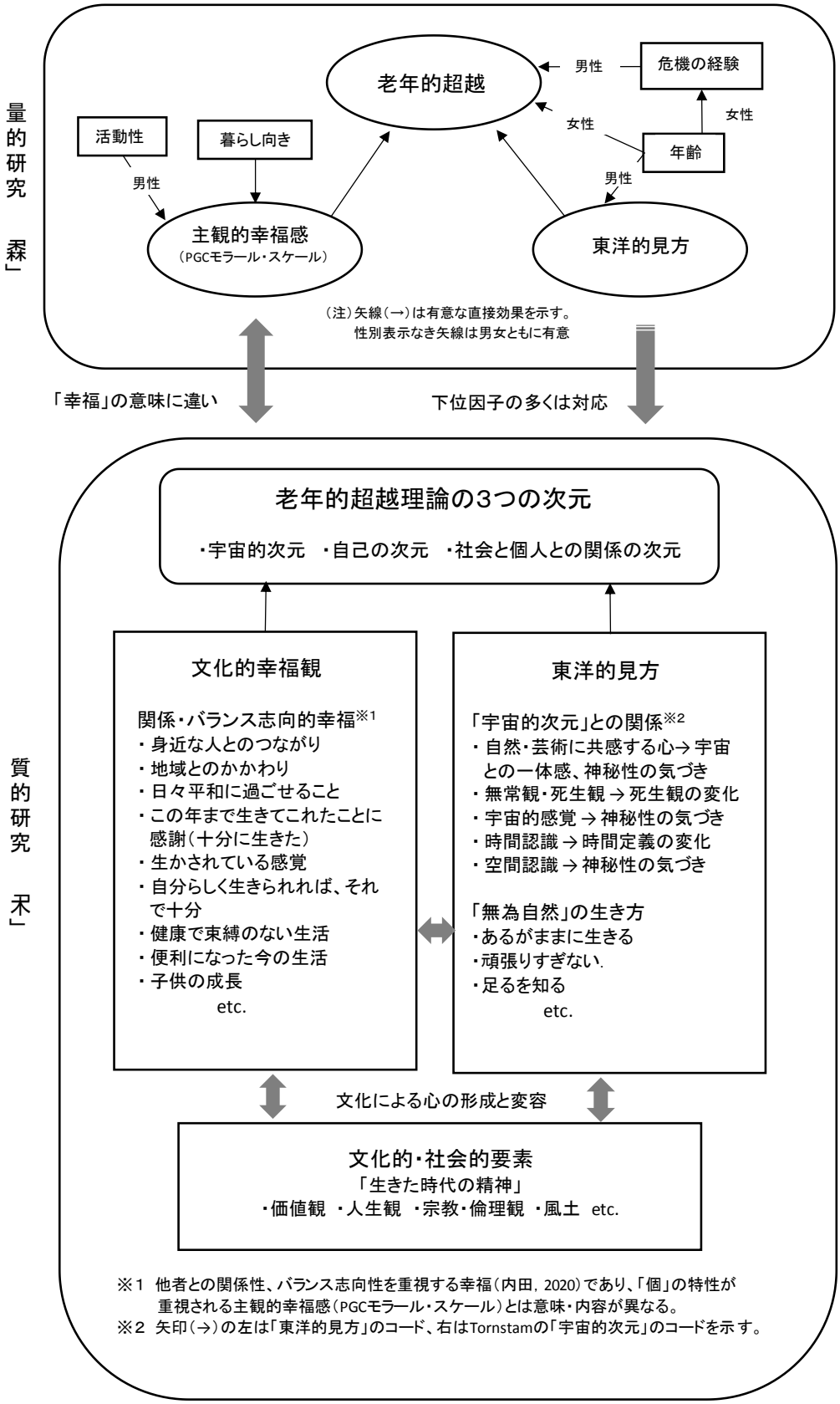
「文化的・社会的要素」については、17 人に共通するのは戦争体験であり、戦中の軍国主義教育から戦後の民主主義教育への価値観のドラスチックな変化を経験してきた人たちの「性格・自己観・人間観等」は、「生きた時代(コホート)」の文化的・社会的要素（価値観、人生観、宗教・倫理観、風土など）と相互に関わりをもつことで形成されてきたものである。

このように老年的超越は、「文化的・社会的要素」の体系に沿って反応する「文化的幸福観」や「東洋的見方」と深く関わる（影響を受ける）ことで発達するものとい

える。なお、「文化的幸福観」の内容については、老年的超越理論の「自己の次元」や「社会と個人との関係の次元」に通じるものも多い。

第５に、量的研究では、『主観的幸福感』と『東洋的見方』のそれぞれの下位尺度間には有意な相関関係はほとんど認められなかったが、質的研究では、「文化的幸福観」と「東洋的見方」には相補的な関連が認められた。幸福の感じ方には、「短期的な認知・感情」評価だけではなく、背景にある文化に根ざす価値観が反映されるということであり、分析結果の解釈にあたっては、この点をふまえて慎重に判断する必要がある。

今回、主観的幸福感の測定に PGC モラール・スケールを用いたが、この尺度は 1970 年代に米国で開発されたもので、これまで幸福な老いの測定尺度としてもっとも広く用いられてきたとされているが（古谷野他，2011，p. 141）、東洋文化の影響を受ける日本人高齢者のバランス志向的な幸福感の測定に相応しい尺度であるのか、半世紀近くを経た今、改めて検証が必要なのではないかと思われる。



量的研究と質的研究の統合：要因関連の概念モデル

目 次

序章 1
1　はじめに 1
2　サクセスフル・エイジングの新たな意味づけ 3
3　老年的超越研究の現状と課題 4
4　本研究における課題 7
5　本研究の意義と目的 8
6　論文の構成 9

Ⅰ　文献検討

第１章　Tornstam の老年的超越理論：概要と研究課題の抽出 11
1．1　社会老年学における新しい理論の必要性 11
1．2　老年的超越理論の文化的な背景と特徴 12
1．3　老年的超越の質的研究 13
1．4　老年的超越の量的研究 19
1．5　老年的超越理論を日本人高齢者に適用する際の問題点と留意点 25
第２章　日本の老年的超越研究 33
2．1　方法 33
2．2　結果 33
2．2．1　質的研究 35
2．2．2　量的研究 37
2．3　考察 42
2．3．1　質的研究の統合 42
2．3．2　量的研究の到達点と実証研究に向けた課題 47
第３章　東洋的なるもの 70
3．1　方法 70
3．2　結果 77
3．3　実証研究に向けて：「東洋的な見方」を構成する要素の再統合 97

Ⅱ 実証研究

第４章　量的研究 103
４．１　調査方法の概要..... 104
４．１．１　調査対象および調査手続き..... 104
４．１．２　導入変数..... 105
４．１．３　質問紙..... 105
４．１．４　データの前処理..... 106
４．２　JGS-R の確認的因子分析と下位尺度の信頼性、および年齢・性別
による差異の検討 109
４．２．１　方法..... 110
４．２．２　結果..... 110
４．２．３　考察..... 114
４．３　東洋的な見方にかかる測定尺度の検討..... 116
４．３．１　方法..... 116
４．３．２　結果..... 119
４．３．３　考察..... 123
４．４　老年的超越の関連要因についての総合的検討..... 125
４．４．１　方法..... 125
４．４．２　結果..... 134
４．４．３　考察..... 141
４．５　主観的幸福感と東洋的見方が老年的超越に及ぼす影響..... 145
４．５．１　方法..... 145
４．５．２　結果..... 145
４．５．３　考察..... 151
第５章　質的研究 160
５．１　方法 160
５．２　分析..... 162
５．２．１　事例分析..... 162
５．２．２　コード分析..... 182
５．２．３　コード分析――まとめ..... 188
５．３　考察..... 194

Ⅲ 総合的考察

第６章　総合的考察 215
６．１　考察..... 215
６．２　本研究の問題点と今後の課題..... 222

参考・引用文献..... 228

謝辞..... 234

資 料

１．質問紙
２．インタビュー データ：事例 ── コード・マトリックス表（要約版）

序　章

１ はじめに

もう半世紀も前のことではあるが、シモーヌ・ド・ボーヴォワールは大著『老い』の中で、「人間がその最後の 15 年ないし 20 年のあいだ、もはや一個の廃品でしかないという事実は、われわれの文明の挫折をはっきりと示している」（朝吹訳　1972，p. 12）と記し、老いの問題は、文化の貧困であり、不条理で、文明社会の根深い問題であることを鋭く指摘した。発達した消費社会では、老いは「言語道断な事実」（p. 12）であり、それについて語ることは不謹慎で注意深く隠蔽されなければならないものと考えられていたのである。

『老い』が発表された 1970 年（昭和 45 年）、日本の総人口に占める 65 歳以上の人口比率が７％を超え、ついに「高齢化社会」と呼ばれるようになる。その頃、一般の日本人の感覚として老いの問題はどのように捉えられていたのであろうか。

『老い』より 10 年ほど前に刊行された深沢七郎（1957）の棄老伝説を題材にした『楢山節考』は、文学作品としての評価を超えて、当時の日本社会に大きな衝撃を与えた。この作品では、二人の老人――村の掟に従い自らの意思で死を受容するおりん婆さん、掟に反抗し逃げて無残な死を遂げる又やん――の決められた「死」に対する対蹠的な態度がリアルに描かれ、＜老いと死の受容＞という抗うことのできない現実的な問いが白日の下に示されたのである。さらに 70 年代に入ると、いわゆるぼけの問題を主題にした有吉佐和子（1972）の『恍惚の人』が話題を集めたが、“恍惚”という言葉は当時の流行語にもなり一時的な社会現象を巻き起こした。これらの二作品はともに映画化もされ、これまで多くの人が、見たくない、聞きたくない、考えたくないとして疎んじてきた老いの問題が、少なからずかかわりのあることだと感じる契機ともなったのである。これらは、文学の視点から老いの問題を取り上げたものである。

一方、日本の高齢者政策の領域では、どのような施策が行われてきたのであろうか。1950 年代の終わりから 60 年代はじめにかけて、年金や医療保険などの社会保障に関する制度が整備され、90 年代になってようやく介護の社会化に向けた初期の政策が示される。2000 年に施行された介護保険制度は、それまでの老人保健福祉の枠組みを大きく変容させたといわれている。それ以降も高齢化をはじめとする社会の状況変化に対応するべく、さまざまな施策の充実が図られてきてはいるが、その一方で高齢者への社会保障給付の増大に伴う財源確保が大きな課題となっている。

このように高齢者施策については、制度面では新たな問題を孕みつつも今日まで一定の改善が図られてきてはいるが、世界的にみても稀にみる少子超高齢化が進行する現在、実際の〈老い〉を生きる当事者である高齢者の思いは本当のところどうなのだろうか。近代化を推進してきたさまざまな価値や理念の転換が求められ、精神的なより

どころが失われかねないこの時代に「老いを生きる」という体験の困難さは、福祉要求だけでは解決は困難であり、そこには次のような実存的問題があるのである。

鷲田（2015）は、「どう考えても，きびしさ、惨めさ、情けなさのほうが、ほこりや満ち足りをしのぐ。日本社会は、『超高齢化社会』という現実に、それも前例をみない速度で直面しつつあり、これまでの人類史に参照すべきモデルのない時代を迎えている。が、〈老い〉のかたち、〈老い〉の文化が、〈老い〉そのものの内にも外にも見えない…。〈老い〉は空白のままである」（p. iii）と、〈老い〉を巡る現状について、今日的で、かつ本質的ともいえる問いを投げかけている。

そこでまず日本における高齢化の現状についてみてみたい。令和３（2021）年版の『高齢社会白書』によれば、2020 年 10 月 1 日現在、65 歳以上の人口は 3,619 万人、総人口に占める割合は 28.8%、同 75 歳以上では 1,872 万人、割合は 14.9%となっており、特筆すべきは、75 歳以上の割合が、65～74 歳人口の割合である 13.9%をすでに上回っていることである。

また、2017 年４月に国立社会保障・人口問題研究所が公表した『日本の将来推計人口』の中位推計によれば、総人口は今後も減少を続けるが、65 歳以上の総人口に占める割合は上昇を続け、2050 年には 37.7%に達して、国民の約 2.6 人に１人が 65 歳以上の者となると予測している。このとき 75 歳以上の総人口に占める割合は 23.7%となり、約 4.2 人に１人が 75 歳以上の者になると推計されている。

平均寿命については、2019 年現在、男性は 81.41 歳、女性は 87.45 歳であるが、2050 年には、男性 84.02 歳、女性 90.40 歳と、女性は、はじめて 90 歳を超えると見込まれている。しかし、健康寿命（日常生活に制限のない期間）でみると、2016 年時点では、男性が 72.14 歳、女性が 74.79 歳となっており、女性のほうが高くなってはいるが、75 歳を下回っている。したがって、後期高齢域の者は男女とも何らかの健康上の問題を抱えていることがうかがえる。この点は介護保険制度における要支援、要介護の認定を受けた者の割合（65～74 歳と 75 歳以上の被保険者に対する比率）でみても明らかである。2018 年度の厚生労働省の算出によると、65～74 歳では要支援で 1.4%、要介護で 2.9%であるのに対して、75 歳以上では、要支援で 8.8%、要介護で 23.0%と 75 歳以上になると要介護の認定を受ける者の割合が大きく上昇している。

日本におけるこのような人口の高齢化は、人口構造の変化、社会経済構造の変化、生活構造の変化、家族構成の変化等をもたらし、これらの変化はさらに重層的に絡み合って新たな問題を惹起する。2019 年には高齢化率（65 歳以上の総人口に占める割合）が 28%を超え超高齢社会と呼ばれるようになったが、その先にある社会の姿や、そこに至る道筋が〈老い〉の当事者の視点で描き切れていないため、多くの高齢者は先の見えない不安感を払拭できないでいるように思われる。だから鷲田（2015）がいうよう

に、「<老い>は空白のまま」なのであろう。

２ サクセスフル・エイジングの新たな意味づけ

2020 年、日本の百寿者の人口は８万人を超え、「人生 100 年時代」というフレーズも昨今定着した感がある。しかし、健康寿命が未だ 75 歳に届かないという現実があるなかで、果たして欧米流のサクセスフル・エイジングのモデルは、日本人高齢者の「幸福な老い」を考える上で有効なモデルとなり得るのであろうか。

老年学の分野では、高齢者の「幸福な老い」についての代表的な理論として、1960～70 年代にかけて活動理論と離脱理論の論争が行われてきた[1]。しかし、両理論の相違点のみが強調されたため、「高齢者を排除する社会体系のメカニズムや加齢に伴うパーソナリティの変化、社会的離脱の普遍性など、離脱理論が提出した重要な命題の多くはほとんど検証されることなく放置され、きわめて成果の乏しいまま論争は収束してしまった」（古谷野他，2011，p.146）といわれている。高齢期の年齢幅の広さ（近年では 65～120 歳）や<老い>の多様性についての認識不足が理由と考えられている。

このように議論が行き詰まるなかで、老年学に新たな方向づけを示す概念として提起されたのが、Rowe & Kahn（1987）による“successful aging”という枠組みである。この概念の特徴について、秋山（2000）は、「“successful aging”という概念は欧米の老年学に２つの大きな貢献をした。ひとつは、それまで医学、…社会学、心理学などで個別的に行われてきた高齢者研究を統合する概念的枠組みを提供し、学際的科学としての老年学の確立に寄与したことである。もうひとつは、従来の老年学が疾病や障害など高齢期の negative な側面に注目したのとは対照的に、高齢期における可能性、つまり、positive な側面に光をあてたことである」と述べている。なかでも高齢者のライフスタイルに大きな影響を与えたことや、高齢者の社会貢献の契機となったことは、この理論の大きな成果であったとされている。

しかし秋山（2000）は、“successful aging”の根底にある考え方が、「欧米（ことに米国）のプロテスタント文化圏で人間の価値として最も重視される“自立”（independent）し、“生産的”（productive）であることを生涯継続する」というイデオロギー化されたものであったため、長寿化とともに加齢が進み健康上や経済的理由から「“自立して生産的”でない高齢者には失敗者という自覚をもたらし、多くの人たちは人生の最終コースを失意のうちに歩むという問題が高齢者自身からも高齢者ケア

---

[1] 端的にいえば、活動理論(Lemon,1972)は、社会活動が個人の幸福感にポジティブな影響を与えるメカニズムを提案したものであり、離脱理論（Cumming & Henry,1961）は、老化とともに社会から離脱して悠々自適な生活を送ることこそ幸せなことだと考える理論である。なお活動理論については、Lemon が提唱する以前から当時のアメリカの中産階級の価値観としてあったと言われている。参考:『よくわかる高齢者心理学』(佐藤・権藤（編），2016，pp.24-25)

の従事者からも指摘されるようになってきた」と、この理論を画一的に高齢者に適用することによって惹き起こされる負の側面にも言及している。

その後も欧米をはじめとする先進諸国では、医療・福祉施策の進歩や拡充によって長寿化が急速に進行してきたが、その一方で、秋山（2000）の指摘にもあるように多くの高齢者が人生の終焉まで“自立して生産的”であることは不可能な状況となっている。

このように高齢者を取り巻く状況が跛行的に大きく変化（長寿化のジレンマ）するなかで、“successful aging”を医学・社会学的な視点からだけではなく、加齢による発達変化と捉える心理学的な視点が注目されるようになり、スウェーデンの老年社会学者の Tornstam が 1989 年に提唱したのが老年的超越理論である。この理論は、離脱理論を批判的に発展させ、さらに日本の禅やユングの分析心理学の知見を取り入れて構築されたものである。

３ 老年的超越研究の現状と課題

（1）Tornstam の老年的超越理論

Tornstam（2005）が提唱した老年的超越理論は一言でいえば、加齢と成熟に伴うメタ的な視点への転換であり、「物質的・合理的な視点から宇宙的・超越的な視点へ移行することで生活満足度が高まる」（p.41）とする心理的発達理論である。Tornstam は老年的超越の内容としては、宇宙的次元（the cosmic dimension）、自己の次元（the self dimension）、社会と個人との関係の次元（the social and personal relationships）という３つの次元（領域）で構成されるとし、老年的超越のイメージとして次のように述べている。

「時間に対する直線的な見方が変化し、過去・現在・未来についての認識が変化する。…自他の境界が消失し自己中心性が減少する。閉鎖的な自己が解体され宇宙的自己にとって代わり、もはや自分を特別な存在と感じなくなる。…メタ世界の捉え方がこのように変化すると死への恐怖心が減少し、過去・現在・未来の世代との親近感が増す。必要以上の社会関係や物質的なものへの関心が低下し、瞑想や思索に時間を使うようになる」（Tornstam,2005,pp.41-42.筆者抄訳）

なお、本論文の第１章では Tornstam の老年的超越研究の集大成ともいえる *“Gerotranscendence: A Developmental Theory of Positive Aging”* に基づき理論の起源や枠組み、老年的超越の測定尺度、関連要因について彼の主張を整理するとともに、この理論を日本人に適用するにあたっての問題点や留意点について述べる。

（2）日本人高齢者の老年的超越の特徴

増井（2013）のレビュー論文では、日本人高齢者の老年的超越の特徴について、「日

本人超高齢者における老年的超越のあり方は、Tornstam の指摘とおおむね同じであるが、宇宙的意識については時間・空間の超越という表現型はあまり現れないことや、自己意識の領域や他者との関係の領域に関する内容が多いという特徴を示していた」との報告がなされている。

本論文でも第２章において、日本人高齢者を対象にした質的研究の成果を用いて、Tornstam の老年的超越の３つの次元との関連を分析したが、ほぼすべてのコードやカテゴリーで関連が認められ、老年的超越理論が日本人高齢者にとっても親和性の高い理論であることが確認された。

（3）超高齢期の幸福感と老年的超越

常識的には、高齢期において身体機能や高次生活機能が低下すると、幸福感も低下すると考えられている。しかし、Tornstam（2005）は高齢者へのインタビュー調査の結果から、老年的超越の高い者は、生活満足度も高いという仮説を導き出している。その後の Tornstam（2005）の量的研究（1990/2001 年）でも、「宇宙的超越/宇宙的次元（同じ概念）」と「自我超越/一貫性次元（同）」については生活満足度との間に正の相関が認められることが報告されている。

一方、Erikson（2001）の生涯発達理論では、超高齢期には身体的機能の低下が著しく、また多くの喪失体験に見舞われることから、「第８段階で出没し始めた絶望は、第９段階では、切っても切れない道連れとなる」（pp.151-152）とされる。そして、第９段階の危機を乗り越えた者が獲得する心理的特性を≪老年的トランスセンダンス（gerotranscen*dance*）≫と呼び、これは Tornstam の≪老年的超越超（gerotranscendence）≫をさらに活性化させた概念であり、死の恐怖を乗り越え、幸福実現につながる道であると論じている。

（4）老年的超越の測定尺度

Tornstam が開発した老年的超越の測定尺度では、日本人高齢者の老年的超越の十分な検討を行うことができない可能性があることから、増井他（2010，2013）により、日本版老年的超越質問紙（JGS および改訂版 JGS-R）が開発されている。JGS は８因子構造で６因子が Tornstam の老年的超越の諸特性と類似しており、特に下位尺度の「脱二元論」や「無為自然」は東洋的な考え方であり、日本でもおおむね適用できると考えられたが、７つの下位尺度の内的一貫性（α係数）が十分でなかったことから、増井他がさらに改良を加えたものが JGS-R である。この尺度は８因子 27 項目で構成されるが、「脱二元論」のα係数が相変わらず低いことなど、内的一貫性については大きな改善効果は認められていない。

老年的超越の尺度に関する日本での研究は、増井他（2010，2013）の研究をおいて他

に見当たらないが、日本人高齢者を対象にした老年的超越の尺度としては、Tornstam の３次元尺度では不十分であることは明らかであり、現時点では改良の余地はあるものの、東洋的な価値観（「無為自然」「脱二元論」など）が一定反映されている JGS-R の８次元尺度が最も妥当なものと考えられる。

（5）老年的超越の関連要因

Tornstam (2005) は老年的超越の関連要因として、３つの下位次元ごとに様々な要因を仮定し詳細な分析を行っているが、統計的に有意な関連が認められるものとしては、下位次元ごとに違いはあるが、性別、年齢、生活環境（職業・収入）、社会活動、人生の危機などが挙げられている。

一方、日本人高齢者を対象にした老年的超越の関連要因についての研究は、現時点ではそう多くはない。増井他（2010, 2012）の横断研究の結果からは、年齢が高く、女性で、他者との親密な関係があり、身体的状況が悪い場合に老年的超越が高いことが報告されている。この点は Tornstam が示した老年的超越の関連要因ともおおむね合致するものである。

また、老年的超越の加齢による変化をみるために行われた増井他（2015）の縦断的検討では、老年的超越の８つの下位尺度のすべての得点が加齢（３年間の縦断変化）に伴って有意に上昇するというものではないが、「脱二元論」「宗教・スピリチュアリティ」「脱社会的自己」「無為自然」については、加齢とともに得点が高まる傾向がみられる。このことから、老年的超越の発達が加齢とともに進むとする Tornstam の仮説を支持するものである、との見方を示している。

なお、老年的超越理論が東洋の禅やユングの分析心理学を参考にして構築された理論とされているにもかかわらず、Tornstam (2005) の量的研究では、文化的な要因についての検討がなされていない。しかし、文化が調節項として老年的超越に及ぼす可能性については言及されている。また、JGS-R の開発者の一人である増井（2013）も、Tornstam の老年的超越の３つの次元について、文化による差異や、その差異を踏まえた測定尺度の再検討の必要性を指摘している。

（6）心理的 well-being と老年的超越の関連

超高齢期の心理的 well-being の維持における老年的超越の役割を検討した増井他 (2010) の研究がある[2]。これによると、生活機能が低下しても well-being が高かった群は、生活機能が低下し、かつ well-being も低かった群と比較して、老年的超越の３つの次元（「内向性」「脱社会的自己」「無為自然」）の得点が高いという結果を得ている。

[2] 心理的 well-being の指標として、抑うつ状態(GDS-5)、健康度自己評価、主観的幸福感（PGC モラール・スケール）が用いられている。

増井他(2010)は、「老年的超越が虚弱高齢者の心理的 well-being の低下を緩衝する働きをしていることを示唆するもので、Erikson の第９段階仮説と合致する結果である」との見解を示している。

４ 本研究における課題

先行研究をレビューした結果の概要はおおむね以上のとおりであるが、これらの結果を踏まえて、本研究における課題を以下のように設定した。

（1）日本版老年的超越質問紙改訂版（JGS-R）の再現性（妥当性・信頼性）

日本人高齢者の老年的超越の測定尺度としては、現在のところ JGS-R が最良のものと考えられるが、この尺度を用いた先行研究では一部の下位尺度の内的一貫性が十分ではなかったという問題が指摘されている。したがって、まずは今回の調査対象者のデータを分析することで、JGS-R の適合度や問題点を洗い出す。併せて、老年的超越の下位次元(尺度)について、年齢、性別による差異を分析し、先行研究との類似点や相違点について考察する。

（2）老年的超越が幸福感に及ぼす影響

Tornstam (2005) の老年的超越理論では、一般的に老年的超越に達した者は生活満足度も高いとされる。本研究では、増井他（2010）の先行研究との比較という目的もあり、また、調査対象者の年齢が 60～90 歳代と広範囲で前期高齢者も多く含まれることから、「幸福感」の指標としては、PGC モラール・スケールで測定される主観的幸福感を用い、老年的超越との関連を分析する。その際、老年的超越と主観的幸福感については、いずれが原因でいずれが結果であるのか、あるいはこの二つは相互に因果的な影響を与えあう概念であるのか、この点を確かめるため双方向の因果関係を仮定し規定力の違いを分析する。

（3）老年的超越の関連要因、特に東洋文化的な要因による影響

先述したように、Tornstam (2005) は老年的超越理論の構築にあたって、日本の禅やユングの分析心理学の知見を参考にしている。一方、東洋には古より『老子』の思想にある「無為自然[3]」という概念があり、この言葉に共感を覚える日本人は多い。日本人高齢者の老年的超越の関連要因を総合的に分析するためには、日本人の思考や感情の

[3] 「無為自然」については、『老子』第 37 章にある「道は常に無為にして、而も為さざる無し」（道はいつでも何事も為さないでいて、しかもすべてのことを為している)に由来する言葉であるが、「無為」は作為的なことはなにも行わないことを意味しているとされる（蜂屋，2013)。また、「老子哲学のキャッチフレーズであり、道家哲学の根本をなす重要な思想表現である」(福永，2013)。

背後にあると考えられる文化的な要因：≪東洋的なるもの≫について、これを定量的に測定する尺度が必要となる。しかし今のところ、このような目的にかなった既存の尺度は見当たらない。したがって本研究において、日本人の〈老い〉に対する態度を規定していると考えられる「東洋的見方」について、その概念構造を検討するとともに、これを測定するための尺度を新たに開発する。

さらに、老年的超越の関連要因については、先行研究で取り上げられている要因に加えて、文化的な背景要因として「東洋的見方」を組み込んだ構造方程式モデルを構築し、多角的な分析を行い、この仮説を検証する。

（4）当事者研究の視点

質問紙調査によって得られた数値データを統計分析することで調査対象者の一般的な傾向やパターン、老年的超越に影響を及ぼす要因などについて平均的な傾向はある程度明らかにできるが、実際の高齢者が自分の〈老い〉や、その先に確実に訪れる〈死〉についてどのように捉えているのか、この点を理解するためには量的調査だけでは限界がある。量的研究が「森を見る」ということであるとするならば、質的研究は「木を見る」ことであり、両者から得られた知見をさらに統合的に分析することで、老年的超越や幸福についての、特に東洋文化的な側面の影響を明らかにする。

５ 本研究の意義と目的

先述したように日本人の平均寿命の延びは著しく、マスメディアなどでは「人生 100 年時代」と喧伝している。しかし健康寿命でみると、男女間で違いはあるものの 74 歳前後が境で、75 歳を過ぎると要介護の認定を受ける人の割合が急増する。

佐藤・高山・増本(2014)は、バルテスのベルリン加齢研究(Berlin Aging Study: BASE; Baltes & Mayer,1999)を紹介する中で、「人生第４期（筆者注：fourth age；85 歳前後以降）の人々は、身体的には、約 80％の人がさまざまな多重障害を抱えており、虚弱者の比率が増大し、…心理機能面でも満足感の低下や孤独感の増加に直面している」(p.209) との指摘をしている。そして、このような「長寿のジレンマ」をいかにして解決するかは、超高齢者研究における重要な課題となっていると述べている（佐藤他，2014，p.209)。

近年の超高齢者研究では、超高齢者や百寿者では身体的資源の喪失があっても精神的健康は低下しないという報告もある(権藤他，2005)。いわゆる「エイジング・パラドックス（Aging Paradox）（権藤，2019）といわれる現象であり、これを説明する理論の一つが老年的超越理論であるが、日本においては老年的超越に関する実証研究はまだ少ないのが現状である。

本研究の目的は、高齢化が世界でも類をみない速さで進む日本において、西欧

で提唱された老年的超越の考え方が日本人高齢者の「幸福な老い」の実現にどのような影響（効果）を及ぼすのか、文化的・心理的・社会的な視点を踏まえて考察するものである。

鈴木大拙は 90 歳を超えたとき、秘書の女性に**「90 歳にならんと分からんこともあるんだぞ、長生きするものだ」**（日野原，1986,p.37）と言ったそうである。

筆者は現在、後期高齢者に一歩手前のところにあるが、忍び寄る老いを実感することが多くなった。日野原（1986）は、「老いの意味するもの」という論考の中で、「私は、老いとは、次第に衰えゆく老人が、人間としての生の意味を最後まで問い続けるプロセスであり、これをめぐる人々や科学がそれにどう対処しつつ老いてゆく人を守るかということが大切だと考えたい」（p.34，傍点筆者）と述べている。老いの問題の特徴は、個々人の人生観や価値観にかかわる問題で個人差があまりにも大きく、一般論では捉えきれない側面が多々あり、極めて個別性の高いテーマである。したがって、その実像に迫るためには、文献調査や量的調査だけでは不十分であり、まさに今〈老い〉を生きる当事者の立場に立った質的調査のアプローチが重要であると考えている。

６ 論文の構成

本論文の構成は、**図 序-1** に示すとおりであり、主として、**Ⅰ文献検討**（第１章～第３章）、**Ⅱ実証研究**（第４章～第５章）および**Ⅲ総合的考察**（第６章）からなる。

第１章では、Tornstam(2005)の著作である *“Gerotranscendence: A Developmental Theory of Positive Aging”* に基づき理論の起源や枠組み、老年的超越の測定尺度、関連要因について整理するとともに、この理論を日本人に適用するにあたっての問題点や留意点について述べる。

第２章では、日本の老年的超越研究について概観するとともに、現時点での研究の到達点と課題となっている事項について整理する。

第３章では、日本人のものの捉え方の背景にあると考えられる《東洋的なるもの》について、文化的・心理的・社会的側面から考察を行い、実証研究に向けた「東洋的見方」の概念構成の検討を行う。

第４章では、調査対象者への質問紙調査の結果を分析し、既存の日本版老年的超越質問紙改訂版（JGS-R）の評価を行う。また、老年的超越の文化的な要因として「東洋的見方」を測定するための尺度を作成する。これらの尺度を用いて老年的超越の関連要因による影響を多角的に分析する。特に、東洋文化的な要因による老年的超越の到達度の違いについて、掘り下げた検討を行う。

第５章では、インタビュー調査の結果を事例・コード分析することで、日本人のものの考え方の根底にあると考えられる東洋文化的な側面が、老年的超越にいかなる影響

を及ぼしているのかを中心に考察する。

第６章では、文献検討の結果を踏まえて、実証研究の結果をどのように解釈するのかについて総合的に考察する。また、先行研究の結果と比較して、本研究の問題点と今後の課題について整理する。

序 章　はじめに、先行研究、本研究の課題・目的・意義

Ⅰ　文献検討

第１章　Tornstam の老年的超越理論：概要と課題抽出

第２章　日本の老年的超越研究：先行研究のレビュー

第３章　東洋的なるもの：「東洋的見方」の概念構成

Ⅱ　実証研究

第４章　量的研究：測定尺度の評価、関連要因の構造分析

第５章　質的研究：インタビュー調査の事例・コード分析

Ⅲ　総合的考察

第６章　考察、結論、本研究の問題点と今後の課題

図 序-1　本論文の構成

Ⅰ　文 献 検 討

第１章　Tornstamの老年的超越理論：概要と研究課題の抽出

老年的超越理論は、スウェーデンの社会老年学者のTornstamが1989年に提唱した高齢者の発達変化に関する理論の一つである。この章では、Tornstam（2005）の*Gerotranscendence: A Developmental Theory of Positive Aging*から、筆者の抄訳[1]に基づき、老年的超越理論の概要について述べたのち、この理論を日本人高齢者に適用する際の問題点と留意点について考察する。

1.1　社会老年学における新しい理論の必要性

Tornstamは「緒言」において、社会老年学における新しい理論の必要性について次のように述べている。

「サクセスフル・エイジングのコンセプトは、表面的には老年期を迎えても、西洋人のミドルクラスの成功者のように、活動性、生産性、有能さ、人格、自立心、富、健康、社交性を持ち続けることだと考えられている。…老年的超越理論は、これらすべてを疑う。中年期の生活パターンを漠然と続けることがよいエイジングだという先入観に代わり、老年期における成長は、そのこと自体に〈意味〉と特徴があるのだということを示す。…これは、変化や発達よりも、継続性や安定性を重視する老年学の主流の考え方とは対照的なコンセプトである」(p.3)

そして、高齢者自身の「語り」に耳を傾けることが重要だとし、老年的超越に向かいつつある人の特徴を、次のように述べている。「自己や他者との関係の再定義や自己の存在に関する問いを経験する。自己中心性が低下すると同時に社会活動への参加が選択的になる。過去の世代との一体感が増す。利害関係のある交流が減少する。物質的なものへの関心が薄れ、ひとりで物事を考えたい欲求が増し、ポジティブな孤独がより重要になる。また、宇宙とつながっている感覚や、時間と空間、生と死の再定義がなされる」(pp.3-4)

したがって、老年的超越は、「撤退（withdrawal）や離脱（disengagement）の状態を意味するものではなく、活動か離脱かの古い二元論を超えて発達を論じる理論である」（p.4）との見方を示している。

特に、老年学のステレオタイプ化されたパラダイム転換の必要性については繰り返し述べており、「研究者は、行動の因果関係を機械的に説明する実証主義的な伝統より、個々人に関わる〈意味〉を詳細に調べることで、行動や意識についての理解を深めるべきである」(p.29）とし、現象論的なアプローチの重要性を強調している。

---

[1] 重要な「用語」については、和訳（筆者の訳で必ずしも定訳ではない）に、適宜原典の英表記を付記した。

1.2　老年的超越理論の文化的な背景と特徴

Tornstam は、新たなメタ理論に至る方法として、一般的な実証主義の考え方から離れて東洋哲学や Jung の考え方に関心を向ける。

「西洋人は強迫的で物質主義的な思考法に囚われている。禅者は、境界が拡散・浸透しあう宇宙的世界を生きる。瞑想する禅者は離脱しているように見えるが、禅問答（The statements made by a Zen Buddhist）をメタ理論の視点で理解するのは難しい――つまり「あなた」と「私」は主客未分であり、過去・現在・未来は分離不能の同時的存在と捉えるのである」（p.37）。この思考法は西洋哲学とは全く異なるもので、Jung の集合的無意識[2]（collective unconscious）との類似性に言及している。

Tornstam が老年的超越について考えるきっかけとなったのは、次のような Jung の講義であった。「人生前半期の課題は社会的適応であるが、高齢期の課題は自己や集合的無意識についての理解である。…しかし、このことに気づかず、人生前半期の役割の継続こそが全てだと間違った理解をしているのは悲劇である。その結果、多くの人は、自分の人生が未完で無駄なものであったと感じ、抑うつ、絶望、死の恐怖、自己嫌悪等の感情を抱き未発達のまま死に直面する」（p.38）。集合的無意識についての理解というのは、Jung の個性化[3]（individuation）のことを指しているものと考えられるが、「非西欧（non-Western）の文化では、人生後半期に特有の発達課題があることは、よく知られたことである」（p.38）と述べており、このような東洋哲学や Jung の知見をふまえて次の論を展開している。

Tornstam は、加齢とともに円熟味が増すことをメタ的視点への転換と位置づけ、「物質的・合理的な視点から宇宙的・超越的な視点へ移行することで生活満足度が高まる」（p.41）とし、老年的超越による発達の特徴を以下のようなフレーズで紹介している（p.41）。

- 霊性（宇宙）的感覚の増加
- 時間・空間・物質の認知における再定義
- 生と死の認知における再定義、死への恐怖の減少
- 過去と将来世代との親近感の増加
- 表面的な社会的交流への関心の低下
- 物質的なものへの関心の低下
- 自己中心性の低下
- 瞑想する時間の増加

---

[2] 「我々の心には祖先から受け継いだ遺伝的なものがある。集合的無意識は、自己と世代を統合する構造と、素因となるものを含む。自己や世代、あるいは場所には境界が存在しない。Jung 派では、瞑想によって集合的無意識に触れることができると信じている」（Tornstam,2005,p.38）。

[3] 意識の中に含まれている集合的無意識が徐々に意識化されてゆき、完成された人格をもつようになる過程をいう。出典：『心理学辞典』（中島他（編），1999，p.271）

さらに、老年的超越の具体的なイメージとして次のように記している。

「時間に対する直線的な見方が変化し、速度だけでなく、過去・現在・未来についての認識が変化する。…自他の境界が消失し自己中心性が減少する。閉鎖的な自己が解体され宇宙的自己にとって代わり、もはや自分を特別な存在と感じなくなる。自分は宇宙的存在（part of a cosmic energy）であり、… 重要なのは“個の命（individual life)”ではなく、“全的な命(the total flow of life)”である。メタ世界の捉え方がこのように変化すると死への恐怖心が減少し、過去・現在・未来の世代との親近感が増す。また、必要以上の社会関係や物質的なものへの関心が低下し、…代わりにもっと重要なこと（たとえば、瞑想や思索）に時間を使うようになる」(pp.41-42)。そして、このように生活態度が変化することは、必ずしも社会的な撤退を意味するものではないことを強調している。

一方でTornstamは、老年的超越の発達を阻害するものとして、西洋文化に根差す価値観を挙げる。「活動性、生産性、効率性、個性、自立、富、健康、社会性というのは、一般的な世間の価値観であり、西洋ではこれらの価値観を前提に道徳的で規範的な判断が行われる。このような考え方から逸脱することは罪悪と感じ、その結果として老年的超越のプロセスが妨げられる。老年学者や介護スタッフ、高齢者の家族が、老年的超越への自然なプロセスを阻害している可能性が多分にある」(pp.43-44)。

このようにTornstamは、老年的超越の発達を阻害する要因の一つに、文化を背景とした価値観や規範意識が存在することを指摘しているのである。

１.３　老年的超越の質的研究

Tornstamは老年学における現象学的手法の重要性を指摘しているが、高齢者本人が、活動、価値観、人生の目標、老いについてどのように考えているのか、この点を明らかにするためインタビュー調査を行っている。調査対象者は50人、年齢は52～97歳、1991年に実施された。

(1) 老年的超越のイメージ

最初に典型的な事例として示されているのは、２人の女性のインタビューでの発言であり、これらの対比によって老年的超越のイメージを描写している。一人は、老年的超越の発達を遂げた元看護師のEva（69歳女性)、もう一人は、老年的超越の発達に行き詰っているGreta(72歳女性）である。

老年的超越の発達を遂げたEva

Evaは、貧しくはなかったが難しい幼少時代を送った。結婚し３人の子供をもったが、離婚によって深い危機を経験した。

「危機の経験から学んだように思う。たとえて言うなら、以前は、川の流れに自分をコントロールできずにただ流されているような感じだった。岸辺にたどり着こうとしても自分ではどうすることもできず、楽しいことも嫌なことも川の流れとともに流されてしまっていた。しかし今は、私自身が川の流れそのものであるように感じている」（p.50，傍点筆者）

Eva に起こった変化は、「自分の人生を川の〈流れ〉のように受け止め、主体としての“私”と客体としての“宇宙的な大いなる命”との間に存在する境界を超越した」（p.50）ことだという。他にも以下のような Eva の発言が紹介されており、これらの言葉から老年的超越の特徴が示されている（→ 印の右は、本文からキーフレーズを抽出。以下同じ）。

「女性は出産に９か月を要し月経もある。春・秋の衣裳ダンスの衣替えなど、循環するさまざまな出来事を経験する」（p.50）→ 時間を直線ではなく円環として捉える。過去・現在・未来の境界を超越。

「らせん状にうず巻く遺伝子の鎖は不滅。…自然科学と宗教の理論、ともに素晴らしいが、この世界には理論によって説明できないことは多々ある」（p51）→“遺伝子の鎖”は“永遠の命”の象徴。科学と神秘主義の境界を超越。

「以前は、観劇、夕食、旅行などにトキメキを期待した。今、私の最良の時間はキッチンに腰掛け、シンプルな生活を満喫しているとき」（p.51）→ 人生の喜びの根っこにあるものが変化。

「…胴回り、荒れた皮膚、顔の皺のことで悩むことはない。取るに足らないことで、すべては自己愛だった」（p.52）。→ 身体についての因習的な見方を超越。

「パーティーで話したくもない人と一緒にいるより、よく知る高齢の夫人との会話のほうが楽しいし、得ることも多い」（p.53）→ 友人や仲間を選ぶのが選択的になる。

「賢・愚どちらかに決めることは簡単なこと。しかし、もっと簡単なことは、自分が良いと思える忠告は控えること」（p.53）→ 「賢愚・善悪」など二元性の超越。

老年的超越の発達に行き詰っている Greta

Greta は、以前は教師をしていたが、３歳のときに母を亡くし、娘も 15 歳のときに亡くすなどの辛い経験をしている。しかし、Eva のように困難な経験をポジティブな方向に転換できず、人生に満足感を感じていない。

「高齢になっても活動的で冒険したいと思っていた。しかし、それも叶わず早々と諦めてしまった。多くのものを失い無気力な高齢者の生活になった。仕事を通じて得ていた満足感が失われたことが寂しい」（p.54）→ 壮年期の理想像に執着。

「自分を振り返ると大抵は失望した気持ちになる。人や諸々のことに対する興味の源が枯れてしまったと感じている。…かつては大きなネットワークをもっていたが、

もはやそういったものからは離脱し、興味を失くしてしまった」(p.54) → 未だに壮年期のパターンに執着。

Tornstam は Eva と Greta との比較から、老年的超越の発達に至った Eva のケースを次のように要約している。

「Eva の視点は、流れになす術もなく浮遊する自分が川そのものになりきったことである。老いを迎えるなかで無力になる自分に対する絶望感と単にバランスをとるというのではなく、そのような態度を超越したのである。また、心と身体を二分する常識的な見方も超越した」(p.55)

(2) 老年的超越の３つの次元

Tornstam は老年的超越の内容について、３つの次元を提示している。すなわち、「宇宙的次元 (the cosmic dimension)」「自己の次元 (the self dimension)」「社会と個人との関係の次元(the social and personal relationships)」である。そして、これらの次元ごとに、インタビューでの発言内容を具体的に紹介している (pp.55-69)。

要点を端的に把握するためには、本文からキーフレーズを抽出し一覧表で整理するのが効果的であるため、筆者が、Tornstam の要約 (p.73-74) に沿って、その内容を補足する形でまとめたのが**表 1-1** である。次元ごとの補足説明は以下のとおりである。

宇宙的次元 (the cosmic dimension) (pp.55-60)

① 時間定義の変化：時間の認識が直線から円環へと変化し、過去と現在の境界の超越が起こる (たとえば、幼年時代への回帰)。人生の意味の振り返えりは、ときに過去との和解 (reconciling) をもたらす。

② 世代間のつながりの認識：単体としての命から“命のつながり”を意識するようになる。過去に生活を共にした人たちへの親近感が増す (“遺伝子の鎖”は不死の証し)。

③ 死生観の変化：死ぬような体験をすると死への恐怖心が消える。無意味な延命や苦痛を伴う死に方を恐れる。人生後半での成熟は、生と死に対する新たな見方を喚起する。

④ 神秘性の気づき：この世には人知や感覚を超えた未知なるものが多々あることに気づく。芸術 (音楽、絵画など) に感動することで、言葉の壁を超越する (生命の神秘に気づく)。瞑想することで、時間・空間の壁を超越する。

⑤ 宇宙との一体感：大きな出来事より、音楽や絵画など日常のささやかな体験に悦びを感じる。自然の中での体験は、宇宙との一体感を覚醒させる (自己と宇宙の障壁を超越)。

自己の次元（the self dimension）（pp.60-63）

① 自己との向き合い：パーソナリティの隠れた側面（自己中心性など）に気づく。

② 自己中心性の低下：自分が宇宙（あるいは集団）の中心にいるとの思い込みが変化する。

③ 身体的超越：体のケアは怠らないが、若さに執着はしない。

④ 自己超越：利己主義から利他主義への移行が起こる（男性にとっては重要）。

⑤ 自我統合：人生はジグソーパズルのピースの全体集合のようなもので、微妙な状態（自我）の保持には、平穏さや孤独が果たす役割を認識することが重要である。

社会と個人との関係の次元(the social and personal relationships)（pp.63-69）

① 人間関係の意味づけの変化：人間関係が選択的になり表面的な関係への関心が低下する。一人でいる時間の必要性が増す。

② 社会的役割についての認識の変化：「役割」が必要なときもあるが、「変装」は老年的超越の発達を妨げるサイン。自分らしくあるためには自信を持つこと。

③ 社会的因習からの決別：受容力であり、無垢さを認めることで成熟度が高まる。

④ 財産への執着心の鈍化：人生の旅も後半では荷物を軽くすることが必要となり解放感が高まる。

⑤ 平凡にして深い知恵の獲得：他人の行動を、寛容、忍耐、謙虚さの視点で観察する。表面的な判断の二元性（善悪、賢愚など）を超越する。

表1-1 老年的超越の３つの次元とコードおよび内容

次元	コード	内　容
宇宙的次元	時間定義の変化	・時間の定義が変化 → 直線から円環へ ・過去と現在の境界の超越 → 幼年時代への回帰 ・人生の意味の振り返り → ときに和解（reconciling）の手段
	世代間のつながりの認識	・単体としての命 → 命のつながり(連鎖の視点へ変化) ・過去に生活を共にした人たちへの親近感の増加 ・「遺伝子の鎖」は不死の証し
	死生観の変化	・死ぬような体験をすると死への恐怖心が消える。 ・無意味な延命や苦痛を伴う死に方を恐れる。 ・人生後半期での成熟は、生と死に対する新たな見方を喚起
	神秘性の気づき	・この世には人知や感覚を超えた未知なるものが多々ある。 ・音楽や絵画によって言葉の壁を超越 → 生命の神秘に気づく。 ・瞑想することで時間や空間の壁を超越する。
	宇宙との一体感	・大きな出来事 → 日常のささやかな体験へ(音楽や絵画など) ・自然の中での体験は宇宙との一体感を覚醒 → 自己と宇宙との障壁を超越する喜びを喚起
自己の次元	自己との向き合い	・Jungが「影」と呼ぶパーソナリティの隠れた側面（良い面も悪い面も）に気づく。 ・これまで意識してこなかった自己中心性の気づき
	自己中心性の低下	・自分が宇宙(集団）の中心にいるとの思い込みが変化 ・自惚れではない適度の自信は必要（自尊心が低いのは問題)
	身体的超越	・体のケアは怠らないが、若さに執着はしない。
	自己超越	・利己主義から利他主義への移行（特に男性にとって重要)
	自我統合	・人生はジグソーパズルの各ピースの全体集合 → パズルの微妙な状態(自我)の保持には、平穏さや孤独が果たす役割を認識
社会と個人との関係の次元	人間関係の意味づけの変化	・人間関係が選択的になり、表面的な関係への関心が低下 → 一人でいる時間の必要性が増加 ・「撤退」ではなく、ポジティブな「孤独」を求める。
	社会的役割についての認識の変化	・役割は人生で必要なときもあるが、「変装」は老年的超越の発達を妨げるサイン ・自分らしくある（be oneself）ためには自信を持つこと
	社会的因習からの決別	・社会的因習から決別する能力であり、受容力の高さを示す。 ・無垢さを恥ずかしがらずに認める → 自分の成熟度が高まる。
	財産への執着心の鈍化	・財産への執着心の鈍化 → 解放感の広がり ・生活必需品以外の物の所有は無意味 → 人生の旅も後半では荷物も軽く
	平凡にして深い知恵の獲得	・他人の行動を、寛容、忍耐、謙虚さの視点で観察 → 表面的な判断の二元性(善と悪、賢と愚など）を超越

（出典）Tornstam(2005)から筆者が要点を抽出し作表

(3) 老年的超越への障害と近道

Tornstam は、老年的超越の発達にとって「障害となるもの」と「触媒となるもの」があるとし、前者は〈物の所有〉であり、後者は〈ポジティブな孤独〉〈人生の危機〉〈橋渡し〉である。

物の所有　多く物を所有するということは、それが縛りとなることもある。「人生後半期の旅は、軽い荷物で過ごすほうがよい。適当に財産を譲ることで、快適でシンプルな生活に適応できるようになる」(p.69)。必要以上の物の所有には、「根っこのところに罠が潜んでいることを理解しておくべきである」(p.70)。

ポジティブな孤独　「私には一人になる時間が必要。そうすることで問題をうまく解決できるように思うし、自分の行動も変えられる。このような時間は心地よい気分にしてくれるし必要なもの」(p.71)。〈ポジティブな孤独〉というのは、人と関わりを断ち究極の孤独を求めることではない。問題なのは、「〈ポジティブな孤独〉を理解せず、抑うつやネガティブな撤退の兆候と誤解していることである」(p.71)。

人生の危機　人生の危機には、「老年的超越の発達を加速する運動エネルギ―が内包されている可能性があり」(p.71)、新たな思考法や心の持ち方を誘起する効果がある。事例として、心臓病の手術経験が心を開く契機となった 68 歳男性の新たな書物との出会い（物事は然るべきところに落ち着くことを知り、死への恐怖が消えた）や、配偶者の死が利他的な考え方をする契機となった 80 歳女性の話を挙げている。

橋渡し（媒介）　Eva の自然の中での体験（頭上を舞う燕を眺めたり、春にはスープを作るためにイラクサを摘むといったシンプルな生活）や、77 歳男性の音楽体験（心地よい音楽に感涙し幸福感に浸る）は、ともに知性よりも感情に訴えるもので、老年的超越の特徴がうかがえる。これらの体験が示すように、境界を超越することで得られた自由は、「実存的意味 (existential categories)」(p.73)に気づくきっかけとなる。

(4)「離脱」と「統合」を超えた発達

Tornstam は、「老年的超越はすべての高齢者に一様にみられる発達ではなく、潜在的にもっている発達可能性として捉えるべき」(pp.74-75) だとし、次のように指摘している。「老年的超越のかたちは個々人によって異なるはずであり、それへと至る道も複数ある。老年的超越の〈種子〉は個々人に内在しているが、それを育てるには適度な水遣りが必要である。しかし、今日の社会では、それが十分になされていない」(p.75)

また、伝統的な老年学の理論で問題とされる孤独についても、「〈ポジティブな孤独〉というものがあり、孤立や離脱とは異なる主体的選択による発達変化と捉えるべき」(p.75) との視点を示している。

もう一つは、社会関係への関心が低下することについての見方である。「インタビューでは社会的因習からの積極的な超越であることが示唆されているにもかかわらず、

無垢であることを精神の異常の兆候とみなしてしまう」(p.75)。しかし、この場合も、生活満足度は高く、抑うつや神経症の兆候も認められないことから、老年的超越の発達パターンである可能性を指摘している。

結論として、伝統的な老年学の理論による説明では限界があり、古い離脱理論とはまったく異なる老年的超越理論による発達の視点が必要であるとし、Erikson の発達モデルとの関係について次のような見方を示している。

「両理論とも〈老い〉を発達のプロセスと捉えており、Erikson の理論では自我統合であるが、老年的超越理論では成熟である。Erikson の自我統合は、人生の基本的受容であり、経験した世界をどう捉えるか、統合のプロセスは過去の振り返りである。一方、老年的超越のプロセスは、現実の再定義を踏まえて意識が外へ向かう視点である」(p.76)

1.4　老年的超越の量的研究

原典では、Tornstam が行った以下の３つの量的研究が紹介されている。

Ⅰ The 1990 Danish Retrospective Study (74-100 歳のデンマーク人を対象にした 1990 年の回顧的縦断研究)(pp.78-92)

Ⅱ The Swedish 1995 Cross—Sectional Study (20-85 歳のスウェーデン人を対象にした 1995 年の横断研究)(pp.92-107)

Ⅲ The Swedish 2001 (65+) Study (65-104 歳のスウェーデン人を対象にした 2001 年の横断研究)(pp.107-123)

上記３つの量的研究について、緒言、方法、結果、考察・結論に区分し、筆者が、共通する項目を中心に要点を抽出し整理した結果を**表 1-2**（本章末）に示す。それぞれの研究については、表側に ID 番号を付している。なお、原典では、IDⅡおよび IDⅢ研究をもとに、LIFE CRISES AND GEROTRANSCENDENCE（人生の危機と老年的超越）と題して節が設けられているのでこれを IDⅣ（pp.128-142）とした。

(1) 研究種別および対象

ID Ⅰは、1990 年に行われた回顧的縦断研究であり、老年的超越理論の初期の実証研究である。対象者はデンマーク人の男女 912 人で年齢は 74-100 歳を対象にした老年的超越の研究である。回顧的というのは、現在の心境を 50 歳のときとの比較で尋ねているためであり、また縦断的というのは、生活満足度について、５年前に行った調査との比較で分析を行っているためである。

IDⅡは、1995 年に行われた横断研究である。1990 年の回顧的縦断研究と同様の結果が再現できるのか、また、老年的超越が理論どおり加齢とともに発達するものとするなら、若年期から同様の発達がみられるのか。スウェーデン人の男女 2,002 人、年齢は 20-85 歳を対象にした研究である。

IDⅢは、2001 年に行われた横断研究である。対象者はスウェーデン人の男女 1,771 人で年齢は 65-104 歳の高齢者を対象にしている。1995 年研究で明らかとなった老年的超越の関連要因である社会的要因（social matrix factor）や事態要因（incident impact factor）について、主たる要因である加齢とともに老年的超越の発達にどのような影響を与えるのかを明らかにする研究である。

IDⅣは、1995 年と 2001 年の横断研究をもとに、老年的超越と人生の危機との関連に特化して考察を行っている論文である。

(2) 老年的超越の質問紙

IDⅠでは、老年的超越理論から導かれた下記の 10 項目の設問（p.82）からなっている。質問は 50 歳のときとの比較で、現在の心境について２件法で尋ねている。

宇宙的超越

・50 歳のときと比べて、生と死の境界がはっきりしなくなったように感じる。
・連綿と続く生命のつながりからすれば、今は個人の命がいかにちっぽけなものかを強く感じる。
・50 歳のときと比べて、宇宙と自身とのつながりを感じる。
・物理的に離れたところにいる人でも、身近にいるように感じることがよくある。
・今は過去と現在の間の距離感がなくなったように感じることがある。
・今は先祖や将来の世代との強いつながりを感じる。

自我超越

・自分のことで、昔のように深刻に受け止めることはしなくなった。
・50 歳のときと比べて物質的なものには意味を感じなくなった。
・今は表面的な社会的関係に興味をもつことはない。
・50 歳のときと比べて深く物事を考えるようになり、内面的な世界に喜びを感じる。

IDⅡおよびIDⅢについては、原典では探索的主成分分析（explorative principal component factor analysis）の結果抽出された下記の 10 項目（p.110）が選定さているが、その元となった Tornstam の論文（1997）では、25 項目の設問から構成されており、選択肢は 4 件法である。

宇宙的次元

・自分の存在は、宇宙とのつながりの中にあるのだと感じる。
・自分はすべての生きとし生きるもの一部と感じる。
・遠くにいる人の存在を強く感じることがある。
・過去の出来事でも現在のことのように感じることがある。
・先祖との強いつながりを感じる。

一貫性次元

・私の人生は混沌としており、一貫性がなかったように感じる。
・私の人生は一貫しており、今日まで生きてきたことには意味があったと思う。

自発的孤独次元

・他人といるよりも、ひとりでいることを好む。
・新しい人と出会うのは楽しい。
・平穏な日常のもとで、ひとり思索することは、よき人生を送るために大切なこと。

(3) 老年的超越の次元

ＩＤⅠ、ＩＤⅡ、ＩＤⅢともに、探索的主成分分析により下位因子を抽出している。それぞれの下位因子の名称は以下のとおりである。なお、各次元の名称については、原典の英文表記を付記した。

ＩＤⅠ：第１因子は６項目で構成され、時間・空間・生と死の感じ方や定義の変化と関連することから「宇宙的超越」(Cosmic transcendence) としている。第２因子は４項目で構成され、個人と他者との関係性と関連することから「自我超越」(Ego-transcendence) としている。Tornstam は、２つの抽出された因子は、ＩＤⅢ研究でも、ほぼ正確に再現されたとし、「これら２つの因子は、Jung のいう老年期の２つの課題――宇宙について知ること、自己について知ること――とも合致する」(p.83) と述べている。

ＩＤⅡおよびＩＤⅢ：第１因子は５項目で構成され、時間・空間・物質的なものからの超越と関連し、質的研究の“宇宙的超越（次元)”に対応していることから「宇宙的次元」(Cosmic dimension) としている。第２因子は２項目で構成され、質的研究の「自己の次元」の“自我統合”に対応していることから「一貫性次元」(Coherence dimension) としている。第３因子は３項目で構成され、質的研究の「社会と個人との関係の次元」の“人間関係の意味づけの変化”に対応していることから「自発的孤独次元」(原典では“Solitude dimension”となっているが、文中では“need for solitude” という言葉が使われており、発達の意味が含意されていると考え、このような訳を当てた) としている。

(4) 変数・測定方法および分析手法

ID Ⅰ研究(1990)

変数：属性・社会的要因としては、年齢、性別、社会活動、心理的要因としては、高齢者うつ尺度、心理的緊張、コーピング・パターン、事態要因としては、人生の危機、および生活満足度からなる。

社会活動：他者への訪問、他者の訪問、親族との接触、友人との接触、屋外での余暇活動、これらの頻度を累加している。ただし、子や孫との接触は除外されている。

高齢者うつ尺度：次の５項目（３件法）からなる。[①孤独を感じる、②時間がゆっくり過ぎていくように感じる、③忘れられてしまっているように感じる、④無用な存在と感じる、⑤老いたと感じる]

心理的緊張：次の５項目の兆候を積み上げている。[①理由がはっきりしない倦怠感、②不眠症、③神経症、④不安、⑤抑うつ]

コーピング・パターン[4]：問題や悩みを感じたときの行動について４件法で尋ねている。基本は、防衛型コーピングと攻撃型コーピングの２類型で構成されるが、次の4類型に区分している。“Low copers”は攻撃型・防衛型コーピングが平均値以下、“Multicopers”は攻撃型・防衛型コーピングが平均値以上、“Defensive copers”は防衛型コーピングが高く、攻撃型コーピングが低い。また“Offensive copers”は攻撃型コーピングが高く、防衛型コーピングが低い。

人生の危機：近親者の死の体験者について、トラウマの解決レベルを４件法で尋ねている。

生活満足度：単項目尺度で、現在の生活の「満足～不満足」を５件法で尋ねている。

分析手法：老年的超越の各次元と生活満足度および社会活動との関連は、ANOVA―MCA（多重分類分析）を行っている。

ID Ⅱ研究(1995)

変数：属性・社会的要因としては、年齢、性別、生活環境、事態要因としては人生の危機、および生活満足度からなる。

人生の危機：病気の数、直近２年間での人生の危機の経験数を累加している。

生活満足度：単項目尺度で、現在の生活の「満足～不満足」を５件法で尋ねている。

分析手法：老年的超越の各次元と属性・社会的要因および事態要因との関連は ANOVA―MCA 分析を行っている。

---

[4] コーピングとは、自分自身の内部に生じたストレス反応を低減することを目的とした認知的または行動的努力のプロセス[『心理学辞典』(中島他(編), 1999, p.276)]のことであるが、「老年的超越の到達度が高い場合には、ストレスに立ち向かう攻撃型（能動的）と、攻撃・防衛型（受動的）の組み合わせからなる複合型のパターンがみられるが、仮に老年的超越が“離脱”だとするなら、Low copers や Defensive copers の割合が老年的超越の高さに比例して増加するはず」(Tornstam,2005,p.86)。

IDⅢ研究(2001)

変数：属性・社会的要因としては、年齢、性別、生活環境、事態要因としては人生の危機、および生活満足度からなる。

病気の経験：病気のリストから罹患した病名に印をつけ、これらの病気の数を累加している。

人生の危機：直近２年間の人生の危機と思える経験を累加している。

活動指標：項目は、a）家外での活動参加（組織活動、教会、映画、劇場等)、b）訪問客の受け入れ（友人、隣人、子供、他の親戚)、c）友人、隣人、子供、他の親せきへの訪問、となっており、[毎日／週／月／半年／それ以上]の５件法で尋ねている。

生活満足度：単項目尺度で、現在の生活の「満足～不満足」を５件法で尋ねている。

分析方法：老年的超越の各次元と属性・社会的要因および事態要因との関連は ANOVA―MCA 分析を行っている。また、老年的超越の次元ごとに、発達の違いをみるために CHID 分析（Chi-squared Automatic Interaction Detection：カイ２乗法による自動交互作用検出法）を行っている。

（5）関連要因の分析結果

各研究のリサーチ・クエスチョンに基づいて様々な要因が変数として取り上げられているが、共通しているのは、年齢、性別、生活環境、社会活動、生活満足度、人生の危機である。以下は、３つの量的研究において有意とされた関連要因について、要点だけをおおまかに整理したものである。

宇宙的次元（ＩＤＩでは、宇宙的超越）

① 「宇宙的次元」の発達は、男女とも成人期前半(20 代)から始まり、成人期後半(65 歳以降)で最大に達する。

② 学生や自由度が高く制約の少ない都市居住者は、「宇宙的次元」が高い。

③ 「宇宙的超越」と社会活動には正の相関が認められるが、「宇宙的超越」の高い者にとっては、社会活動は、生活満足度を高める本質的な要因ではない。

④ 人生の危機の経験のある者は、ない者より「宇宙的次元」は高い。しかし、高齢になると危機の経験の有無による「宇宙的次元」の差は縮小し、同じような水準に至る。

⑤ 「宇宙的超越」の高い者は、低い者と比べて「攻撃型」「マルチ型」のコーピング・パターンの割合が高い。また、「宇宙的超越」と高齢者のうつ傾向には相関は認められない。これらのことから、老年的超越は離脱とは異なるコンセプトであるといえる。

一貫性次元

① 「一貫性次元」は、男女とも 65 歳頃までは急速に発達し、それ以降 94 歳頃まではフラットに推移し、95 歳以降は急速に低下する。この間、男性は 35-45 歳にかけて一時期、大きく低下する。Jung の「中年の危機」による意識変化が考えられる。

② 既婚者、高収入で社会的地位の高い者は「一貫性次元」が高い。

③ 社会活動に積極的な者は、「一貫性次元」も高く生活満足度も高い。

④ 人生の危機は、若年期には「一貫性次元」に否定的な影響を与えるが、高齢期での危機の経験は、「一貫性次元」に与える影響は小さい。加齢とともに変化する人生観(価値観)やコーピングの変化が、危機の経験によるネガティブな影響を緩和している可能性が示唆される。

自発的孤独次元

① 「自発的孤独次元」は、男女とも若年期（20 代）から中年期にかけて急速に高まり、中年期以降はフラットに推移し、65 歳以降、女性はさらに高まるが、男性は低下傾向を示し、コホートの影響を考える必要がある。

② 社会活動に消極的な者は、孤独を求める動機がネガティブな方向となり、その結果として生活満足度が低くなるのであろう

③ 人生の危機の経験のある者は、ない者と比べて「自発的孤独次元」は僅かに高いが、後期高齢域ではその影響は弱まり、最終的には危機の経験の有無にかかわらず、「自発的孤独次元」は同じ水準に至る。

④ 「自我超越」の高い者は、「攻撃型」「マルチ型」のコーピング・パターンの割合が高い。また「自我超越」と高齢者のうつ傾向には相関は認められないことから、老年的超越は離脱ではなく、ポジティブな生活態度であることがうかがえる。

（6）文化的要因への示唆

IDⅡ研究では、「比較研究を行えば、老年的超越のプロセスの文化による違いを明らかにできるだろう」（p.107）と、次の３人の研究者の指摘を紹介している。

「Jung の集合的無意識では、元型（archetypes）の現れ方が文化に依存するとされる。また、Ahmadi は、文化的な要素は老年的超越の発達の調節項とみるべきであり、神秘性を伴う文化のもとでは容易に老年的超越の発達がみられると述べており、Chinen は、それが民話であることを指摘している」(p.107)。

このように Tornstam は、文化が調節項として老年的超越に影響を及ぼす可能性について言及している。

1.5　老年的超越理論を日本人高齢者に適用する際の問題点と留意点

Tornstam は、「老年的超越は、高いレベルの人間発達でありポジティブなものである。この点では、活動理論や Erikson の発達理論と相違するものではないが、違いがあるとすれば、〈老い〉についての新たな視点である」(pp.45-46) とし、老いの本質的な意味を理解するためには、高齢者自身の「語り」に耳を傾け、哲学や人類学の知見も活用し現象学的に捉えることが重要であると述べている。

以下では、老年的超越理論を日本人に適用する際の問題点や留意点について、(1) 老年的超越理論の東洋文化的な側面、(2) 老年的超越の測定尺度、(3) 老年的超越の関連要因、(4) 老年的超越と生活満足度、の観点から整理し、実証研究に向けた課題を明らかにする。

(1) 老年的超越理論の東洋文化的な側面

Tornstam は老年的超越理論を構築するにあたって、東洋の禅や Jung 心理学の考え方を取り入れている。人は加齢とともに円熟味が増すことで、「物質的・合理的な視点から宇宙的・超越的な視点へ移行する」(p.41) とし、Tornstam はこの変化を〈メタ的視点への移行〉と呼んだ。そして、老年的超越の発達過程では、下記のような認知・行動の変化が認められると述べている[記号 (⇔) の左側 (p.41)]。また、記号 (⇔) の右側には、第３章で詳述する《東洋的なるもの》から対応するキーフレーズを対置させているが、これらの内容は一見すれば明らかなように、東洋文化圏において一般的に認められる、〈ものごと〉に対する見方・考え方である。

・霊性 (宇宙) 的感覚の増加　⇔　自然と人間が融合する宇宙観
・時間・空間・物質の認知における再定義　⇔　時空一体の概念
・生と死の認知における再定義、死への恐怖の減少　⇔　死は天命。自然に還る
・過去と将来世代との親近感の増加　⇔　将来世代とのつながり
・表面的な社会的交流への関心の低下　⇔　林住期に遊ぶ
・物質的なものへの関心の低下　⇔　「知足」の心
・自己中心性の低下　⇔　利他性
・瞑想し過ごす時間の増加　⇔　禅的生活

Tornstam は老年的超越の内容については、「宇宙的次元 (the cosmic dimension)」「自己の次元 (the self dimension)」「社会と個人との関係の次元(the social and personal relationships)」の３つの次元を提示しており、構成要素となるコードとその内容については、**表 1-1** に示したとおりである。この表からも明らかなように、多

くのコードや内容で東洋文化の影響をうかがわせる表現形がみられるが、この点については第３章において詳しく検討する。

なお、Tornstam は老年的超越の発達を阻害するものとして、「西欧文化に根差す一般的な世間の価値観――活動性、生産性、効率性、個性、自立、富、健康、社会性――」（p.43）を挙げている。西欧には、このような価値観から逸脱することは罪悪と感じる文化が背景にあることから、結果として多くの人が人生後半の発達課題に気づかないまま老いるという、いわゆる Jung の中年の危機（原典では“Jung's sad observation”）（p.44）に直面することになる。この点に関して、東洋には、人生を円環的に捉える「還暦」や、『論語』の一節にある「不惑、知命、耳順、従心」のように、古来より年齢に応じた理想的な発達を意味する考え方があり、日本人にとっても、老年的超越理論は、親和性の高い理論であると言えるであろう。

（2）老年的超越の測定尺度

Tornstam は老年的超越の測定尺度として、２つの尺度、Gerotranscendence Scale Type1（GST1）と Gerotranscendence Scale Type２（GST２）を作成している。GST1 は、1990 年にデンマーク人を対象に行われた回顧的縦断研究において、GST2 は、1995/2001 年にスウェーデン人を対象に行われた横断研究で用いられた。探索的主成分分析の結果、GST1 は、６項目からなる「宇宙的超越」（Cosmic transcendence）と４項目からなる「自我超越」（Ego-transcendence）という２つの因子で構成され、GST２は、５項目からなる「宇宙的次元」（Cosmic dimension）、２項目からなる「一貫性次元」（Coherence dimension）、３項目からなる「自発的孤独次元」（Solitude dimension）と３つの因子で構成されている。

GST１および GST２の構成項目を比較すると、GST1 の「宇宙的超越」と GST２の「宇宙的次元」については類似している。また、GST1 の「自我超越」は、老年的超越理論が示すイメージに沿う内容であるが、GST２の「一貫性次元」は、たった２項目で構成されており、その内容も“人生を振り返っての一貫性の有無”について片方を逆転項目で問う形となっている。

この GST2（日本語版）を日本の高齢者大学の受講生に適用した研究（石原・長田，2011）では、「Cosmic のみ属する全ての項目と有意な関連を示した一方で、Coherence、Solitude には有意な関連を示さない項目が認められた」と報告されている。

また、増井（2013）のレビュー論文によれば、Tornstam が開発したこれらの尺度（原版はスウェーデン語）は各国語に翻訳され利用されているが、その評価については、「GST2 の宇宙的次元については、その下位尺度のオランダ、台湾、日本での適用可能性が報告されているが、一方、その他の２つの次元（一貫性と孤独）の適用可能性は、現在のところ確認できる研究が限られている」と報告されている。

その上、GST２では３つの次元の総項目数が 10 項目と限られており、東洋文化の影響を強く受ける日本人高齢者に対しては、文化的な背景を踏まえた測定を十分行えない可能性が高い。同じような問題意識から増井他（2010,2013）は、日本版の老年的超越質問紙（Japanese Gerotranscendence Scale ； JGS）の開発を行っている。

これらの概要については、第２章で詳述する。

（3）老年的超越の関連要因

前述したように Tornstam は、1990 年研究では２つの次元、1995/2001 研究では３つの次元について、詳細な関連要因の分析を行っているが、ここでは、GST2 が使用された 1995/2001 研究において統計的に有意とされた要因について、おおまかに３つの次元ごとに整理して示すと以下のとおりである。

宇宙的超越　年齢による効果は成人期初期からみられ、性別、職業、病気・人生の危機によっても影響を受けるが、後期高齢域ではこれらの要因の影響力は失われる。また、女性は年齢とともに高まるが、男性は後期高齢域では低下し、コホートによる影響が考えられる。

一貫性　年齢による効果は成人期初期からみられるが、超高齢期（95 歳以降）では男女とも急速に低下する。前職業における地位、病気・人生の危機、活動性も影響を及ぼす。しかし、高齢期では人生の危機の影響は小さく、加齢とともに変化する人生観（価値観）やコーピングの違いが影響している可能性が高い。

自発的孤独　孤独を求める傾向には、加齢による発達と考えられる場合と、病気や危機に対する防衛反応と考えられる場合がある。年齢による効果は、成人期初期から後期高齢域にかけて連続的な増加がみられる。年齢は他の要因と補完関係にある発達要因であるが、男性ではコホートによる影響が考えられる。配偶者の喪失、離婚、病気などによっても影響を受ける。

このように、次元ごとで影響要因に若干の違いがあるが、全体としてみた場合には、年齢、性別、生活環境（婚姻歴、収入、職業、家族関係など）、社会活動および人生の危機が老年的超越の関連要因となっている。特に、年齢については、年齢階層（１階層 10 歳区切り）ごとに区分し詳細な分析がなされており、男性についてはコホート（戦争経験）による影響の可能性が示唆されている。

Tornstam の研究で明らかとなった老年的超越の関連要因については、日本人高齢者でも再現されるのかについては第２章で詳述するが、人生経験豊富な高齢者の老年的超越という複雑な心理発達に影響を及ぼすも要因が属性・社会的要因やネガティブ・ライフイベントだけなのか、さらに検討を要するところであろう。

老年的超越理論は、東洋の禅や Jung 心理学の知見を取り入れて構築された理論であり、これを日本人高齢者に適用する際には、バックグラウンドとなる文化的な要因を

説明変数として取り込む工夫が必要であろう。Tornstam も 1995 年研究において、文化的な要素（たとえば、Jung の集合的無意識と元型、Ahmadi の神秘的要素を持つ文化、Chinen の東洋の民話、など）が調節項として老年的超越に影響を及ぼす可能性を指摘しているが、原典をみる限りでは量的研究において変数としては取り込まれてはいない。

また、影響要因の分析手法に関しては、主として ANOVA―MCA 分析が用いられているが、この手法では、各要因の説明力についての分析は可能であるが、複数の要因間の構造的なつながり（因果の方向性）について把握するのは難しいのではないかと思われる。

（4）老年的超越と生活満足度

高齢者のみを対象にした 1990/2001 年研究では、「宇宙的超越」と「一貫性」については、生活満足度との間に正の相関が認められたが、1995 年研究では相関は認められなかった（Tornstam は、1995 年研究は横断研究のため、発達変化が捉えられていなかった可能性を指摘している）。

Tornstam は、先述したように、社会活動に積極的な者は、「宇宙的超越」や「一貫性」は高くなるが、社会活動に消極的な者は孤独を求める傾向（ネガティブな孤独）が強くなるため、生活満足度が低いのであろうと述べている。このように、老年的超越、社会活動、生活満足度との間には統計的に有意な関係が存在していることは明らかであるが、「宇宙的超越」が高い者にとっては、社会活動の程度は生活満足度の本質的な要因でないとも述べており、老年的超越と生活満足度との関連については、単純な２変数間の因果関係だけではない可能性があり、他の要因との相互効果を考慮する必要があるであろう。

GT：老年的超越（Gero-Transcendence）の略号

表１-2 Tornstamの量的研究の概要（全4頁）

ID	研究種別	実施年	リサーチ・クエスチョン	方法			
				対象	GTについての質問紙	次元	変数・測定方法 属性・社会的要因
I	縦断研究 （1986年と1990年の比較）	1990年	1.GT理論が示唆する変化を高齢者が認識しているか 2.GTの到達レベルの違いをどう定義するか 3.GTは、社会活動からの撤退を含意するか 4.GTの高い者は、人生の問題にどう対処しているか 5.GTは生活満足度を高めるか 6.人生の危機はGTのプロセスを促進するか 7.GTが高まれば向精神薬の使用は減少するか	・デンマーク人 男女912人 ・年齢74～100歳	GT理論から導いた10項目 質問：「人生観は50歳のときと比べて変わったか」2件法で回答	主成分分析により２つの因子を抽出 1.Cosmic transcendence （宇宙的超越） 時間・空間・生と死等に関連する６項目で構成 2.Ego-transcendence （自我超越） 人間関係に関連する４項目で構成	・年齢 ・性別 ・社会活動 ・高齢者うつ尺度 ・心理的緊張 ・コーピングパターン（４パターンに分類）
II	横断研究	1995年	1.GTに年齢差は認められるか 2.GTは連続的な発達、それとも人生の節目に出現するものか 3.GTの性別による発達の違いはあるか 4.生活環境はGTの発達にどう影響するか 5.GTは生活満足度の向上、死への恐怖の低減にどう影響するか	・スウェーデン人 男女2,002人 ・年齢20～85歳	原典では主成分分析による因子抽出後の10項目が示されているが、Tornstamの論文(1997)では25項目の設問となっている（4件法で回答）	主成分分析により３つの因子を抽出 1.Cosmic dimension （宇宙的次元） 質的研究の「宇宙的超越」に対応し５項目で構成 2.Coherence dimension （一貫性次元） 質的研究の「自己の次元」の「自我統合」に対応し２項目で構成 3.Solitude dimension （自発的孤独次元） 質的研究の「社会と個人との関係次元」に対応し３項目で構成	・年齢 ・性別 ・生活環境 （婚姻歴、収入、職業、家族関係等）

ID	変数・測定方法		結　果	考察・結論
	事態要因	生活満足度		
I	・人生の危機 （近親者の死を体験した者にトラウマの解決レベルを４件法で尋ねる）	・現生活の満足/不満足度を1項目尺度（５件法）で尋ねる。	1. 42%の者が過去と現在の距離感の消滅を実感 2. 「宇宙的超越」「自我超越」ともに年齢との相関が認められない。性差も同様。74歳までにGTに到達している可能性 3. 「宇宙的超越」と社会活動とは正の相関、「自我超越」とは有意な相関がみられず。 4. 「宇宙的超越」「自我超越」の高まりにつれ、「攻撃型」「マルチ型」のコーピングパターンが増加 5. 「宇宙的超越」「自我超越」は生活満足度と正の相関を示すが、「宇宙的超越」が高まると、社会活動と生活満足度の相関は弱まる。 6. 喪失体験（人生の危機）のある者は「宇宙的超越」が高い。「自我超越」とは有意な関連がみられず。 7. 「宇宙的超越」「自我超越」ともに高齢者うつ尺度とは相関を示さず。GTが抑うつに伴う防衛反応ではない証拠	・GT尺度を構成する内容は離脱のコンセプトとは異なる。今を生きる現実の新たな再定義を意味するもの。 ・GTは、社会活動と正の相関、同時に孤独の必要性や思索行動とも関連がみられる。重要なのはどちらも行動が自発的であること。 ・GTの高い者のコーピングパターンは、攻撃型・マルチ型。GTが離脱や社会的崩壊症候群（Social breakdown syndrome）の側面だとする仮説は誤り。 ・社会活動の程度は、「宇宙的超越」の高い者にとって生活満足度の本質的な要因ではない。 ↓ **GTは既存の老年学の見方とは明らかに異なるコンセプト**
II	・人生の危機 （病気の数、危機の経験を累加）	・現生活の満足/不満足度を1項目尺度（５件法）で尋ねる。	**1. 属性による影響** ・「宇宙的次元」は、男女とも高齢者ほど高い。全体的に女性が高い。65-74歳で男性は女性に追いつくが、この後は女性はさらに高まるが、男性は反転して低下する。 ・「一貫性次元」は高齢者ほど高いが、男性では35-44歳で一時的に低下し、その後は急速に高まる→Jungの「中年の危機」 ・「自発的孤独次元」は男女とも35-44歳までは差はなく高まる。それ以降も男性は微高し65-74歳を境に反転低下。女性は微減するも65-74歳を境に反転し急速に高まる。 **2. 社会的要因による影響** ・自由業や学生の「宇宙的超越」は高い。 ・婚姻歴のある者や高収入の者は、「一貫性」が高い。 **3. 事態要因による影響** ・人生の危機の経験は、「宇宙的超越」には肯定的な影響を、「一貫性」には否定的な影響を及ぼす。 ・病気は「宇宙的超越」と正の相関を示すが、危機の経験をコントロールすると病気の影響は消える。人生の危機と感じる病気は「宇宙的超越」を高める。 **4. 生活満足度と死の恐怖** ・1990年研究でみられた生活満足度と「宇宙的超越」と正の相関は認められず。横断研究では発達変化を捉えられないことが原因 ・「一貫性」は生活満足度と強い正の相関すが、「一貫性」のコンセプトが生活満足度と近い概念であることによる。 ・「一貫性」は、死の恐怖とは緩い負の相関を示す。	・1995年の横断研究の結果は、1990年の縦断研究に沿ったものであった。 ・「宇宙的超越」と「一貫性」の発達は、人生前半期から始まり、後半期で最大に達する。「自発的孤独」も、若年期で急速に発達し後半期で最大に達する。 ・「宇宙的超越」は、男性より女性が高いが、この差は年齢とともに縮小する。 ・人生の危機は、職業・収入と同様、GTの各次元に影響を与える。人生の危機を経験することでGTの発達を妨げている価値観から解放され、自立的な人生を達成できる可能性が高まる。 ・85歳以下のデータであり、文化的な違いや異なるコホートで分析を行えば、結果が違ったものとなる可能性。 ↓ **GTの発達の文化による違いの比較研究の必要性を示唆** 例えば： ・Jungの集合的無意識における元型の表れ方が文化に依存すること。 ・文化的な要素は、GTの発達の調節項になり得る（AhmadiやChinen）

ID	研究種別	実施年	リサーチ・クエスチョン	方　法			
				対象	GTについての質問紙	次元	変数・測定方法 属性・社会的要因
Ⅲ	横断研究	2001年	1.65歳以降のGTの発達の特徴は何か 2.1995年の20～85歳を対象にした研究に新たな知見を示せるか 3.GTの関連要因はどのようなものか 4.GTの高い者と低い者の違いは何か 5.超高齢者で「宇宙的超越」が低下する理由は何か 6.後期高齢者（75～85歳）では、GTと社会活動、生活満足度との間にどのような関連がみられるか	・スウェーデン人 男女1,771人 ・年齢65～104歳	1995年の横断研究に同じ	主成分分析により３つの因子を抽出。因子名を変えているが内容は同じ。 1.Cosmic transcendence （宇宙的超越） 質的研究の「宇宙的超越」に対応し５項目で構成 2.Coherence （一貫性） 質的研究の「自己の次元」の「自我統合」に対応し２項目で構成 3.Solitude （自発的孤独） 質的研究の「社会と個人との関係次元」に対応し３項目で構成	・年齢 ・性別 ・生活環境 （婚姻歴、収入、職業、家族関係等） 上記に加えて ・出生地 ・住居 ・教育 ・活動指標
Ⅳ	横断研究 （GTと人生の危機）	1995年 2001年	1.対象者が経験した人生の危機とは何か 2.人生の危機の経験は年齢とともに増加するのか 3.人生の危機のパターンは男女で違いがあるのか 4.GTとの関連で人生の危機をどう捉えるのか	1995年/2001年研究に同じ	1995年/2001年研究に同じ	1995年/2001年研究に同じ	1995年/2001年研究に同じ

ID	変数・測定方法		結　果	考察・結論
	事態要因	生活満足度		
Ⅲ	・人生の危機 （病気の数、危機の経験を累加）	・現生活の満足/不満足度を1項目尺度（５件法）で尋ねる。	**1.「宇宙的超越」と関連要因** ・女性は高齢者ほど高いが、男性は75-84歳をピークに低下（コホートの影響。1910～1920年生まれの男性） ・人生の危機を経験した95歳以上の男性では大きく低下、女性は危機の経験の有無にかかわらず高齢者ほど高い。 ・1995年研究では、年齢、性別、人生の危機、病気、他の多くの変数とも相関を示したが、2001年研究ではこれらの変数とは相関を示さず。 ・活動性指標と生活満足度だけには相関が認められた。GTが離脱とは異なる概念であることの証明 **2.「一貫性」と関連要因** ・男女とも65～94歳までは、ほぼフラットに推移し差は認められない。95歳以降は男女とも急速に低下する。 ・病気や危機の経験とは正の相関を示す。 ・前職業における地位とは正の相関を示す。 ・活動性とは強い正の相関を示す。 ・生活満足度と強い正の相関を示す（1990研究と同様）。 **3.「自発的孤独」と関連要因** ・男女とも65歳以降は高まる傾向。男性は95歳以降は低下傾向 ・生活満足度との間で弱い負の相関を示す。 ・未亡人、未婚者、離婚経験者は、孤独を求める傾向が強い。 ・社会活動の少ない者は、孤独を求める傾向がみられる。 **4. GTと生活満足度との関連** ・「宇宙的超越」「一貫性」ともに正の相関を示す。後期高齢域では相関の強度は低下する。 ・「自発的孤独」とは、負の相関を示す。	**＜1995年と2001年研究の総括＞** **（宇宙的超越）** ・発達パターンは成人期からみられ、属性・社会的要因（性別、職業など）、事態要因（病気、人生の危機など）によっても影響を受けるが、後期高齢域では影響力は失われる。 ・1995年研究でみられた性別による発達の違い（女性は年齢とともに発達、男性は後期高齢域で低下）は、2001年研究でも再現されたが、コホートによる影響の可能性 ・有配偶者では、男性は女性と比べて「宇宙的超越」が低いという1995研究のパターンは、2001年研究では再現されず。 **（一貫性）** ・高齢期の社会的要因や事態要因が「一貫性」に影響を及ぼすという点で「宇宙的超越」とは異なる。 ・活動性の高い者は「一貫性」も高い。活動理論とGTは相補的関係 **（自発的孤独）** ・成人期初期から後期高齢域にかけて連続的な増加がみられる。 ・孤独を求める傾向には、①加齢による発達、②病気や危機に対する防衛反応、が考えられる。 ・年齢は、社会的要因や事態要因と補完関係にある発達要因であり、コホートの影響を受け「自発的孤独」を助長する。 ・配偶者の喪失、離婚、病気などによっても影響を受ける。 **（生活満足度）** ・1990年および2001年研究で、「宇宙的超越」「一貫性」と生活満足度との相関が明らかとなったが、20～85歳に焦点を当てた1995年研究では相関は認められなった→データが65歳以上、かつ発達変化ではなく、特定の時点（断面）で捉えた可能性がある ・「自発的孤独」とは負の相関がみられた。
Ⅳ	質問：直近2年の間に人生の危機と思える体験をしたか？ 選択肢：自身の病気、知人の病気、近親者の死、別離、その他		**1.「宇宙的超越」との関連** ・危機の経験のある者は、ない者より「宇宙的超越」は高いが、高齢者ほど危機の経験の有無による差は縮小する。 ・危機を経験した女性では、年齢による「宇宙的超越」の違いはみられないが、危機を経験していない男性では、高齢者ほど違いが認められる。 **2.「一貫性」との関連**（性別による区分はなし） ・危機の経験のない者は、ある者と比べて「一貫性」は高い。 ・危機の経験の有無にかかわらず、高齢者ほど「一貫性」は高い。 ・20－24歳では差は顕著であるが、75－85歳では大きく縮小する。 **3.「孤独の必要性」との関連**（性別による区分はなし） ・危機の経験のある者は、ない者より「孤独の必要性」は高いが、この差は小さい（1995年研究）。 ・2001年研究では、両者に有意な相関がみられない。	・人生の危機には各々の年齢に見合ったタイプがある。1995年研究では、病気と関連があることを明らかにした。 ・他人の病気や死がきっかけとなる「主観的な危機」は、高齢者に限ったことではなく若年者も経験すること。 ・高齢期での危機の経験は、若年期での経験と比べて「一貫性」に与える影響は小さい。むしろ加齢とともに変化する人生観（価値観）やコーピングの違いが影響している可能性 ・「一貫性」や「孤独の必要性」は、人生の危機の経験によって否定的な影響を受けるが、高齢者ほどその影響は弱まる。最終的には人生の危機の経験の有無にかかわらず、同じような水準に至る。 ↓ **年齢は「宇宙的超越」を高める重要な要因であると同時に、危機の影響を緩衝する働きをしている可能性**

（出典）本表は、Tornstam(2005)の下記の３つの量的研究から、筆者が要点を抽出し作表したものである。

Ⅰ The 1990 Danish Retrospective Study (pp.78-92)　Ⅱ The Swedish 1995 Cross–Sectional Study (pp.92-107)　Ⅲ The Swedish 2001 (65+) Study (pp.107-123)

第２章　日本の老年的超越研究

第１章では Tornstam（2005）の老年的超越理論について述べたが、本章では、日本の老年的超越研究に関する既存の文献を調査した結果について要約するとともに、これらの研究成果の統合を行い、実証研究に向けた課題を整理する。

2.1　方法

文献検索　調査対象となる文献については、次の考え方にしたがって抽出した。第１に、日本の老年的超越研究の現状や課題が概観できるもの、第２に、本研究における問いと密接に関連があると考えられるもの、である。具体的には、①日本人向けの老年的超越の測定尺度に関する文献、②老年的超越の関連要因に関する文献、③Tornstam の老年的超越理論は日本の禅やユングの分析心理学を参考にして構築されたものであり、このような文化的視点をふまえた研究、である。

大きな流れは、増井論文（2013）に国内外の動向が簡潔にまとめられているので、まずは、この論文を参考に上記の方針にかなった論文を一次抽出する。さらに抽出した論文の引用文献についても、確認が必要と判断したものについては二次的に収集する。増井論文以降（2014 年～）の日本の文献については、『老年社会科学』のバックナンバーを調べ、「老年的超越」をキーワードに検索し収集した。これら以外の文献については、インターネットのキーワード検索により、本研究の問いと関連があると判断した論文を収集した。

内容検討および文献統合　抽出した論文については質的研究と量的研究に分類し、内容を確認したのち IMRAD（Introduction,Methods,Results,And Discussion）形式にしたがって要約表にまとめた。この要約表に基づき、それぞれの文献の概要を記述するとともに、量的研究については、抽出した文献の相互比較を行い研究ごとの類似点・相違点、未検討事項について整理した。また、質的研究については、各論文の著者が導出した概念やコード・カテゴリーが Tornstam の老年的超越理論の３つの次元とどのように関係するのか、各論文での考察に立脚し関連図として示した。

2.2　結果

抽出した文献は**表 2-1** に示すとおりであり、質的研究が９本（ID 番号:Ａ１～Ａ９）、量的研究が７本（同：Ｂ１～Ｂ７）である。

これらの文献をレビューした結果、質的研究については、(1) 国内外の老年的超越研究の動向が包括的にまとめられているもの（ID 番号 Ａ６；以下では番号のみを記す)、(2) 実在の超高齢者の「語り」について現象学的に分析されたもの（Ａ５、Ａ７)、(3)

日本人高齢者のスピリチュアリティ概念について検討を行ったもの（A３）、(4) 日本人高齢者への老年的超越概念の適用に関する問題点を考察したもの（A９）、を取り上げ、**表 2-2**（本章末）に IMRAD 形式でまとめて示した。

また、量的研究については、(1) Tornstam の老年的超越尺度を日本人に適用した研究（B３）、(2) 日本版老年的超越質問紙の作成に関する研究（B２、B５）、(3) 老年的超越の関連要因についての横断研究（B４）、(4) 老年的超越の関連要因についての縦断的研究（B６、B７）、(5) 高齢者の精神的健康の縦断変化に及ぼす老年的超越の影響（B７）、を取り上げ、**表 2-3**（本章末）に IMRAD 形式でまとめて示した。なお、B４と B７は、ともに関連要因を扱った研究ではあるが、B7 は精神的健康の縦断変化に特化した分析であるため上記のように個別に整理することとした。

表2-1　検討文献

ID	タイトル	著者	発行年	雑誌名
A1	サクセスフル・エイジングのもう一つの観点	中嶌康之、小田利勝	2001	神戸大学発達科学部研究紀要
A2	スピリチュアリティに関する質的調査の試み	田崎美弥子、松田正巳ほか	2001	日本医事新報
A3	日本人高齢者のスピリチュアリティ概念構造の検討	竹田恵子、太湯好子	2006	川崎医療福祉学会誌
A4	奄美群島超高齢者の日常からみる「老年的超越」形成意識	富沢公子	2009	老年社会科学
A5	超高齢者の語りにみる生(life)の意味	中川　威、増井幸恵ほか	2011	老年社会科学
A6	老年的超越研究の動向と課題	増井幸恵	2013	老年社会科学
A7	百寿者にとっての幸福感の構成要素	安元佐織、権藤恭之ほか	2017	老年社会科学
A8	日本人高齢者を対象とした宗教性およびスピリチュアリティ研究	大橋　明	2019	老年社会科学
A9	我が国の高齢者への「老年的超越」概念の適用に関する問題点	末田啓二	2019	甲子園短期大学紀要
B1	超高齢期における身体的機能の低下と心理的適応 ―板橋区調高齢者訪問悉皆調査の結果から―	権藤恭之, 古名丈人ほか	2005	老年社会科学
B2	心理的well-beingが高い虚弱高齢者における老年的超越の特徴; 新しく開発した日本版老年的超越質問紙を用いて	増井幸恵、権藤恭之ほか	2010	老年社会科学
B3	Tornstamの老年的超越尺度の構造の検討	石原房子、長田久雄	2011	応用老年学
B4	地域高齢者における老年的超越の関連要因の検討:年齢、身体状況、 他者との関係性に焦点をあてて―SONICデータを用いて―	増井幸恵、中川　威ほか	2012	日本心理学会第76回大会発表論文
B5	日本版老年的超越質問紙改訂版の妥当性および信頼性の検討	増井幸恵、中川　威ほか	2013	老年社会科学
B6	地域高齢者における老年的超越の縦断的変化の検討	増井幸恵、中川　威ほか	2015	日本心理学会第79回大会発表論文
B7	地域高齢者の精神的健康の縦断変化に及ぼす老年的超越の影響 の検討――疾患罹患・死別イベントに対する緩衝効果に注目して	増井幸恵、権藤恭之ほか	2019	老年社会科学

(注)著者等の詳細は、本論文末の「参考・引用文献」による。

2.2.1　質的研究

（1）国内外の老年的超越研究の動向

日本の老年的超越研究の動向については、増井（2013）の論文（A６）に簡潔にまとめられているので、ここではさらに要点のみを記すが、この中から文献検討で取り上げた論文については個々の論文の内容検討で記述する。増井論文の目的は、日本人高齢者における老年的超越の実態、老年的超越の測定尺度、老年的超越の関連要因、高齢期の心理的 well-being と老年的超越との関連について概観することである。

まず、日本人高齢者の老年的超越の特徴は、Tornstam の指摘（３つの次元；呼称は増井の訳による）とおおむね同じであるが、「宇宙的超越」については明確に現れず、「自己意識」と「社会との関係」の次元に関する内容が多いと述べている。また、老年的超越の測定尺度について、日本人を対象とする場合には Tornstam の GST 尺度では不十分で、増井他の研究グループが開発した日本版老年的超越質問紙（JGS および改訂版 JGS-R）の妥当性についての評価を紹介している。

さらに、老年的超越の関連要因について、Tornstam が示した要因の中で「年齢」と「人生の危機」に関して、オランダでの Read らの縦断研究との比較で一貫していないことを指摘している。老年的超越と心理的 well-being との関連では、増井他（2010）の日本人を対象とした研究（B２）を紹介しながら、「超高齢者の身体機能の低下の際の心理的 well-being の維持に老年的超越が重要であることを示唆するものであった」と記している。

日本での老年的超越研究の課題としては、①日本人高齢者を対象にした縦断研究、②老年的超越の３つの次元について、文化による差異や、その差異をふまえた測定尺度についての再検討、③海外では老年的超越の臨床的な応用が行われており、日本の介護現場や虚弱な高齢者への適用可能性についての検討、を挙げている。

（2）実在の超高齢者の「語り」についての現象学的分析

まず、中川他（2011）の A５は、農村部および都市部に暮らす身体機能の低下した超高齢者の生(life)の体験(生命・生活・人生)を見直し、その意味を現象学の視点から記述することを目的に行われた研究である。研究協力者は 85 歳以上の８人(男性４人、女性４人)で、インタビュー方式で実施された。分析の結果、次の４つのテーマを抽出している。「つながっていること」「変わっていくことに気づくこと」「変わらないことを見いだすこと」「自分だけにできることをみつけること」である。「つながっていること」「変わらないことを見いだすこと」「自分だけにできることをみつけること」は、Erikson (2001) の指摘にもある老年的超越の重要な構成要素であること、また、「変わっていくことに気づくこと」を肯定的な側面と捉え、このことが超高齢期における well-being の低下を緩衝している可能性があると述べている。

中川他（2011）は、課題として主に次の三点を挙げている。①高齢期における心理的適応のメカニズムは未解明なので超越の視点からの研究が望まれる、②超高齢者の生(life)は、宗教や風習といった独自の文化的背景の影響を受けているため、異なる文脈での検討が望まれる、③生(life)の実存的意味への志向性が高齢期にどのように発達するのかは未解明であり、幅広い心理的発達に着目していくことが重要となる。

次に、安元・権藤・中川・増井（2017）のＡ７は、百寿者にとっての幸福感の概念構造を明らかにするために行われた研究であり、あわせて既存の幸福感に関する理論との比較・考察を行っている。研究協力者は、都市部および農村部に居住する 99 歳以上の 13 人(男性１人、女性 12 人)で、インタビュー方式で実施され、GTA 分析の結果、次の５つのカテゴリーを抽出している。「前向きな気持ちで生きること」「制限の中で生きること」「他者とのよい関係を築くこと」「人生の充足感を感じること」「あるがままの状態を受け入れること」である。これらの幸福感の５つのカテゴリーについて、Ryff の心理的 well-being[1]との比較を行っており、考察の結果、それぞれのカテゴリーが順に「人生の目的」「環境制御」「積極的対人関係」「個人的成長」「自己受容」に対応すると記している。なお、「個人的成長」に関して“十分に生きた”という心からの満足感は、百寿者特有のものであったと記している。そして「百寿者の幸福感の概念と老年的超越とを比較検討することで、さらに理解が深まるであろう」と結んでいる。

（3）日本人高齢者のスピリチュアリティについて検討

竹田・太湯（2006）のＡ３は、日本でのスピリチュアリティ研究を概観し、日本人高齢者のスピリチュアリティの概念構造を文献レビューの手法で検討したものである。WHO が呈示したスピリチュアリティ概念についての日本での議論や識者の定義などを紹介しながら、スピリチュアリティは多様性をもつ概念で次のような共通性を有するとしている。①人間存在の根源に関わる。②人生の危機に直面したときに顕在化し機能する。③「自己」「他者や環境」「自分の力を超える大きなもの」との関係性を有し、「生きる目的・意味」「死や苦しみの意味」について探求する。④宗教的な因子を含むが宗教とは区別される。⑤個人の「生きる力」となる。⑥QOL と深い関係がある。このようにスピリチュアリティは、「高齢者の健康を考える上で非常に重要な概念である」と述べている。

また、日本人高齢者のスピリチュアリティ概念を構成する要素として、次の６つのコアカテゴリーを抽出している。なかでも「生きる意味・目的」は中心に位置し、高齢

[1] Ryff(1989)が提唱した Psychological well-being の概念で、次の６つの因子で構成されている。Self-acceptance(自己受容)、Positive relation with others(積極的対人関係)、Autonomy(自律性)、Enviromental mastery(環境制御)、Purpose in life(人生の目的)、Personal growth(個人的成長)：因子名の和訳は安元他（2017）による。

者との関連では「死と死にゆくことへの態度」「他者との調和」「自己超越」がスピリチュアリティにおいて重要な要素となる概念だとする。そして「『よりどころ』が他の５つの概念と双方向に関係しあう様は、まさに“老いにおけるスピリチュアリな作業”であり、高齢者の自己形成を促すことにもつながる」と述べている。

スピリチュアリティに関しては、A３以外に田崎・松田・中根（2001）のA２のように WHO のスピリチュアリティ概念の項目についての日本でのグループ議論の結果を考察したものや、大橋（2019）のA８の宗教性およびスピリチュアリティの定義についての文献レビューがある。A８によれば、日本人の場合、老年的超越の下位次元（JGS-R）にある「ありがたさ・おかげの認識」や「宗教的もしくはスピリチュアルな態度」などがスピリチュアリティに相当すると述べている。

（4）日本人高齢者への老年的超越概念の適用に関する問題点

末田（2019）のA９は、老年的超越の概念をめぐって日本の文化的背景を考慮に入れながら、アニミズム心性に関する研究と関連づけて論じているが、結論としては、おおむね次のようなことかと思われる。①老年的超越は、父性社会では老年期後半になって出現すると考えられるが、母性社会ではどの発達段階にも認められる心性である。②母性社会の日本ではアニミズムやアニミズム心性は受け入れられやすいが、欧米文化の下では、自我意識の衰える老年期後半になって出現すると考えられ、文化的・歴史的背景に対する留意が必要である。③近年、スピリチュアリティの重要性が欧米の研究者の間から指摘されており、スピリチュアリティ概念と老年的超越やアニミズム心性との関連についての議論が必要である。

質的研究については、この他に中嶌・小田（2001）のA1および富沢（2009）のA4を調べた。A1 については Tornstam の老年的超越理論についての背景や理論の生成過程についての考察であるが、本論文では第１章において述べた。A4 は老年的超越の形成要因を明らかにすることを目的に行われた研究であるが、調査対象者が奄美群島在住の超高齢者（11 人）であり、結果の解釈については、風土的な影響を考慮する必要があるように思われる。

2.2.2　量的研究

（1）Tornstam の老年的超越尺度を日本人に適用した研究

石原・長田（2011）のB3は、Tornstam（1997）の老年的超越尺度の因子構造および関連要因を明らかにすることを目的に行われた横断研究である。分析対象は、生きがい大学受講生 203 人(男性 93 人、女性 110 人、平均年齢 66.3 歳)、郵送回収方式で行われた。分析手法は、SEM による確認的因子分析、関連要因分析には重回帰分析が用い

られている。結果は、Cosmic 因子だけは５つの観測変数と有意な関連が認められたが、Coherence と Solitude の２因子については有意といえる関連は示されていない。また、関連要因については Cosmic 因子との関連が検討されているが、年齢が高いこと、友人・知人・親戚に会う機会が多いことが有意に影響していた。ただし、決定係数が小さく、検討した変数以外の影響要因がある可能性を示唆している。課題としては、Tornstam(1997)の老年的超越尺度を日本語に翻訳することの難しさ、日本人高齢者特有の老年的超越の要素、異なる文化でも共通する要素についての検証の必要性を挙げている。

（2）日本版老年的超越質問紙に関する研究

増井他（2010）の B２は、日本人高齢者を対象にした老年的超越質問紙(JGS)の開発と、心理的 well-being が高い虚弱高齢者の老年的超越の検討を目的とした横断研究である。対象者は 65 歳以上の在宅高齢者 500 人(男性 198 人、女性 302 人、平均年齢 79.0 歳)で、内訳としては、超高齢者 155 人(男性 54 人、女性 101 人、平均年齢 88.4 歳)は訪問調査、前期・後期高齢者 345 人（男性 144 人、女性 201 人、平均年齢 74.4 歳）は郵送調査である。測定項目（変数等）は、老年的超越については JGS、心理的 well-being については主観的幸福感（PGC モラール・スケール）など３つの指標、高次生活機能・身体機能については老研式活動能力指標など２つの指標、その他の変数として年齢、性別など６つの指標である。JGS の作成に関しては探索的因子分析、虚弱高齢者における老年的超越と心理的 well-being との関連についてはクラスター分析と一般線形モデルによる分析が行われている。

結果および考察では、JGS に関しては８つの因子（略称：「ありがたさの認識」「内向性」「脱二元論」「宗教・スピリチュアル」「脱社会的自己」「基本的肯定感」「利他性」「無為自然」）を抽出し、６因子が Tornstam の老年的超越の特徴と類似しており日本でもおおむね適用できるものであったと結論している。なかでも「脱二元論」と「無為自然」は、日本人にもなじみの深い東洋の超越的な考え方であり、ともに年齢と有意な正の相関があり、高齢期全般にわたって発達する特性であることが示されたとしている。

また、心理的 well-being と高次生活機能を変数とするクラスター分析の結果、超高齢者について３つのクラスターを抽出し、低機能高 well-being 群が低機能低 well-being 群より、「内向性」「脱社会的自己」「無為自然」の得点が有意に高かったとしている。この結果について、「Erikson の老年的超越は虚弱高齢者の心理的適応を促進するという仮説を支持するものである」と述べている。

課題としては、主に次の三点を挙げており、①尺度（JGS）の内的一貫性（α係数）が十分でなかったため質問紙の信頼性を高める検討が必要なこと、②対象集団のバイ

アスの問題があり代表サンプルを用いた分析が必要なこと、③超高齢期の虚弱化の進行に対する心理的適応の過程と老年的超越の役割についての縦断研究の必要性、である。

増井他（2013）の B5 は、より代表性の高い一般的な高齢者集団（SONIC[2]データ）を用いて JGS の改訂版を作成すること（研究１）、高齢者より若い世代での JGS-R 適用の可能性を検討すること（研究２）を目的とした横断研究である。研究１の対象者は、地域高齢者 1,973 人（男性 936 人、女性 1,037 人）、内訳は、70 歳群（69～71 歳）1,000 人および 80 歳群（79～81 歳）973 人であり、調査方法は会場招待型で実施された。また、研究２の対象者は、1 回目調査では中年群（49～51 歳）206 人、高齢群（69～71 歳）206 人、2 回目調査では、同様に中年群 172 人、高齢群 172 人であり、クローズド型ウェブ調査である。

検討対象となる尺度は、研究１および研究２ともに JGS の改訂版（JGS-R）であり、解析方法は、研究１は確認的因子分析、研究２は、平均値の有意差検定（t 検定）である。

結果および考察については、研究１では JGS-R の確認的因子分析の結果、８因子 27 項目のモデルの適合度が高いことを確認したが、内的一貫性は JGS と比べて大きな改善効果は認められなかった。その理由として、①老年的超越という広範で複雑な概念を少数の項目で網羅しようとしたこと、②高齢者の個人差が大きく、項目に対する反応が一貫していない可能性があること、を挙げている。研究２では、中年群と高齢群の比較において、「内向性」「脱二元論」「宗教・スピリチュアル」で有意差は認められなかったが、他の５つの下位尺度では、高齢群は中年群よりも有意に得点が高かった。このことから、「老年的超越特性が Tornstam が当初想定したとおりに加齢に伴って上昇するものであることを示しており、構成概念妥当性が確認されたものであると考える」と述べている。

総合的な議論として、①JGS および JGS-R の交差妥当性が確認できたことから、日本の比較的健康度の高い前期・後期高齢者にこの尺度が適用可能であること、②老年的超越が年齢とともに上昇すること、女性で高いことは Tornstam の理論どおりの結果であり、JGS-R の構成概念妥当性を示すものである、と結んでいる。なお、内的一貫性が低かったことについては、「老年的超越という複雑な現象を測定することの困難さが示された」として、今後、さらなる尺度の改良が期待されるとしている。

（3）老年的超越の関連要因に関する横断研究

増井他（2012）の B4 は、老年的超越の関連要因についての横断研究である。対象は、

[2] 大阪大学、東京都健康長寿医療センター研究所、慶應義塾大学の高齢者を対象とした共同研究の名称。

SONIC データを用い地域高齢者 1,973 人（男性 936 人、女性 1,037 人、平均年齢 74.9 歳)、内訳は 70 歳群（1,000 人、69～71 歳)、80 歳群（973 人、79～81 歳）とし、会場招待型で行っている。重回帰分析が用いられ、従属変数は JGS-R（30 項目）の下位尺度得点、説明変数は、性別等の背景変数、年齢、他者との関係性（交流頻度、ソーシャル・サポート)、身体状況である。

増井他（2012）は、「分析の結果、ほとんどの老年的超越の下位尺度で年齢の標準偏回帰係数(β;筆者挿入)が最も高かった。情緒的・手段的サポートは老年的超越に正の関連を示し、年齢に次ぐ大きさのβを示した。一方、交流頻度は下位尺度により正の関連を示すものと、負の関連を示すものとに分かれた。…身体状況が悪い場合には老年的超越が高いことが示された」と述べている。これらの結果から、「老年的超越は『自然な加齢』に伴って発達するという Tornstam の知見や、老年的超越は身体状況の悪化が避けがたい超高齢期の発達課題であるとする Erikson の第９段階仮説を支持するものであると考えられた」との見解を示している。

（4）老年的超越の関連要因に関する縦断的研究

増井他（2015）の B６は、老年的超越の加齢変化を確認するために実施された縦断研究である。対象は、第１波調査では B４研究と同様 SONIC データを用い、第２波調査では、第１波調査の参加者から地域高齢者 1,251 人（男性 614 人、女性 637 人、平均年齢 77.6 歳)、内訳は 70 歳群（681 人、71～74 歳)、80 歳群（570 人、81～85 歳）とし、調査方法としては会場招待型で行われている。分析モデルは JGS-R（27 項目）の下位尺度得点を従属変数とし、調査時期（第１波、第２波：反復要因)、性別、年齢群を独立変数とする分散分析である。年齢・性別ごとの３年間の老年的超越下位尺度得点の縦断変化を分析した結果は次のとおりである（論文記載の表 1 から筆者が読み取り)。

① 「脱社会的自己」と「無為自然」は、年齢・性別にかかわらず有意に上昇する。
② 「脱二元論」は、70 歳群男女と 80 歳群男性で有意に上昇するが、80 歳群女性では変化はみられない。
③ 「ありがたさ・おかげの認識」では、70 歳群男女ではともに有意に低下するが、80 歳群男女ではともに変化はみられない。
④ 「内向性」と「基本的肯定感」は、年齢・性別すべてにおいて有意に低下する。
⑤ 「宗教・スピリチュアリティ」は、70 歳群男女ではともに有意に低下するが、80 歳群男女ではともに有意に上昇する。

これらの結果から、「前期高齢者および後期高齢者における老年的超越の３年間の縦断的変化については、仮説通り上昇する下位因子もあったが、仮説とは逆に低下する下位因子もあり、老年的超越の発達の過程が下位因子によって異なることが示唆された」と述べている。なお、低下傾向がみられた下位因子があったことについては、観察

期間が短かった可能性を挙げている。

(5) 高齢者の精神的健康の縦断変化に及ぼす老年的超越の影響

増井他（2019）のB7は、ネガティブなライフ・イベントに対する心理的適応に老年的超越が重要な役割を果たしていることを検証することを目的とした縦断研究である。対象者は、地域在住の72～84歳までの高齢者1,085人(男性516人、女性569人）で、内訳は70歳群673人(72～74歳)、80歳群412人（82～84歳）である。調査は２期（間隔は３～４年）に分けて行われ、BL(ベースライン調査)および FU(フォローアップ調査)としている。測定された項目は、老年的超越（JGS-R：27項目)、疾患罹患・死別イベントの経験、精神的健康（日本語版WHO5-J)、その他（年齢、性別、教育年数、同居家族、手段的自立、外出頻度、経済状況、交流頻度、ソーシャル・サポート)、である。

なかでも、BLからFU時の精神的健康の変化に対して、①BL時の老年的超越やBLからFU間の疾患罹患・死別イベントの経験が影響を与えるか、②BLからFU間の疾患罹患・死別イベントの経験を老年的超越が緩衝するか、③それらの三者の関係に年齢群による違いがみられるか、を検証するために８つのイベントごとに重回帰分析を行っている。分析の結果は、以下のとおり報告されている。

① BL時の精神的健康（WHO5-J）が高いほど、FU時のWHO5-Jが有意に高い。

② ６つのイベントにおいて、男性よりも女性のほうがFU時のWHO5-Jが有意に低い。

③ 交流頻度とソーシャル・サポートが高いほど、FU時のWHO5-Jが有意に高い。

④ 「配偶者の死別」を除く５つのイベントにおいて、その他の変数を統制してもBL時の老年的超越が高いほど、FU時のWHO5-Jが有意に高い。

⑤ 「きょうだいとの死別」イベントでは、老年的超越の有意な影響に加え、年齢群×老年的超越×イベントの交互作用が有意であった（80歳群のみで老年的超越のFU時のWHO5-Jに対する影響が有意であった)。

⑥ FU時のWHO5-Jに有意な影響があったのは、「家族が大きな病気やけがをした」のみであった。

⑦ 80歳群では「配偶者との死別」を経験した人のほうがFU時のWHO5-Jが高いが、70歳群ではその影響はみられなかった。

以上の結果を受けて、a)老年的超越がその後の精神的健康に及ぼす影響、およびb)疾患罹患・死別イベントの経験がその後の精神的健康に及ぼす影響、について様々な考察を行っているが、要約して示すとおおよそ次のようなことであろう。

a）については、老年的超越の影響度は、BL時の精神的健康を除くと、経済状況や人的交流などの社会的要因よりも相対的に大きく、「身体機能や社会的ネットワークが縮小しがちな後期高齢者、超高齢者の精神的健康の維持・促進を考えるうえで、重要な知

見を与えるものといえるだろ」としている。

ｂ)については、特に、疾患罹患・死別イベント経験後の精神的健康に対する老年的超越の緩衝効果については年齢差があることが示されたことから、「老年的超越は、経験したイベントが他のリソースによって補償されないときや、補償資源が低下したときにより強く機能することが考えられた」としている。

また、この研究の問題点として、①結果が脱落の影響を受けていた可能性（追跡率67%）があること、②JGS-R の合計点を用いたため、８つの下位因子の影響については不明であること、③複数イベントが重複する場合の影響等、が挙げられている。

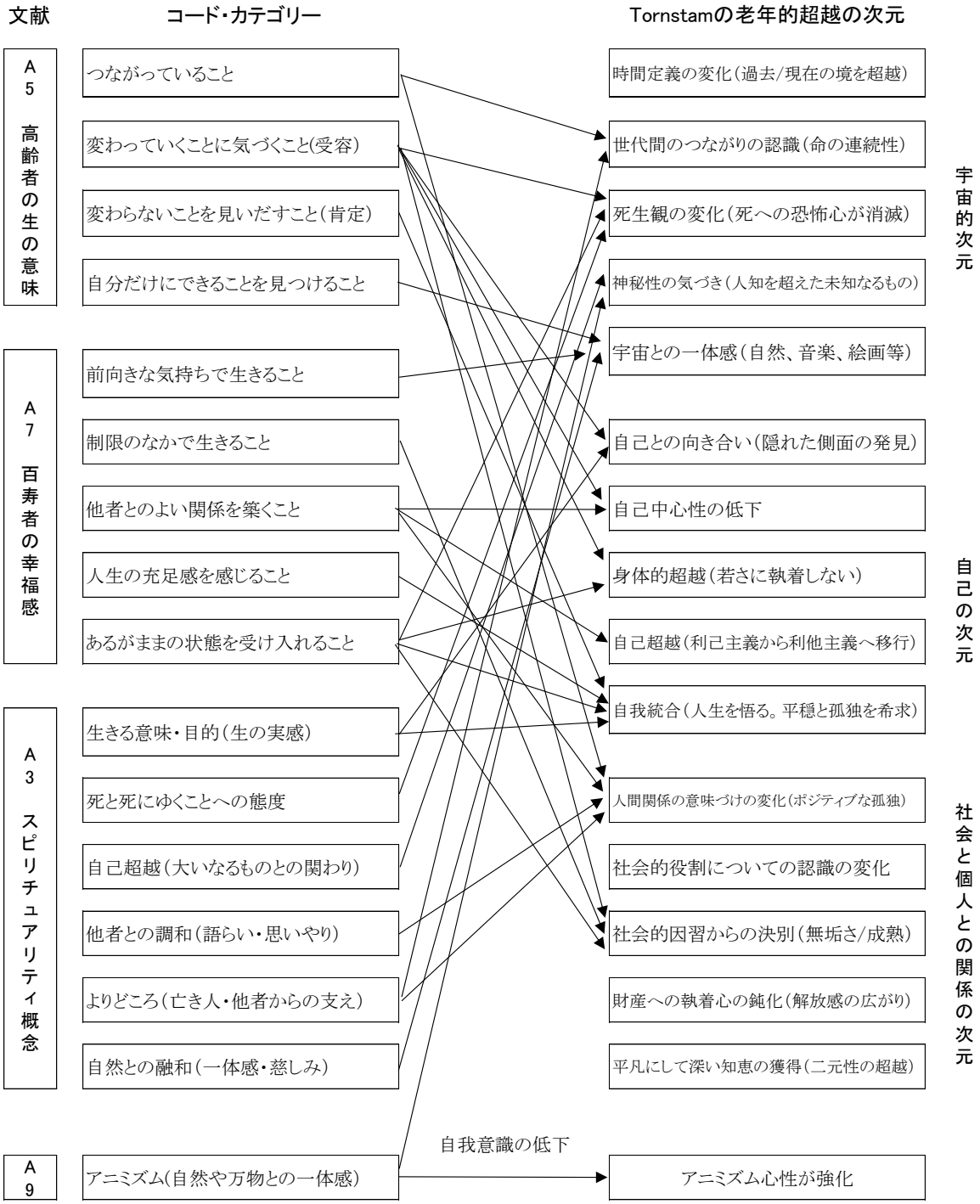
量的研究については、以上の他に権藤他（2005）の B1 を調べた。この論文は多くの老年的超越研究で引用されており、超高齢期における身体的機能の低下とそれに対する心理的適応について検証しているものである。結果は、「超高齢期には、日常生活機能や身体機能の低下が顕著になる一方、それらの低下に対する補償が十分に機能し、心理的適応が進むことを示唆するものであった」としており、Erikson(2001)が主張する超高齢期における心理的発達の可能性に言及している。

2.3 考察

前節 2.2 では、国内の老年的超越に関する研究論文から、質的研究および量的研究に区分しその概要を整理した。本節では、この結果をふまえて質的研究の統合、および量的研究の到達点と実証研究に向けた課題について考察する。

2.3.1 質的研究の統合

今回調査した文献から、日本人高齢者の生（life）の意味（A５）、百寿者の幸福感（A７）、スピリチュアリティ概念（A３）、アニミズム心性（A９）について、それぞれの文献で明らかにされているコード・カテゴリー（構成要素や概念、以下同様）を手掛かりに、Tornstam の老年的超越の下位次元との関連を整理した。その結果を**図 2-1** に示す。各々の文献でも老年的超越との関連についてふれている部分もあるが、言及のないコード・カテゴリーについては、当該論文における著者の考察や記載されている一次情報（研究協力者の発言）に立脚し、筆者の判断を加えて関連づけを行った。これらの文献から抽出したコード・カテゴリーは、老年的超越の下位次元と多元的に深く関わっていることがうかがえる。



注) 文献記号:A5(中川他, 2011)、A7(安元他, 2017)、A3(竹田他, 2006)、A9(末田, 2019)
矢線は、上記の文献を参考に筆者の判断で関連づけたもので、因果の方向を示すものではない。

図2-1 調査文献から抽出したコード・カテゴリーと老年的超越の3つの次元との関連図

コード・カテゴリーに関してリンク数の多いものから順に列挙すると、「変わっていくことに気づくこと」（５本）、「あるがままの状態を受け入れること」（４本）、「他者とのよい関係を築くこと」（３本）、「つながっていること」「生きる意味・目的」「よりどころ」（各２本）、「変わらないことを見いだすこと」「自分だけにできることを見つけること」「前向きな気持ちで生きること」「制限の中で生きること」「人生の充足感を感じること」「死と死にゆくことへの態度」「自己超越」「他者との調和」「自然との融和」「アニミズム」（各１本）の順となる。

このようにリンク数の多いコード・カテゴリーは、老年的超越との関わりが深い要素といえる。たとえば、５本のリンクをもつ「変わっていくことに気づくこと」、４本のリンクをもつ「あるがままの状態を受け入れること」は、老いに対する受容的な態度を示すものであり、老年的超越の３つの下位次元とも関連があることから、老年的超越にとって重要な要素と考えられる。また、３本のリンクをもつ「他者とのよい関係を築くこと」は、自己へのこだわりから解放され、真に大切な人との関係を重視するという点で老年的超越の２つの次元（「自己の次元」「社会と個人との関係の次元」）と関わりが認められる。加齢とともに身体的機能が低下するなかでもポジティブに生きようとするときに必要となる心構えである。これらの他に２本のリンクをもつものが３つ、１本のリンクをもつものが 10 項目認められ、いずれも老年的超越の下位次元との関わりがうかがえる。次に、老年的超越の下位次元からみるとどうか。３つの次元ごとに詳しくみていく。

宇宙的次元

意外にも「時間定義の変化」には 1 本のリンクもみられない。これは、今回取り上げた文献の中には、Tornstam（2005）が述べているような“加齢に伴う時間認識の変化”を取り上げたものがなかったためである。東洋哲学やユングの知見をふまえた新たなメタ理論とされるTornstamの老年的超越理論では、加齢とともに円熟味が増すと、ものの見方が物質的・合理的な視点から宇宙的・超越的な視点へと移行するとされ、宇宙や時間に対する認識の変化が進むとされている。今回調査した文献では、そのような東洋的な見方に関するものはなかったが、日本人の老年的超越との関わりを考える上では、見落としてはならない重要な視点といえるであろう。

「世代間のつながりの認識」とは、“命の連続性”ということでもあるが、「つながっていること」と「よりどころ」の２本のリンクが認められる。いずれも過去に生活を共にした人たちへの親近感や、亡き人の心の支えが重要であるという点で老年的超越との関連が認められる。

「死生観の変化」とは、死への恐怖が消え新たな生と死の解釈がなされるということであるが、「変わっていくことに気づくこと」「あるがままの状態を受け入れること」

「死と死にゆくことへの態度」の３本のリンクが認められる。日々の身体の変化と、迫りくる死の予感をどう肯定的に受容できるか、まさに死生観そのものである。

「神秘性の気づき」とは、この世には人知を超えた未知なるものがあることに気づくことであるが、「自己超越」と「アニミズム」の２本のリンクが認められる。共通するのは“大いなるもの”との関わりであり、命の永続性である。

「宇宙との一体感」とは、大きな出来事より日常のささやかな体験を重視する態度で、特に自然の中での体験は宇宙との一体感を覚醒させるとされており、「自分だけにできることを見つける」「前向きな気持ちで生きること」「自然との融和」の３本のリンクが認められる。これらは人生に対するポジティブな姿勢であり、自然や音楽、絵画など自己の内面に響くものに感動する気持ちをもつことである。

自己の次元

「自己との向き合い」とは、ユングが「影」と呼ぶパーソナリティの隠れた側面に気づくこととで、「変わっていくことに気づくこと」と「生きる意味・目的」の２本リンクが認められる。いずれもアイデンティティの再統合に関わる内容であり、自己のよい面にも悪い面にも目を向けることになることから、人生の実存的な意味についての振り返りとなる。

「自己中心性の低下」とは、自分を中心とした世界からの移行であるが、自惚れでない自信は必要だとされる。「変わっていくことに気づくこと」と「他者とのよい関係を築くこと」の２本のリンクが認められるが、身体機能の低下とともに自分が無力となったことを肯定的に受容できることと、人間関係の和を重視する傾向が強いことは、日本人の気質とされていることでもあり、元来、自己中心性はそれほど高くはない。

「身体的超越」とは、身体のケアーは怠らないが、若さには執着しない態度であり、「変わっていくことに気づくこと」と「あるがままの状態を受け入れること」の２本のリンクが認められる。高齢になれば肉体の老化は避けることのできないことであり、自然に任せ、肯定的に変化を受け入れる態度である。

「自己超越」とは、自己へのこだわりから解放され、利己主義から利他主義へ考え方が変化することであるが、「他者とのよい関係を築くこと」のみがリンクしている。他者の存在の大切さを認識することは、同時に自身の利他的な態度につながる。

「自我統合」とは、Tornstam(2005)によれば、「ジグソーパズルの各々のピースが全体を構成していることを悟ること」(p.74)だとされている。４本のリンクが認められるが、「変わらないことを見いだすこと」と「あるがままの状態を受け入れること」は、ジグソーパズルのピースを一つひとつ埋めていくことであり、その過程において「人生の充足感を感じること」があり、そうして「生きる意味・目的」を悟るのではないかと考えられる。

社会と個人との関係の次元

「人間関係の意味づけの変化」とは、加齢とともに人間関係が選択的になり、表面的な関係への関心が低下し、一人でいる時間の必要性が増すとされるが、「つながっていること」「他者とのよい関係を築くこと」「他者との調和」「よりどころ」の４本のリンクが認められる。いずれも人間関係に関することであるが、その量ではなく質が重要であることを示す内容となっている。４本というリンクの多さからしても、老年的超越にとって重要な要素であると考えられる。

「社会的役割についての認識の変化」については、リンクが１本も認められなかった。これはおそらく研究協力者が超高齢者であり社会活動に参加している人がほとんどいなかったことによる結果であろうと思われる。

「社会的因習からの決別」とは、必要もない社会的なしきたりを超越する新たな力であり、受容力の高さを示すものである。「変わっていくことに気づくこと」「制限の中で生きること」「あるがままの状態を受け入れること」は、日々の身体の変化を受け入れ、限界を認識し、自然に任せて平穏に生きていく、そのようなポジティブな態度を示すものである。

「財産への執着心の鈍化」と「平凡にして深い知恵の獲得」についても、コード・カテゴリーからのリンクが１本も認められない。このことは、この２つの項目にはここで取り上げた４本の論文が示す領域以外に関連する領域が存在している可能性を示唆するものであり、筆者はそれが東洋的なものの見方（価値観）であると考えている。この点については第３章で詳しく述べることとする。

なお、「アニミズム」からの影響については、文献（A7）では「宇宙的超越」との関連は明らかであるが、他の２つの次元との関連については、自我意識の低下（日本のような母性社会では老年期前半から始まるとされる）によってアニミズム心性が強化され、その結果として老年的超越が促進される可能性を示唆している。ただし、思弁的な研究であるため具体的にどの次元の要素と関連しあうのかは特定されていない。

以上、これらの質的研究の文献統合の結果を総括すると以下の二点となる。

① 超高齢者の生（life）の意味、百寿者の幸福感、高齢者のスピリチュアリティやアニミズム心性に関して Tornstam（2005）の老年的超越の３つの下位次元との関連が認められたことは、老年的超越理論が日本人高齢者にとっても親和性の高い理論であることが明らかとなった。

② Tornstam（2005）の老年的超越の３つの下位次元のうち、「宇宙的次元」の＜時間定義の変化＞と、「社会と個人との関係の次元」の＜財産への執着心の鈍化＞＜平凡にして深い知恵＞には、リンクが１本も認められなかったが、これらは東洋的なも

のの見方（価値観）と関係の深い項目であり、日本人の老年的超越について、さらに理解を深めるためには、この領域との関わりを検討することが必要である。

2.3.2　量的研究の到達点と実証研究に向けた課題

（1）老年的超越の測定尺度

Tornstam（1997）の測定尺度（GST２：３因子構造）を日本人高齢者に用いた石原他（2011）の研究があるが、Cosmic 因子以外は観測変数との間で有意な関連が示されなかった（B３）。その理由として石原他（2011）は、対象が前期高齢者のみであったことや、Tornstam の GST 尺度を日本語に翻訳して用いることの難しさを挙げている。

一方で、日本人高齢者を対象にした老年的超越尺度として増井他（2010）によって開発されたのが日本版老年的超越質問紙（JGS）である（B２）。この尺度は８因子構造で６因子が Tornstam の老年的超越の諸特性と類似しており、特に他の２因子（「脱二元論」「無為自然」）は東洋的な考え方にみられるものであり、日本でもおおむね適用できると考えられたが、JGS の８つの下位尺度のうち７つの下位尺度の内的一貫性（α係数）が十分でなかったことから、増井他（2013）がさらに改良を加えたものが JGS-R である（B５）。この尺度は８因子 27 項目（最初は 30 項目）で構成され、下位尺度名は JGS と同じであるが、下位尺度の「脱二元論」のα係数が 0.36 と相変わらず低く、他のα係数も JGS とほぼ同程度であったことから、内的一貫性については大きな改善効果は認められていない。増井他（2013）が理由として挙げているのが、①老年的超越という概念が広範で複雑な要素を含むにもかかわらず、少数の項目で概念全体を網羅するような項目構成となっていること、②高齢者の個人差が大きく、項目に対する反応が一貫していない可能性があること、である。しかし、先行研究と同様、老年的超越の下位尺度得点がより高齢で高く、女性でも高いことは、JGS-R の交差妥当性を示すものである、としている。

以上のように老年的超越の尺度に関する日本での研究は少ないが、日本人高齢者を対象にした老年的超越の尺度としては、Tornstam の３次元尺度では不十分であることは明らかであり、現時点では改良の余地はあるものの、東洋的な価値観が一定反映されている JGS-R の８次元尺度が最も妥当なものと考えられる。なお、この点については、後述する第４章でも検証することとする。

（2）老年的超越の関連要因についての横断研究

第１章でも述べたように、Tornstam（2005）は、老年的超越の関連要因として３つの下位次元ごとに様々な要因を仮定し詳細な分析を行っているが、有意な関連が認められるものとしては、下位次元ごとに、また、性別や年齢（青年期・中年期・高齢期）ごとに違いはあるが、性別、年齢、生活環境（職業・収入）、社会活動、人生の危機など

が挙げられている。

老年的超越の関連要因に関する日本での研究はそれほど多くはないが、石原他(2011)のB３ではCosmic因子への影響が分析されており、年齢、社会活動が影響要因として示されているが、他の２つの因子については分析から除外されているため、ここでは、JGS-R（30項目）を用いて分析が行われた増井他（2012）の横断研究（B４）について考察する。

この研究では、従属変数をJGS-Rの下位尺度得点とし、説明変数としては、背景変数（性別、同居者の有無、経済状況)、年齢、他者との関係性（交流頻度、情緒的サポート、手段的サポート)、身体状況（手段的自立,慢性病既往数、握力、歩行時間）を一括投入する重回帰分析が行われている。なお、この研究では、Tornstam(2005)が取り上げた「人生の危機」は説明変数として組み込まれていない。

結果は、有意となった各説明変数の標準偏回帰係数（β）をみる限り、JGS-Rのほとんどの下位尺度で年齢と性別の値が高い。交流頻度は、下位尺度により正の関連を示すものと、負の関連を示すものに分かれる。また、他者との関係性についても、手段的サポートおよび情緒的サポートともに、正/負の関連を示すものに分かれる。身体状況（慢性既往症）については、正の関連を示すものが３つとなっている。

以上の結果から、年齢が高く、女性で、他者との親密な関係があり、身体的状況が悪い場合に老年的超越が高いことが示唆され、このことはTornstam（2005）が示した老年的超越の関連要因ともおおむね合致するものである。

B4（増井他，2012）では、老年的超越の関連要因の分析に重回帰分析が用いられているが、説明変数が11個と多く、また、標準偏回帰係数の符号も正/負が混在している。重回帰分析では、結果を解釈するにあたって当該変数以外の説明変数の値が一定であることが条件となるため、説明変数間に多重共線性や相互作用が想定される場合には、分析結果の評価が難しいことがある。たとえば、一般的に規定力の強い性別や年齢などの属性的変数が他の説明変数と強い相関を有している場合には、偏相関係数（この例でも、正/負の値が混在している）の解釈が容易でないこともある。

老年的超越の関連要因についての代表的な横断研究は以上のようなことかと思われるが、本研究では、これらの先行研究で明らかにされた要因に加えて、文化的な要因として≪東洋的なるもの≫の影響を分析することを主目的としている。しかし、主観的幸福感と老年的超越に加えて、さらに≪東洋的なるもの≫という文化的変数が加わると重回帰分析の手法では、上述したような分析結果の解釈上の問題が顕在化することが想定されるため、本研究では、構成概念の考え方を導入することで要因間の関連を縮約して記述することが可能とされる共分散構造分析（SEM）を試みることとする。

（3）心理的well-beingと老年的超越の関連

B2（増井他，2010）では、低機能高 well-being 群は、低機能低 well-being 群よりも有意に「内向性」「脱社会的自己」「無為自然」の得点が高く、老年的超越が虚弱高齢者の心理的 well-being の低下を緩衝する働きをしている可能性が示唆されている。

このモデルは、老年的超越の下位尺度が目的変数、２つのクラスター（低機能高 well-being 群、低機能低 well-being 群）を説明変数とする一般線形モデルによる分析であり、心理的 well-being の違いによる老年的超越の下位尺度得点の有意差を分析しているものである。しかし、増井他（2012）の考察では、低機能高 well-being 群の上記の３つの下位因子の内容から、PGC モラール・スケールの下位尺度との関連を考察し、老年的超越は心理的安定や主観的幸福感の向上をもたらすと評価しているが、統計モデル上は、因果の方向（老年的超越→心理的 well-being）を直接的に検証しているものではないと考えられる。

また、Tornstam（2005）の量的研究でも、第１章で述べたように、老年的超越、社会活動、生活満足度との間には統計的に有意な関係が存在していることは明らかであるが、「宇宙的超越」が高い者にとっては、社会活動の程度は生活満足度の本質的な要因でないと述べており、老年的超越と主観的幸福感（Tornstam では生活満足度）との関連については、単純な２変数間の因果関係だけではない可能性があることが示唆されている。

このように、老年的超越と主観的幸福感（あるいは生活満足度）との関連については、仮説としては老年的超越が主観的幸福感（あるいは生活満足度）を高めると考えるのが筋ではあろうが、この分野の先行研究がそれほど多くないなかで、果たしてそのように断定できるのであろうか。先述したように、老年的超越の関連要因分析では、共分散構造分析を用いることとしているので、老年的超越と主観的幸福感との因果関係については双方向の分析を行うことで、この点を検証することとする。

（4）老年的超越の関連要因についての縦断研究

上記の(1)～(3)の内容は横断研究に基づくものであるが、老年的超越の加齢による変化をさらに詳しくみるためには縦断的検討が必要とされる。文献検討では２つの縦断研究を取り上げた。B６（増井他，2015）は、JGS-R の下位尺度得点の縦断変化であり、B7（増井他，2019）は、ネガティブイベントに対する心理的適応に老年的超越が果たす役割についての検証である。

まず B6 研究については、前期・後期高齢者を対象に老年的超越の３年間の変化を検討しており、分析モデルは JGS-R の下位尺度得点を従属変数とし、調査時期（第１波から３年後に第２波調査）、性別、年齢群を独立変数とする分散分析である。調査時期により有意差（交互作用も含む）が認められた下位尺度は、「利他性」を除いて、「ありがたさ・おかげの認識」「内向性」「脱二元論」「宗教・スピリチュアリティ」「脱社会的

自己」「基本的肯定感」「無為自然」の７つとなっている。

さらに、年齢・性別ごとの３年間の縦断変化をみると、「ありがたさ・おかげの認識」では 70 歳群男女で有意な得点の低下、80 歳群男女では変化は認められない。「脱社会的自己」と「無為自然」では、年齢・性別すべてにおいて有意な得点の上昇があり、「脱二元論」では 70 歳群男女と 80 歳群男性で有意な得点の上昇、80 歳群女性では変化は認められない。また、「内向性」「基本的肯定感」では、年齢・性別すべてにおいて得点が有意に低下しており、「宗教・スピリチュアリティ」においても 70 歳群男女ではともに有意な得点の低下、80 歳群男女ではともに有意な得点の上昇が認められる。

これをみると、老年的超越のすべての下位尺度の得点が加齢（３年間の縦断変化）に伴って上昇するものではないことがわかるが、上昇した下位尺度をみると、「脱二元論」では 70 歳群男女と 80 歳群男性、「宗教・スピリチュアリティ」では 80 歳群男女、「脱社会的自己」と「無為自然」では 70/80 歳群男女となっている。

これらの結果は、老年的超越の発達が加齢とともに進むとする Tornstam（2005）の仮説をおおむね支持するもので、「脱二元論」や「宗教・スピリチュアリティ」「脱社会的自己」「無為自然」などの下位因子は、先述したように東洋的な価値観にみられる特徴であり、Tornstam（2005）の理論では「自己の次元」（ただし、「脱二元論」「無為自然」は異なるとされる[3]）の領域に属するものである。

次にＢ７研究であるが、ネガティブなライフ・イベントに対する心理的適応に老年的超越が重要な役割を果たしていることを縦断データを用いて検証したものである。

まず、老年的超越がその後の精神的健康に及ぼす影響についてであるが、調査開始時（BL 時）の老年的超越が高いほど、他の調整変数（外出頻度、友人・隣人との交流頻度、ソーシャル・サポート等）を統制しても３～４年後（FL 時）の精神的健康が有意に高い。老年的超越の精神的健康への影響度は、BL 時の精神的健康（影響度が最大）を除くと、経済や交流などの社会的要因よりも相対的に大きく、老年的超越がその後の精神的健康を高める働きは、前期・後期高齢者ともに有効とされる。この点について増井他（2019）は、身体機能や社会的ネットワークが縮小しがちな後期・超高齢者の精神的健康の維持・促進を考えるうえで重要な知見が得られたとしている。

先述したように Tornstam（2005）の分析でも、生活満足度に対する社会活動の影響は、老年的超越が高い水準にある場合は本質的なものではないとされており、生活満足度を精神的健康度に置き換えて考えれば、この点でも Tornstam（2005）の仮説を支持する結果となっている。

次に、ネガティブなライフ・イベント経験後の精神的健康に対する老年的超越の緩衝効果についてであるが、「きょうだいとの死別」に関してのみ効果が認められ、80 歳

[3] 増井他（2010）による。

群ではBL時に老年的超越が高かった者はFU時の精神的健康が高いが、70歳群ではこのような差はみられない。増井他（2019）によれば、80歳群では“きょうだい”というリソースをなくした場合、精神的健康が低下する可能性があり、高齢期において老年的超越的な価値観をもつことは、精神的健康の維持増進やその低下予防に役立つ緩衝効果があると述べている。

なお、B7研究では、老年的超越の指標として８つの下位次元の合計得点を用いているが、下位次元ごとに同様の分析を行うことで、日本人高齢者の「人生の危機」と老年的超越の関連がさらに明確になってくる可能性があることが示唆されている。

以上のように、日本では縦断的研究はまだ限られてはいるが、加齢や危機の経験が老年的超越を促進するというTornstamの老年的超越の考え方は、日本人高齢者にも適用可能であることが実証的にも証明されている。

なお、本研究における量的研究は横断データに基づくものであるが、同時に実施する質的研究では、インタビューを通じて可能なかぎり縦断変化を把握できるよう留意する。

※ ID番号は表2-1の文献と対応

表2-2　質的研究検討文献の要約表（全10頁）

ID番号	研究の種別	緒言		方法		
		背景	目的	対象	項目・問い・調査方法	解析方法
A6	文献研究	Tornstamの老年的超越理論は、活動理論的なサクセスフル・エイジング像とは異なる高齢者の望ましいあり方を示す理論として注目度が高い。	日本人高齢者における老年的超越の実態、測定尺度、関連要因、高齢期の心理的well-beingとの関連について概観する。	下記のテーマに関する国内外の文献をレビュー Ⅰ. 老年的超越とは Ⅱ. 老年的超越の測定尺度 Ⅲ. 老年的超越の実証研究	Ⅰ. について 1. Tornstamによる定義 2. 老年的超越の内容 3. エリクソンの第9段階との関連 4. 日本人高齢者の老年的超越 Ⅱ. について 1. Tornstamの測定尺度(GST) 2. 日本版老年的超越質問紙(JGS)と改訂版(JGS-R) Ⅲ. について 1. 関連要因の研究 2. 心理的well-beingとの関連	国内外の文献をレビューし老年的超越研究の現状と動向について取りまとめ ・文献検討と要約 ・文献の比較・対比 ・今後の研究課題

ID番号	結 果	考 察	結論・課題・展望
A6	Ⅰ．について 1．Tornstamによる定義：「物質主義的で合理的な世界観から、宇宙的、超越的、非合理的な世界観への変化」 2．3つの次元：「宇宙的意識」「自己意識」「社会との関係」 3．Eriksonは、超高齢期（第8段階）の危機を乗り越えるため、もしくは乗り越えた高齢者像として老年的超越（第9段階）を位置づけ 4．日本人高齢者の老年的超越のあり方はTornstamの指摘とおおむね同じ。「宇宙的意識」の時間・空間の超越という表現型は明確には現れず、他の2つの次元に関する内容が多い。 Ⅱ．について 1．Tornstamの測定尺度：GST1は2因子構造、GST2は3因子構造（宇宙的次元、一貫性次元、孤立次元）。日本の質的研究では、「宇宙的意識」の内容の一部は現れず、「自己意識」や「社会との関係」の次元が報告。日本人高齢者にはGST尺度では不十分なことが示唆 2．JGSの改訂版としてJGS-R（8因子27項目）を開発。交差妥当性が確認されていること、Tornstamの3つの次元がバランスよく含まれていることから日本人高齢者の老年的超越の検討に適した尺度 ⇒ ※ 右欄へ	※ 左欄からの続き(結果) Ⅲ．について 1．Tornstamが示す関連要因 自然な加齢、危機の経験、疾病の罹患、職業や収入、活動の多さ。「宇宙的超越」については、対人接触頻度、情緒的ソーシャルサポートなど ・年齢 JGS/JGS-Rを用いた日本の研究では、8つの下位因子のうち「内向性」「宗教・スピリチュアル」を除く多くの下位因子と有意な相関が報告。 ・危機の経験 Tornstamは、年齢を統制しても、「宇宙的超越」および「孤立」の得点は危機を多く経験している群のほうが高いことを示した。 2．心理的well-beingとの関連 表2-3のB2に日本の研究。結果は、Eriksonが論じたように、超高齢期の身体機能の低下の際の心理的well-beingの維持に老年的超越（自己意識、社会との関係）が重要であることを示唆。しかし、この2つの次元はGST2では測定は困難	○課題 ・ 早急に行われるべきは、日本人高齢者を対象にした老年的超越の縦断的な変化およびその関連要因に関する研究。Readらの縦断研究の知見（Tornstamの示した関連要因を否定する結果）に対する検証が必要 ・ 老年的超越の3つの次元について、文化による差異や、その差異を踏まえた測定尺度についての再検討 ○展望 ・ 老年的超越の臨床的および応用的利用はスウェーデンや台湾などではすでに行われているが、日本の介護現場や虚弱な高齢者への適用可能性についても検討していく必要 ・ 今後の超高齢化社会に向けて、老年的超越の視点から、高齢者の心理的発達と精神的健康の維持に資する取り組みを考えていくことが重要

ID番号	研究の種別	緒言		方法		
		背景	目的	対象	項目・問い・調査方法	解析方法
A5	質的研究	・ 加齢に伴い心理的適応が上昇するという結果が多くの研究で示されているが、高齢期における心理的適応のメカニズムは未解明 ・ 現象学の視点で発達をとらえれば、高齢者の機能しなくなる身体の意味や文化的背景の意味を理解できる可能性	農村部および都市部に暮らす身体機能の低下した超高齢者の生(life)の体験(生命・生活・人生)を見直し、その意味を現象学の視点から記述	○研究協力者 85歳以上で、意思疎通が可能、援助や介護を受けながら在宅で生活している8人の高齢者 ○内訳 農村部　4人(男2、女2、年齢89～96歳) 都市部　4人(男2、女2、年齢91～106歳)	○リサーチクエスチョン 「日常生活において超高齢者が、身体機能の低下やそれに伴う活動の減少といった客観的には困難な状況をどのように認識し、生きているか、超高齢期を生きるということは何であるか」 ○インタビュー 身体の状態、普段の活動、気分、価値観などに関する半構造化面接	○解釈的現象学の視点から分析 **テーマ分析** 生(life)の諸側面に対する意味や価値を文脈を整え、客観的な意味に書き換え(意味ある単位)、これらをテーマに沿って分類 **模範例の解釈** 個々の記述と模範例を比較することで、テーマの類似・相違を明確化 **事例の解釈** テーマの妥当性を向上

ID番号	結 果	考 察	結論・課題・展望
A5	○4つのテーマを抽出 **1. つながっていること** 家族や身近な人とのつながりだけではなく、死者や神仏といった可視化されない存在への親和性 **2. 変わっていくことに気づくこと** 病気や親族の死といった明確な変化だけではなく、失われていく体力、世の中の変化といった日々の小さな変化に気づくことで、変化を予期 **3. 変わらないことを見いだすこと** これまで生きてきたという事実のなかにアイデンティティを見いだし、身体が変化しても存続するものがあり、未来に続くことを期待 **4. 自分だけにできることをみつけること** 制約の多い生活のなかで、自分だけにできることをみつける。理解しがたい行為も楽しみとして語る。	○超高齢者の生の体験の全体的理解 **1. について** Eriksonらの指摘にもあるように、「つながり」の認識は老年的超越の重要な構成要素 **2. について** 「自分が無力である」ということの肯定的な側面。増井らの老年的超越尺度の下位因子である「無為自然」も、超高齢期におけるwell-beingの低下を緩衝している可能性 **3. について** アイデンティティの統合(再統合)の側面。ただし、自己を絶対基準に基づいてとらえるのではなく、他者との関係のなかで相対化する認識(超越的アイデンティティ)であることが示唆 **4. について** Eriksonらは、年を重ねることで人は超越性を獲得し、遊び、喜び、歌といった失われたものを取り戻し得ると述べている。創造性が心理的適応に関連するメカニズムについては今後の課題 ○超高齢者の生の体験の本質的構造 生の体験は、目に見える客観的な事実から構成される現実と、生の実存的意味を志向する意識から構成される構造をもつ。この構造は文脈を越えた共通性(生の有限性と無限性)をもつ。	**○課題** ・ 老年的超越理論は、高齢者の生の体験の実存的側面をとらえる理論的枠組み。超越の視点をもつ枠組みで高齢期の心理的適応のメカニズムを明らかにする試みが求められる。 ・ 超高齢者の語りの分析から、二元的志向を脱することで、心理的に適応していることが理解できたが、従来の発達規範を越える方向性をもたらすことが示唆 **○限界** ・ 超高齢者であるがゆえのインタビューの難しさ ・ 超高齢者の生は、宗教や風習といった独自の文化的背景に織り込まれているため、異なる文脈での批判的検討が望まれる。 ・ 生の実存的意味への志向性が高齢期にいかに発達していくかは不明。幅広い高齢期にわたる心理的発達に着目することが重要

ID番号	研究の種別	緒言		方法		
		背景	目的	対象	項目・問い・調査方法	解析方法
A7	質的研究	百寿者は、機能低下という客観的な状況によらず、生活に興味をもつこと、喪失に意味を見いだすことで幸福感を維持しているとされるが、百寿者にとっての幸福が何を意味しているかを記述した知見はまだ限られている。	百寿者にとっての幸福感を構成する要素をインタビューデータから抽出し、その詳細を記述 ・ 抽出された構成要素について、幸福感に関連する理論との比較検討	**○研究協力者** 都市部と農村部の在住者で、調査年度に100歳となる99歳以上の13人を対象（女12人、男1人） **○内訳** 4人が家族と同居、2人が独居、6人が特養入居、1人がその他	**○インタビューの内容** 普段の生活、どのようなときに幸せを感じるか、どのような物事に対して幸せを感じるかなどを軸にした半構造化面接	**○GTAを用いた分析** 百寿者が幸福感を経験する出来事や記憶、それらをどのように解釈しているかを調査協力者の語りをもとに分析

ID番号	結 果	考 察	結論・課題・展望
A7	**○5つのカテゴリを抽出**(・印はサブカテゴリ) **1. 前向きな気持ちで生きること** ・日常生活のなかで楽しみを見つる ・信念をもって生きる **2. 制限のなかで生きること** ・活動性の低さを認識 ・限界の認識 **3. 他者とのよい関係を築くこと** ・他者との調和を保つ ・世話されるありがたさを感じる **4. 人生の充足感を感じること** ・生きることへの満足 ・十分に生きた感覚 **5. あるがままの状態を受け入れること** ・考えすぎない ・自然に任せる ・平穏な気持ち	**○Ryffの心理的well-being(以下の「 」)との比較** **1. について** 「人生の目的」と合致。人生に対するポジティブな姿勢は百寿者の特徴 **2. について** 「環境制御」と類似。百寿者は環境を変えることは不可能であることを受け入れ、自分の認識や価値観を調整することで適応(2次的コントロール) **3. について** 「積極的対人関係」と類似。制限された生活のなかだからこそ、他者への肯定的な見方や、他者の存在の大切さを認識 **4. について** 「個人的成長」に類似。〈十分に生きた〉という心からの満足感は百寿者特有のもの **5. について** 「自己受容」に類似。社会面、身体面での喪失が大きい百寿者の幸福感に、このような受容的な態度は重要	**○結論** ・ 百寿者は身体機能や他者との交流頻度の低下など、様々な喪失に直面しながらも、状況に適応しながらポジティブな感情を生み出すことで、幸福感の概念を構成する要素を再生産している。 ・ 百寿者の幸福感の概念構造を理解するためには、従来の幸福感の概念と老年的超越を比較検討することで、さらに理解が深まる。

ID番号	研究の種別	緒言		方法		
		背景	目的	対象	項目・問い・調査方法	解析方法
A3	質的研究（文献レビュー）	・ スピリチュアリティは高齢者の健康を考えるうえで重要な概念であるが、わが国において高齢者のスピリチュアリティに焦点をあてた研究は少ない。 ・ スピリチュアリティは宗教や社会文化的な影響を受けると考えられるため、諸外国の研究成果をそのまま参考にはできない。	わが国でスピリチュアリティがどのようにとらえられているのかを概観し、日本人高齢者のスピリチュアリティの概念構造を文献レビューにより検討	主に国内の文献(書籍および論文)	Ⅰ. 文献にみる日本人のスピリチュアリティ概念 1. スピリチュアリティの概念の背景 2. スピリチュアリティとは何か ①WHOでの議論 ②各論者の定義 3. スピリチュアリティの測定 4. 日本におけるスピリチュアリティ概念をめぐる現状と課題 Ⅱ. 日本人高齢者のスピリチュアリティ概念を構成する要素とその構造 1. スピリチュアリティ概念の構成要素 2. スピリチュアリティ概念の構造	文献レビューにより検討

ID番号	結 果	考 察	結論・課題・展望
A3	**Ⅰ. 文献にみる日本人のスピリチュアリティ概念** 1. について 日本人の感覚には沿いにくい概念であるが、「自己存在の意味」の探求というスピリチュアルな側面を全ての患者(人間)が有しているとされる。 2. について ① 「人間として生きることに関連した経験的一側面であり、身体感覚的な現象を超越して得た体験を表す言葉」として定義。 ② 「自然・風習・文化などの影響を強く受けていて、…人生を支え、慰め、方向性を与えるもの」 3. について 日本人の特徴(文献ID:A2):①自然との対比における人の小ささ、②自然への畏敬の念、③祖先との関わり、④個人の内的な強さ、⑤特定の宗教をもたなくても、何か絶対的な力の存在を感じる 4. について ①人間存在の根源に関わる、②人生の危機に直面したときに顕在化し機能する、③「自己」「他者や環境」「自分の力を超える大きなもの」との関係性を有し、「生きる目的・意味」「死や苦しみの意味」について探求する、④宗教的な因子を含むが、宗教とは区別される、⑤個人の「生きる力」となるもの、⑥QOLと深い関係 → スピリチュアリティは、高齢者の健康を考えるうえで重要な概念 ⇒ ※ 右欄へ	※ 左欄からの続き(結果および考察) **Ⅱ. 日本人高齢者のスピリチュアリティ概念を構成する要素とその構造** 1. について 6つのコアカテゴリーを抽出 【生きる意味・目的】:中心に位置する概念 【死と死にゆくことへの態度】:高齢者にとって重要な概念 【自己超越】:重要な要素となる概念 【他者との調和】:高齢者にとって注目したい概念 【よりどころ】:多様性に富む概念 【自然との融和】:日本人にとって重要な概念 2. について 6つのコアカテゴリーを3つの重層的空間に布置 (説明) ・「自己」は2層の円構造。【生きる意味・目的】を中心に置き、外側に【死と死にゆくことへの態度】が存在 ・「自己」は【よりどころ】を核として【他者との調和】【自然との融和】に至り【自己超越】の体験 ・【自己超越】の体験が他者や環境に対する認知を深め、自己の内面がより豊かに。 ・ 結果、【生きる意味・目的】がより鮮明に。	**○まとめ** ・ 日本人高齢者のスピリチュアリティが6つの概念で構成されていることについては、スピリチュアリティの構造を「自分の外にある超越的なもの(神仏、宇宙の生命、自然の生命)」と「自分の中にある究極的な自分」の2つからとらえ、関心の方向を「超越性」と「究極性」で説明している窪寺の先行研究とも一致 **○課題** ・ 用いた文献の切り口がそれぞれ異なるため、概念間の関係性については言及できず。 ・【よりどころ】が他の5つの概念と双方向に関係しあう様は、まさに「老いにおけるスピリチュアリな作業」。高齢者の自己形成を促すことにつながり、QOLを高めていく可能性

ID番号	研究の種別	緒言		方法		
		背景	目的	対象	項目・問い・調査方法	解析方法
A9	質的研究（思弁的研究）	アニミズム心性は老年的超越の特定の次元ときわめて類似しており、他の次元に関しても、自我意識の変化と密接に関係していると考えられる。	老年的超越の概念をめぐって、わが国の文化的背景を考慮に入れながら、アニミズム心性に関する研究と関連づけて論じる。		1. 老年的超越の概念とアニミズムの関係性 2. 老年的超越と自我の関係 3. 老年的超越がなぜ老年期後半になって出現するのか 4. 老年的超越とアニミズム心性、自我の3者関係の仮説モデル 5. 我が国の超高齢者に老年的超越の概念はそのまま適用できるか	思弁的考察

ID番号	結 果	考 察	結論・課題・展望
A9	1. について ・ 老年的超越の「宇宙的意識の獲得」の特徴は、個々の高齢者にとっては感覚次元の変化(一体化して感じる、宇宙の意思を感じる感覚) ・ これはアニミズム心性と類似した感覚で、老年期に至って論理性や合理性から解放され、潜在化していたアニミズム心性が顕在化した結果と解釈される。 2. について ・ Tornstamの考えに立てば、自我意識の低下が引き金になって老年的超越という心理特性が生じたと理解できる。 ・ 母性社会(河合隼雄)といわれる我が国では、老年的超越はアニミズム心性と同様に必ずしも老年期後半に出現する必要はないのではないか。 3. について ・ 高齢期における危機の解決に、高齢者は価値観(社会的地位、富、物質的豊かさなど)の否定という心理的機制を働かせwell-beingの維持を図ろうとする。 ・ ポジティブ心理学では、自己実現のさらに上に自我超越。well-beingの最終段階は自我から自由になった状態。 ⇒ ※ 右欄へ	※ 左欄からの続き(結果および考察) 4. について ・ 老年的超越、アニミズム心性、自我の3つの概念は相互に深い関係性を示す。 ・ 母性原理が優位な社会では、いずれの発達段階にも同時並行的に老年的超越は顕在化するが、父性原理の優位な社会では、Tornstamが指摘するように老年期後半になって、父性原理の影響が弱まって(自我意識が低下して)初めて、老年的超越の感覚が生じると思われる。 5. について ・ 父性社会ではTornstamの指摘は当てはまるものの、母性社会では老年的超越は老年期後半になって初めて出現する心性ではなく、どの発達段階にも認められる心性であろう。	○まとめ ・ 母性社会のわが国では、アニミズムやアニミズム心性は受け入れられやすいが、欧米文化の下では、自我意識の衰える老年期後半になって出現するのではないか。 ・ 欧米の理論や研究結果を我が国に適用するに際しては、文化的・歴史的背景を考慮したうえで解釈する必要 ○課題 ・ 老年的超越の概念に関する実証的研究の推進と、アニミズムやアニミズム心性に関する国際比較をどのように進めていくか。 ・ spiritualityの概念と老年的超越やアニミズム心性との関連についての議論が必要 ・ 自我や自我意識と並行して、well-beingの視点からも人間の成長や発達、価値観などを考えていく必要

※ ID番号は表2-1の文献と対応

表2-3　量的研究検討文献の要約表（全8頁）

ID番号	研究の種別	緒言		方法		
		背景	目的	対象	測定項目(変数等)	解析方法
B2	量的研究 (横断研究)	・ 日本人高齢者の老年的超越を検討するためには、日本の高齢者に適した尺度の開発が必要 ・ Eriksonが想定した超高齢期の虚弱化から生じる心理的危機に対する心理的適応という観点から、老年的超越の役割を検討した研究はまだない。	1. 日本人高齢者を対象にした老年的超越質問紙(JGS)の開発 2. 心理的well-beingが高い虚弱高齢者の老年的超越の検討	**○参加者** 65歳以上の在宅高齢者500人(男198人、女302人、平均79.0歳) (内訳) 超高齢者155人(男54人、女101人、平均88.4歳) 前期・後期高齢者345人(男144人、女201人、平均74.7歳) **○調査方法** ・超高齢者は訪問調査 ・上記以外は郵送調査	①JGS ②心理的well-beingの指標 抑うつ状態(GDS-5) 健康度自己評価 主観的幸福感(PGCモラールスケール) ③高次生活機能・身体機能 老研式活動能力指標 日常生活動作機能(バーゼル得点) 介護保険認定の有無等 ④その他の変数 年齢、性別、同居形態、学歴、外出頻度、病気の有無	**1.JGSの作成に関する分析** ・因子分析 ・信頼性係数の算出 **2. 虚弱高齢者における老年的超越と心理的well-beingとの関連性** ・群分けにはクラスター分析 ・一般線形モデルによる分析

ID番号	結 果	考 察	問題点・課題・展望
B2	**1. JGSの因子構造** 以下の8因子を抽出（α係数） ありがたさの認識（0.72） 内向性（0.57） 脱二元論（0.57） 宗教・スピリチュアル（0.60） 脱社会的自己（0.53） 基本的肯定感（0.53） 利他性（0.50） 無為自然（0.46） **2. 心理的well-beingと高次生活機能による超高齢者の分類** ・以下の3つのクラスターを抽出 ①低機能高WB群 ②低機能低WB群 ③高機能高WB群 ・背景変数についての①と②との有意差比較 年齢：①＞② 独居：②＞① バーセル得点：②＞① 外出頻度：①＞② **3. 低機能高WB群の老年的超越における特徴** 低機能高WB群は低機能低WB群よりも有意に「内向性」「脱社会的自己」「無為自然」の得点が高く、「宗教・スピリチュアル」の得点が低い。	**1. 老年的超越の下位因子** ・ 6因子がTornstamの老年的超越の諸特徴と類似。これらの結果は、Tornstamの老年的超越の概念が日本でもおおむね適用できることを示唆 ・「脱二元論」はオリジナル概念の「経験に基づいた知恵の獲得」と似るが、日本版では、善悪、正誤、生死、現在過去という二元論的な考えから脱却する内容 ・「無為自然」は老荘思想の「無」と類似し、日本人にもなじみの深い東洋の超越的な考え方 ・「脱二元論」と「無為自然」ともに年齢と有意な正の相関、高齢期全般にわたって発達する特性であることが示唆 ↓ オリジナル概念との相違をさらに検討、日本人における老年的超越の概念を確立する必要 **2. 虚弱高齢者の心理的well-being低下を緩衝する老年的超越の機能** ・ Eriksonの「老年的超越は虚弱超高齢者の心理的適応を促進する」という仮説を支持 ・「無為自然」の高さがネガティブ感情を統制し、心理的安定をもたら可能性	**1. 尺度の信頼性** 内的一貫性が十分でなかったため、下位因子の項目を増加させるなど、質問紙の信頼性を高める検討が必要 **2. 対象者集団の特性** 郵送調査の対象者は、学歴、高次生活機能、健康度自己評価の平均値が高い傾向、代表サンプルを用いた場合には尺度の下位因子構造が変わる可能性 **3. 心理的well-beingの評価** ・ 一部の虚弱高齢者を対象にした分析のため、新たな超高齢者集団を用いた交差妥当性の検討が必要 ・ 超高齢期の虚弱化の進行に対する心理的適応の過程と老年的超越の役割について縦断的検討が必要

ID番号	研究の種別	緒言		方法		
		背景	目的	対象	測定項目(変数等)	解析方法
B3	量的研究 (横断研究)	老年的超越理論は、高齢期の心理を理解する手立てとなりうるものであるが、日本における老年的超越研究はまだ少ない。	前期高齢者を対象とした老年的超越尺度の因子構造および関連要因の検討	**○参加者** 生きがい大学の受講生203人(男93人、女110人、平均年齢66.3歳)を分析対象 **○調査方法** 留め置き法(郵送法で回収)	**○従属変数** Tornstamの老年的超越尺度(3因子構造)の下位因子 **○独立変数** ・改訂版PGCモラール・スケール ・社会活動の頻度(友人・知人・親戚) ・主観的健康感 ・基本属性(性、年齢、同居者の有無、最終学歴)	**1. SEMによる確認的因子分析** **2. 重回帰分析**
B5	量的研究	**研究1** ・ JGSはサンプルの代表性に関する性質が確認された集団で検討されたものではなかった。 ・ JGSの8つの下位尺度のうち7つの下位尺度の内的一貫性が低い。 **研究2** ・ JGS-Rの項目の意味の取り方について個人間の変動がある可能性 ・ Tornstamの理論では、老年的超越の発達変化は若い年代で始まるとされる。	**研究1** ・ より代表性の高い一般的な高齢者集団を用いて、JGSの改定版を作成 ➡ JGS-R ・ JGS-Rを代表性の高い地域高齢者の集団に実施し、尺度の因子構造および内的一貫性を検討 **研究2** ・ JGS-Rの再検査信頼性を検討することで個人差の問題を確認 ・ 高齢者より若い世代でのJGS-R適用の可能性を検討	**研究1** **○対象** 地域高齢者1,973人(男936人、女1,037人、平均74.9歳) 70歳群(69～71歳):1,000人 80歳群(79～81歳):973人 **○調査方法** 会場招待型 **研究2** **○対象** 1回目調査 中年群(49～51歳):206人 高齢群(69～71歳):206人 2回目調査 中年群(同):172人(平均49.9歳、男86人、女86人) 高齢群(同):172人(平均70.0歳、男86人、女86人) **○調査方法** クローズド型ウェブ調査	**研究1** JGSの先行研究の結果に基づき30項目のJGS-Rを作成 **研究2** 調整後の27項目のJGS-Rを実施	**研究1** 1. JGS-Rの確認的因子分析(すべての因子相関を認めるモデル) 2. 下位尺度の信頼性(α係数)を計算 3. 下位尺度得点について、70歳群と80歳群、男性と女性の平均得点の差をt 検定 **研究2** 1. 全体、中年群、高齢群ごとに内的一貫性(α係数)、再検査信頼性(相関係数)を計算 2. 群別の下位尺度の平均値の有意差をt 値により検定

ID番号	結 果	考 察	問題点・課題・展望
B3	**1. について** ・3因子モデル(Cosmic,Coherence,Solitude)としては不適解 ・Cosmic因子だけが5つの観測変数と有意な関連 ・Cosmic因子と主観的幸福感とは弱い正の相関 **2. Cosmic因子への影響要因** 年齢が高いこと、友人・知人・親戚に会う頻度が多いことが有意に影響	**1. について** ・前期高齢者では、Cosmic以外のCoherenceとSolitudeは、それぞれの観測変数との対応に符号面で一貫性がなく、パス係数も小さいことから適切な解釈が困難 ・Cosmicは、設問項目の内容からして老年的超越の中心的概念 ↓ 本研究の対象者のように前期高齢者で生きがい大学受講生では、Tornstamのモデルが当てはまらず。 **2. について** 年齢、社会活動が影響要因として示されたが、決定係数が小さく今回検討した変数以外に影響要因がある可能性	**○問題点** ・対象が前期高齢者のみであること、虚弱高齢者が含まれていないため、モデルの検討としては不十分 ・Cosmicのような抽象的な項目の尺度を日本語訳することの難しさ。Tornstamの尺度項目そのものに不十分な点があることは否めない。 **○課題** ・日本人高齢者特有の老年的超越の要素、異なる文化でも共通する要素についての検証 ・老年的超越の発達メカニズムの解明
B5	**研究1** **1. JGS-Rの確認的因子分析の結果** ・8因子27項目によるモデルを選択 ・下位因子名はJGSに同じ **2. 下位尺度の信頼性(内的一貫性)** ・「脱二元論」のα係数が.36と相変わらず低い。他はJGSとほぼ同程度 **3. 下位尺度得点と年齢・性別との関連** ・すべての下位尺度で80歳群は70歳群より有意に高い得点 ・「無為自然」を除く7つの下位尺度において、女性の平均点は男性より高い。 **研究2** **1. JGS-Rの信頼性** ・α係数は、「脱二元論」以外の下位尺度は先行研究とほぼ同様もしくは高い値を示す。 ・再検査信頼性は、「内向性」「脱二元論」「利他性」がやや低かったが、その他は十分高い信頼性が示された。 **2. 基本変数(年齢、性別)との関連** ・「内向性」「脱二元論」「宗教・スピリチュアル」において、高齢群と中年群との有意な差は認められず。 ・その他の5つの下位尺度では、高齢群は中年群よりも有意に得点が高い。 ・「内向性」「脱二元論」「宗教・スピリチュアル」において、いずれも男性より女性の得点が有意に高い。	**研究1:** **1.について** ・JGSと同様の8因子モデルの適合度が高いことを確認 **2. について** ・内的一貫性については、大きな改善効果は認められず。 ・理由としては、①老年的超越という概念が広範で複雑な要素を含むにもかかわらず、少数の項目で概念全体を網羅するような項目構成としたこと。②高齢者の個人差が大きく、項目に対する反応が一貫していない可能性 ➡ 再検査信頼性の検討 **3. について** ・先行研究と同様、老年的超越の下位尺度得点がより高齢で高く、女性で高いことは、JGS-Rの交差妥当性を示すもの。 **研究2:** ・JGS-Rの下位尺度得点の再検査信頼性は、「内向性」「脱二元論」「利他性」を除いて十分な高さを示し、尺度得点の個人内での安定性、再検査信頼性を確認 ・中年群と高齢群との比較では、5つの下位尺度で高齢群が有意に高い。このことは、Tornstamの理論どおり老年的超越の特性が加齢に伴って上昇するものであることを示すもの。	**1. 交差妥当性について** ・JGSおよびJGS-Rの交差妥当性が確認できたことから、日本の比較的健康度の高い前期・後期高齢者を対象とした場合にも本尺度が適用可能 ・老年的超越が年齢とともに上昇すること、女性で高いことは、Tornstamの理論どおりの結果であり、JGS-Rで測定された老年的超越の構成概念妥当性を示すもの。 ・これらの結果は、西洋と同様の枠組みで検討可能であることを示めすもの。 **2. 信頼性について** ・再検査信頼性では比較的十分な高さが得られたにもかかわらず、内的一貫性は低かったことについては、下位因子といえども広範な要素を含んでいることが原因と考えられる。 ・「脱二元論」を下位尺度から除くという選択肢もあるが、老年的超越理論の重要な要素でもあり慎重な評価が必要 ・JGS-Rの分析からは、老年的超越という複雑な現象を測定することの困難さが示されたが、中年期から高齢期全般を測定できる尺度として、さらなる改良が期待

ID番号	研究の種別	緒言		方法		
		背景	目的	対象	測定項目(変数等)	解析方法
B4	量的研究 (横断研究)	・ Tornstamの老年的超越理論では、「自然な加齢」による影響が最も大きいが、重篤な病気の罹患といった人生の危機とも関連するとされる。 ・ Eriksonも、第9段階の危機からの回復には「基本的信頼感」の再獲得が重要であり、他者との密接な関係の重要性を指摘している。	年齢、身体状況、他者との関係性(交流頻度やソーシャルサポート)に関する要因が老年的超越に及ぼす影響について検討	**○対象全体**(SONICデータ) 地域高齢者1,973人(男936人、女1,037名、平均年齢74.9歳) **○群別参加者** ・70歳群(n=1000:69-71歳) ・80歳群(n=973:79-81歳) ・参加率:70歳群23.1%、80歳群18.1%。 **○調査方法** 会場招待型	・**老年的超越**:JGS−R30項目 ・**交流頻度**:6段階で評定 ・**ソーシャルサポート**:情緒的サポートおよび手段的サポート ・**手段的自立(IADL)**:老研式活動能力指標 ・**慢性病の既往数** ・**歩行時間**:2.44mの歩行時間 ・**握力** ・**その他の変数**:年齢、性別、同居者の有無、経済的なゆとり	**従属変数**:JGS-R下位尺度得点 **説明変数**:背景変数(性別、同居者の有無、経済状況)、年齢、他者との関係性(交流頻度、ソーシャルサポート)、身体状況(IADL,慢性病既往数、握力、歩行時間) ↓ 上記の説明変数を一括投入する重回帰分析
B6	量的研究 (縦断研究)	老年的超越は高齢期全般にわたって発達すると仮定されており、これまで横断研究により前期高齢者群よりも後期高齢者群、超高齢者群の老年的超越が有意に高いことが示されている。 しかし、縦断研究による検討は行われておらず、老年的超越の加齢変化については確認されていない。	前期・後期高齢者を対象とした縦断研究により、老年的超越の3年間の変化を検討する。	**○対象全体** 第1波調査:B4(上欄)に同じ 第2波調査:第1波調査の参加者のうちから地域高齢者1,251人(男614人、女637名、平均年齢77.6歳) **○群別参加者** 70歳群(n=681:71-74歳) 80歳群(n=570:81-85歳) 追跡率:70歳群68.1%、80歳群58.6%。 **○調査方法** 会場招待型	JGS-Rの27項目を実施	**○分析モデル** JGS-Rの下位尺度得点を従属変数とし、調査時期(第1波、第2波:反復要因)、性別、年齢群を独立変数とする反復要因のある分散分析

ID番号	結　果	考　察	問題点・課題・展望
B4	・　老年的超越のほとんどの下位尺度で年齢の標準偏回帰係数（β）が最も高かった。 ・　情緒的・手段的サポートは老年的超越に正の関連を示し、年齢に次ぐ大きさのβを示した。 ・　交流頻度は、下位尺度により正の関連を示すものと、負の関連を示すもの（内向性、脱社会的自己）とに分かれた。 ・　身体状況が悪い場合に老年的超越が高いことが示された。	・　年齢が高く、他者との親密な関係があり、身体的状況が悪い場合に老年的超越が高いことが示された。 ・　年齢が与える影響が最も強かった。 ・　これらの結果は、次の2つの仮説を支持するものである。 ↓ **①Tornstamの知見**：老年的超越は「自然な加齢」に伴って発達する **②Eriksonの第9段階仮説**：老年的超越は身体状況の悪化が避けがたい超高齢期の発達課題	
B6	**○調査時期の有意な主効果、交互作用があった下位尺度** 「ありがたさ・おかげの認識」 「内向性」 「脱二元論」 「宗教・スピリチュアリティ」 「脱社会的自己」 「基本的肯定感」 「無為自然」 **○年齢・性別ごとの3年間の縦断変化（表-1より）** 「脱社会的自己」「無為自然」：年齢・性別すべてにおいて有意な得点の上昇 「脱二元論」：70歳群男女と80歳群男性で上昇、80歳群女性では変化なし。 「内向性」「基本的肯定感」：年齢・性別すべてにおいて有意に低下 「宗教・スピリチュアリティ」：70歳群男女ではともに低下、80歳群男女ではともに上昇	・　前期・後期高齢者における老年的超越の3年間の縦断的変化については、仮説どおり上昇する下位因子もあったが、低下する下位因子もあり、老年的超越の発達の過程が下位因子によって異なることが示唆 ・　上昇したのは老年的超越の「自己」に関する領域の下位因子（こだわりを捨てる、ありのままを受け入れる、合理的思考から解放される等）が多かった。 ・　3つの下位因子（脱二元論、脱社会的自己、無為自然）では、70歳群、80歳群の両方で得点が上昇しており、前期・後期高齢期を通じて発達することが示唆	70歳群、80歳群の両方で低下傾向がみられた下位因子（内向性、基本的肯定感）があったことの解釈は直ちには困難であるが、観察期間が短かった可能性もあり、継続した観察・検討が必要

ID番号	研究の種別	緒言		方法		
		背景	目的	対象	測定項目(変数等)	解析方法
B7	量的研究 (縦断研究)	老年的超越が高まることにより、加齢による身体状況や機能の物理的な変化があっても、心理面への悪影響が小さくなる可能性があることは知られているが、横断データによるものであるため、老年的超越と幸福感の因果関係は不明	老年的超越が、ネガティブなライフイベントに対する心理的適応に重要な役割を果たしていることを縦断データを用いて検証	**○対象者** 地域在住の72～84歳までの高齢者1,085人(男516人、女569人)。SONICの参加者 **○調査** 第2波:ベースライン(BL) 第3波:フォローアップ(FU) **○BL・FU両方に参加** 70歳群673人(72-74歳) 80歳群412人(82-84歳) **○調査方法** 会場招待型	**①老年的超越**:JGS-R(27項目) **②疾患罹患・死別イベントの経験**:本人、家族、友人、親、兄弟等にまつわるイベント※ **③精神的健康**: WHO5-J **④その他の変数**:年齢、性別、教育年数、同居家族の有無、手段的自立、外出頻度、経済状況、交流頻度、ソーシャルサポート ※8つのイベント ・自分が大きな病気やけがをした ・家族が大きな病気やけがをした ・配偶者との死別 ・子供との死別 ・親しい友人との死別 ・親との死別 ・きょうだいとの死別 ・家族・親族・友人の介護	1. BL後からFUの間に経験した8つの疾患罹患・死別イベントについて、性別、年齢別、老年的超越の高さの群間差 ➡ χ^2 検定 2. BLからFU時の精神的健康の変化に対して、①BL時の老年的超越、BLからFU間の疾患罹患・死別イベントの経験の両者が影響を与えるか、②BLからFU間の疾患罹患・死別イベントの経験を老年的超越が緩衝するか、③それらに年齢群による違いがみられるか ➡ 8つのイベントごとに重回帰分析 **目的変数**:FU時のWHO5-J **説明変数**:年齢群、BL時のJGS-Rの合計点、疾患罹患・死別イベントの経験の有無、その他年齢群との1次・2次の交互作用項 **調整変数**:BL時のWHO5-J、性別、教育年数、BL時の同居家族の有無、外出頻度、経済状況、交流頻度、ソーシャルサポート

ID番号	結　果	考　察	問題点・課題・展望
B7	**1. 前期・後期高齢者における約3年間の疾患罹患・死別イベントの経験頻度** ・ 年齢群差:「自分の大きな病気」「家族・親族・友人の介護」以外の6つのイベントで有意 ・ 男女差:「配偶者と死別」「家族・親族・友人の介護」で、女性が有意に高い。 ・老年的超越の差:「親との死別」で、老年的超越の低い群が有意に高い。 **2. 精神的健康の縦断変化に対する老年的超越、疾患罹患・死別イベントの影響および老年的超越の緩衝効果** ・ BL時のWHO5-Jは、6つのイベントで有意な正の影響 ・ 6つのイベントで女性のほうがFU時のWHO5-Jが有意に低い。 ・ BL時の交流頻度とソーシャルサポートが高いほど、FU時のWHO5-Jが有意に高い。 ・ 配偶者の死別」を除く5つのイベントで、BL時の老年的超越が高いほど、FU時のWHO5-Jが有意に高い。 ・「きょうだいとの死別」は、老年的超越の有意な影響に加えて、2次の交互作用(年齢群×老年的超越×イベント)が有意 ・ FU時のWHO5-Jに有意な負の影響があったのは、「家族が大きな病気やけがをした」のみ。 ・ 80歳群では「配偶者の死」を経験した人のほうがFU時の精神的健康が高い。70歳群では影響はみられず。 ・「きょうだいとの死別」では、80歳群では老年的超越が高い群のほうが有意にFU時のWHO5-Jが高い。70歳群では有意な効果はみられず。	**1. 老年的超越がその後の精神的健康に及ぼす影響** ・ BL時の老年的超越が高いほど、他の要因を統制しても3～4年後の精神的健康が有意に高い。βからみても老年的超越の影響が大きい。 ・ ほとんどのイベントで老年的超越と年齢群との交互作用は示されなかったことから、老年的超越がその後の精神的健康を高める働きは、前期・後期高齢者ともに有効 ・ 老年的超越の精神的健康への影響度は、BL時の精神的健康を除くと、経済や交流などの社会的要因よりも相対的に大きい。身体機能や社会的ネットワークが縮小しがちな後期・超高齢者の精神的健康の維持・促進を考えるうえで重要な知見 **2. 疾患罹患・死別イベントの経験がその後の精神的健康に及ぼす影響** ・ 分析対象者全体に対して有意な負の影響があったイベントは「家族の大きな疾患への罹患」のみ。高齢者の精神的健康悪化のリスク要因のひとつとして重視すべき。 **3. 疾患罹患・死別イベント経験後の精神的健康に対する老年的超越の緩衝効果と年齢差** ・「きょうだいとの死別」のみ緩衝効果が認められ、80歳群では、BL時に老年的超越が高かった者はFU時の精神的健康が高い。70歳群ではこのような差はみられず。老年的超越の緩衝効果には年齢差がある。 ・ 老年的超越は、経験したイベントが他のリソースによって補償されないとき、より強く機能することが考えられる。	**○まとめ** ・ 老年的超越の高さは、その他の要因を調整しても3～4年後の精神的健康にポジティブな影響を与える。 ・ 後期高齢者で老年的超越の高かった者は、「兄弟との死別」を経験しても精神的健康が悪化しない。これは老年的超越の緩衝効果 ・ 高齢期において老年的超越的な価値観をもつことは精神的健康の維持増進やその低下予防に役立つ可能性 **○問題点・限界** ① 結果が脱落の影響を受けていた可能性(追跡率67%) ② JGS-Rの合計点を用いたため、8つの下位因子の影響については不明 ③ 地域差の検討の必要性(地域コミュニティによって相違する可能性) ④ 複数イベントの重複の影響(本研究では個別に検討)

第３章　東洋的なるもの

第１章において述べたように、Tornstam の老年的超越理論は、日本の禅やユングの分析心理学を参考にして構築された理論である。しかし、Tornstam の行った量的研究では、禅やユング心理学の知見が老年的超越の影響因としてどう反映されているのか、詳細が明らかでない部分がある。したがって、この理論を日本人に適用するにあたっては、東洋文化的な側面(後述するように、ユング心理学も東洋思想の影響を強く受けているとされる)をさらに掘り下げて考察する必要がある。

本研究の主たる目的は、老年的超越の関連要因（特に東洋文化による影響）について実証的に明らかにすることであり、質問紙調査やインタビュー調査にあたっては、上記の視点をふまえた予備的な考察や、≪東洋的なるもの≫を測定する新たな尺度の検討が不可欠である。

本章では、≪東洋的なるもの≫とは如何なるものなのか、文化的・心理的・社会的側面から文献調査を行った結果について述べる。その上で、「東洋的な見方」という上位の構成概念を設定し、さらに、これを構成する要素を再統合することで、尺度による測定を前提とした下位の構成概念を構築する。加えて、この構成概念に基づき、質問紙調査やインタビュー調査における設問項目および質問文の検討を行う（候補案１次抽出の段階)。

3.1　方法

東洋思想やユング心理学についての専門的な学術書ではなく、一般人を対象に入門書的に書かれた、この分野の代表的書籍を調査対象文献とする。その理由は、この文献調査の目的が、東洋思想やユング心理学を学術的に研究することではなく、一般人が≪東洋的≫という言葉からイメージする「ものの見方・感じ方・考え方」を手短なフレーズやエッセンスで把握することにある。

今回、文献調査の対象とした書籍を**表 3-1** に掲示する。おおまかには、ID 記号の A と B は「老いに関する書籍」、C は「東洋文化に関する書籍」、D は「ユング心理学に関する書籍」である。これらの文献を通読し、「東洋的な見方」に関する設問項目を作成する際に参考になると思料されるフレーズを抽出した。抽出したフレーズについては、文献カードを作成し、さらに、文献カードに記載された内容を、簡単なキーフレーズ（コード化）に縮約したユニットカードを作成し、このカードを用いて KJ 法を行いカテゴリーに分類した。その結果を**表 3-2** のマトリックス表に示す。

横軸(行方向)は３つに区分し、文化的側面、心理的側面、社会的側面とした。さらに、文化的側面については６つに区分し、思考様式、世界観・人生観、幸福観、日本人の風土的あり様、同無常観、同死生観とした。心理的側面については４つに区分し、意

識構造、元型、個性化の過程、共時性とした。社会的側面については２つに区分し、人間関係、社会システムとした。

縦軸(列方向)は、「東洋的な見方」と「西洋的な見方」の２区分とした。なお、この分析の目的が「東洋的な見方」の特徴を抽出することであるので、「西洋的な見方」については、比較の際の参考程度に掲げたものである。

分析の方法としては、文献統合の手法を参考に、「東洋的な見方」と「西洋的な見方」の特徴が浮かび上がるよう留意し、先述した KJ 法を用いて構成要素の構造化を行ったチャートをもとに、文化的・心理的・社会的側面ごとにそれぞれカテゴライズした内容をマトリックス表に布置していった。このマトリックス表をもとに、各カテゴリーに縮約して記された内容を次節 3.2 で文章化するにあたっては、再度、該当する文献にあたり、筆者の理解が及ぶ範囲で要点を引用した。

なお、東洋と西洋の定義については、以下のようにそれぞれの著者（たとえば、鈴木大拙、河合隼雄、リチャード・E・ニスベット）によって違いはあるが、この文献調査の目的が≪東洋的なるもの≫のイメージを掴むという趣旨からすれば、鈴木の考え方が受け入れやすいのではないかと思われるので、大まかにはこの定義に従うこととした。

鈴木（1997）の『東洋的な見方』では、「東洋と西洋、というあんばいに、文化を地理的にわけて良いか否かは、厳密に規定せられぬかも知れぬ。が、これは、そんなにやかましく、科学的に書き立てるのでないから、ただ漠然と東と西ということにしておく」(C1,p.10）と冒頭で述べており、また、「西洋では物が二つに分かれてからを基礎として考え進む。東洋はその反対で、二つに分かれぬさきから踏み出す」(C1,p.20）と、対象に対する思考方法や解釈の違いから「東洋的な見方」と「西洋的な見方」に区分している。

一方、河合（1967）の『ユング心理学入門』では、心の構造という観点から、「日本人の意識構造は西洋のそれと異なることはもちろんであるが、それと簡単に対応させて東洋の特徴をもっているとはいいがたいのである」(D１,p.293）と、東洋の他の国民と比べて日本人の特異性を論じている。また、「日本が東洋と西洋の中間地帯と、あるいはその接点として、その意識の構造も多分に両者の中間的性格をもっていることである」(D１,p.293）と、現在の日本では東洋と西洋の文化が混在(混合)する状況にあると指摘している。

また、ニスベット（2004）の『木を見る西洋人　森を見る東洋人』では、「中国および中国文化に多大な影響を受けた国々（主として日本と韓国）を想定している。これらの国の人々は、場合に応じて『東アジア人』『東洋人』『アジア人』などと略される。また、私が西洋人という場合には、ヨーロッパ文化に身を置く人々を指す」(C11,pp.10-11）と述べている。

表3-1　検討文献・報道記事等

ID	書籍名	著者名等	刊行年
A1	ライフサイクル、その完結＜増補版＞	E.H.エリクソン／村瀬孝雄他訳	2001
A2	老年期	E.H.エリクソン他／朝長正徳他訳	1990
A3	老い(上・下巻)	シモーヌ・ド・ボーヴォワール／朝吹三吉訳	1972
A4	Gerotranscendence	Lars Tornstam	2005
B1	こころと人生	河合隼雄	1999
B2	老いの発見　１老いの人類史	伊東光晴他5人の編集委員	1986
B3	老いの発見　３老いの思想	伊東光晴他5人の編集委員	1987
B4	老いの発見　４老いを生きる場	伊東光晴他5人の編集委員	1987
B5	老いの万華鏡	思想の科学研究会〈老いの会〉編	1987
B6	老いの様式――その現代的省察	多田富雄他編	1987
B7	成熟と老いの社会学	松田道雄他	1997
B8	老いのいきかた	鶴見俊輔編	1997
B9	「老いる」とはどういうことか	河合隼雄	1997
B10	老いの近代	天野正子	1999
B11	老いの空白	鷲田清一	2015
B12	老人力	赤瀬川原平	1998
B13	日経シニア・ワークライフ・フォーラム	児玉清氏の講演　日経新聞　2010.12.18	2010
B14	NHK SWインタビュー（日野原×篠田）	篠田桃紅氏の発言　2016.01.09	2016
B15	楢山節考	深沢七郎	1964
C1	東洋的な見方	鈴木大拙	1997
C2	禅	鈴木大拙／工藤澄子訳	1987
C3	日本的霊性	鈴木大拙	1972
C4	風土―人間学的考察―	和辻哲郎	1935
C5	老荘思想	安岡正篤	1979
C6	易學入門	安岡正篤	1960
C7	わたしが死について語るなら	山折哲雄	2010
C8	死を視ること帰するがごとし	山折哲雄	1995
C9	林住期	五木寛之	2008
C10	人生を考える	中村元	1991
C11	木を見る西洋人　森を見る東洋人	リチャード・Ｅ・ニスベット／村本由紀子訳	2004
C12	NHKこころの時代　唯識に生きる	横山紘一	2017
C13	こころの未来　Vol.15	京都大学こころの未来研究センター	2016
C14	こころの未来　Vol.16	京都大学こころの未来研究センター	2017
C15	こころの未来　Vol.18	京都大学こころの未来研究センター	2018
C16	タテ社会の人間関係	中根千枝	1967
D1	ユング心理学入門	河合隼雄	1967
D2	ユング心理学と仏教	河合隼雄	2010
D3	無意識の構造	河合隼雄	1977
D4	中空構造日本の深層	河合隼雄	1999
D5	対話する生と死	河合隼雄	2006
D6	自然現象と心の構造	Ｃ.Ｇ.ユング　W.パウリ／河合隼雄訳	1976
D7	ユングと共時性	イラ・プロゴフ／河合隼雄訳	1987
D8	量子力学と意識の役割	ブライアン　Ｄ．ジョセフソン他／竹本忠雄監訳	1984
D9	NHK100分de名著　河合隼雄スペシャル	河合俊雄	2018
D10	＜こころ＞はどこから来て、どこへ行くのか	河合俊雄、中沢新一他	2016

（出典）文末のカッコ内に文献ID（表3-1）を示す。

表3-2　検討文献からの抽出情報の統合（全4頁）

	文化的側面					
	思考様式	世界観・人生観	幸福観	日本人		
				風土的あり様	無常観	死生観
東洋的な見方	**○包括的に見る** ・調和と包括性を重んじ、万物は互いに影響しあうと考える（C11） ・ものごとを文脈のなかにおいて見ようとする（C11） ・ものごとの原因を、対象物と「場」の関係のなかに見出す（C11） **○相補的に関係を見る** ・世界を陰と陽の相補的関係で捉える（C11） **○二分化前を見る** ・東洋では、二つに分かれない根本のところからものを割り出す（C１） ・分別のうらには無分別がある（C1） **○円環的に見る** ・有限の事と物とは円融無碍的に錯綜、二分性は絶対的でない（C１） ・東洋的なものは、行って還らぬ直線ではない、一円相である（C1） **○禅の影響** ・禅は自己の存在の本性を見ぬく術、束縛からの自由への道（C4） ・知(言葉）は表面的なものしか到達しえない。体得する以外にない（C1） ・二元的に考えているかぎり、いくら自由を叫んでも無意義（C1） ・無分別の世界が「妙」（C1）	**○宇宙観** ・空想を好み、自然と人間が融合する宇宙観を重んじる(C11) ・地上の出来事は自然界や宇宙の出来事と共鳴していると考える(C11) ・時空一体の概念。「時間なくして空間は存在せず、空間なくして時間は存在しない」（D8） ・時間に実体はなく、移りゆくのみ（C1） **○人生観** ・「人間万事塞翁が馬」(C11) ・人間たらんと意欲する心のある限り、一度エデンを出でよ（C1） ・「運命を味わうこと」に生き甲斐を感じる（D1） **○自然観** ・東洋の自然は「人」を含む(C1)（natureは二元的で人と対峙する） ・東洋では、自然にも情性があり、自然にも人間性（C1） ・アニミズムは、日本人の多くが共有する感覚(C7) **○日本的霊性** ・日本人の品性、思想、信仰、情調を養うもの（浄土系思想、禅）（C4） ・霊性は大地を離れることを嫌う（C4） ・大地性こそが日本の霊性の特徴（C4）	**○足るを知る** ・幸福は周囲との関係性や人生全体のバランスで評価するもの（C13） ・幸福を増やすことよりも不幸を減らす。「足るを知る」（C15） ・不幸があることで、逆に幸福を感じることも(C15) ・死生観や自然観を失うと「幸福」という観念が見えなくなる（C14） **○極楽に行って毎日何をする？** ・「苦のない世界、楽のない世界」では、人間は生きていけない（C1） **○将来世代とのつながり** ・自分が作り上げてきたものの価値、その価値を次の世代と共有する喜び（C14）　→　西洋人にも共通 **○林住期に遊ぶ** ・俗世間の掟に縛られない精神の自由（C9） ・独りになること、人間関係の簡素化（C9） ・自分のために残された時間と日々を過ごす。真の自由人（C９）	**○日本人の二重性格** ・モンスーン的で、熱帯的・寒帯的でありながら、季節的・突発的な二重性格が加わる。その特徴は受容的・忍従的（C4：以下同様） ・台風が日本人の国民性に大きな影響。 **○モンスーン的な受容性** ・単に熱帯的な感情の横溢でもなければ、寒帯的な感情の持久でもなく、豊富に流れ出でつつ変化において静かに持久する感情。 ・感情の昂揚を尚びながらも執拗を忌む。桜の花は日本人のこの気質を象徴。 **○モンスーン的な忍従性** ・熱帯的なあきらめでもなければ、寒帯的な辛抱強さでもなく、あきらめでありつつも反抗において変化を通じて気短に辛抱する忍従（日本人のヤケ、自暴自棄） ・この感情の嵐のあとには静寂なあきらめが現れる。桜の花は日本人のこの気質を象徴。 **○日本人の国民的性格** ・しめやかな激情と戦闘的な恬淡。 ・相矛盾する性格を併せ持つ。	**○諸行無常** ・時間は刻々移りゆくもの、実体は捉えられない（C1） ・「日に新たにして、日々にまた新たなり」（C1） ・諸行無常のうらには、恒久とか永遠を考えている（C1） **○仏教の無常観**（C7） ・地上に永遠のものは一つもない ・形あるものは必ず壊れる ・人は生きて、やがて死ぬ **○自然に対する畏怖** ・自然災害の多い日本では、自然に対する畏れの感覚や万物流転のような無常観が漂う（C14）	**○死は天命** ・移り変わらぬ永遠の命があるとすれば、それは死そのもの（C1） ・死ぬということは、生きることを含んでいる（C10） ・人は努力しても必ずそれが酬われるとは限らない。寿命は天命（C9） **○死んだら自然に還る** ・日本人にとって死は、人間が自然という全体性へと還ること（D4） →西洋人にとって死は、「すべてを失った無の状態に至る」と否定的（D4） ・自然と融けあって一つになるような気分になったとき、死を受け入れるられる（C7） **○どう生きるか** ・死ぬのに覚悟はいらない。自然に任せればよいこと（C1） ・どういう気持ちで死んでいくかというのは「自由」の問題。温かな心をもって死んでいくことは誰にでもできること（C10） ・戦争世代の人は、死について恬淡（C14） ・死は人間の根本問題。どう生きるかに帰着（C14）

	心理的側面				社会的側面	
	意識構造	元型	個性化の過程	共時性	人間関係	社会システム
東洋的な見方	**○自己に心の中心点** ・東洋の意識は内向的態度に重きを置く（D1） ・「自己」は心全体の統合の中心（東洋思想の「道」との結びつきが強い）（D1） **○意識と無意識の境界が曖昧** ・東洋人は、なんとなく心の底に、無意識の働きのあるのを感覚（C1） ・唯識の「阿頼耶識」は、ユングの無意識に相当（C1,C12） ・自己の存在を強調しすぎると意識と無意識の境界が不明確となり、統合性が漠然としたものになる（D1） ・このような意識構造のもとでは、深層で自と他の区別なく重なり合う（D1） ・意識と無意識の境界が曖昧な意識構造では、シビアな対決は起こりにくく、ありのまま受け入れる態度を示す（D9） **○日本人の意識構造の中空性** ・意識と無意識の境界が不鮮明で、意識も中心としての「自我」によって統合されていない。ある種の曖昧さ（C4） ・均衡を大切にする国民性の表れ（C4）	（注）文献は全てD1 **○普遍的無意識の基本的要素** ・元型は心の奥深く隠されている基本的要素、元型はその姿を隠喩によってのみ示す。 ・元型は人間が生来もっている「行動の様式」であり、表象の可能性。 ・元型は合理的な思考によってイメージされるものではなく、主客分離以前の状態において体験される。 ・元型の事例：ペルソナ、影、アニマ、アニムス、自己、太母、老賢者（知恵深い老人） **○「影」の魅力を知る日本人** ・「影」（個人の意識によって生きられなかった半面）は、個人的な心的内容と関連が深い。 ・東洋人は、陰陽複雑に変化する心の現象についての豊富な知識をもち、「影」の多い生活を楽しんできた。 ・日本人は「影」の魅力について、西洋人よりはるかによく知っていた。 ※西洋人は、キリスト教による善悪の判断や、合理主義的思考によって、影の部分を意識から除外する傾向が強い。	（注）文献は全てD1 **○自己実現の過程** ・個人に内在する可能性を実現し、その「自我」を高次の全体性へと志向させる努力の過程。 ※ユングは、東洋の「道」から示唆 **○自己との対決と協同** ・内的・主観的な総合の過程 ・客観的関係の過程 自己実現とは、外界・内界に対しても窓を開くこと、近代文明を消化しながら、古い暗い心の部分ともつながりを持たねばならない困難な道。 ※アメリカの自己実現の考え方は、光の部分だけを見て、影の部分を見落としている。 **○中年の危機** ・人生の後半では、内的なことに目を向けねばならぬ意義深い「時」が訪れる。	**○「意味のある偶然」の一致** ・自己実現の過程で出合う不思議な現象（D1） ・これを説明する原理が「共時性」（D1） ・現代物理学での不連続性の発見は、因果性に終焉（D6） **○共時的現象** ・心的状態（無意識）と物理的状態（自然）との同時生起（意味の等価）（D6） ・無意識過程と関連する現象（D7） **○「相」を見る東洋の易** ・事象を因果の鎖で時系列に並べるのではなく、事象全体の「相」を見る　→　「易経」の考え方（D1） ※西洋における自然科学の発達は、一面では「相」の知恵を抑圧（D1） **○共時的現象を媒介する元型の働き** ・「意味のある偶然の一致」は、元型的な、すなわち情動的な因子が重要な役割を果たす（D7） ・元型に特有の役割は、時間軸を横切る状況に「形」を与えること（D7）	**○内集団との関係を重視** ・自己は内集団に埋め込まれており、外集団とは離れていると感じている（C11） ・人間関係や義務の網目のなかに自己があると感じており、人間関係において調和を保つことが社会生活の主たる目標（C11） ・他人の気持ちに十分な注意を払い、人間関係の調和を保つために努力（C11） ・上下関係と集団管理を受け入れ、論争や討論を避ける（C11） ↓ ※１他者より秀でていることや個性的であることより、人と人との支え合いのなかで調和を維持することや、集団の目標を達成するために役割を果たすことを望む（C11） ※２日本社会の「単一性」こそが、人と人、人と集団、集団と集団、の設定のあり方を決定する場合に、重要な基盤となっている（C16）	**○集団主義的な社会システム** ・いわゆる「ゲマインシャフト」（共有されたアイデンティティ意識にもとづく共同社会。基本は思いやり、対面での相互作用、共通経験、財産の共有など）（C11） ・相互協調的な世界に生きており、自己は大きな全体の一部であると考えている（C11） ・成功や達成は、所属集団に名誉をもたらすという意味で重要（C11）

	文化的側面					
	思考様式	世界観・人生観	幸福観	日本人		
				風土的あり様	無常観	死生観
西洋的な見方（参考）	**○科学的二分性を重視する** ・主客対立するものとして世界を考える（C1） ・カテゴリーに分類して世界を捉える（C11） ・対象物の性質に焦点を当てた分析を好む（C11） ・形式的な論理規則の有効性を信じている（C11） **○直線的に見る** ・変化や加速は直線的と考える（C11） ・自然や力は、西洋的なるものの基盤（C1） **○個を重視する** ・個人主義的で独立性を重んじる（C11） **○単純化して見る** ・対象の動きは単純な規則によって理解可能と考える（C11） ・単純化して見るゆえに、統一的な分類体系を生み出す（C11） **○一貫性を重視する** ・「ぼんやりとしたこと」を嫌う（C1） ・論理的分析（三段論法）を好む（C11）	**○理性を重んじる世界観** ・ものごとの本質は「イデア」にあり（C11） ・客観的な外の世界と主観的な内の世界とを区別（C11） ・人や物を環境から切り離されたものとして分析的に捉える（C11） ・物質界のほうに関心を寄せる（C11） ・変化は直線的、出来事は制御可能と思い込んでいる（C11） **○自然観** ・人間を自然の一物体と見て、人間を非人間化する傾向（C1） **○人生観** ・「運命と戦うこと」に人生の意義を見出す（D1） ・人間の主体性を重んじる（自由とアイデンティティ）（C11）	**○幸福感** ・基本的にはポジティブ感情をどう増やすかに価値を見出す（C15） ・自己の才能を自由に発揮できる人生に価値（C11） ・自分に誇りを持ち達成感を味わうことで幸福を実現（C13） ・拡大成長志向で功利主義的（C15）			

	心理的側面				社会的側面	
	意識構造	元型	個性化の過程	共時性	人間関係	社会システム
西洋的な見方（参考）	**○西洋人の意識構造** ・意識が無意識と明確に区分されており、外向的で、その中心に確立された自我をもつ（D1） ・心の領域を明確に分化させていくので、「影」の部分が全くの闇になることが多い（D1） ・度を過ぎると、疎外感や深い孤独感を抱えることに（D1）				**○内集団と外集団を区別しない** ・自己を内集団と切り離して捉えており、内集団と外集団をそれほど区別しない（C11） ・個性に価値を置き、自分をよく見せるために奮闘（C11） ・自分自身を知ることに関心があり、公正であるためには調和を犠牲にすることを厭わない（C11）	**○個人主義的な社会システム** ・いわゆる「ゲゼルシャフト」（道具的な目標を達成するために組織された利益社会。相互交流は、目的を達成するための手段）（C11） ・相互独立的な社会に生きており、個人活動の自由にこだわり、自己は単一の自由な主体として捉えられている（C11） ・成功や達成は、個人的利益をもたらすという意味で重要（C11） ・個人主義的で個の独立性を重んじる（C11）

3.2　結果

以下では、**表 3-2** に基づき、３つの側面（文化的側面、心理的側面、社会的側面）ごとに順を追ってその特徴を略述する。

（1）文化的側面

思考様式

文献 ID の**Ｃ１**、**Ｃ２** は、日本の禅文化を広く海外に紹介した仏教学者の鈴木大拙の著書である。**C11** は、社会心理学者のリチャード・E・ニスベットが東洋人と西洋人のものの考え方の違いについて心理学の側面から著した著書である。

マトリックス表の「東洋的な見方」を５つのカテゴリー(包括的に見る、相補的に関係を見る、二分化前を見る、円環的に見る、禅の影響)に、「西洋的な見方」を５つのカテゴリー（科学的二分性を重視する、直線的に見る、個を重視する、単純化して見る、一貫性を重視する）にまとめた。まず、「東洋的な見方」である。

○包括的に見る　ニスベットは、「道教、儒教、仏教の三思想はいずれも、調和と包括性を重んじ、万物は互いに影響しあうと考えていた」(**C11**, p. 30)といい、「出来事の原因は複雑に絡み合った文脈的要因にあると考え…」(**C11**, p. 127) と述べている。このことは、ものごとの原因を「対象物と『場』の関係」(**C11**, p. 49)の中に見出そうとすることでもあり、一般的に東洋人は、両極端を嫌い「中庸」を重んじる傾向があると考えられている。

○相補的に関係を見る　『淮南子』の人間訓が出典とされる「人間万事塞翁が馬」という故事成句は、日本でもよく知られているが、人生に対する東洋人の基本的スタンスを表している。ニスベットも「塞翁が馬」に関連して、陰と陽の原理についてふれており、東洋人の思考方法の特徴として捉えている。

○二分化前を見る　鈴木は、「知性はどうしても二分性を根本的に帯びている。それゆえに、表面的になりがちである」(**Ｃ１**, p. 195)という。また、「東洋は大体これに反して、物のまだ二分しないところから、考えはじめる。…そのまだ分かれぬところ、…無意識であろうが、そこに目をつけるということになるのである」(**Ｃ１**, p. 166)と、東洋人の根本的な思考法の特徴を指摘している。無意識との関連に言及しているところは、後述するユング心理学と通じるところがある。さらに、「思議の世界は、それゆえに、分別の世界である。…ところが、その『うら』に無分別があることを忘れてはならぬ」(**Ｃ１**, p. 121)と、この世には不思議の世界があるという。

○円環的に見る　鈴木は、「この世における有限の事と物とは、いずれも円融無礙的に

参差し、錯綜する。二分性はけっして絶対的でない。…東洋的なるものは、いつも、ここから出てきて、また還ってゆく。…往って還らぬ直線ではない、循環端なき円環、一円相である」(C１,p.175)という。陰陽五行説が根拠とされる「還暦」も、人生を直線ではなく、円環で捉える考え方なのであろう。

○禅の影響　鈴木は、「禅は、要するに、自己の存在の本性を見ぬく術であって、それは束縛から自由への道を指し示す」(D４,p.41）という。そして、禅がわかるということは、「…こうした精神の苦闘を戦い抜いた時、…しかし、事実は、禅とはひとりひとりの実際の体験であって、分析や比較によって得られる知識ではない」(D４,p.68)。また、「知は表面的なものしか到達しえない。物自体はわからぬ。『我』自身もわからぬ」（C１,p.121）という。そして、有限と無限の葛藤、肉と霊の葛藤については、「知性がおのれの興味のためにかりに作り出した無意味な区別にすぎない」(D４,p.51）と喝破し、二分性を否定する。

さらに、知性についても、「そのしかるべき領域においては、それなりに有用である。だが、生の小川の流れを邪魔させてはならない。…あなたが流れに手を入れたその瞬間に、その透明さは乱されて、もはやあなたの姿を写さなくなってしまうからである」（D４,pp.51-52）というが、このくだりは、第１章で Tornstam（2005）が、老年的超越に至った Eva の心境(p.50)として述べていたこととも通じるところがあるように思われる。

また、後述するが、禅と無意識との関係について次のように述べている。「人間の意識には、まだ充分かつ組織的に探究しつくされていない未知の領域があるという。それは時に『無意識』と呼ばれ、…それは漠とした心像をもって満たされた領域で、いきおい、たいていの科学者はそこに踏み込むことを恐れる。…自己の存在の本性を見究める力もまた、ここに隠されているかもしれない。そして、禅がわれわれの意識の中に目覚めさせるものも、それであるかもしれない」(D４,pp.70-71,傍点筆者）と。ここで触れられている“心像”というのは、ユングのいう普遍的無意識としての元型（もしくは原始心像）のことを指しているものと思われる。

このように禅の思想は、非常に深遠なもので実際に坐禅などを体験した修行者しか到達し得ない境地とされ、東洋人のすべてが禅の考え方を理解しているものでは到底ないが、「東洋的な見方」の背景に潜在する重要な要素であることは間違いないことと思われる。

まとめ

東洋人の「思考様式」の特徴は、ものごとを包括的に見ることである。両極端を嫌い「中庸」を重んじる傾向があり、ものごとの原因を、対象物と「場」（背景や環境）の

関係性のなかに見出そうとする。これには『易経』の考え方が影響しており、世界を陰と陽の相補的関係で見ようとする。また、西洋における知性は、二分性を根本的に帯びているがゆえに表面的になりがちであるが、東洋はこれに反して、二分化前から考えはじめる。混沌としたところ、すなわち無意識の世界に目を向ける。円環的に見るということのなかに、二分性が絶対的でないことがうかがえる。このような東洋的な思考様式の根底に禅がある。

なお、参考として、「西洋的な見方」では、カテゴリーに分類して世界を捉えるという点では科学的二分性を重視する、変化を直線的と考える点では“直線的に見る”、個人主義的で独立性を重んじる傾向があるという点では“個を重視する”、対象の動きは単純な規則によって理解可能と考える点では“単純化して見る”、論理的分析(三段論法）を好むという点では“一貫性を重視する”、といったところが特徴かと思われる。

Tornstam (2005) の「東洋哲学の視点をふまえれば、加齢とともに円熟味が増すことによって、物質的で合理的な視点から、より宇宙的で超越的な視点へ移行することで生活満足度が高まる」(p.41.筆者抄訳）との指摘は、以上のようなことからも理解できるところである。

世界観・人生観

文献 ID の C１、C11(ともに前掲)以外に、D８は物理学、D1 はユング心理学、C７、C８、C10 はともに仏教の視点から書かれた書籍である。

マトリックス表の「東洋的な見方」を４つのカテゴリー(宇宙観、人生観、自然観、日本的霊性)に、「西洋的な見方」を３つのカテゴリー(理想を重んじる世界観、自然観、人生観)にまとめた。

〇宇宙観　宇宙を完全な連続体と捉え、「地上で起こっている出来事は自然界や宇宙の出来事と共鳴している」(C11, p.101)と考える点は、東洋の宇宙観の特徴である。また、東洋的な世界観では、「時間なくして空間は存在せず、空間なくして時間は存在しない(鈴木大拙)」(D８, p.96)と考えられてきたが、現代の物理学(相対性理論)でも、時間・空間を別々のものとして扱うことができず、４次元の時空間として同時に扱わなければならないとされている。一方、ニスベットによれば、「現代の西洋人は…世界を分析的で原子論的な視点で見ている。人や物を環境から切り離された各々独立のものとして捉えている。出来事が少しでも変化するとすれば、それは直線的に動くと考えている」(C11, p.126）という。

〇人生観　先述したように「人間万事塞翁が馬」という人生観は、ニスベットも、「人生に対する東洋人の基本的なスタンスをよく表している」(C11, p.26）という。しかし

鈴木は、「『なるようにしかならぬ』…自力の方では、何事も不可能ときめて、…すべて受動的で消極的にして、受け身の立場に立つほど、気楽なことはないとも考えられる」（C１,p.259）と述べつつも、「人間万事は、果たしてこの態度でやって行ってよいか如何」（C１,pp.259-260）と問う。そして、「人間が人間たらんと意欲する心のある限り、極楽は人間の住処ではない、人間は一度はエデンを出なければならない」（C１,p.260）と、単に受動的なだけではないポジティブな意志の重要性を指摘する。

また、河合は、「西洋では運命と戦うことに人生の意義を見出し、東洋では運命を味わうことに生き甲斐を感じているといえるだろう」（D１,p.282）と、西洋人と東洋人の人生観（生きがい感）の違いに言及している。

○自然観　鈴木は、「西洋のネイチュアは二元的で『人』と対峙する、相剋する、どちらかが勝たなくてはならぬ」（C１,p.220）という。また、「西洋人は人間を自然化する。東洋人は自然を人間化する。それで東洋では自然にも情性があるようになる。…これに反して、西洋では人間を自然の一物体とみ見て、人間を非人間化する傾向をもっている」（C1,p.59-60）と、東洋人と西洋人の自然観に対する明らかな違いを指摘する。山折は、仏教的な視点から、「天地万物に生命(魂)が宿っているという一種の宗教教育…日本人の多くが共有している感覚です」（C７,p.110）と、日本人の心には根底にアニミズム信仰があることをうかがわせる。

○日本的霊性　鈴木によれば、「精神と物質との奥に、いま一つ何かを見なければならぬのである。…なにか二つのものを包んで、二つのものがひっきょうずるに二つでなくて一つであり、また一つであってそのまま二つであるということを見るものがなくてはならぬ。これが霊性である」（C３,p.16）という。換言すれば、「知情意をはたらかせる原理――それはもはや知性や分別ではなくて、これをこえたものでなければならない」（C３,p.260）のである。霊性は、「（鎌倉時代以降の）700 年後の今日に至るまで、それが大体において我らの品性、思想、信仰、情調を養うものになってきた」（C３,p.51）と述べ、「霊性の日本的なものとは何か。自分の考えでは、浄土系思想と禅とが、もっとも純粋な姿でそれである」（C３,p.20）という。また、「霊性は、どこでもいつでも大地を離れることを嫌う。霊性は最も具体的なることを貴ぶ。…山を山と見、水を水と見るのが、具体的な見方なのである。水を冷、湯を暖と感ずるのが具体的な感じなのである」（C３,p.75）と、大地性こそが日本の霊性の特徴であると繰り返し強調している。

まとめ

東洋人の「世界観・人生観」の特徴として、宇宙を完全な連続体と捉え、地上の出来事と自然界や宇宙の出来事が共鳴していると考える点は、東洋の宇宙観のユニークな

ところである。また、東洋では、古から「時間なくして空間は存在せず、空間なくして時間は存在しない」（鈴木大拙）と考えられてきたが、現代の物理学では、時間と空間は別次元ではなく同時に取り扱わなければならないとされている。

東洋人の人生観の特徴として、「なるようにしかならぬ」――受動的で消極的にして受け身の立場に立つ――といった側面があることは認めつつも、「人間らしくありたいと意欲する心のある限り、人間は一度エデン（極楽）を出なければならない」（鈴木）、と単に受動的なだけではないポジティブな意志も重要と考えている。これも禅の影響によるのであろう。

東洋の自然は、「人」を含むため自然にも情性があると考え、人と自然が対峙しない。また、仏教による影響と考えられるが、日本人の多くが共有している感覚として、天地万物には生命（魂）が宿っているというアニミズム信仰がある。

日本的霊性（知性や分別ではなく、これを超えたもの）は、鎌倉時代以降、日本人の品性、思想、信仰、情調を養うものになってきたもので、日本人のものの見方、感じ方、宗教に対する考え方の深層にあるものであり、大地性こそが日本の霊性の特徴とされる。

なお、参考として、「西洋的な見方」では、客観的な外の世界と主観的な内の世界とを区別するという点で“理性を重んじる世界観”、“人間を自然と対峙させる自然観”、“人間の主体性を重んじる人生観”、といったところが特徴であろう。

幸福観[1]

文献 ID の C１、C11（ともに前掲）以外に、C13、C14、C15 は『こころの未来』（京都大学こころの未来研究センター）の対談記事から、C９はバラモン教法典が根拠とされる「林住期」についての五木寛之の著書からである。

マトリックス表の「東洋的な見方」を４つのカテゴリー（足るを知る、極楽に行って毎日何をする？、将来世代とのつながり、林住期に遊ぶ）に、「西洋的な見方」を１つのカテゴリー（幸福感）にまとめた。

〇足るを知る　日本人の幸福感の特徴として次のようなことが語られることが多い。

「幸福は個人の主体的達成の絶対的評価として感じられるものではなく、周囲との関係性や人生全体のなかでのバランスなど、相対的に評価されている。つまりマクロに経験される主観的幸福感は、実はマクロ文化の影響を受けている」（C13, 内田, p. 37）。「幸せすぎると逆によくないことが起こるのではないかとか、1 人だけ幸せになるこ

[1] 本節における「幸福観」と「幸福感」の使い分けについては、必ずしも厳密ではないが、一応、内田（2020）の次の定義を参考にしている：「幸福観」は、幸福についての前提、それに付随して人が感じる感情は「幸福感」としている（p. 64）。

とが本当に社会全体にとってよいことか？」(C15,広井,p.7) といった思いが日本人の幸福観の根底にはあり、まさに『老子』の「足るを知る」の教えである。

また、死生観と幸福観は密接につながっており、「死生観とか自然観を失ってしまうと、『幸福』という観念がうまく捉えられなくなってしまう」(C14,佐伯, p.12) など。

一方、西洋人の幸福感は、「基本的にポジティブ感情であって、それをどのように増やしていくべきか、幸福を増やすために個人がどのように努力するか、…」(C15,広井,p.7)に価値を見出す。したがって西洋人は、自己の才能を存分に発揮できる人生、自尊心がもて達成感を味わうことができる人生に幸福を感じる。

○極楽に行って毎日何をする？ 鈴木は、「苦のない世界、楽のない世界、そのような一方向きの世界には、人間は絶対に生きて行けるものではない」(C1,p.224) という。易では「陰が陽にも變ずれば、陽が陰にも變じ、陰陽相應じて新たな創造變化の推進（中）が行はれる」(C６,p.33) とされるが、鈴木の先の言葉は、生の充実感というのは安穏とした暮らしからは手に入れることはできず、自ら変化を求めなければ（一度は「エデンの楽園」(C1,p.221) を出なければ）得られるものではない、ということを指摘しているのであろう。

○将来世代とのつながり　高齢者が幸福感を感じることの一つに、「自分たちが作り上げてきたものに『高い価値がある』と感じて、その価値を同じように感じる次の世代がいることの嬉しさ、そうした価値が共有される嬉しさ」(C14,吉川,p.11)がある。この点は、東洋人も西洋人もともに有する感情であろう。エリクソンも、「多くの老人の中に『不屈』とも言える何かがしばしば存在するが、…それは自己を超越し、世代間のつながりを強調する。それは、人間の条件を（限界）を受け容れるという点で普遍的なものである」(A１,p.xvi：傍点筆者) と述べている。

○林住期に遊ぶ　四住期の一つである林住期について、五木は、これを現代風にアレンジして、次の三点を挙げている。「①俗世間の掟に縛られない精神の自由。②独りになること。…その人脈、地脈を徐々に簡素化していくこと。③自分のために残された時間と日々をすごすこと」(C９,p.21,44,70)。このような生活を送ることで真の自由人となれるとされるが、この考え方は、後述するユングの中年期以降の個性化過程の理論にも通じる考え方である。なお、Tornstam も自著で四住期[2]を紹介している。

---

[2] 四住期について、「四つの段階とは、学生期・家住期・林住期・遊行期で、後の二つの特徴は物質的なものの放棄であり、林住期は、老人には家と土地を手放すことが求められ、森で質素な生活を送る時期。遊行期は、世俗的なものは放棄し、放浪する時期である」(Tornstam,2005,p.70. 筆者抄訳)

まとめ

日本人の幸福観の特徴としては、周囲との関係性や人生全体でのバランスなどを相対的に評価し、「幸福を増やすことよりも不幸を減らす」、つまり「足るを知る」という価値観の影響を強く受ける。また、日本人の幸福観は、自然観や死生観とも密接につながっており、アニミズム信仰とも関連があるとされる。

一方、西洋人の幸福観の特徴は、基本的にはポジティブ感情であって、それをどう増やすかに価値を見出す。自己の才能を存分に発揮できる人生、自尊心がもて、達成感を味わうことができる人生に幸福を感じる。

極楽に行って毎日何をする？　東洋人の人生観のところでも同趣旨のことを書いたが、本当の生の充実感は、一度は「エデンの楽園」から出なければ得られるものではないとの鈴木の指摘は、東洋人の精神性に根差す幸福観のもう一つの側面である。この考え方は、後述するユングの中年期以降の個性化過程の理論にも通じるものがあり、林住期もこれに類する考え方といえる。

高齢者が幸福を感じることの一つに将来世代とのつながりがある。自分たちが作り上げてきたもの価値を次の世代と共有する喜びである。この点は、東洋人も西洋人もともに有する感情であり、エリクソンも「過去・現在・未来の統合」という意味で、世代間のつながりを強調する。

日本人の風土的あり様

文献 ID の C４は、哲学者・和辻哲郎が著した『風土』である。発刊が昭和 10 年ということなのでかれこれ 90 年以上も前の和辻の論考で構成されているが、日本人の国民性の因って来るところを知るには、今なお有益な視座が示されているので対象文献として取り上げた。

マトリックス表の「日本人の風土的あり様」を４つのカテゴリー(日本人の二重性格、モンスーン的な受容性、モンスーン的な忍従性、日本人の国民的性格)にまとめた。本書の記述は難解で、微妙なニュアンスが随所にみられるため、引用は少々長くなるが、それなりに理解できる範囲で要点を記述する。

和辻は、「風土と呼ぶのはある土地の気候、気象、地質、地味、地形、景観などの総称である。…従ってその土地の自然環境が、我々の欲すると否とにかかわらず、我々を『とり巻いて』いる」(C4, p. 7, 傍点筆者　以下同じ)のだという。しかし重要なことは、風土が単なる自然現象ではなく、「『間柄』(他者との共通認識としてのつながり；筆者挿入)としての我々自身を、そこに見出すことにある(自己了解；筆者挿入)」(C４, p. 11)という。すなわち、「風土における自己了解はまさしくかかる手段（風土に規定されたモノ・コト、様式、仕方など；筆者挿入）の発見としてあらわれるのであって、『主観』を理解することではない」（C４, p. 12)と主張する。

このような風土の現象は、文芸、美術、宗教、風習等のあらゆる人間生活の表現のうちに見出すことができる、という(C４,p.13)。また、時間と空間が切り離せないように、歴史性と風土性は相即不離のものである(C４,p.15)。したがって、「気持ち、気分、機嫌などは、単に心的状態とのみ見られるべきものではなくして、我々の存在の仕方である。しかもそれは我々自身が自由に選んだものではなく、『すでに定められた』有り方として我々に背負わされている」(C４,pp.20-21)と、まさに国民性が風土によって規定されるものであるというのである。

○日本人の二重性格　和辻は、風土の類型として、「モンスーン」「砂漠」「牧場」の３つを挙げているが、日本を中国も含めて「モンスーン」に分類している。さらに、日本については、人間の存在の仕方を「モンスーン的」(C４,p.134)と名づけ、熱帯的・寒帯的でありながら、季節的・突発的な二重性格が加わるとし、その特徴を「受容的・忍従的」(C４,p.136)と呼ぶ。特に、「台風が季節的でありつつ突発的であるという二重性格は、人間の生活自身の二重性格にほかならぬ」(C４,p.135, 傍点和辻 以下同じ)と、台風が、日本人の国民性に大きな影響を及ぼしていることを強調する。

○モンスーン的な受容性　モンスーン的な受容性とは、「単に熱帯的な、単調な感情の横溢でもなければ、また単に寒帯的な、単調な感情の持久性でもなくして、豊富に流れ出でつつ変化において静かに持久する感情」(C４,p.136)だという。また、この感情は、「絶えず他の感情に変転しつつも同じ感情として持久するのであるがゆえに、単に季節的・規則的にのみ変化するのでもなければ、また単に突発的・偶然的に変化するのでもなく、変化の各瞬間に突発性を含みつつ前の感情に規定された他の感情に転化する」(C４,p.136)。日本人の感情の昂揚は、台風のような猛烈さにおいて現れるが、季節的・突発的であるため、「感情の昂揚を非常に尚びながらも執拗を忌むという日本的な気質を作り出した。桜の花をもってこの気質を象徴するのは深い意味においてきわめて適切である」(C４,pp.136-137)と論じている。

○モンスーン的な忍従性　モンスーン的な忍従性とは、「単に熱帯的な、従って非戦闘的なあきらめでもなければ、また単に寒帯的な、気の永い辛抱強さでもなくして、あきらめでありつつも反抗において変化を通じて気短に辛抱する忍従」(C４,p.137)だという。この感情は、「繰り返し行く忍従の各瞬間に突発的な忍従を蔵しているのである。忍従に含まれる反抗はしばしば台風的な猛烈さで突然燃え上がるが、しかしこの感情の嵐のあとには突如として静寂なあきらめが現れる」(C４,p.137)。「日本の特殊な現象としてのヤケ(自暴自棄)は、右のごとき忍従性を明白に示している」(C４,p.137)という。「思い切りのよいこと、淡白に忘れることは、日本人が美徳としたところであり、

…桜の花に象徴せられる日本人の気質は、半ばは右のごとき突発的忍従性にもとづいている」(C４,pp.137-138)。そして、その典型的な姿は、「淡白に命を捨てるということである」(C４,p.138)と論じる。

まとめ

和辻は、日本人の国民的性格について、「日本の人間の特殊な存在の仕方は、豊かに流露する感情が変化においてひそかに持久しつつその持久的変化の各瞬間に突発性を含むこと、及びこの活発なる感情が反抗においてあきらめに沈み、突発的な昂揚の裏に俄然たるあきらめの静かさを蔵すること、において規定せられる。それはしめやかな激情、戦闘的な恬淡である」(C４,p.138)と述べている。

このような日本人の国民的性格には、相対立するものが一方では関連しあい、相互浸透し、一つの世界を形成しているという点で先にみた『易経』の相補的な見方に通じるところがあるのではないかと思われる。

日本人の無常観

文献 ID の C１、C７以外に、C14 は『こころの未来』(京都大学こころの未来研究センター）の対談記事からである。

マトリックス表の「日本人の無常観」を３つのカテゴリー（諸行無常、仏教の無常観、自然に対する畏怖）にまとめた。

○諸行無常　東洋では、時間の捉え方に特徴がある。鈴木によれば、「時間という言葉は、概念的で、抽象的で、それに対する実体はない。実体はただ移りゆくということ、そのほかには何もない」(C１,p.144）とされる。ゆえに禅では、「移りゆく時間、そのほかに永遠はない。永遠は絶対の今である」(C1,p.146）と考える。また、「『日に新たにして日々にまた新たなり』で、…諸行無常といっても、そのうらに恒久とか永遠というものを、無意識にしても、考えていなくては出てこぬ」(C１,p.151）と、鈴木はいう。

○仏教の無常観　道元の言葉に、「無常は仏性なり」(C10,p.176）とある。また、山折は、「仏教における無常には三つの考え方――①地上に永遠のものは一つもない。②形あるものは必ず壊れる。③人は生きて、やがて死ぬ――があり、この三つの原則は、どんな人も否定できない」(C７,p.55）と述べており、これらは日本人の無常観のベースにある考え方であると言っても過言ではないのであろう。

○自然に対する畏怖　地震や風水害等、元来自然災害の多い日本では、いついかなることが起こるかわからないという「自然に対する畏れの感覚や、万物流転のような無

常観」(C14,吉川,p.13)が昔からあった。この点は、先述したように、風土性にみられる日本人の国民的性格によるところも大いに影響しているものと思われる。

「永遠なるもの」に美を感じ取る西洋人の姿勢に対して、日本の中世文学にみられるように、日本人の多くは、「移ろいゆくもの」にこそ美（もののあわれ）を感じる傾向を根強くもっているとされる。「無常観」は、中世以来培ってきた日本人の美意識の特徴でもある。

まとめ

東洋では、時間の捉え方に特徴があり、鈴木によれば、「時間という言葉は、概念的で、抽象的で、…実体はただ移りゆくということ、そのほかには何もない」とされる。諸行無常に象徴される仏教の無常観は、日本人の無常観の根底にある考え方である。

「移ろいゆくもの」に美（もののあわれ）を感じるという意味での「無常観」は、中世以来培ってきた日本人の美意識の特徴でもある。

また、日本は元来自然災害が多く、自然に対する畏怖の感覚や万物流転のような無常観が昔からあった。この点は、風土性にみられる日本人の国民的性格も影響しているものと思われる。

日本人の死生観

文献 ID の C１、C７、C９、C10 以外に、C14 は『こころの未来』（京都大学こころの未来研究センター）の対談記事からである。

マトリックス表の「日本人の死生観」を３つのカテゴリー(死は天命、死んだら自然に還る、どう生きるか)にまとめた。

○死は天命　鈴木は、「移り変わらぬ永遠の命があるとすれば、その生命は生命ではなく、死そのものである。永遠の生命は永遠の死にほかならぬ」（C１,p145）という。また、中村は、「生まれたということは、同時に死ぬことをそこに内含しています。そしてまた、死ぬということは生きていることをそこに含んでいる」(C10,p.185)と、生と死の問題は根本的には不合理なものであると述べている。さらに五木は、「人は努力しても必ずそれが酬われるとは限らない、と覚悟することだろう。寿命には天命ということがある」（C９,p.24）と、人生は矛盾にみち不条理なものであると記している。

○死んだら自然に還る　河合は、日本人は自然との一体感を大切にする国民性ゆえ、「死はある意味では、人間が自然という全体性へと還ることとさえ考えられる」（D４,p.98）という。かたや西洋人は、「死は、すべてを失った無の状態に至ること」（D４,pp.98-99）と、「無」や「死」を否定的に捉えているという。また、山折は、「人間

というものは、自分をとり巻いている自然と融けあって一つになるような気分になったとき、静かに自分の死というものを受け入れることができるのではないか」(C７,p.212)と述べている。

○どう生きるか　鈴木は遺稿になった文章で、「生死は生きものに、ついてまわるのだから、何もそう急がなくとも、自然にまかせてよいのである。それだといって、…自然の感じにまかせて、悲しんだり、喜んだりしているのもまた人間である」(C１,pp.264-265）と述べている。そして「死ぬのに覚悟はいらない」(C1,p.335）という。また、中村は、「人間は本当にはかなく浅ましいもので、力のないものですね。けれども不思議なことに、温かい心をもつことができます。…そういう気持ちで死ぬことは誰にも可能です」(D４,p.195)と説く。

さらに、「戦争世代の人は、死について恬淡としている」(C14,佐伯,p.11)との指摘もあるが、この点は、「日本人の風土的あり様」でも述べたように、桜の花に象徴される日本人の気質からもうかがえる。最期をどのように迎えるかという問題は、生きるということが同時に死ぬことを内包しているのだとすれば、結局は、“どう生きるか”に帰着する問題でもある。

まとめ

生まれたということは、同時に死ぬことを内含している――天命である。死は、ある意味では人間が自然へと還ること。自分をとり巻いている自然と融けあって一つになるような気分になったとき、静かに自分の「死」を受け入れることができる。かたや西洋人は、死は、すべてを失った「無」の状態に至ること、と否定的に捉える傾向が強い。

「生死は生きものに、ついてまわるのだから、何もそう急がなくとも、自然にまかせてよいのである。…死ぬのに覚悟はいらない」と鈴木はいう。また、中村は、「人間は、温かい心をもつことができる。…そういう気持ちで死ぬことは誰にも可能だ」と。

戦争世代の日本人は、死について恬淡としているところがあるが、桜の花に象徴される日本人の気質に因るところが大きい。結局、“最期をどのように迎えるか”という問題は、“どう生きるか”に帰着する問題でもある。

（2）心理的側面

意識構造

文献 ID の D１、D２については、ユング心理学の側面から、D４は日本人の意識構造の特殊性、C１は東洋思想、C12 は唯識の側面から書かれた書籍である。

マトリックス表の「意識構造」を、「東洋的な見方」に関しては３つのカテゴリー(自

己に心の中心、意識と無意識の境界が曖昧、日本人の意識構造の中空性)に、また「西洋的な見方」では１つのカテゴリー(西洋人の意識構造)にまとめた。なお、以下の河合の論考では、日本が東洋に属することを前提に論じているが、「日本が東洋と西洋の中間地帯、あるいはその接点として、その意識の構造も多分に両者の中間的性格をもっている」(Ｄ１,p.293)とし、短絡的に「東洋と西洋とをたして２で割るようなやさしいことではないのである」(Ｄ１,p.297)と指摘している。

○自己に心の中心　以下は、Ｄ１からの引用である。「東洋と西洋の相違について、まずユングの強調するところは、前者が、内向的態度に重きを置くのに対して、後者は外向的態度を基本的なものとしていることである」(Ｄ１,p.275)。また、「西洋人が『心』（mind）という場合にはつねに『意識』を考えるのに対し、東洋人は『無意識』のほうをさしているのではないか」(Ｄ１,p.276)と。さらに、「西洋人のほうは、自我を中心として、それ自身一つのまとまりをもった意識構造をもち、東洋人のほうは、それだけではまとまりをもっていないようでありながら、実はそれは意識の外部にある中心（すなわち自己）へ志向した構造をもっているということができる」(Ｄ１,p.277)。

ユングの「自己は心の全体性であり、また同時にその中心である。これは自我と一致するものでなく、大きい円が小さい円を含むように、自我を包含する」(Ｄ１,p.223)という考え方も、東洋思想の「道」から大きな影響を受けたものだ、と河合はいう。

○意識と無意識の境界が曖昧　鈴木は、「東洋では、…なんとなく心の底に、無意識の働きのあるのを感覚している」(Ｃ１,p.168)という。また、唯識でも、深層の根本の心が「阿頼耶識」であり、これは、ユングの無意識に相当するといわれている（Ｃ１,p.102,C12,p.28)。河合は、ユングの考え方を基本に試論として述べているので、ここでは、その要点を引用する。

「(東洋では、) 自己の存在に強調点を置くときは、意識と無意識の境界は不明確なものとなり、それらが漠然とした形ではあるが一つの統合性をもつことが大切となっている」(Ｄ１,pp.275-276)。このような意識構造のもとでは、「無限の広がりをもった自己は深いところで、自と他の区別なく重なり合うことになり、ここに『個』を無視した強烈な連帯感が発生する」(Ｄ１,p.278)。日本人では、このような感覚が非常に強く、「死を見ること帰するがごとき[3]」(Ｄ１,p.280)生き方へとつながってゆくという。この点は、先に「日本人の風土的あり様」でも記したように、戦前の日本人の国民的性格とされる“しめやかな激情、戦闘的な恬淡”と通じるものがあるように思える。

また、河合俊雄は、「自我を中心として意識が明確な輪郭をもつと、そこには無意識

[3] 死ぬことを家に帰ることのように考え、死に臨んでゆったりと落ち着いているさま。 ── 大戴礼記・曾子制言より(Ｃ８,p.5)

との対決や統合の苦難が生じますが、境界が曖昧な東洋的意識構造ではシビアな対決は起こりにくく、それは、あらゆるものを、ありのまま受け入れていく態度に結びついていきます」(D９,p.69；傍点筆者、以下同じ）と述べている。

西洋人との比較では、「西洋人はその心（意識）の領域を部分的にでも明確にし分化させていくのに対し、東洋人は、むしろ未分化であっても全体性のほうを強調しようとする。このため、東洋人はその『影』について西洋人よりもよく知っているということができる」(D１,p.280)と。さらにユングは、「東洋人のこころにとっては、その細部がひとつの全体の構図をつくりあげているのである。この全体性には、…『偶然によって』結びつけられたように見える諸事象が含まれていて…」(D６,p.99)という。これらの点については、後述する共時性でも言及する。

○日本人の意識構造の中空性　河合は日本神話の分析から、日本人の意識構造の中空性について興味ある論を展開しているが、一例を挙げれば、「日本人の場合は、意識と無意識の境界も不鮮明なままで、漠然とした全体性を志向しているのである」（D４,p.97）とした上で、「境界を不鮮明にして全体性を求める態度は、日本人の自然に対する態度にも反映され…」（D４,p.98）と述べており、先に示した日本人の自然観や死生観に通じるところがある。また、「中空」は、単なる緩衝地帯ではなく、中間領域として機能することで、二元論的な対立を避け巧みなバランスを図るという点で、日本人に無意識のうちに共有されてきた意識構造（文化）といえるであろう。

○西洋人の意識構造　「西洋人の場合は、意識が無意識と明確に区分された存在として、その中心に確立された自我をもっている」(D４,p.96)。また、「西洋人が無意識の世界から自我を切り離し自立せしめることに力をつくしたとするならば、…その心の領域を部分的にでも明確にし分化させていくので、…影の部分はまったくの闇となることが多い」(D１,pp.279-280)という。このように西洋人の思考法は二分性が明快である。しかし、「自我を中心としてのまとまりが強力になりすぎているとき、それは深い基礎づけを欠いた弱さとなって現れる」(D１,p.278)という。

まとめ

西洋の意識が外向的であるのに対し、東洋の意識は内向的で、外界よりも心（内面）に強い関心を示す。西洋人が「心」(mind）という場合には「意識」を考えるのに対し、東洋人は「無意識」をさしている。すなわち、西洋人は自我を中心とした意識構造をもつが、東洋人は意識の外部にある中心（自己）へ志向した構造をもつとされる。ユングのこの考え方は、東洋思想の「道」から大きな影響を受けた。鈴木は、「東洋人は、…なんとなく心の底に、無意識の働きのあるのを感覚している」という。また、唯識の

「阿頼耶識」も深層の根本の心とされるが、これはユングの無意識に相当するものである。

このような東洋人の意識構造のもとでは、意識と無意識の境界が不鮮明で、意識も中心としての自我によって統合されていないため、中心として据えるものにある種の曖昧さをもつ。河合は、これを「日本人の意識構造の中空性」と呼んだ。これは、あらゆるものをありのまま受け入れる日本人の受容性にも通じるもので、様々なものを受けとめて多様性を生み出す源としても機能している。

これに対して西洋人の意識構造の特徴は、意識が無意識と明確に区分されており、外向的で、心の領域が明確に分化されていくので、「影」の部分はまったくの闇となり、その結果、疎外感や深い孤独感を抱えることが多い。

このように「意識構造」という点では、東洋人と西洋人には明らかな差異がみられ、特に「自我」のあり方や、「自己」の捉え方という点では、老年的超越理論への東洋思想やユング心理学の影響は大きいものと思われる。

元型

ユングは、人間の普遍的無意識の内容の表現のなかに、共通した基本的な型（モチーフ）を見出すことができると考え、それを元型（archetype）と呼んだ。以下は、文献IDのD１からの要点の引用である。

マトリックス表の「元型」を２つのカテゴリー(普遍的無意識の基本的要素、「影」の魅力を知る日本人)にまとめた。

○普遍的無意識の基本的要素　河合は、「すべての心的な反応は、それを呼び起こした原因と不釣り合いの場合には、それが、それと同時に何らかの元型によっても決定づけられていないかを探求すべきである」(D１,p.93)とのユングの言葉を引用し、現象の背後に潜む元型的なものを問題とすべきことを示唆している。しかし、「元型そのものは、…意識によってはとらえることはできず、…その意識に与える効果によってのみ認識されるにすぎない。そして、その効果こそが、…原始心像なのである」(D１,p.100)と。またユングも、「元型とはむしろ、人間が生来もっている『行動の様式』(pattern of behavior)というべきである。あるいは、…そのような表象の可能性である」(D１,p.100, 傍点河合 以下同じ)と述べており、元型とは、われわれの合理的な思考によってイメージされるものではなく、おそらく主客分離以前の状態において体験されるものなのであろう。河合は、ユングが元型として取り上げているもののうち、特に重要なものは、ペルソナ、影、アニマ、アニムス、自己、太母、老賢者だと述べている（D１,p.101)。

Tornstam（2005）も、「我々の心には先祖から受け継いだ遺伝的なものがある。自己

と世代を統合する構造と、要素となるものを含む。自己や世代、あるいは場所には境界が存在しない。ユング派では、瞑想によって集合的無意識に触れることができると信じている」(p.38.筆者抄訳）と述べている。ここでいう集合的無意識とは、人類に共通で、より深い人格層にある普遍的無意識という意味で、その内容は、元型を指しているものと思われる。

○「影」の魅力を知る日本人

「影」に関しては、個人的な心的内容と関連が深く、河合は、「影の内容は、…その個人の意識によって生きられなかった半面、その個人が容認しがたいとしている心的内容であり、…その人の暗い影の部分をなしている」(D１,p.101)という。

また、「西洋がキリスト教による強い善悪の判断や、合理主義による明確な思考によって、…影の同化という問題に足ぶみしているときに、東洋人は、陽の極まるところ陰となり、陰の極まるところ陽となる心の現象の複雑さについての知識を豊富にもち、影の多い生活を楽しんできたものともいえる」(D1,p.112,傍点筆者)と指摘しており、この点で、日本人は西洋人よりも、「影」の魅力について、はるかによく知っていたという（D１,p.111)。

まとめ

ユングによれば、元型とは、人間が生来もっている『行動の様式』で、合理的な思考によってイメージされるものではなく、主客分離以前の状態において体験されるものなのである。ユングが元型と呼ぶものには、影、ペルソナ、アニマ・アニムス、自己、太母、老賢者がある。

「影」に関しては、個人的な心的内容と関連が深く、われわれの価値体系と相容れぬものは無意識下に抑圧しようとする傾向がある。河合によれば、西洋人が、キリスト教や合理主義による価値判断によって「影」の部分を意識から除外する傾向が強いのに対して、東洋人は、心の現象の複雑さについての知識を豊富にもち、「影」の多い生活を楽しんできた。日本人は「影」の魅力について、西洋人よりはるかによく知っていたのである。

Tornstam も、瞑想によって集合的無意識に触れることができると述べているが、その内容は、元型を指しているものと思われる。

個性化の過程

ユングは、意識と無意識の相互作用と対決によって、両者の統合と心の全体性(自己)を獲得していく過程を「個性化（自己実現）の過程」と呼んだ。以下は、文献 ID の D１からの要点の引用である。

マトリックス表の「個性化」を３つのカテゴリー(自己実現の過程、自己との対決と協同、中年の危機)にまとめた。

○自己実現の過程　ユングは、「個人に内在する可能性を実現し、その自我を高次の全体性へと志向せしめる努力の過程を個性化の過程（individuation process)、あるいは自己実現（self realization）の過程と呼び、人生の究極の目的」(Ｄ１,p.220）と考えた。ここでいう自己とは、「意識と無意識の統合の機能の中心であり、そのほか、人間の心に存在する対立的な要素、男性的なものと、女性的なもの、思考と感情などを統合する中心」(Ｄ１，p.221）とされる。河合は、ユングのこの考え方は、先にも述べたように、中国における『道』の思想（たとえば、相対立する陰と陽の相互作用など）から大きな示唆を受けたものだという。

このように、ユングのいう個性化（自己実現）というのは、「自我を相当に強化し、その強い自我が自ら門を無意識の世界に対して開き、自己との相互的な対決と協同を通じてこそ、自己実現の道を歩むことができる」(Ｄ１，p.224)という厳しい道である。この点で、「東洋は、心の内的世界について、とくに自己の問題について、西洋よりは、はるか以前から多くを知っていた」(Ｄ１，p.224）と、河合はいう。先述したように、禅などは、その好例であろう。

Tornstam（2005）は、「新たなメタ理論のパラダイムへ至る道を発見するためには、通常の実証主義的な考え方をやめて、…東洋哲学の考え方に目を向けよう」(p.37.筆者抄訳）と述べており、老年的超越理論を構築するにあたって、禅やユング心理学を参考にしたことがうかがえる。

○自己との対決と協同　自己実現というのは、「外界との接触を失うことなく、しかも内界に対しても窓を開くこと、近代的な文明を消化しながら、古い暗い心の部分ともつながりをもとうとしなければならないこと」(Ｄ１，p.225）であり、困難を伴う道であるとされている。ユングは、「すべて良いものは高くつくが、人格の発展ということは最も高価なものである」(Ｄ１，p.226）という。河合は、「アメリカにおける自己実現の考え方は、その光の部分のみを見て、ユングが述べているような暗い部分を見逃してしまっている点に、甘さを感じさせられる」(Ｄ１，p.227）との指摘をしている。

○中年の危機　人生の後半においては、内面に目を向けねばならぬ意義深い「時」がやってくる。ユングは、この時期は40歳前後だという。「無意識なもの、すなわち、非合理的なもの、劣等なものを抑圧してきたひとは、その強い自我によって地位や財産を築くことになろう。しかし、このようなひとは、ふとあるとき自分の地位や財産や、その仕事など、彼が誇りとしてきたものの『意味』がわからなくなったと感じ出すかも

しれない」（D１，p.224）と述べており、いわゆる「中年の危機」である。

東洋には、論語（不惑、知命、耳順、従心）にあるように、古来より、年齢に応じた理想的な発達を示す考え方があった。また、東洋思想や仏教にも「老人の叡智」（D１，p.238）を物語る多くの逸話が残されている。このように個性化の過程は、元型（東洋では老賢者の出現）と密接に関連していることがうかがえる。

Tornstam（2005）も、老人を主人公とした世界のおとぎ話を詳細に調べたChinenの次のような研究を紹介している。「西洋では、高齢者が主人公となっているものは皆無だが、東洋やスラブ系の国では、老年的超越のプロセスを支持する規範的なおとぎ話がある」（p.42.筆者抄訳）

まとめ

ユングによれば「個性化」とは、個人に内在する可能性を実現し、その「自我」を高次の全体性へと向かわせる努力の過程(自己実現)である。なお、ここでいう「自己」とは、意識と無意識の統合の中心であり、人間の心に存在する対立的な要素を統合する中心とされる。ユングのこの考え方は、中国における「道」の思想に大きな示唆を受けたものである。この点で東洋には禅などがあり、心の内的世界、とくに自己の問題について、西洋よりは、はるか以前から多くを知っていたとされる。

また、自己実現における「時」について、ユングは、この時期は40歳前後だという。いわゆる「中年の危機」である。東洋には、論語（不惑、知命、耳順、従心）にあるように、古来より、年齢に応じた理想的な発達を示す考え方があった。また、東洋思想や仏教にも「老人の叡智」（老賢者)を物語る多くの逸話が残されている。個性化の過程と元型とは密接に関連しているのである。

共時性

人は、個性化の過程における重要な「時」において、不思議な現象に出会うことがある。これは「意味のある偶然の一致」といわれる現象で、ユングの共時性(synchronicity)の原理と呼ばれている。文献IDのD１、D６についてはユング心理学の側面から書かれた書籍であるが、特にD６は、ユング自身によるものである。

マトリックス表の「共時性」を４つのカテゴリー（意味のある偶然の一致、共時的現象、「相」を見る東洋の易、共時的現象を媒介する元型の働き）にまとめた。

○意味のある偶然の一致　ユングは、因果性の原理について、「『科学的世界観』は、統計学的に把握されない重要な側面をすべて捨象した、心理学的に偏見づけられた一面的な見解を越えるものではありえない」（D６,p.6）という。河合は、「自己実現における重要な時において、われわれはしばしば不思議な現象に出会うことがある。それは

偶然にしては、あまりにも意味の深い偶然と考えられる現象が起こるのである。…このような『意味のある偶然の一致』(meaningful coincidence) を、ユングは重要視して、…非因果的な原則として、『共時性』(synchronicity) の原理なるものを考えた」(D１,pp.240-241)と述べているが、一方で、このような同時性の現象を因果律によって説明しようとすると、偽科学(魔術)に陥る危険性があることも併せて指摘している。

○共時的現象　共時的現象は、「まるで客観的な事象がすでに存在しているかのごとく、現在の心の像として偶然に体験される」(D６,p.38) ことである。共時的現象のもとでは、「空間が原理的にそれらの通過に際して障害とならず、また時間的に諸事象の順序が逆行されるという点において、時間と空間は相対化される。そのとき因果性もまた、その正当性を失う」(D６,pp.144-145)。相対性理論では、「時間と空間は緊密に結合し、≪時―空≫と呼ばれる四次元連続体を形成する」(D８,p.94) とされており、時間と空間に関するわれわれの認識に革命的変化をもたらした。またユングは、因果性の法則に終焉をもたらしたのは、現代物理学における不連続性の発見（エネルギー量子仮説など）が、その根拠となっていると述べている（D６,p.140)。

なお、共時性には、次の２つの因子が考えられている。「(a)ある無意識な像が直接的（すなわち文字通り)あるいはそうでなければ間接的(象徴的もしくは示唆的)に、夢、観念や予知の形で意識に入ってくる。(b)ある客観的な状況がこの内容と偶然に一致する」(D６,p.42)。

○「相」を見る東洋の易　河合は、『易経』の考え方では、「事象を因果の鎖によって時系列のなかに並べるのではなく、事象全体をとらえて、その全般的な『相』を見出そうとするのである」(D１,p.242)という。またユングは、『易経』では、「心的状態と物理的状態との同時生起を、意味の等価（an equivalence of meaning）として説明しようとした」(D６,p.48, 傍点ユング）とし、事象を理解する上で、「西洋の合理主義的態度が唯一の可能なものでもなく、全てを包括するものでもなく、多くの点においてひとつの偏見であり偏向であって、おそらく修正されるべきものであることを、記憶しておかなければならない」(D６,pp.94-95) と述べている。

○共時的現象を媒介する元型の働き　ユングは、「意味のある偶然の一致は、元型的な基盤をもっているように思われる。…情動的な因子が重要な役割を果たしているということができる。しかし情動性は、相当程度、本能に基づいており、この本能の形相的な側面こそが元型なのである」(D６,pp.31-32) という。また、ユングと共同研究した体験をもつイラ・プロゴフは、共時的現象には、「強い元型的要因が、ヌミノース（筆者注：神秘的）な方法で働いている」(D７,p.125)とし、「共時的現象のなかでの元型に

特有の役割は、時間軸を横切る状況の配置の中心となること、また、その状況に明確な『かたち』を与える内的秩序の要因となることであると思われる」(D７,p.137)と、元型が共時的現象を媒介する働きをしていると述べている。

まとめ

自己実現における重要な時において、不思議な現象に出会うことがある。ユングは、これを「意味のある偶然の一致」と考え、非因果的な原則として「共時性」の原理を考えた。そもそも共時的現象とは、ある客観的な事象がすでに存在しているかのように現在の心の像として偶然に体験される現象である。共時的現象のもとでは、時間と空間は相対化され、因果性もその正当性を失うとされる。

共時性の原理について河合は、「事象を因果の鎖によって時系列のなかに並べるのではなく、事象全体を捉えて、その全般的な『相』を見出そうとする東洋の易の考え方が影響している」という。ユングも事象を理解する上で、西洋の合理主義的態度が唯一ではないと主張しており、「意味のある偶然の一致」は、元型的な基盤をもっていると述べている。

（3）社会的側面

人間関係

社会心理学者のニスベットの著書（文献 ID:C11）に基づき、人間関係という側面から「東洋的な見方」と「西洋的な見方」に分類し、その特徴の要点を引用する。

○東洋人は内集団との関係を重視　「東洋人は、自己は内集団に埋め込まれており、外集団とは離れていると感じている」(C11,p.66)。このため、「人間関係において調和を保つことが社会生活の主たる目標となる」(C11,p.65)という。また、「東洋人は、他者の気持ちに十分な注意を払い、人間関係の調和を保つために奮闘する」(C11,pp.92-93)傾向がみられるため、上下関係や集団として管理されることに抵抗感が少ない。

東洋人は人間関係においてこのような特徴を有することから、「他者より秀でていることや個性的であることより、人と人との支え合いのなかで調和を維持することや、集団の目標を達成するために何らかの役割を果たすこと」(C11,P.69)を望む、としている。

○西洋人は内集団と外集団を区別しない　「西洋人は、自己を内集団と比較的切り離して捉えており、東洋人ほど内集団と外集団を区別しない」(C11,p.66)。このため、他者との関係に縛られることなく、自分の目的に沿うように行動するという。また、「個性に価値を置き、自分をよく見せるために奮闘する」(C11,p.92)。加えて、「自分自身

を知ることに関心があり、公正であるためには調和を犠牲にすることを厭わない」（C11,p.93)、としている。

社会心理

同じくニスベットのC11に基づき、社会心理という側面から「東洋的な見方」と「西洋的な見方」に分類し、その特徴の要点を引用する。なお、集団についてのテンニエスの分類（「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」）では、一般的に、前者を「集団主義」、後者を「個人主義」と呼ぶことが多いが、ニスベットは、これとよく似た概念であるとしてヘーゼル・マーカスと北山忍[4]によって提起された「相互協調」、「相互独立」という用語を用いて論じている（C11,p.72)。そして、「東アジアの人々をひとつのグループとして捉え、同様にヨーロッパ文化の人々をひとつのグループとして捉えてみると、両者の間にはかなり顕著な社会心理的な違いが見出される」（C11,p.92)という。

○東洋は集団主義的な社会システム　「東アジア人は相互協調的な世界に生きており、自己は大きな全体のうちの一部であると考えている」(C11,p.92)とし、「成功や達成は、東洋人にとっては所属集団に名誉をもたらすという意味で重要」（C11,p.92)という。すなわち、東洋人は、集団主義的で協調性を重んじる。

○西洋は個人主義的な社会システム　「西洋人が生きる世界では、自己は単一の自由な主体として捉えられている」(C11,p.92)とし、「成功や達成は、西洋人にとっては個人的利益をもたらすという意味で重要」(C11,p.92)という。すなわち、西洋人は、個人主義的で個の独立性を重んじる。

なお、中根（1967）によれば、日本人の意識は、個人的な「資格」（氏・素性・学歴・地位などの属性）よりも、集団としての「場」（地域・所属など）を重視する点にあるとした上で、「文化というものは受容・変化しやすいが、社会構造の基盤をなすところの人間関係のあり方というものは、歴史的、文化的変容にもかかわらず、変わりにくいものであることが指摘できるのである」(p.88）と述べている。そして、「この日本社会の『単一性』こそ、…人と人、人と集団、集団と集団、の設定のあり方を決定する場合に、重要な基盤となっているものである」（C16, p.188）と論じている。

東洋人というより、さらに踏み込んだ日本人に関する論考ではあるが、ここでの指

---

[4] Markus,H.R.,and Kitayama,S.(1991b)."Culture and the self:Implications for cognition, emotion,and motivation."*Psychological Review 98*,224-253.

摘（社会構造の基盤をなすところの人間関係のあり方は、…変わりにくいものであること）は、根底に、先に「**日本人の風土的あり様**」で述べた、和辻のいう他者との共通認識としての「間柄」とも通じるものがあるのではないかと思われる。

3.3　実証研究に向けて：「東洋的な見方」を構成する要素の再統合

3.2 節で「東洋的な見方」について、主として、一般の読者を対象に著された既存の書籍を対象に、文化的・心理的・社会的な側面から検討を行った。文献検討の内容は、本研究の目的に沿うよう相当絞り込んだ形のものではあったが、**表 3-2** に示すようなカテゴリー化を行い、ポイントとなる箇所を要点引用する形でまとめた。これによって、「東洋的な見方」の輪郭はおぼろげながら掴むことができるが、次の段階としては、実証研究で使用する質問紙やインタビュー項目に、この内容をどのように落とし込むかが重要となる。すなわち、「老い」を軸とした「東洋的な見方」の構成要素の再統合である。

ところで、心理学の分野では、「態度[5]」という用語について、脚注に示すような説明や定義がなされている。この考え方にしたがえば、結果としての行動（老年的超越のような心的活動も含まれる）の背後には、原因としての「態度」が影響を及ぼしていると考えることができる。そこで、「態度」を手掛かりに、「東洋的な見方」のカテゴリーに包含されるコード（キーフレーズ：構成要素）の類似性や相互関係等を見極めながら、構成要素の再統合を行ったものが構成概念としての「〈老い〉に対する東洋的態度」である。この作業は、いわば、「東洋的な見方」という概念から「〈老い〉に対する東洋的態度」という概念への変換であるが、具体的には KJ 法を用いて次のような手順で行った。

手順１：「東洋的な見方」のカテゴリーを構成するコードの内容（キーフレーズ）をカードに書き出し、「老い」を指標に、関連が認められそうなコードをグルーピングする。

手順２：グルーピングされたカード群は、「〈老い〉に対する東洋的態度」の構成要素となるものであるが、グループのネーミングにあたっては、エッセンスを一言で表すもので、かつ、東洋的な「老い」の特徴を表象できる名称とする。

手順３：グルーピングされたカード群を空間配置し、矢線で関連を同定する。

上記の同定作業を繰り返し、到達した結果が、下記に示した「〈老い〉に対する東洋的態度」の構成要素の名称であり、**図 3-1** は「東洋的な見方」の 13 個のカテゴリーとの

---

[5] 『心理学辞典』（中島他(編)，1999，p.552）によれば、オルポート（Allport,G.W）による定義が比較的広く受け入れられているとされている。態度の構成要素として、心的心構え、行動の準備状態、心理的基礎、永続性、学習された性質、評価的性質などがあるとした上で、「態度とは、関連するすべての対象や状況に対する個人の反応に対して直接的な影響を及ぼす、経験に基づいて組織化された、精神的および神経的準備状態のことである」と定義している。

関連を矢線で図化したものである。

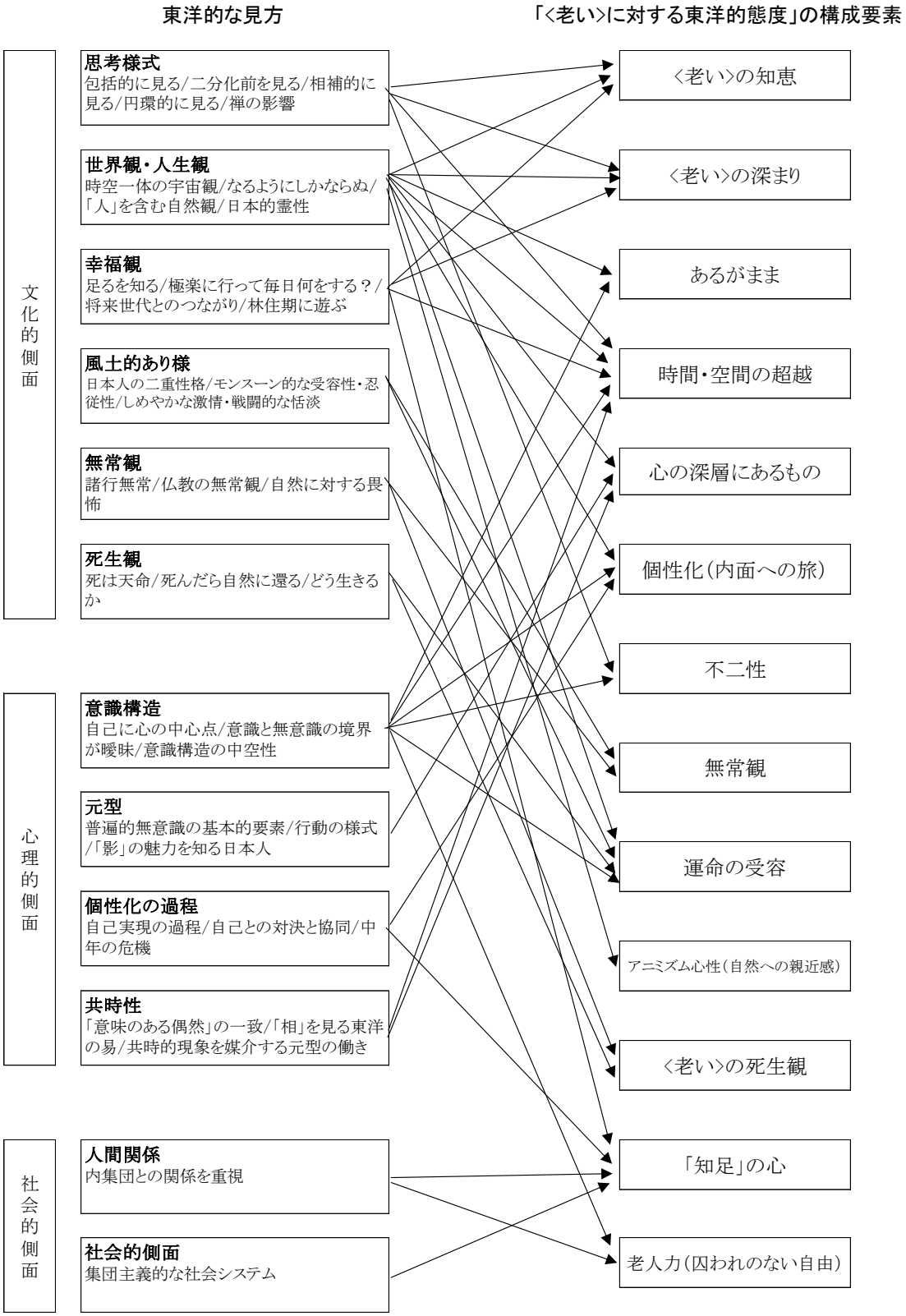


図3-1　東洋的な見方と「〈老い〉に対する東洋的態度」の構成要素との関係

「〈老い〉に対する東洋的態度」の構成要素

〈老い〉の知恵、〈老い〉の深まり、あるがまま、時間・空間の超越、心の深層にあるもの、個性化（内面への旅）、不二性、無常観、運命の受容、アニミズム心性（自然への親近感）、〈老い〉の死生観、「知足[6]」の心、老人力（囚われのない自由）

これらの構成要素の名称や区分については、この段階では確定したものではなく、第４章における「東洋的な見方にかかる測定尺度の検討」において、さらに考察を行うこととする。

また、**表 3-3** は、「〈老い〉に対する東洋的態度」という構成概念のイメージを、質問文とうい形に落とし込んだものであり、質問紙調査やインタビュー調査において、設問項目の候補となるものである。表側には、「〈老い〉に対する東洋的態度」の 13 個の構成要素を表示しており、表頭の「設問項目（案）」の欄には、それぞれの構成要素からイメージされる短文（質問文のワーディング）を記載している。これらの短文の出典元は、各短文の末尾に文献 ID（**表 3-1**）で示しているが、表現型は、一般人が日常生活で使用する言葉に近いものとなるよう留意した。文献 ID の表示のないものは、筆者によるものである。同じく表頭の「東洋的な見方」の欄は、「〈老い〉に対する東洋的態度」の構成要素との対応を示している

なお、実際の調査で使用する質問紙やインタビュー項目は、調査対象者の多くが後期高齢者であることを考慮し、回答の際の負担を軽減する観点から、さらに検討を加え絞り込むことになる。この点は、第４章および第５章で述べる。

6 『老子』第 46 章「足るを知るの足るは、常に足る」（福永訳，2013，p.180）。「知足の教え」として有名な文言（蜂屋，2013，p.90）。

表 3-3　「〈老い〉に対する東洋的態度」に関する設問項目

構成要素	設問項目(案)	東洋的な見方
＜老い＞の知恵	・年をとれば、世間のしきたりにしばられない心の自由が大事だ（A4,C1)。 ・年をとるにつれて余計なものを削ぎ落とすと、身も心も軽くなる(A4,C1)。 ・年をとったことを楽しまなければ損だ（B1)。 ・「何もしないで、ただそこにいる」。年をとれば、そんな時間も必要だと思う（B11)。	思考様式 世界観・人生観 幸福観
＜老い＞の深まり	・年をとると、衰えるものばかりではなく、深まってくるものもある（B1,B2,B3,B8,B9,B11)。 ・「老」という言葉には、尊重・尊敬の意味があると思う（C1,C5,C10)。 ・年齢を重ねていくことで、芸術的なもの（音楽、絵画、文学など）に感動を覚えるようになった（A4)。 ・社交的なつながりよりも、心を通わすことのできる人との時間が大事だ（A4)。 ・人生を振り返ってみて、「よくここまで来たな」と思う（B1)。 ・「日に新たにして、日々にまた新たなり」。自分もこうありたいと思う（C1)。 ・「老子」のように通俗的な型を超越した風格、深く内面に通じ危なっ気のない老人が理想だ（C5)。 ・「お天道様が見ている」から、身勝手なことはできない（C15)。 ・「二人でも一人で生きていけないと駄目。一人でも二人で生きていかないと駄目」。自分もこうありたいと思う（B1)。	思考様式 世界観・人生観 幸福観
あるがまま	・人間は自然物だから、自然体で生きればよい（B14)。 ・その年になってみないと分からないこともある（B2,B14,C1)。	世界観・人生観 意識構造
時間・空間の超越	・これからの人生の時間は、自分のために過ごしたい。 ・自分のための時間を過ごせる〈老い〉の場所があればよ（B11)。 ・夢と現実が偶然一致する体験をしたことがある（D6,D7)。 ・時間は刻々移りゆくもので、その実態は捉えられないと思う（B5,B11,C1)。 ・直線的な時間感覚ではなく、いくつかの時間が折り重なったように感じることがある（B5,B11,C1)。 ・時間の境界が曖昧になるような錯覚に囚われることがある（B11)。 ・夢と現実（うつつ）の境があいまいに感じることがある（B11)。 ・小宇宙(人間)の中に大宇宙の諸々が存在するように思えることがある（D6)。 ・自分・他者・自然は、「一人一宇宙」の中に存在するものだと思う（C12)。	思考様式 世界観・人生観 幸福観 意識構造 共時性
心の深層にあるもの	・太陽とは違って月には母性的な愛を感じる（D3)。 ・何ものをも包み込む“母なるもの”（太母）の存在を感じることがある（D1,D3)。 ・「月の愛」と「太陽の愛」があるとすれば、「月の愛」に親近感を覚える（D3)。 ・霊性（心のもと）は、知性や分別を超えたものだと思う（C3)。	世界観・人生観 元型 共時性

個性化（内面への旅）	・人生後半になって、自分の内面に目を向けるようになった（D1,D3）。 ・外見より内面的な豊かさに価値を感じる（D1,D3）。 ・還暦を過ぎて、また新たな人生がスタートしたような気がする（C1）。 ・自分は、中年期以降は “心の中の現実”（内面）と向き合ってきた（D1）。 ・外界のことよりも“心の中の現実”に関心がある（D1）。	世界観・人生観 意識構造 個性化の過程
不二性	・人生には苦楽共にあるから、人は生きていけるのだと思う（C1,C15）。 ・対立するものも「陰と陽」のバランスで考えると、なぜか収まりがよい（C6,C11）。 ・はっきりと意識に上ってこない「ぼんやり」したことは嫌いだ(反) （C1,C11,D4）。 ・わかったような、わからないものは、どうも好きになれない（反）(C1,C11,D4)	思考様式 意識構造
無常観	・日本の四季のめぐりには、無常を感じる。 ・桜の花には、日本人としての気質のようなものが象徴されているように思う（C4）。 ・自然の猛威（地震、台風、水害など）には、ある種の諦念（あきらめ）を感じる（C1,C4,C14）。 ・自然と同様、すべてのことは、移り変わる（万物流転）ように思える（C1,C4,C7,C14）。 ・天変地異（台風、水害、地震等）に対して、人間は本当に無力だと思う（C1,C7,C10,C14）。	風土的あり様 無常観
運命の受容	・意のままにならないことは、受け入れるよりしょうがない（B2,B5,C1,C4）。 ・自分の感覚を超えたものは、運命にまかせるより仕方ない（B2,B5,C1,C4）。 ・困ったことが起こっても、「なるようにしかならぬ」と腹を決める（C1）。 ・自分は「できない」「できなかった」ことからも、人生を眺めることができる （B11） ・人間は「老病死」から逃れることはできない（B2,B7,C1,C9,C10,C14）。 ・人間には、そもそも「分」というものがあるものだ（B8）。 ・自分は、「運命と戦うよりも、運命を受け入れる」タイプと思う（D1）。 ・自分は、「対決するよりも、ありのまま受け入れる」ほうを好むタイプと思う（C11）。	世界観・人生観 風土的あり様 死生観 意識構造
アニミズム心性(自然への親近感)	・身のまわりにある草や花、木、鳥、石などは、自分の人生を支える大事なものと感じる（B1）。 ・万物生命観（アニミズム）は、日本人の多くが共有している感覚と思う（C7,C14）。	世界観・人生観
〈老い〉の死生観	・死は、「すべてを失った無の状態に至る」ことだと思う(反)（D4）。 ・「老病死」から逃れられないのは分かっているが、考えたくない(反) （B2,B7,C1,C9,C10,C14）。 ・死んだら、体も魂も自然に還り宇宙のさまざまなものと一体化されるように思う（B11）。 ・生きることは老いること。この終末に死があるだけ（B2,B7）。 ・老化するからだのみ気にとめ、今をあわれむような心境にはなりたくない（A4,B2）。 ・死については、悩んでどうなるものでもないと思う（B2,B7,C1,C9,C10,C14）。	無常観 死生観

	・宗教は、死生観を深めてくれるように思う（B3)。 ・信仰のある人は、死に臨んでもうろたえないように思う（B2)。	
「知足」の心	・信仰をもつことは、「生きがい」の指針となると思う（B3)。 ・「私はこれをやりました」と言えるものを持ちたい（B1)。 ・役割を果たせなくなっても、そこに「いてくれるだけでいい」と言ってもらいたい（B1)。 ・幸福を増やすよりも、不幸を減らすことのほうが大事だ（C15)。 ・一人だけ幸せになることが、社会全体にとってよいこととは思えない（C15)。 ・自分が力を注いだものが次の世代に引き継がれてゆくことに幸せを感じる（C14)。 ・自分は、誰にはばかることもなく好きなことをやっている。 ・自分の人生は、最後には“1 枚の絵”に収まるような気がする（B11)。 ・心のあり方、幸せのあり方は、若いときから随分変化したように思う。 ・昔を回想していると子供時代に遊んだ場所の風景がよみがえってくる。 ・この年になって、「何のために生きているのか？」なんて考えてもしようがない（B1)。(反)	幸福観 個性化の過程 人間関係 社会システム
老人力(囚われのない自由)	・楽しむことがいちばん、嫌なことは放っておく（B12)。 ・自分の思いを相手に押し付けるのは摩擦しか生まない（B13)。 ・理屈の正しさよりも、自分の感覚がいちばん大事だ（B12)。 ・何事もしがみつくのをやめると新しい道が開ける（B12)。 ・全部はできない。こだわりを捨てれば気持ちよい（B12)。 ・ものごとには、「テキトー」のほうがうまくいくこともある（B12)。 ・許すことで自分の心が癒される（B13)。 ・自分の力の限界が見えると、本当の趣味の楽しさがわかる（B12)。	意識構造 人間関係

（注）カッコ内はヒントを得た文献を示しており、表 3-1 に掲示する文献の ID。表示のないものは筆者による。「東洋的な見方」欄は、表 3-2 の表頭に掲げた項目を転記。(反）の表示は、反転項目となる設問を示す。

Ⅱ　実 証 研 究

第４章　量的研究

第４章および第５章は、本論文において老年的超越の実証研究に相当する個所であるが、まず、第４章では量的研究を取り上げる。量的研究の主たる目的は、序章でも述べたように日本人高齢者を対象にした老年的超越の関連要因について定量的な分析を行うことである。具体的な検討事項は下記の４項目であるが、分析の方法としては、質問紙調査で得られた数値データに基づき統計的手法を用いて解析を行う。

(1) 日本版老年的超越質問紙改訂版(以下、JGS-R とする)の確認的因子分析と下位尺度の信頼性、および年齢・性別による差異の検討

(2) 東洋的な見方にかかる測定尺度の検討

(3) 老年的超越の関連要因についての総合的検討

(4) 東洋的な見方が老年的超越に及ぼす影響についての詳細検討

上記の４項目を取り上げた理由、およびその概要は以下のとおりである。

(1)については、日本人高齢者の老年的超越の測定尺度として、現在のところ JGS-R が最良のものと考えられるが、この尺度を用いた先行研究（増井他，2010；増井他，2013）では、一部の下位尺度の内的一貫性が十分でなかったという問題が指摘されている。今回の調査対象者のデータを分析することで、JGS-R の適合度や問題点を洗い出し、あわせて老年的超越の下位次元について、年齢、性別による差異を分析し、先行研究との類似点や相違点について考察する。

(2)については、日本人高齢者の老年的超越の関連要因を総合的に分析するためには、一般的な日本人の思考や感情の背景にあると考えられる文化的な要因、すなわち≪東洋的なるもの≫について、これを定量的に測定する尺度が必要となる。しかし、今のところ、このような目的にかなった既存の尺度は見当たらない。したがって、日本人の〈老い〉の捉え方を規定していると考えられる「東洋的な見方」について、その概念構造を検討するとともに、これを測定するための尺度（「〈老い〉に対する東洋的態度」）を作成する。

(3) および (4) は、老年的超越の関連要因について統合的に理解するための枠組みの検討であり、分析モデルの概略を**図 4-1** に示す。詳細は本章 4.4 節で述べるが、先行研究でも明らかにされている背景的な要因（主として人口学的・社会的属性）に加えて、東洋文化的な背景を考慮したモデルとしている。この点はこれまでの研究にはみられない特徴の一つである。

第４章の構成であるが、まず、4.1 節において、調査対象、導入変数、質問紙、データの前処理等、量的研究の共通的な事項について述べる。4.2 節以降が上記の４項目に対応した記述であるが、それぞれの節の構成としては、原則的には「方法」「結果」「考察」の見出しのもとに論じる。

なお、インタビュー調査の対象となった 17 人の数値データについては、第４章の量的研究での分析対象に含まれているが、インタビューにかかる質的データについての分析は第５章において行う。

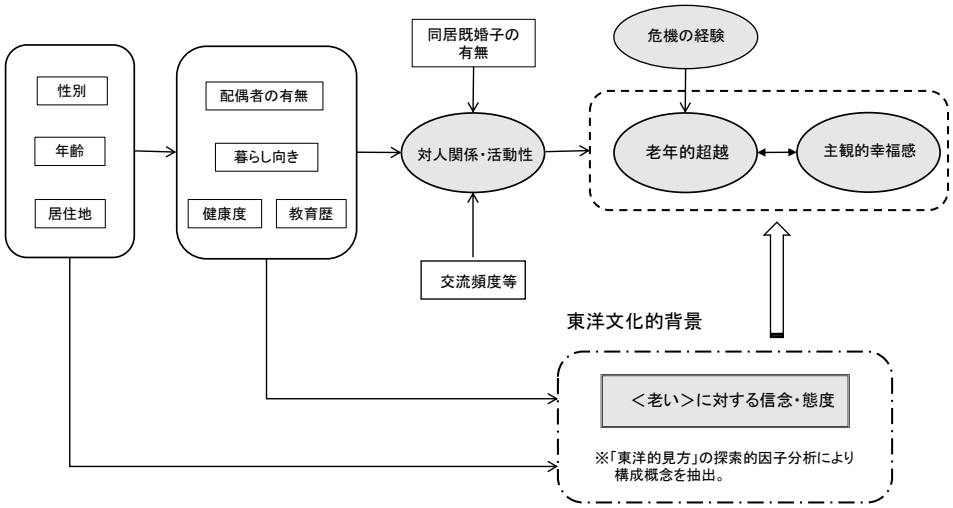


図4-1 老年的超越の影響要因についての関連図（想定）

4.1 調査方法の概要

4.1.1 調査対象および調査手続き

調査対象者は、主として京都府在住の 60 歳以上の高齢者[1]363 人で、内訳は、京都府等が主催する高齢者大学受講生 294 人、その他 69 人（うち 11 人は府外在住者）は、公益財団法人京都 SKY センターから紹介を受けた高齢者および知人であった。調査方法は質問紙調査とし、高齢者大学の受講生に対しては、各種講座の開催日に研究目的等の事前説明を行い調査への協力を依頼した。調査期間は 2019 年１～３月であった。その他の調査対象者については郵送調査を実施した。調査期間は 2019 年２～３月であった。なお、このうち 17 人の後期高齢者および超高齢者については直接インタビューを行い、事前に送付した質問紙への回答が未記入な者はその場で質問紙への回答を依頼した。調査期間は 2019 年２～３月であった。統計解析には、SPSS および Amos の

[1] 高齢者心理学で一般的に使われている区分（佐藤・権藤編，2016，p.186）を参考に、原則として、前期高齢者：65～74 歳、後期高齢者：75～84 歳、超高齢者：85 歳以上、とした。なお、調査対象者には 60～64 歳の者も含まれており、60 歳以上の者は総称して「高齢者」と呼ぶこととした。

Version22.を使用した。

本研究は、京都府立大学倫理委員会の承認を受けて実施した（受付番号 168)。すべての調査対象者に対して調査の内容やプライバシーの保護に関する説明を書面や口頭で行った。インタビュー調査では参加者の体調を考え、インタビュー時間は最長で 60 分以内に収まるよう留意し、あわせて書面による調査への同意を得た。

4.1.2 導入変数

図 4-1(老年的超越の影響要因の関連図）に基づき導入すべき変数を次のように設定した。独立変数としては、背景要因となる属性的変数（**表 4-1** に掲げる 10 項目）と健康度や高次生活機能を表す変数からなる。以下では、これらを総称して背景的変数と呼ぶ。これらの変数は、第１章および第２章で述べたようにいずれも Tornstam の量的研究をはじめ、日本の先行研究でも老年的超越の関連要因として取り上げられているものである。特に本研究では、東洋文化的な要因による影響を考察するという趣旨から、「東洋的見方」を測定する尺度を新たな変数として加えた。

基準（従属）変数は、老年的超越と主観的幸福感であるが、この２つの変数については後述するように双方向の因果関係を想定するので、ケースによっては説明（独立）変数としての性格をもつ。老年的超越については JGS-R の８つの下位尺度(次元)で、主観的幸福感については改訂版 PGC モラール・スケールの３つの下位尺度(次元)[2]で構成される。

4.1.3 質問紙

調査の方法は、対象者が高齢者であり負担の軽減を図る観点から選択回答方式とした。設問内容は研究目的に沿ったものを厳選し、記述は、可能な限り曖昧さを排除するよう努めた。その結果、設問は全部で７問、総項目数では 114 項目となった。老年的超越と主観的幸福感、および高次生活機能の測定には、JGS-R（４件法）と PGC モラール・スケール（２件法)、および老研式高次生活機能指標[3]（２件法）を用いた。その他の設問項目については、できるだけ先行研究で使用されているものを参考にしたが、特に、「東洋的見方」を測定するような尺度は先行研究には見当たらないので、第３章で検討した東洋文化的な見方をふまえて、本研究で新規に作成することとした（4.3 節に詳述)。その際、選択肢のラベルについては、回答者の判断の流れを阻害することが

[2] 改訂版 PGC モラール・スケールは、３つの下位次元（「心理的動揺」「孤独感・不満足感」「老いに対する態度」）によって構成される「モラール」（ここでは主観的幸福感）の測度であり、日本人高齢者への使用実績も豊富であるが、ただ、この尺度には「感情―長期的」な要素は含まれていないとされている（古谷野・柴田・芳賀・須山，1989)。

[3] 地域での独立した生活を営む上で必要とされる活動能力（高次生活機能）を測定するための尺度で 13 項目からなり、３次元尺度ではあるが合計得点で評価される（古谷野・柴田・中里・芳賀・須山，1987；古谷野・柴田，1992)。

ないよう JGS-R と同様の４件法とした。

質問紙は、巻末の資料に添付しているが、JGS-R については**問5[5－3]**、PGC モラール・スケールは**問６**、老研式高次生活機能指標は**問２**、「東洋的見方」については**問5[5－1**および**5－2]**が対応している。

4.1.4 データの前処理

質問紙を配布した 363 人のうち 300 人から回答を得た（回収率 82.6%）。うち記入漏れ等があり関連要因の分析に使用できないものを除くと有効回答数は 251 人となった（有効率 83.7%）。有効回答数 251 人のデータについては、平均値や標準偏差（*SD*）などの基礎統計量やヒストグラムでデータの分布を確認した。その結果、一部のデータでは得点の偏りがみられたが、極端な天井効果やフロア効果はみられなかったので、未回答の多かった**問5[5－2]**の項目番号 12 を除いて、他はすべての質問項目を分析に用いた。

次の変数については、ダミー変数として扱った：性別（男性=０　女性=１）、居住地（都市・都市近郊=０　農村=１）、配偶者（いる=１　いない=０）、同居既婚子（いる=１　いない=０）、「重篤な病気」の経験（ある=１　ない=０）、および健康度自己評価（ダミー変数に変換：健康・まあ健康=１　健康でない・あまり健康でない=０）

その他の変数については、次のような換算を行った。「人生の危機」については、５つの選択肢（自身の重い病気、親しい友人・近親者の重い病気、親しい友人・近親者の死、大切な人との別れ、その他自記）の中から○印の合計数とした。「教育歴」については就学年数を考慮し、選択肢の番号１(尋常小学校・高等小学校・国民学校、新制の小学校)は６年、番号２(旧制中学校・高等女学校・実業学校、新制の中学・高校)は 12 年、番号３(旧制高校・専門学校・高等師範学校・師範学校・大学、新制の専門・高専・短大・大学・院)は 16 年に換算した。「暮らし向き」については、国民生活基礎調査（平成 29 年版）の高齢者世帯の所得分布を参考に次のように数値化した。選択肢の番号１は 150 万円、番号２は 225 万円、番号３は 500 万円、番号４は 700 万円とした。「交流頻度」については、３つの交流対象（親せき、ご近所、友人）のうち、実際に困ったときのサポートが期待できると回答した対象（相関分析の結果を参考に、親せきとご近所に絞った）の合計人数（1 か月に 1 回以上交流のある人の数）とした。

調査対象者の背景要因（主に基本属性）、健康度自己評価、高次生活機能、および主観的幸福感について記述統計的に整理したものを**表 4-1** に示す。インタビュー調査の欄は、調査対象者の内数である。調査対象者 251 人の内訳は、男性 140 人、女性 111 人、と男性が女性を上回った。平均年齢は 75.3 歳(*SD* 6.5 歳)、60 歳代 48 人、70 歳代 142 人、80 歳以上 61 人、と 70 歳代が半数以上を占めた。インタビュー調査の 17 人（男性 7 人、女性 10 人）の平均年齢は 85.1 歳、最高齢は男性 92 歳、女性 94 歳であ

った。

その他の指標について、いくつか特徴を記すと、有配偶者が 74.9%、都市居住者が 86.9%、教育歴は高等教育が 63.3%と最も多い。暮らし向きは 70.1%が普通、交流頻度（相談できる人：親せき・近隣住民）については、1 か月平均で 6.3 人であるが個人差（*SD* 5.5 人）が大きい。インタビュー調査の交流頻度の平均は 11.3 人（*SD* 6.2 人）と全体平均を２倍近く上回っていた。「重篤な病気」の経験者は 45.8%、インタビュー調査では同 52.9%であった。「人生の危機」では、“親しい友人・近親者の重い病気”が 45%、インタビュー調査では、“親しい友人・近親者の死”が 41.2%を占めた。健康度自己評価では、ダミー変数としたため約 80%の人が“健康だ”に分類されているが、“まあ健康だ”の割合が最も高い。高次生活機能（老研式活動能力指標：満点 13 点）の平均が全体・インタビュー調査ともに 12 点台と極めて高い値であった。主観的幸福感（PGC モラール・スケール：満点 17 点）については、全体では 12.5 点（*SD* 3.6 点）、インタビュー調査では 13.2 点（*SD* 2.7 点）と全体平均を上回る結果であった。

表4-1　調査対象者の背景要因および健康度自己評価、高次生活機能、主観的幸福感の特徴

	調査対象者 (*N*=251)		インタビュー調査 (内数 *n*=17)	
性別				
男性	140	(55.8%)	7	(41.2%)
女性	111	(44.2%)	10	(58.8%)
年齢				
全体（平均、SD）	75.3	(6.5)	85.1	(5.1)
60歳代	48	(19.1%)	0	(0.0%)
70歳代	142	(56.6%)	2	(11.8%)
80歳以上	61	(24.3%)	15	(88.2%)
配偶者				
いる	188	(74.9%)	9	(52.9%)
いない	63	(25.1%)	8	(47.1%)
既婚子との同居				
している	26	(10.4%)	2	(11.8%)
していない	224	(89.2%)	14	(82.4%)
居住地				
都市地域	218	(86.9%)	9	(52.9%)
農村地域	32	(12.7%)	8	(47.1%)
教育歴				
初等教育	1	(0.4%)	0	(0.0%)
中等教育	88	(35.1%)	7	(41.2%)
高等教育	159	(63.3%)	10	(58.8%)
暮らし向き				
大変苦しい	4	(1.6%)	0	(0.0%)
やや苦しい	16	(6.4%)	0	(0.0%)
ふつう	176	(70.1%)	15	(88.2%)
ゆとりがある	55	(21.9%)	2	(11.8%)
交流頻度(サポートが期待できる人)				
親戚・近隣住民（平均、SD）	6.3	(5.5)	11.3	(6.2)
「重篤な病気」の経験				
ない	136	(54.2%)	8	(47.1%)
ある	115	(45.8%)	9	52.9%)
「人生の危機」の経験				
自身の重い病気	71	(28.3%)	3	(17.6%)
親しい友人・近親者の重い病気	113	(45.0%)	5	(29.4%)
親しい友人・近親者の死	45	(17.9%)	7	(41.2%)
大切な人との別れ	18	(7.2%)	2	(11.8%)
その他	4	(1.6%)	0	(0.0%)
健康度自己評価				
健康だ	219	(87.3%)	14	(82.4%)
健康でない	32	(12.7%)	3	(17.6%)
高次生活機能				
老研式活動能力指標（平均、SD）	12.1	(1.4)	12.0	(2.5)
主観的幸福感				
PGCモラール・スケール(平均、SD)	12.5	(3.6)	13.2	(2.7)

注）年齢、交流頻度、高次生活機能、主観的幸福感以外は構成比を表示している。

4.2 JGS-R の確認的因子分析と下位尺度の信頼性、および年齢・性別による差異の検討

JGS-R は、その前身の日本版老年的超越質問紙（JGS）の改訂版であり、８因子 27 項目で構成されている（**表 4-2**、**表 4-3**）。この尺度については、「交差妥当性が確認されていること、内容的に Tornstam の老年的超越理論の３つの次元がバランスよく含まれる内容となっていること、下位尺度の内的一貫性はいまだ低いものの再検査信頼性では十分な精度を示していること、重要な基準関連変数である年齢との正の関連が異なる集団で繰り返し確認されていること、などから日本人高齢者の老年的超越の検討に適した尺度であるといえるだろう」（増井他、2013）との報告がなされている。

今後、さらなる改良は必要とされているが、現時点では、JGS-R 以外に老年的超越に関する適当な測定尺度は見当たらないので、後述する老年的超越の関連要因分析に先立ち、まずは、今回の調査対象者のデータでも同様に下位尺度の８因子構造が抽出されるのか、この点を確かめるために構造方程式モデリング（以下、SEM とする）による確認的因子分析を行った。さらに、この結果をもとに、JGS-R の信頼性、年齢および性別による差異について検討した。

表4-2　日本版老年的超越質問紙改訂版(JGS-R)の下位尺度と内容

下位尺度名	内容
「ありがたさ」・「おかげ」の認識	自己の存在が他者によって支えられていることを認識することにより、他者への感謝の念が強まる。
内向性	ひとりでいることのよい面を認識する。ひとりでいても孤独感を感じない。外側の世界からの刺激がなくとも肯定的態度でいられる。
二元論からの脱却	善悪、正誤、生死、現在過去という概念の対立の無効性や対立の解消を認識する。
宗教もしくはスピリチュアルな態度	神仏の存在や死後の世界、生かされている感じなど、宗教的またはスピリチュアルな内容を認識する。
社会的自己からの脱却	見栄や自己主張、自己のこだわりの維持など、社会に向けての自己主張が低下する。
基本的で生得的な肯定感	自己に対する肯定的な評価やポジティブな感情を持つ。また、生得的な欲求を肯定する。
利他性	自己中心的から他者を重んじる傾向への変化が生じる。
無為自然	「考えない」「気にならない」「無理しない」といったあるがままの状態を受け入れるようになる。

（出典）増井他（2013）

4.2.1 方法

JGS-R の確認的因子分析　JGS-R の 27 項目にすべて回答している 251 人（男性 140 人、女性 111 人）を分析対象とした。JGS-R の下位尺度ごとに項目の得点を合計し、これを下位尺度得点とした。JGS-R の８つの下位尺度が想定どおりの８因子構造となるのか確かめるために SEM による確認的因子分析を行った。分析にあたっては、８つの因子(下位尺度)からそれぞれの該当する項目が影響をうけ、すべての因子間に共分散を仮定するモデルから始め、有意でない共分散については順次削除（因子間相関を０と仮定）しながら適合度が最大となるモデルを最適解とした。パス解析図に表示されている観測変数は、巻末資料の「質問紙」の質問ごとの項目番号に対応している[4]。なお、以後の記述では、JGS-R の下位尺度については、先行研究（増井他，2010）と同様の略称(**表 4-3** の因子名)を用いることとし、「　」を付けて表記する。

下位尺度の信頼性および年齢・性別による差異の検討　JGS-R の確認的因子分析の結果に基づき、下位尺度の項目ごとの平均得点、因子負荷量（パス解析図の潜在変数から観測変数へのパス係数)、α係数および下位尺度得点を算出する。また、先行研究（増井他，2013）との比較を行うために、下位尺度間に年齢[先行研究では、70 歳群(69～71 歳)/80 歳群（78～81 歳）; 本研究では、74 歳以下/75 歳以上の 2 区分]、性別による違いがあるかどうかをみる目的で平均値の差による検定（*t* 検定）を行った。なお、先行研究（増井他，2013）では行われていないが、年齢と性別については交互作用の効果も考えられるため、２要因（年齢×性別）の分散分析を行った。その際、年齢区分は 60 歳代、70 歳代、80 歳以上の３水準とした。

4.2.2 結果

JGS-R の確認的因子分析　結果を**図 4-2** のパス解析図（係数は標準化推定値）に示す。適合度指標[5]は、GFI=.841、AGFI=.804、RMSEA=.068 であった。一般的に、GFI や AGFI については 1 に近いほどデータへの当てはまりがよいとされているので、分析モデルの適合度は高いとは言えないが、RMSEA が 0.1 以下（一般的に 0.1 以上であれば当てはまりが悪いと判断される）であるので、確認的因子分析の結果としては８つの因子の存在が確認され、おおむね妥当なものと判断した[6]。

また、潜在変数間の共分散（図中の数値は相関係数に相当）については、図示したパスは、いずれも有意となった。このことから、下位尺度間には相関関係があり、特に

---

[4] 例示：Q53_１は、**問５[５－３]**の項目番号１を表す。添え字ｒがついている項目は逆転処理を施している。

[5] 自由度の大きいモデルでは、GFI は参考程度にとどめ、RMSEA によってモデル選択することを推奨している専門書もある（豊田編，2013，p.225)。

[6] χ^2による検定は、データ数（251）がホルターの臨界標本数（5%水準で 132）を超えるので使用しなかった。以下の SEM 分析の適合度検定でも同様の扱いとした。

「無為自然」については他の６つの下位尺度と、「ありがたさの認識」「宗教・スピリチュアル」「基本的肯定感」「利他性」では他の５つの下位尺度と正の有意な相関が認められたが、「脱二元論」と「脱社会的自己」との相関は有意ではあるが負の値となった。

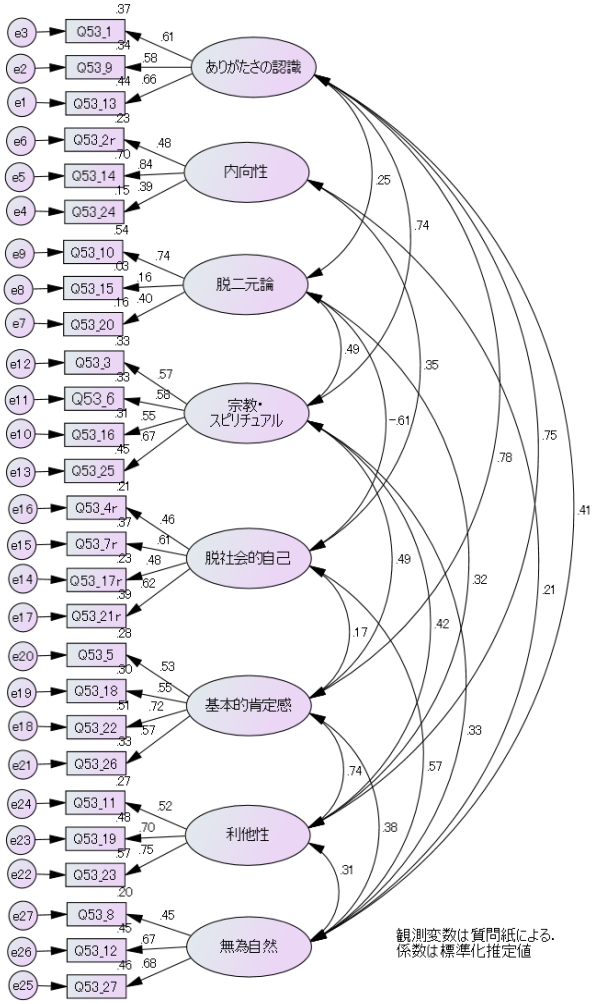


図 4-2　JGS-R の確認的因子分析結果

下位尺度の信頼性および年齢・性別による差異の検討　分析の結果を**表 4-3** に示す。下位尺度の項目ごとの得点は、先行研究（増井他，2013）とよく似た傾向を示した。因子負荷量については、「脱二元論」→ Q53_15（善悪の区別をすることは難しい）への影響（パス）は５％水準で有意であったが、その他の項目への影響（パス）はすべて 0.1％水準で有意であった。先行研究（増井他，2013）では、すべての項目で 0.1％水準で有意となっている。

α係数でみると、「脱二元論」については 0.43 と、他の下位尺度（0.56～0.68）と比

べて低い値であった。先行研究（増井他，2013）でも、「脱二元論」のα係数は 0.36 と最も低い値となっている。他の下位尺度のα係数は、先行研究（増井他，2013）における 0.36～0.62 と比べて、ほぼすべての下位尺度で高い値であった。

年齢別（74 歳以下/75 歳以上）および性別による比較では、年齢別で有意差が認められた下位尺度は、「ありがたさの認識」「脱二元論」「基本的肯定感」および「利他性」の４つであった。いずれも 75 歳以上の得点が高い。先行研究（増井他，2013）ではすべての下位尺度で有意差が認められているが、年齢区分（70 歳群/80 歳群）の設定の仕方が異なる。

次に、性別で有意差が認められた下位尺度は、「ありがたさの認識」「内向性」「宗教・スピリチュアル」「脱社会的自己」「基本的肯定感」「利他性」および「無為自然」の７つであった。いずれも女性の得点が高い。先行研究（増井他，2013）では、「無為自然」を除いて他の７つの下位尺度で女性の得点が高い。

さらに、２要因(年齢・性別)の分散分析の結果を**表 4-4** に示す。性別による主効果が「脱二元論」を除いて他の７つの下位尺度で認められ、いずれも女性の得点が男性よりも有意に高い。また、年齢による主効果も「ありがたさの認識」「脱二元論」「基本的肯定感」および「利他性」の４つの下位尺度で認められたので、３水準間の差を見るため多重比較を行った。**表 4-4** の下段にその結果を示している。

これをみると「ありがたさの認識」については、80 歳以上と 70 歳代はともに 60 歳代よりも有意に得点が高い。「脱二元論」については、70 歳代に比べて 80 歳以上が、60 歳代に比べて 80 歳以上の得点が有意に高いが、70 歳代と 60 歳代との間には有意な差は認められない。「基本的肯定感」については、80 歳以上が 60 歳代に比べて有意に得点が高いが、70 歳代との間には有意な関係は認められない。「利他性」については交互作用が認められたので単純主効果を検定したところ、女性において年齢の単純主効果が有意[$F(2,245)=12.13$, $p<.001$]であったので多重比較を行ったところ、60 歳代、70 歳代、80 歳以上の順に有意に得点が高くなった。

２要因の分散分析の結果は、**表 4-3** の t 検定の結果とも符合しており、性別では女性が、年齢では（70 歳代は中間年齢と考えれば）高齢者ほど老年的超越の得点が高いことが示されたと言えるであろう。

表4-3　日本版老年的超越質問紙改定版（ＪＧＳ－Ｒ）の基本統計量および下位尺度の信頼性と、年齢・性別による差異の検討

因子名		項目番号及び項目文	平均値	因子負荷量	α係数	下位尺度得点	年齢			性別		
							74歳以下	75歳以上	*t*値	男性	女性	*t*値
ありがたさの認識	1	人のありがたさを実感している	2.5(0.5)	.61***	0.63	6.7(1.4)	6.4(1.4)	7.0(1.4)	3.20**	6.4(1.4)	7.1(1.4)	3.89***
	9	良いことがあると、他の人のおかげだと思う	1.9(0.7)	.58***								
	13	周りの人の支えがあるからこそ私は生きていける	2.3(0.6)	.66***								
内向性	2	ひとりで過ごすのはつまらない（反転項目）	1.2(1.0)	.48***	0.56	5.4(1.8)	5.9(1.3)	6.1(1.2)	0.85	5.8(1.2)	6.3(1.3)	3.48**
	14	ひとりでいるのも悪くない	1.9(0.8)	.84***								
	24	ひとりで静かに過ごす時間は大切だ	2.3(0.7)	.39***								
脱二元論	10	私の気持ちは昔と今を行ったり来たりしている	1.4(0.8)	.74***	0.43	4.5(1.9)	4.1(1.7)	4.9(2.1)	3.1**	4.4(1.9)	4.7(2.0)	1.52
	15	善悪の区別をすることは難しい	1.6(0.9)	.16*								
	20	もう死んでもいいという気持ちともう少し生きたいという気持ちが同居している	1.6(1.1)	.40***								
宗教・スピリチュアル	3	死後の世界があると思う	1.2(1.0)	.57***	0.68	6.9(2.6)	6.6(2.5)	7.2(2.6)	1.9	6.5(2.8)	7.5(2.2)	3.23**
	6	生かされていると感じることがある	2.1(0.8)	.58***								
	16	神様や仏様のような人智を超えた存在があると思う	1.8(1.0)	.55***								
	25	ご先祖様との繋がりを強く感じる	1.9(0.8)	.67***								
脱社会的自己	4	つい見栄を張ってしまう（逆転項目）	1.6(0.9)	.46***	0.64	6.7(2.4)	6.5(2.3)	6.8(2.5)	0.86	6.0(2.1)	7.5(2.4)	4.89***
	7	過去のことでまだこだわっていることがある（逆転項目）	1.5(0.9)	.61***								
	17	人がやっていることに、ついロを出したくなる（逆転項目）	1.9(0.7)	.48***								
	21	他の人のことを羨ましいと思うことがある（逆転項目）	1.7(0.9)	.62***								
基本的肯定感	5	振り返ってみると、「自分はよくやってきた」と思う	2.1(0.7)	.53***	0.65	8.0(2.1)	7.7(2.2)	8.4(2.0)	2.55*	7.7(1.9)	8.4(2.2)	2.75**
	18	自分がいなくなっても、未来に何かが伝わると思う	1.6(0.9)	.55***								
	22	自分の人生は意義のあるものだったと思う	2.1(0.7)	.72***								
	26	毎日が楽しい	2.2(0.7)	.57***								
利他性	11	自分のことより人のことをまず考える	1.6(.0.7)	.52***	0.67	5.6(1.6)	5.3(1.5)	5.9(1.6)	2.71**	5.3(1.5)	6.1(1.6)	4.26***
	19	人の気持ちがよくわかるようになった	2.0(0.7)	.70***								
	23	昔より思いやりが深くなったと思う	2.1(0.6)	.75***								
無為自然	8	良いことも悪いことも、あまり考えない	1.5(0.8)	.45***	0.63	5.3(1.7)	5.1(1.6)	5.5(1.9)	1.53	4.9(1.5)	5.8(1.8)	4.00***
	12	できないことがあってもくよくよしない	2.0(0.7)	.67***								
	27	細かいことが気にならなくなった	1.9(0.7)	.68***								

（　　）：標準偏差

＊$p<.05$, ＊＊$p<.01$, ＊＊＊$p<.001$

表4-4 性別と年齢区分によるJGS-R下位尺度得点と分散分析表

因子名	男性			女性			主効果		交互作用
	60歳代	70歳代	80歳以上	60歳代	70歳代	80歳以上	性別	年齢区分	性別＊年齢区分
ありがたさの認識	5.87	6.64	6.42	6.47	7.02	7.63	14.43***	5.64**	
	(1.20)	(1.37)	(1.43)	(1.42)	(1.33)	(1.27)			
内向性	5.71	5.71	5.97	6.29	6.11	6.73	11.15**		
	(1.04)	(1.12)	(1.43)	(0.85)	(1.32)	(1.36)			
脱二元論	4.03	4.18	5.13	3.94	4.58	5.50		7.56**	
	(1.76)	(1.97)	(1.69)	(1.35)	(1.77)	(2.40)			
宗教・スピリチュアル	5.55	6.64	7.00	7.06	7.34	8.03	9.11**		
	(2.23)	(2.95)	(2.57)	(1.60)	(2.34)	(2.13)			
脱社会的自己	6.10	6.18	5.58	7.00	7.50	7.63	19.02***		
	(2.06)	(2.23)	(2.03)	(2.18)	(2.23)	(2.93)			
基本的肯定感	7.26	7.78	8.03	7.47	8.36	9.17	4.83*	4.70*	
	(1.88)	(2.01)	(1.70)	(2.35)	(2.15)	(2.14)			
利他性	4.90	5.37	5.35	4.71	6.08	6.87	10.56**	10.80***	4.49*
	(1.42)	(1.40)	(1.64)	(1.36)	(1.53)	(1.22)			
無為自然	4.87	4.85	5.19	5.53	5.78	5.90	10.00**		
	(1.38)	(1.56)	(1.68)	(1.55)	(1.64)	(2.37)			

上段：平均値，下段（　）：標準偏差　$^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$

注）「利他性」については、交互作用が有意であったので単純主効果の検定を行った。女性において年齢区分の単純主効果が有意［$F(2,245)=12.13$, $p<.001$］、年齢区分の高い群において性別の単純主効果が有意[70歳代：$F(1,245)=8.40$, $p<.01$　80歳以上：$F(1,245)=16.69$, $p<.001$]となった。
なお、年齢区分において主効果が有意となった下位尺度の多重比較は以下のとおりである。

	多重比較	備考
ありがたさの認識	80歳以上・70歳代＞60歳代	
脱二元論	80歳以上＞70歳代　80歳以上＞60歳代	
基本的肯定感	80歳以上＞60歳代	
利他性	80歳以上＞70歳代＞60歳代	女性の比較

4.2.3 考察

先行研究（増井他，2013）では、モデルの適合度は、GFI=.95、AGFI=.93、 RMSEA=.044であったが、本モデルの適合度は GFI=.841、AGFI=.804、RMSEA=.068 といずれも先行研究を下回る結果であった。この違いは、有効サンプル数（先行研究では、全体 1,831人　男性 872 人、女性 959 人）の違いによるものなのか、対象集団の属性等の違い［先行研究では、SONIC[7]の 70 歳群（69～71 歳）と 80 歳群（79～81 歳）を対象］によるものなのかは、使用されたデータを入手しさらに詳細に分析しなければわからない。しかし、本研究での RMSEA は 0.1 以下に収まっており、確認的因子分析の結果としては、先行研究（増井他，2013）と同様の８つの下位因子の存在が確認できたため、JGS-R の因子構造の妥当性は認められると判断した。この結果は、JGS-R の交差妥当性を示すものであると言えるであろう。

次に、下位尺度間の相関に着目すると、「脱二元論」と「脱社会的自己」との相関は、先行研究（増井他，2013）と同様（先行研究では、すべての下位尺度間に相関を仮定するモデルとしている）、有意な負の値となっている。しかし、「脱二元論」も「脱社会的自己」も共に老年的超越の特徴を表す重要な構成概念だとするなら、なぜ、この相関が負の値となるのか。このことは、「脱二元論」という下位尺度に問題があることを示唆

[7] 大阪大学、東京都健康長寿医療センター研究所、慶應義塾大学の高齢者を対象とした共同研究の名称。

するものである。

先行研究（増井他，2013）では「脱二元論」について、内的一貫性の低さを（α=.34）指摘しており、その理由として、「老年的超越という概念は下位尺度においてもより広範で複雑な要素を含んでいるにもかかわらず、少数の項目で概念全体を網羅するような項目構成にしたこと」「高齢者においては各々の経験の個人差が大きく、同一因子の同一の項目であっても、個人間の反応が一貫しない傾向が大きいこと」（増井他，2013）を挙げている。本研究でも「脱二元論」の α 係数は 0.43 と小さい値であり、先行研究の指摘と同様の結果となっている。また、「脱二元論」の決定係数（観測変数の右肩の数値）をみると、Q53_15（「善悪の区別をすることは難しい」）の数値が 0.03 と極めて小さく、因子負荷量も 0.16 と小さな値であることから、この項目については「脱二元論」という構成概念ではほとんど説明されていないことを示している。ただし、先行研究（増井他，2013）では、この項目の因子負荷量は 0.32 となっており、本研究とは異なる結果となっている。

また、本研究でみられた「脱二元論」と「脱社会的自己」との負の相関（r=-.61）については、先行研究（増井他，2013）でも同様な負の相関（r=-.59）が示されている。概念的には、「脱二元論」と「脱社会的自己」は、Tornstam の老年的超越理論の２つの次元（「社会と個人との関係の次元」「自己の次元」）に相当するものであり、老年的超越の到達度の高い者ほど得点は高くなり、本来、正の相関関係を有するはずのものである。この相関が負となっている原因は、「脱二元論」の設問項目の記述の仕方や扱い方にあるように思われる。たとえば、「私の気持ちは昔と今を行ったり来たりしている」「もう死んでもいいという気持ちと、もう少し生きていたいという気持ちが同居している」という項目では、逆転処理がなされていないので肯定的な回答（「そうだ」=３点）をした人の得点が高くなる。すなわち、このような“二元論的見方”から未だ脱却できていない人の得点が高くなってしまうのである。第３章でも述べたように、「東洋思想では二分化前を見る」といった考え方があり（鈴木，1997）、“二元論から脱却”している人というのは、西洋思想にみられる二分性を肯定的に超越している人である。

一方、「脱社会的自己」については、すべて逆転項目となっていることから、見栄やこだわり、羨望、そういった“もろもろのしがらみから吹っ切れた”、そのような超越的な感情を測定している。このような測定項目のベクトル方向の違いが、「脱二元論」と「脱社会的自己」の相関が負となっている理由ではないかと考えられる。しかし、「脱二元論」の否定的な回答（「そうではない」=０点）を“二元論からの脱却”とみなして単純に逆転処理するのも短絡的すぎるようには思える。

以上のようなことから、JGS-R の下位尺度の「脱二元論」については、設問の内容や項目処理の方法に改善が必要なことが示唆された。

まとめ

以上の結果を要約すると次のとおりである。

(1)　JGS-R の下位尺度の平均得点や因子負荷量については、先行研究（増井他，2013）と大きくは異なることのない結果が得られた。

(2)　JGS-R の信頼性（α係数）については、全体的に先行研究（増井他，2013）よりも高い結果が得られたが、「脱二元論」については、先行研究と同様に８つの下位尺度中で最も低い値であった。

(3)　老年的超越の年齢および性別による差異については、年齢では４つの下位尺度（「ありがたさの認識」「脱二元論」「基本的肯定感」「利他性」）において高齢者のほうが高いこと、性別では「脱二元論」以外の７つの下位尺度において、女性のほうが高いことが示唆された。なお、増井他（2013）の先行研究では、年齢については８つの下位尺度で、性別については「無為自然」を除いて他の７つの下位尺度で有意差が認められているが、年齢区分を 70 歳群（69～71 歳）と 80 歳群（79～81 歳）としているため単純な比較はできない。それでも、Tornstam（2005）の報告にあるように、年齢が高くなるほど、また、男性より女性で老年的超越の傾向が高まることは示されたと言えるであろう。

4.3　東洋的な見方にかかる測定尺度の検討

本研究の主要なテーマは、日本人の思考や感情に投影されていると考えられる東洋的なものの見方（以下では「東洋的見方」と記す）が老年的超越にどのような影響を及ぼすのかを実証的に明らかにすることである。そのためには、**図 4-1**（老年的超越の影響要因の関連図）において文化的背景として示した「東洋的見方」をいかなる方法で測定するのかが重要となる。本節では、第３章で検討した「東洋的見方」の下位の構成概念と位置づける「〈老い〉に対する東洋的態度」を測定するための質問紙の作成、および、この質問紙への回答データの探索的因子分析により作成した測定尺度の因子構造、並びに尺度の信頼性・妥当性について検討する。

4.3.1 方法

質問紙の作成　第３章で検討した東洋的な見方の概念構造（**図 4-3**）をふまえて作成した「〈老い〉に対する東洋的態度」を測定する設問項目は 79 項目（**表 3-3**）となっているが、調査対象者の多くが後期高齢者であることを考慮すると、これらの項目の多くをそのまま質問紙に盛り込むことは、他にも 100 項目近い設問があるなかで、調査対象者に相当な負担を強いることになり倫理上も許されることではない。そこで、意味・内容が類似した項目、一義的な解釈が難しいと思われる項目、哲学的で簡単に答え

ることが難しい項目、JGS-R と近い内容の項目については削除し、結果的には質問紙の**問５**の［５－１］７項目、および［５－２］29 項目からなる計 36 項目の設問とした。

下位因子（尺度）の抽出　探索的因子分析により、「〈老い〉に対する東洋的態度」の因子構造を分析した。因子分析の対象とした項目は、後述するように質問紙の**問５**の［５－１］7 項目、および［５－２］28 項目（回答数が少なかった項目番号 12 を削除）の計 35 項目であった。分析に使用したデータは、**問５**の前記 35 項目すべてに回答があった 262 人のデータである。固有値や因子負荷量をチェックしながら、設定した条件（固有値≧1、因子負荷量≧.35）をクリアーした時点の解を「〈老い〉に対する東洋的態度」の因子構造として確定した。それぞれの下位因子に所属する項目の内容をふまえて各因子を命名し、これを「〈老い〉に対する東洋的態度」の下位尺度とした。

信頼性・妥当性の検討　測定の信頼性については、項目間の内的整合性に着目してα係数を算出した。妥当性については、外的基準（たとえば、すでに妥当性が確認されている類似の尺度など）となるものが見当たらないので、測定値の統計的特性に着目し、次に述べる方法で検討を行った。

(1)　「〈老い〉に対する東洋的態度」の探索的因子分析の結果をもとに、SEM 分析による確認的因子分析を行い、モデルの適合度から下位尺度の妥当性を検証する。

(2)　JGS-R の下位尺度を構成する「無為自然」は、尺度開発者によれば、「積極的にコントロールを行わない、自我を捨て去り、自然に任せるといった内容は、老荘思想の中心である『無』の思想と類似する」（増井他，2010）とされており、８つの下位尺度のうち最も東洋的な色彩の濃い下位尺度と考えられる。したがって、「無為自然」を東洋的見方の外的な基準の一つと考えれば、「〈老い〉に対する東洋的態度」の下位尺度と「無為自然」との関連を分析することで、基準関連妥当性に準じた検討が可能である。

(3)　東洋的な見方というのは第３章でも考察したように、一般的には長い人生経験を経るなかで徐々に体得されてくるものであると考えるなら、「〈老い〉に対する東洋的態度」の下位尺度の得点は、年齢と正の相関を示すことが想定される。したがって、これらの相関をチェックすることで、測定尺度の基準関連妥当性を検討する。

なお、以後の記述では、「〈老い〉に対する東洋的態度」の下位因子（尺度）には「　」を付けて表記する。

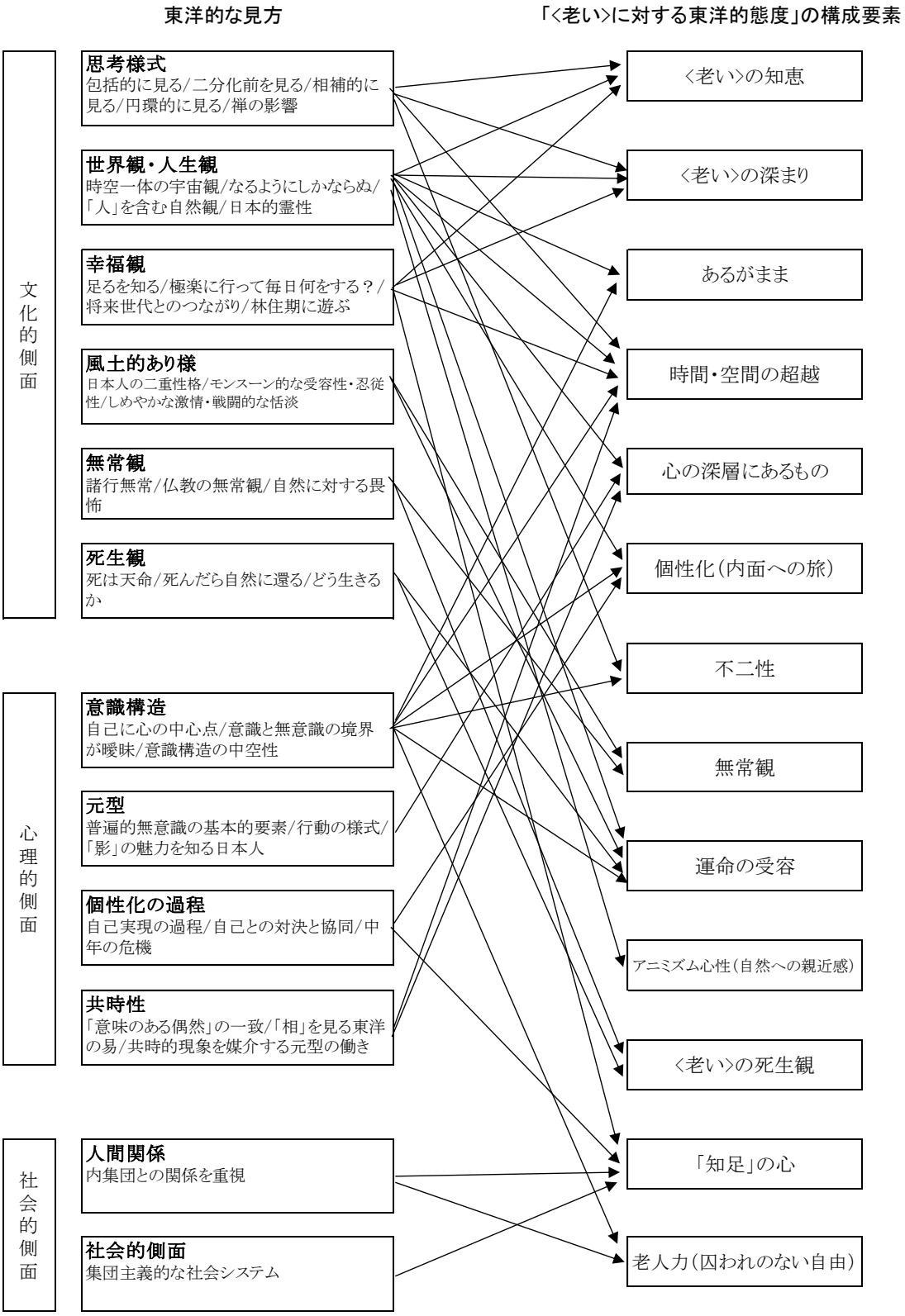


図4-3（前掲図3-1） 東洋的な見方と「〈老い〉に対する東洋的態度」の構成要素との関係

4.3.2 結果

下位因子（尺度）の検討　下位因子どうしが無相関であるとは考えにくいので斜交解を求めることとし、主因子法・Promax 回転による因子分析を行った結果、27 項目 8 因子を抽出した。**表 4-5** にその結果を示す。なお、８番目の因子は項目数が 1 項目のみとなったため、これを削除し最終的には７因子構造とした。回転前の７因子で 27 項目の全分散を説明する割合は 44.04％であった。抽出された因子については、それぞれの因子を構成する項目の内容を考慮して以下のように命名した。(　) 内に内的整合性の指標であるα係数を示めした。

第Ⅰ因子は７項目で構成されており、「余計なものを削ぎ落とす」「こだわりを捨てる」「しがみつくのをやめる」など、いわゆる＜老人力[8]＞（赤瀬川，1998）を思わせる内容であることから「〈老い〉の知恵」（α＝.74）と命名した。

第Ⅱ因子は４項目で構成されており、「自然の中にいると自分がその一部であるような気がする」「身近な自然を人生の支えと感じている」などに高い因子負荷量を示したことから「自然への親近感」（α＝.70）と命名した。

第Ⅲ因子は３項目で構成されており、「自分の感覚を超えるものは運命に任せる」「意のままにならないことは受け入れる」「自然の猛威には諦念を感じる」などに高い負荷量を示したことから「運命の受容」（α＝.79）と命名した。

第Ⅳ因子は４項目で構成されており、「その年になってみないとわからないことがある」「年をとると深まってくるものもある」「自然体で生きればよい」などに高い因子因子負荷量を示したことから「〈老い〉の深まり」（α＝.65）と命名した。

第Ⅴ因子は３項目で構成されており、「楽しむことがいちばん」「嫌なことは放っておく」「理屈の正しさよりも自分の感覚が大事と考える」など＜老人力＞的な内容と、「これからの人生は自分のために過ごしたい」といった自由への願望も含まれているため「囚われのない自由」（α＝.57）と命名した。

第Ⅵ因子は３項目で構成されており、「還暦を過ぎると新たな人生が始まる」「年をとって芸術的なものにより関心が向かうようになった」「人生後半になって自分の内面に目を向けるようになった」といった内容で構成されており、これらはユングのいう個性化過程をイメージした内容であり「内面への旅」（α＝.61）と命名した。

第Ⅶ因子は２項目で構成されており、「人生には『苦と楽』がともにあるから人は生きていける」「対立するものも『陰と陽』のバランスで考えると収まりがよい」といった内容で構成されており、「場」全体で、また相補的に物事をみる東洋的な知の

---

[8] 赤瀬川（1998）の造語で、老人力の特徴として、物忘れ、体力減退、物の二重視、繰り言、ため息など、従来、耄碌として忌避されてきた現象に潜む「つかみどころのないエネルギー概念」(p.217) とされる。これらは高齢期にさしかかった多くの人が自覚せざるを得ない現象であるが、これを逆手にとって＜マイナスの力＞として肯定的に捉えた発想で、一種のキャッチフレーズでもある。

特徴であることから「不二性」（α＝.77）と命名した。

表4-5　「〈老い〉に対する東洋的態度」の因子分析結果

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ
因子Ⅰ:〈老い〉の知恵								
Q52_2 余計なものを削ぎ落とすと、身も心も軽くなるように思う	**.66**	-.01	-.08	.11	-.15	.04	-.04	.13
Q51_5 全部はできない。こだわりを捨てれば気持ちよい	**.64**	-.07	.02	-.08	.04	-.03	.09	.06
Q51_4 何事もしがみつくのをやめると新しい道が開ける	**.61**	.16	.04	.04	.10	-.17	-.01	-.05
Q51_7 許すことで自分の心が癒される	**.47**	-.12	.05	.00	-.08	.22	.07	-.16
Q51_2 自分の思いを相手に押し付けるのは摩擦しか生まない	**.44**	-.02	-.04	-.14	.17	.07	.04	.04
Q51_6 ものごとには、「テキトー」のほうがうまくいくこともある	**.39**	-.06	.12	.15	.16	-.14	.12	-.08
Q52_1 年をとれば世間のしきたりにしばられない心の自由が大事と思う	**.35**	.01	-.11	.16	.11	.03	-.10	.22
因子Ⅱ：自然への親近感								
Q52_26 自然の中にいると、自分がその一部であるような気がする	.00	**.74**	-.01	-.02	.05	.07	-.08	-.07
Q52_24 夜空に浮かぶ月を見ると、宇宙への親近感を覚える	-.09	**.59**	-.03	.01	.10	.01	.15	.07
Q52_25 身近にある自然も自分の人生を支える大事なものだ	.02	**.58**	.03	.14	-.10	.02	-.01	-.08
Q52_29 死んだら身体も魂も自然に還り、宇宙のさまざまなものと一体化されるように思う	-.03	**.38**	.12	-.01	.13	.19	.11	-.01
因子Ⅲ：運命の受容								
Q52_23 自分の感覚を超えたものは、運命にまかせるより仕方ない	.01	-.03	**.82**	.02	.08	.04	.10	-.07
Q52_22 意のままにならないことは、受け入れるよりしょうがない	.01	-.01	**.82**	-.05	-.03	.03	-.10	.02
Q52_21 自然の猛威には、ある種の諦念を感じる	-.01	.10	**.66**	.10	-.07	-.15	-.07	.10
因子Ⅳ：〈老い〉の深まり								
Q52_9 その年になってみないと分からないことがあると思う	.00	.03	.09	**.71**	-.12	-.22	.07	.14
Q52_4 年をとると衰えるものばかりではなく、深まってくるものもあると思う	-.10	.13	-.04	**.54**	-.18	.28	.00	-.09
Q52_8 人間は自然物だから、自然体で生きればよいと思う	.06	-.02	-.03	**.48**	.18	-.09	.14	-.04
Q52_3 年をとったことを楽しまなければ損だ	.21	-.03	-.02	**.47**	.05	.30	-.16	-.13
因子Ⅴ：囚われのない自由								
Q51_1 楽しむことがいちばん、嫌なことは放っておく	.10	-.06	.05	-.10	**.64**	.06	-.02	-.09
Q51_3 理屈の正しさよりも、自分の感覚がいちばん大事だ	.12	.22	-.10	-.03	**.60**	-.11	-.09	.00
Q52_10 これからの人生の時間は、自分のために過ごしたい	-.13	-.14	.07	.22	**.43**	.20	-.05	.35
因子Ⅵ：内面への旅								
Q52_15 還暦を過ぎると、また、新たな人生が始まると思う	-.13	.08	-.11	.04	.16	**.66**	.12	-.01
Q52_6 年をとって芸術的なものにより関心が向かうようになった	.04	.08	.02	-.17	-.14	**.50**	.02	.20
Q52_13 人生後半になって、自分の内面に目を向けるようになった	.14	.28	.12	-.12	-.05	**.42**	-.05	.14
因子Ⅶ：不二性								
Q52_16 人生には「苦と楽」がともにあるから、人は生きていけるのだと思う	.04	.00	-.05	.10	-.10	.05	**.80**	.05
Q52_17 対立するものも「陰と陽」のバランスで考えると、収まりがよい	.11	.10	-.03	-.01	-.03	.09	**.59**	.05
因子Ⅷ：不採用								
Q52_7 社交的なつながりの多さより、少人数でも共感できる人と過ごす時間のほうが大事と思う	.05	-.03	.04	-.01	-.05	.10	.08	**.62**

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ
Ⅰ	―	.34	.06	.57	.31	.37	.24	.26
Ⅱ		―	.07	.40	-.07	.47	.39	.27
Ⅲ			―	.12	.13	.08	.28	.13
Ⅳ				―	.19	.51	.31	.26
Ⅴ					―	.06	-.06	.24
Ⅵ						―	.32	.24
Ⅶ							―	.15
Ⅷ								―

信頼性・妥当性の検討　下位尺度のα係数については、前記の各因子名の右横の（　）内に示した。「〈老い〉の深まり」「内面への旅」が 0.6 台、「囚われのない自由」が 0.57 と若干低い値であったが、他の因子については 0.7 台と、信頼性が疑われるような下位尺度は認められなかった。

「〈老い〉に対する東洋的態度」尺度の妥当性については、SEM による確認的因子分析の結果を**図 4-4** に示す。この図では、有意でなかった共分散は削除されている。モデルの適合度は、CFI=.859　RMSEA=.055 であり適合度の高いモデルとはいえないが、RMSEA が 0.1 を下回っていることや、因子負荷量の値はすべて 0.1%水準で有意であることから、「〈老い〉に対する東洋的態度」は、７つの下位因子からなる尺度構造を有していると判断できよう。

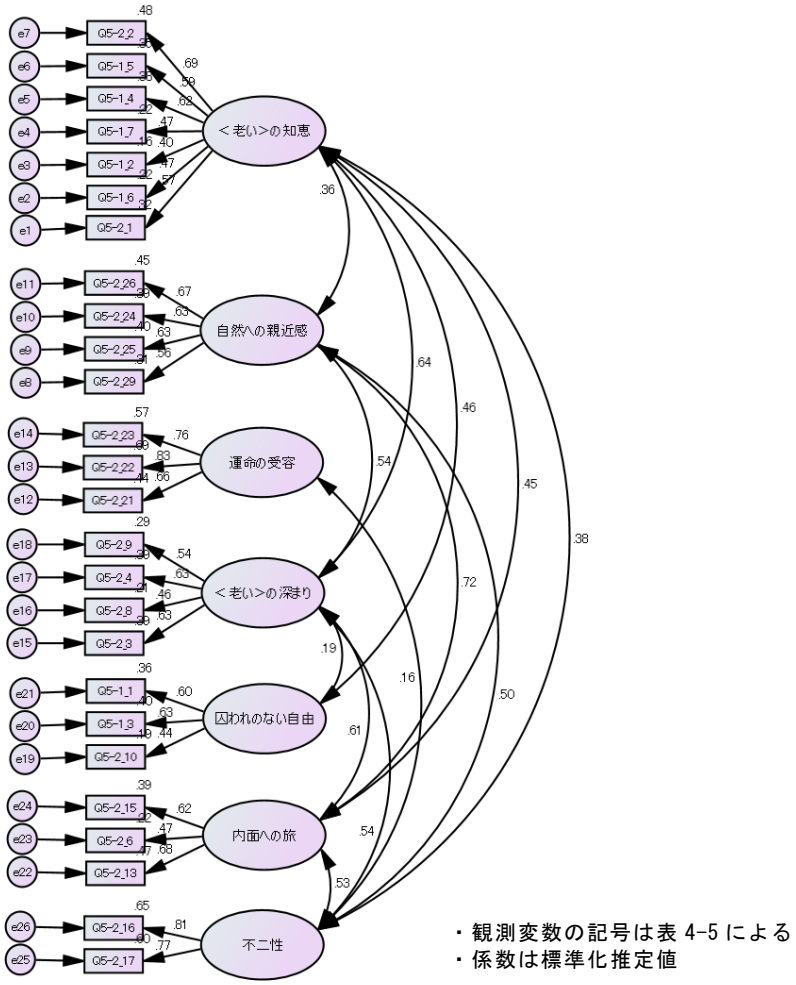


図 4-4 「〈老い〉に対する東洋的態度」の確認的因子分析結果

また、尺度の基準関連妥当性については、**図 4-4** のモデルをベースに、「無為自然」との関連を探る多重指標モデルを構成し分析を行った。結果は**図 4-5** に示すとおりである。モデルの適合度は、CFI=.846　RMSEA=.055 であり適合度の高いモデルとはいえないが、RMSEA が 0.1 を下回っているので、東洋的見方の一つの側面である「無為自然」との関連を示すモデルとしては妥当と考えられる。なお、**図 4-5** には、７つの下位因子からの有意でないパスも含めてすべて表示しているが、有意となったのは「運命の受容」（γ=.24, p<.01）と「〈老い〉の深まり」（γ=.44, p<.05）の２因子のみであった。この解釈については考察において述べる。

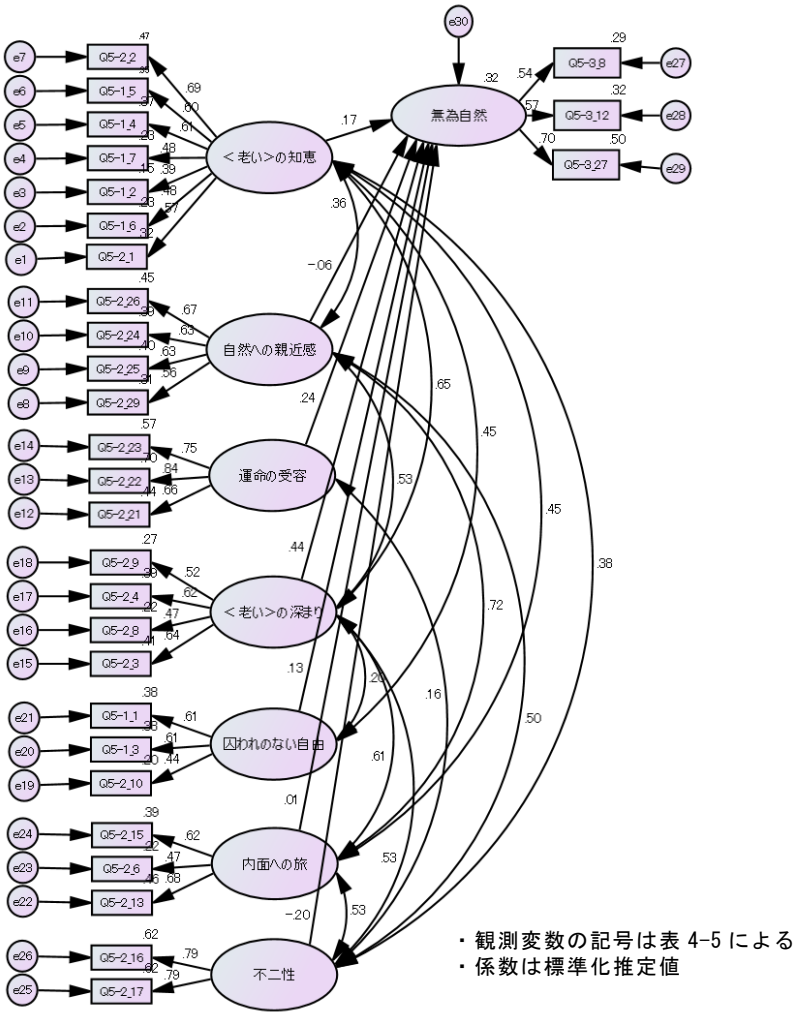


図 4-5 「〈老い〉に対する東洋的態度」と「無為自然」との関係

さらに、尺度の基準関連妥当性について、**図 4-6** に示すように SEM 分析を援用して、年齢と 7 つの下位次元ごとの単回帰分析を行った結果、有意となったパスは、「自然への親近感」（γ=.20, p<.01）、「運命の受容」（γ=.28, p<.001）、「内面への旅」（γ=.21, p<.01）、「不二性」（γ=.23, p<.01）であった。

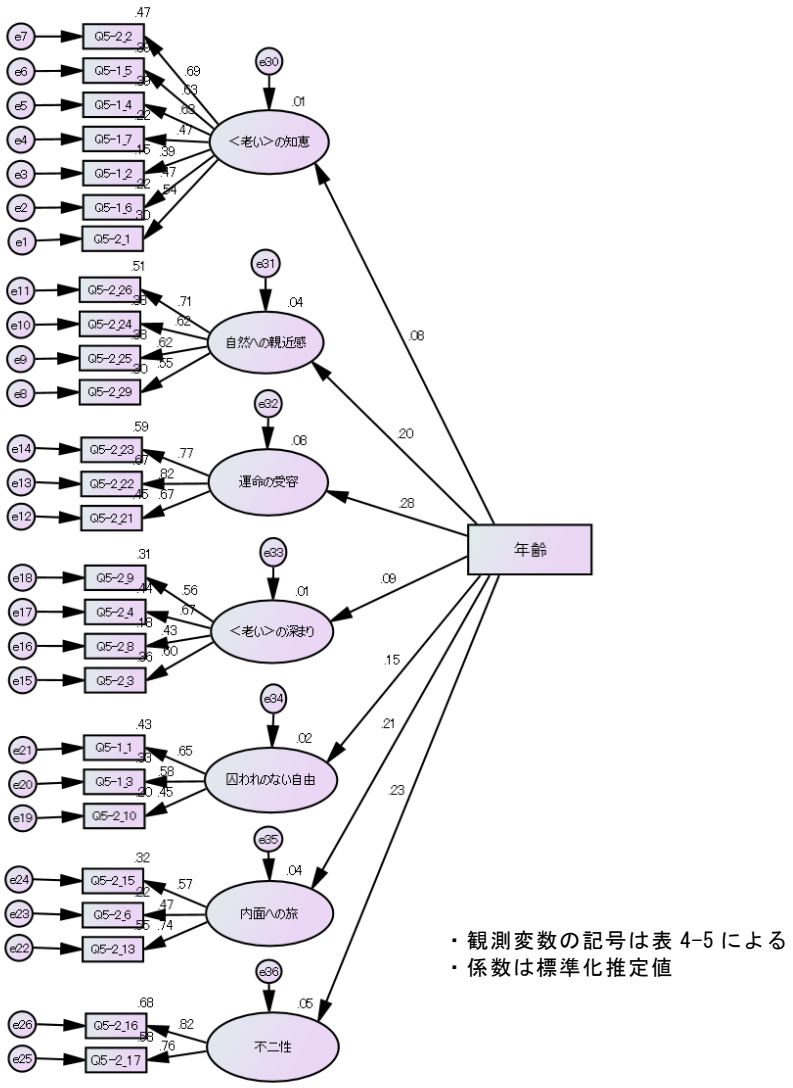


図 4-6 「〈老い〉に対する東洋的態度」と年齢との関係

4.3.3 考察

質問紙の検討　回答者の得点分布をみると、全体的に中央やや右よりの分布となっていたが、極端な天井効果がみられるものではなかったので、東洋的見方を測定する質問紙としては妥当であると判断した。

下位因子（尺度）の検討　探索的因子分析の結果は、８因子が抽出され、それぞれの因子を構成する項目数をみると、第Ⅰ因子は７項目とやや偏りがあるが、第Ⅱ～Ⅵ因子までは４～３項目とバランスよく収まっている。しかし、第Ⅶ因子は２項目、第Ⅷ因子は１項目となったため、第Ⅷ因子は除外し、第Ⅶ因子はα係数を計算する上で２項目は少ないが、内容的には東洋思想の「不二性」にあたる内容であることから残した。結果的には、当初想定した「〈老い〉に対する東洋的態度」の構成要素（13個）の半分程度に縮小されることになったが、〈老い〉に関する東洋的見方の特徴的な次元はおおむね含まれているものと考えられる。

信頼性・妥当性の検討　信頼性については、α係数が 0.50 を下回るような下位尺度はなく、７因子とも内的整合性は保たれていると考えられる。妥当性についての検討結果は次のとおりであった。

まず、確認的因子分析の結果であるが、モデル全体の適合度が十分高いとはいえなかったが、７つの因子からの影響指標（因子負荷量）の値がすべて 0.1%水準で有意であったことから、それぞれの下位尺度で「〈老い〉に対する東洋的態度」の特徴を説明できているものと考えられる。また、７つの因子間の共分散に着目すると、図示されてはいないが有意でなかった共分散は、探索的因子分析で因子間相関が極めて小さかった因子間関係と符合しており、特に、「運命の受容」と「囚われのない自由」は、他の因子に比べて有意な相関を示す相手側の因子が少ない傾向がみられた。このことは、「〈老い〉に対する東洋的態度」の特徴を示すものであろう。たとえば、「運命の受容」は人生の達観や無常観に、「囚われのない自由」は＜老人力＞に通じる概念であり、いずれも〈老い〉を肯定的に捉える態度的側面が強い下位尺度となっているからではないかと推察される。

次に、JGS-R の「無為自然」との関連であるが、因果係数（パス係数）の値が有意となったのは、「運命の受容」と「〈老い〉の深まり」の２因子のみであった。この検討が基準関連妥当性を側面的に確認するものであるとするなら、このことは何を意味するのか。

「無為自然」の内容をみると、「良いことも悪いことも、あまり考えない」「できないことがあってもくよくよしない」「細かいことが気にならなくなった」となっており、あるがままの状態を受容する態度を測定しているものである。だとすれば、「運命の受容」(意のままにならないことは受け入れる等)と「〈老い〉の深まり」(自然体で生きればよい等)が有意な正の関連を示すことは理解できるところであろう。

一方、他の５つの因子が「無為自然」と有意な関連を示さなかったことの解釈として、JGS-R との弁別性が保たれていることの証であるとも考えられる。換言すれば、JGS-R では東洋的な見方に類する尺度として「無為自然」や「脱二元論」という下位尺度を設けているが、「無為自然」に関していえば、日本人高齢者の東洋的なものの

見方・感じ方の側面を十分捉えきれていない可能性がある。

さらに、「〈老い〉に対する東洋的態度」と年齢との間の相関であるが、「自然への親近感」「運命の受容」「内面への旅」および「不二性」との間で有意な相関（**図 4-6** は単回帰モデルであることから因果係数の値は相関係数に一致する）が認められたことは、構成概念の基準関連妥当性を示すものであるといえる。第３章で考察したように、東洋的な見方やユング心理学の知見などを参考に概念の構造化を検討する過程で明らかになったように、これらの４つの因子は、〈老い〉とともに深まる高齢者のものの見方・感じ方の変化を示していると考えれば、年齢との間には正の相関がみられるはずである。

他の３つの因子との間で有意な相関が認められなかったことについては、「〈老い〉の知恵」「〈老い〉の深まり」「囚われのない自由」という因子は、前期高齢者においてもみられる「〈老い〉に対する東洋的態度」の側面なのであろう。

以上のような考察から、東洋的な見方の傾向を測定するために本研究において新規に作成した「〈老い〉に対する東洋的態度」に関する尺度は、心理尺度としての信頼性・妥当性を一定程度有するものであると結論した。したがって、次節 4.4 で述べる老年的超越の関連要因の分析では、「東洋的見方」を測定する尺度として、この７つの下位因子で構成される尺度を用いることとした。

４．４　老年的超越の関連要因についての総合的検討

老年的超越に影響を及ぼす要因について、主に次の二点に着目して分析を行う。

(1)　今回測定された 30 個の変数（背景的変数：12 個、主観的幸福感の下位尺度：３個、老年的超越の下位尺度：８個、東洋的見方の下位尺度：７個）から、老年的超越に影響を及ぼすと考えられる要因を絞り込み、要因間の関係を縮約的に記述する構造方程式モデル（以下、SEM モデルとする）を構築する。

(2)　(1) の SEM モデルをベースに性別ごとの多母集団分析を行い、老年的超越の関連要因について男女間における構造的な差異や因果の影響度について検討する。その際、①老年的超越と主観的幸福感については、いずれが原因でいずれが結果であるのか、あるいはこの２つは相互に因果的な影響を与えあう概念であるのか、②老年的超越は属性的要因に加えて文化の影響をうける心理的現象でもあるが、日本人の価値観にみられる「東洋的見方」という文化的な側面（文化的要因）は、他の属性的な要因との関連でどのような影響を及ぼすのか――に着目して分析を行う。

4.4.1　方法

(1)分析対象とモデルに投入する変数、および性別による差異

分析に用いたデータは、本章 4.1.1 で述べた 251 人（男性 140 人、女性 111 人、74 歳以下 115 人、75 歳以上 136 人）の質問紙調査で得られたデータである。SEM による分析に先立ち、モデルへの入力データについて次のような前処理を行った。

下位尺度得点の事前計算　主観的幸福感(PGC モラール・スケール)、老年的超越(JGS-R)、東洋的見方（〈老い〉に対する東洋的態度）については、測定尺度としての因子構造がすでに確認されているため、下位尺度得点（項目の合計点）を事前に求めて、これを SEM 分析の入力データとした。

相関分析による投入変数の選択　性別ごとに２母集団に区分し、投入するすべての変数（下位尺度および背景的変数）について２変数相関分析を行い、主観的幸福感、老年的超越および東洋的見方の下位尺度と有意な相関が認められた背景変数を SEM 分析に取り込むことにした。この２変数相関分析の結果を**表 4-6**、**表 4-7**(共に本章末)に示す。これらの結果を子細に眺めると性別による違いが随所にみられ、統一した傾向を読み取ることは困難であるが、SEM 分析に取り込む背景的変数としては、年齢、配偶者、重篤な病気、人生の危機、教育歴、暮らし向き、健康度、交流頻度、活動性指標を選択することとした。これらの変数は、男性で有意であっても女性では有意ではない、また、その逆もあるが、どちらかで有意な場合は説明（独立）変数として取り込んだ[9]。なお、同居既婚子と居住地については、一部で有意な相関関係がみられるものもあるが、サンプル数の偏りが大きく（既婚子と同居：10.4%、農村部に居住：12.7%)、使用するデータとしては不適切と考え採用を控えた。

性別による差異の検討　SEM 分析に投入した全変数の性別ごとの平均値と標準偏差および t 検定の結果を**表 4-8** に示す。傾向としては、背景的変数については、「配偶者」「教育歴」「交流頻度」「活動性指標」で、また、「老年的超越」については７つの下位尺度で、「東洋的見方」については５つの下位尺度で、男女の平均得点に有意差が認められる。

[9] ２変数の間に相関関係が認められても、両者の間の因果関係の存在を保証するものではない。見かけの相関となっている場合もあり、背後に共通の原因となる交絡変数（因子）が存在している可能性はある。

表4-8　SEM分析に投入した全変数の平均値と標準偏差および*t*検定の結果

	男性		女性			
	M	*SD*	*M*	*SD*	*df*	*t*値
背景的変数						
年齢	74.84	6.31	75.97	6.70	249.00	-1.38
配偶者（あり:1 なし:0）	0.94	0.25	0.51	0.50	151.56	8.12 ***
重篤な病気の経験	0.51	0.50	0.40	0.49	238.21	1.76
人生の危機の経験	1.05	0.97	1.14	0.91	249.00	-0.71
教育歴	14.88	1.80	14.11	2.14	210.66	3.00 **
暮らし向き	525.71	107.41	514.41	140.80	249.00	0.72
健康度	0.88	0.33	0.86	0.34	249.00	0.32
交流頻度	5.49	5.29	7.21	5.53	249.00	-2.51 *
活動性指標	11.81	1.41	12.51	1.18	244.11	-4.20 ***
主観的幸福感						
心理的動揺	4.36	1.64	4.42	1.57	249.00	-0.32
孤独感・不満足感	4.57	1.40	4.68	1.46	249.00	-0.63
老いに対する態度	3.47	1.45	3.51	1.48	249.00	-0.23
老年的超越						
ありがたさの認識	6.42	1.37	7.10	1.37	249.00	-3.89 ***
内向性	5.76	1.17	6.31	1.29	249.00	-3.48 **
脱二元論	4.36	1.90	4.73	1.96	249.00	-1.52
宗教・スピリチュアル	6.48	2.75	7.49	2.19	248.99	-3.23 **
脱社会的自己	6.03	2.15	7.46	2.42	221.96	-4.89 ***
基本的肯定感	7.72	1.92	8.44	2.22	249.00	-2.75 **
利他性	5.26	1.46	6.08	1.57	249.00	-4.26 ***
無為自然	4.93	1.55	5.77	1.84	249.00	-3.96 ***
東洋的見方						
〈老い〉の知恵	14.69	3.14	15.52	3.18	242.00	-2.18 *
自然への親近感	7.71	2.47	8.73	2.32	247.00	-3.32 **
運命の受容	6.22	1.88	6.31	1.88	249.00	-0.36
〈老い〉の深まり	8.80	1.70	9.97	1.75	247.00	-5.35 ***
囚われのない自由	5.03	1.52	4.86	2.12	192.51	0.75
内面への旅	5.40	1.73	6.36	1.87	247.00	-4.19 ***
不二性	4.26	1.23	4.66	1.23	248.00	-2.49 *

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

（2）潜在変数および観測変数

SEM 分析の利点は、内容の似かよった観測変数を構成概念として１つにまとめ、これを潜在変数として因果関係を縮約的に記述できることにある。このあと詳述するように、SEM 分析では５つの潜在変数と４つの独立観測変数、23 個の内生的観測変数を導入した。以下の記述では、潜在変数名を『　　』で、観測変数名を「　　」で表記する。

まず、潜在変数についてであるが、『主観的幸福感』と『老年的超越』については、すでに概念規定が明確になっており、それらを測定する尺度も実績があるが、『東洋的見方』については本研究において導入した構成概念である。本章 4.3 節で述べたように、これを測定する尺度として「〈老い〉に対する東洋的態度」を作成したが、信頼性や妥当性は一定程度保たれていると考えられるので、『主観的幸福感』や『老年的超越』と同様に潜在変数として扱うこととした。

『危機の経験』については、「重篤な病気」と「人生の危機」が互いに中程度の相関（男性 r=.26　女性 r=.35）を有しており、これらの観測変数の共通の原因として１つの潜在変数で説明することが可能である。また、『活動性』についても、「交流頻度」「活動性指標」「健康度」はそれぞれの相関関係に男女間で違いはあるが、少なくとも二対は互い有意な相関（男性：「交流頻度」と「活動性指標」r=.29　女性：「活動性指標」と「健康度」r=.33）を有しており、いずれも活動性や日常生活の基盤をなす指標と考えられることから、１つの潜在変数として表すこととした。

次に、観測変数についてであるが、「配偶者」「教育歴」「暮らし向き」については、後述するように「場の理論」では人（P）に帰属する任意性の低い変数であるため、独立観測変数として扱うこととした。「性別」をさらに「年齢」で分割することも考えられるが、多母集団分析を行う場合には、男女に区分した集団の規模が 50 人程度に縮小されることになり SEM による分析が不適切となるので、「年齢」は独立観測変数として投入することとした。

(3) モデルの詳細

第２章で述べたように、先行研究では老年的超越に影響を及ぼす背景的要因として、年齢、性別、生活環境（職業・収入）、社会活動、人生の危機の経験などが挙げられているが、これらの背景的要因については、**表 4-6**、**表 4-7**(共に本章末)に示した２変数相関分析の結果からも、おおむね妥当なものであることは明らかである。したがって、本研究における因果連鎖のモデルでも、これらの背景的要因を取り込むとともに、加えて本研究で老年的超越を促進する文化的要因と位置づける『東洋的見方』を潜在変数としてモデルに組み込む。

SEM によるモデルの構築　老年的超越の SEM に取り込む変数については上に述べたとおりであるが、SEM の構築にあたっては、Lewin（1936；1951）の「場の理論[10]」の枠組みと、文化心理学の考え方を参考にした。

まず、「場の理論」の枠組みの援用であるが、B=F(P,E)で定義される関係において、『老年的超越』や『主観的幸福感』という心の現象は心的活動として B に該当する。P（人）は、その人固有の属性であり、同時に認知構造を有する。また、E（環境）については、その人固有の思想や価値観・人生観といった側面も含まれることから、『東洋的見方』は心理学的環境に相当するものと考えられる。

---

10 一定の領域内に作用する多様な変数の相互関係を力学的に分析するアプローチであり、活動（この事例では心的活動）(B) は、人（P）とその環境（E）の関数として B=F(P,E)で定義され、P と E とは相互依存する変数で、このような変数（諸要因）の全体性をその個人の「生活空間」と呼ぶ。人（P）は、属性（性別、年齢、学歴、職業、家族関係、性格、健康度、活動能力等）と、その人固有の認知構造（知覚、記憶、学習、思考、判断等の認知機能の集合体）を有する。環境（E）は、心理学的環境（思想、人生観、願望、理想等）と、社会的環境（他者関係、社会的役割等）および物理的環境（居住地域、家等）で構成される（Lewin,1936 外村・松村訳 1942；1951 猪俣訳 1956)。

このような考え方に立てば、理論の力動的な側面からの記述には及ばないが、ごく大まかには『老年的超越』や『主観的幸福感』に影響を及ぼす種々の要因のなかで空間的・時間的な近接性という点からは、まず、P に相当する固有の属性が直接的な要因として挙げられ、ここでは、「年齢」「性別」「配偶者」「教育歴」「暮らし向き」および潜在変数としての『活動性』『危機の経験』が該当するであろう。このうち「性別」は、モデルそのものが２母集団（男性/女性）に区分されている。「性別」以外の背景的変数については任意性が低いと考え、このモデルでは『主観的幸福感』や『老年的超越』に直接影響を及ぼす原因側の説明（独立）変数として扱うこととした。

E に含まれる『東洋的見方』については、P の属性や認知構造に投影される価値観や人生観などで構成されるものであり、かつ、P との相互作用により B（心的活動）の変化を促す要因である。

この点は文化心理学の考え方[11]からも、アナロジー的には次のように説明することが可能と考えられる。まず、B（心的活動）に相当するのは「心のプロセス」であり、P はその人固有の属性、E は文化の集合的要素、すなわち日常的慣習や集合的意味の体系（イデオロギーや人間観など）である。たとえば、『老年的超越』の下位次元の内容をみると、「ありがたさ・おかげの認識」「二元論からの脱却」「宗教・スピリチュアルな態度」「社会的自己からの脱却」「無為自然」などは、老いに対する適応としての態度変化の側面（２次的制御[12]）を表している。これらは、高齢者が長い人生を通じて獲得してきた「心のプロセス」と考えられるものである。

一方、『東洋的見方』の下位次元の内容をみると、「〈老い〉の知恵」「自然への親近感」「人生の受容」などは、一般的に日本人のものの考え方の根底にある一種の文化的な知恵の枠組み（第３章で検討した、思考様式、幸福観、自然観、死生観、無常観等）で、いわば「暗黙の通念」に類するものである。

文化心理学の考え方では、「文化は実質的に心を作り上げており、また同時に、文化そのものも多くの心がより集まって働くことによって維持、変容されていく。…その特徴は非二元論的である」（北山，2000，p.24）とされ、「場の理論」でも P と E は相互依存する関係にあり、そのプロセスを経て B が誘起すると考えられている。したがって、第一義的には、老年的超越という「心のプロセス」が東洋的見方という文化に根差す価値観によって影響をうけると仮定することは、SEM における因果連鎖の設定としては不自然なことではないように思われる。

---

[11] 北山は、文化（慣習や公の意味構造）と心のプロセス（思考、感情、動機づけ）との関連について、「人は、…ある特定の文化のなかに生まれると、その文化にある慣習やそこにある暗黙の通念などに自らの反応を対応させ、両者を連動させることにより、文化の一員になっていく。そして、その過程で、そのような反応を促進する心理的傾向やそれを可能にするさまざまな心のプロセスが芽生えていくと考えられる」（柏木・北山・東，2000，p.22）と述べている。

[12] ２次的制御とは自分の見方や考え方を制御することを指し、年齢が進むと、自分が必要とする制御の型が、直接的な環境の制御（１次的）から２次的な状況制御に移行するとされる（東，2012）。

以上のような考え方に基づき、基本的には原因となる変数の時間的・意味的先行性や心理学的力の方向性（態度変化→心的活動）に留意しながら、以下のような考え方の下に、まずプロトタイプのモデルを構築し、SEMによる分析を繰り返しながらモデルの適合度等を評価しつつ、あわせて先行研究などの知見を参照し妥当と判断できるモデルを探索した。

考え方（1） ３つの外生的な潜在変数（『活動性』『危機の経験』『東洋的見方』）がそれぞれ原因（説明変数）となり、結果（基準変数）となる２つの内生的な潜在変数（『主観的幸福感』『老年的超越』）に影響を及ぼすと仮定する。このとき、『主観的幸福感』と『老年的超越』との間には先述したように双方向の因果関係（パス）を仮定する。なお、『活動性』は『主観的幸福感』の、『危機の経験』は『老年的超越』の道具的変数となるため、技術上の制約から『主観的幸福感』と『老年的超越』へのパスを同時に設定できない（豊田，1998,p.161）。

考え方（2） 考え方（1）の骨格構造を基本とし、外生的な観測変数が原因となり、結果となる潜在変数に直接的な影響を及ぼすと仮定する。これらの観測変数の潜在変数への関わり方にはいくつかのパターンが想定されるが、２変数相関分析の結果やモデル探索の結果に基づき次のように仮定した。すなわち、「暮らし向き」は『主観的幸福感』の原因変数とし、「年齢」「配偶者」「教育歴」については、『老年的超越』に直接影響を及ぼす独立(観測)変数とした。この点ではMIMIC(Multiple Indicator Multiple Cause:多重指標多重原因）モデルと同様の構造となっている。なお、２変数相関分析において、外生的潜在変数の観測変数と独立観測変数との間で、また独立観測変数間で相関関係が認められているものには、同一の「生活空間」において背後に共通の原因があると仮定し共分散を設定した。この点はモデル構成上の技術的制約でもあり、また、識別問題を回避するためでもある。収集したデータの有効活用を図る観点から、SEM分析では完全情報最尤推定法（FIML: Full Information Maximum Likelihood Estimation）を用いた。

プロトタイプ・モデル 上記の考え方に基づき様々なパターンを多母集団分析[13]し、先行する実質科学的な知見もふまえて、おおむね妥当と判断された結果をパス解析図で示したものが**図 4-7**および**図 4-8**のプロトタイプ・モデルである。SEM分析では構造的な外生変数間には、原則として共分散を設定することとされているが、この図では、極端に小さな共分散は削除してある。図に表示されている数値は標準化推定値である。

『老年的超越』の観測変数のうち、決定係数（r^2：観測変数の右肩の数値）の値をみると、「脱二元論」では、男性で r^2=.07、 女性で r^2=.00、「脱社会的自己」では、男性で r^2=.06、 女性で r^2=.17 と、ともに極めて小さい値となっている。『東洋的見方』

[13] 母集団間で潜在変数の平均を比較することが目的ではないので配置不変モデルとした。

についても、「運命の受容」では、男性で r^2=.06、 女性で r^2=.00、「囚われのない自由」では、男性で r^2=.04、 女性で r^2=.07 と、同様の傾向を示している。この結果からみて、これらの観測変数はモデルで想定した潜在変数では適切に説明できておらず、むしろ誤差変数の影響を大きく受けていることが推察される。このことは、モデルの適合度指標（CFI=.700、RMSEA=.054）が低くなっている原因でもあり、これら４個の観測変数を下記の理由によりモデルから削除することとした。

そもそも量的研究の目的は、老年的超越という「心のプロセス」に影響を及ぼす要因間の関係を縮約的に明らかにし、このプロセスを統合的に理解する枠組みを検討することであり、JGS-R で測定される８次元の因子すべてに対する影響を個別詳細に分析することではない。この趣旨からすれば、むしろ説明力の低い観測変数（本章 4.2 節でも述べたように、本質的には JGS-R 下位尺度の信頼性に関わる問題でもある）は、仮にその変数を除いたとしても構成概念の定義に本質的な影響を及ぼすものでない限り、また、そのことによってモデルの適合度が改善されるのであれば、むしろ、このような調整を行うことで分析結果の見通しが良くなるメリットもある。

また、このモデルでは一部の観測変数の誤差項間に共分散を仮定しているが、これは次の理由による。観測変数の決定係数の値が小さく、かつ、２変数相関分析の結果で中程度の相関が認められる観測変数については、それぞれの誤差変数の背後に共通の方向に働く要因の存在が示唆されると考えたためである。

たとえば、「心理的動揺」と「無為自然」、「無為自然」と「〈老い〉の知恵」との関連では、設問項目の共通点を抽出すると、「小さいことや細かいことが気にならなくなった」「できないことがあってもくよくよしない」「こだわりを捨てる」など、〈老い〉に対する受容的態度の側面を表している内容である。また、「宗教・スピリチュアル」と「自然への親近感」との関連でも、それぞれの観測変数の設問項目の共通点を抽出すると、「死後の世界があると思う」「神や仏のような人智を超えた存在」「死んだら自然に還り、宇宙と一体化される」など、老年的超越の考え方の特徴を表す内容である。いずれも、それぞれの観測変数間に中程度の相関（パス解析図に表示）が認められるため誤差変数間に共分散を仮定した。

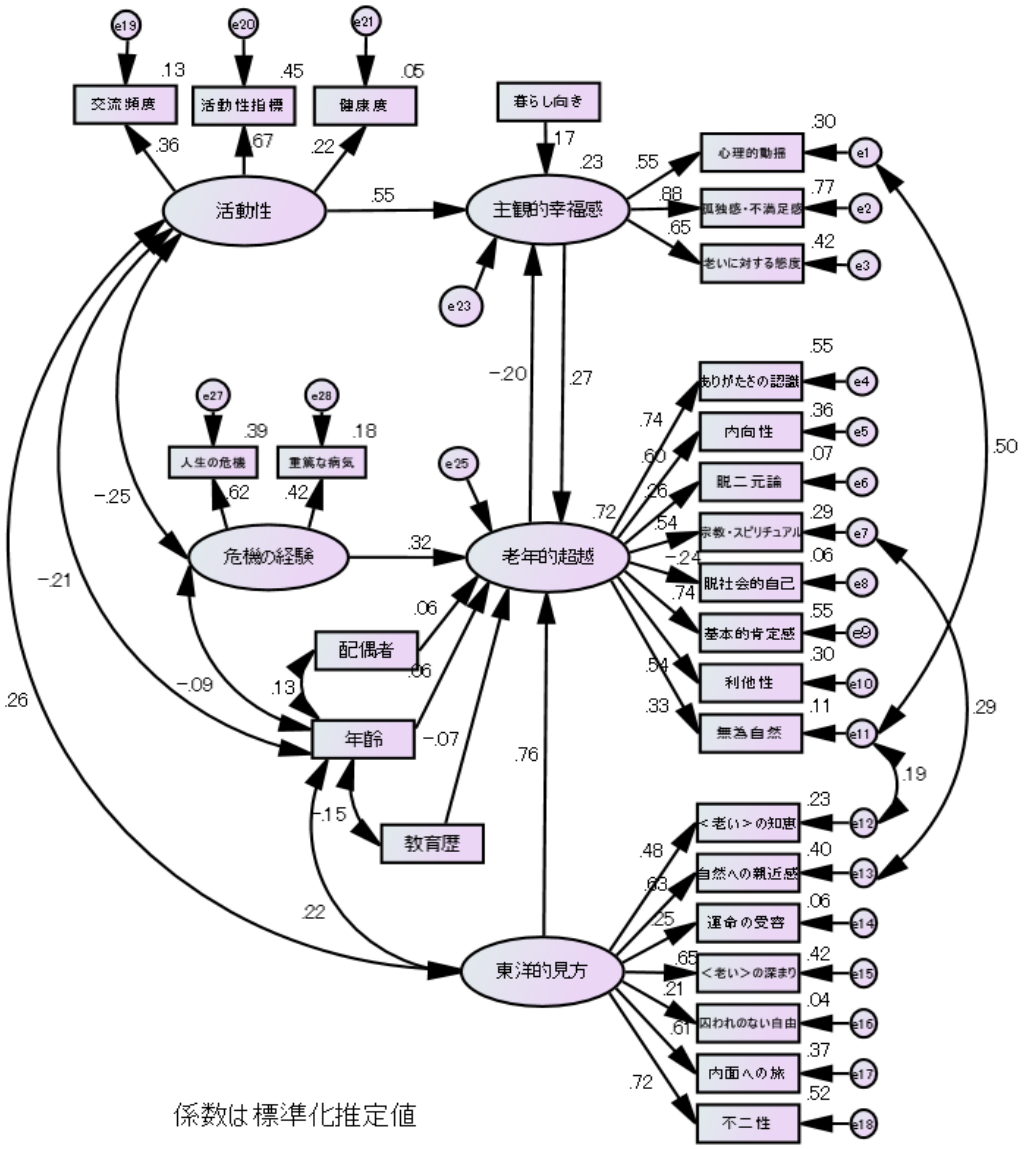


図 4-7 プロトタイプ・モデルのパス解析図（男性）

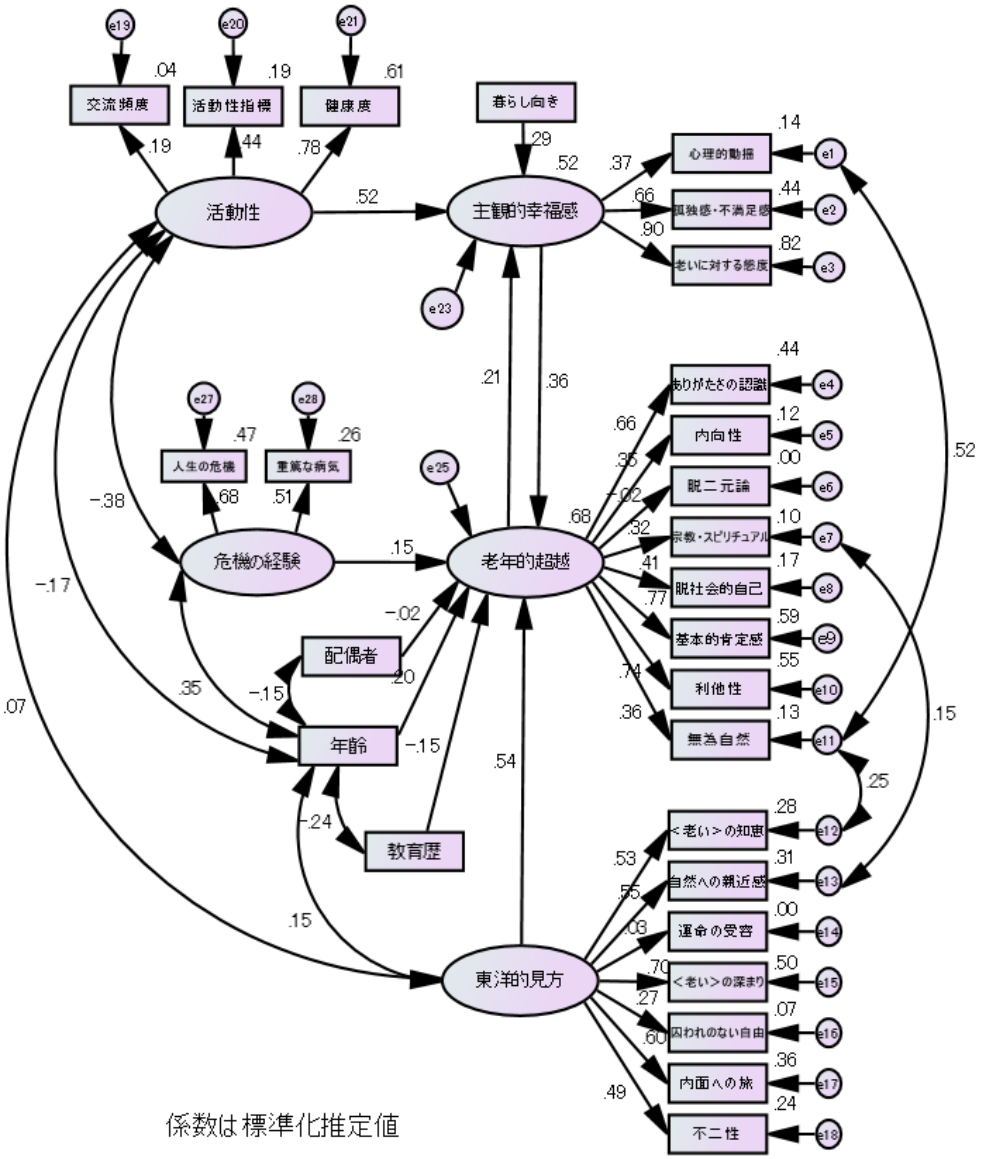


図 4-8 プロトタイプ・モデルのパス解析図（女性）

4.4.2　結果

(1)モデルの選択

SEM モデルの絞り込み　ここまでは、『主観的幸福感』と『老年的超越』との間には双方向のパスを仮定して分析を行てきたが、これ以降の分析に進む前に、それぞれの片方向のパスも含めた検討を行い構造モデルを絞り込んでおく必要がある。**図 4-9** に検討モデルの３パターンの説明図を示す。モデル A は『老年的超越』→『主観的幸福感』、モデル B は『主観的幸福感』→『老年的超越』、モデル C は双方向の因果を仮定したものである。

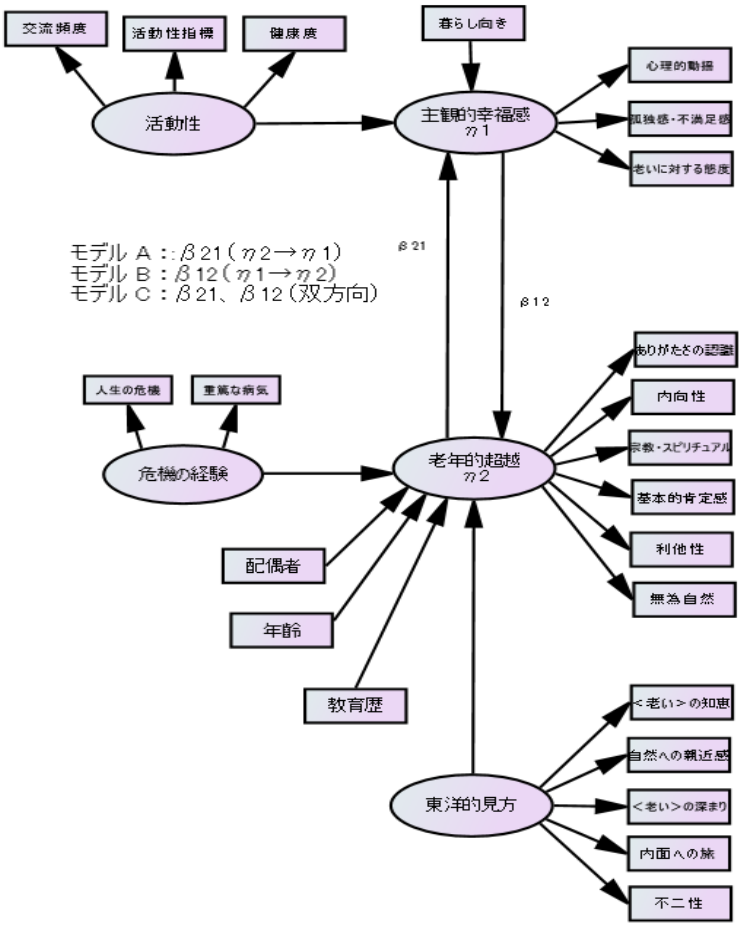


図4-9　検討モデルの３パターン

SEM 分析の結果を**表 4-9** に示す。適合度指標の RMSEA は３パターンとも 0.05 以下で基準はクリアーしており、モデル選択の指標となる AIC でみると適合度の良さでは、モデル C＞モデル B＞モデル A の順となるが、モデル B とモデル C では違いがあるとは思えない。また、因果係数の値でみると、モデル B は男女とも有意となっているが、モデル C では男女とも β_{12} 方向（『主観的幸福感』→『老年的超越』）のパスのみが有意となっている。単純に考えればモデル B を選択することになるのであろうが、モデル A では女性の β_{21} 方向（『老年的超越』→『主観的幸福感』）のパスは有意という結果が得られており、この情報は老年的超越の考え方を支持するものでもある。したがって、この分析では双方向の因果関係を含むモデル C を選択することとした。

表4-9　各種モデルの適合度比較

モデル名	χ^2	*df*	*p*	CFI	RMSEA	AIC	因果係数	
							男性	女性
A	638.7	432	0.000	0.828	0.044	970.7	0.025	0.319 *
B	630.0	432	0.000	0.836	0.043	961.9	0.230 **	0.357 **
C	625.7	430	0.000	0.838	0.043	961.7	−0.200	0.183
							0.314 **	0.274 *

$^{*}p < .05, ^{**}p < .01, ^{***}p < .001$

注）各モデルは、因果の方向を以下のように想定している。因果係数は標準化推定値を示す。

モデル A：『老年的超越』→『主観的幸福感』

モデル B：『主観的幸福感』→『老年的超越』

モデル C：双方向同時解析。上段：モデル Aに相当　下段：モデル Bに相当

以下では、このようにして絞り込まれた構造モデル、すなわちモデル C の分析結果について述べる。このモデル C のパス解析図を**図 4-10** および**図 4-11** に、モデルの適合度、構造方程式の因果係数、決定係数、共分散、因果係数等の検定統計量の各種指標を**表 4-10** に示した。

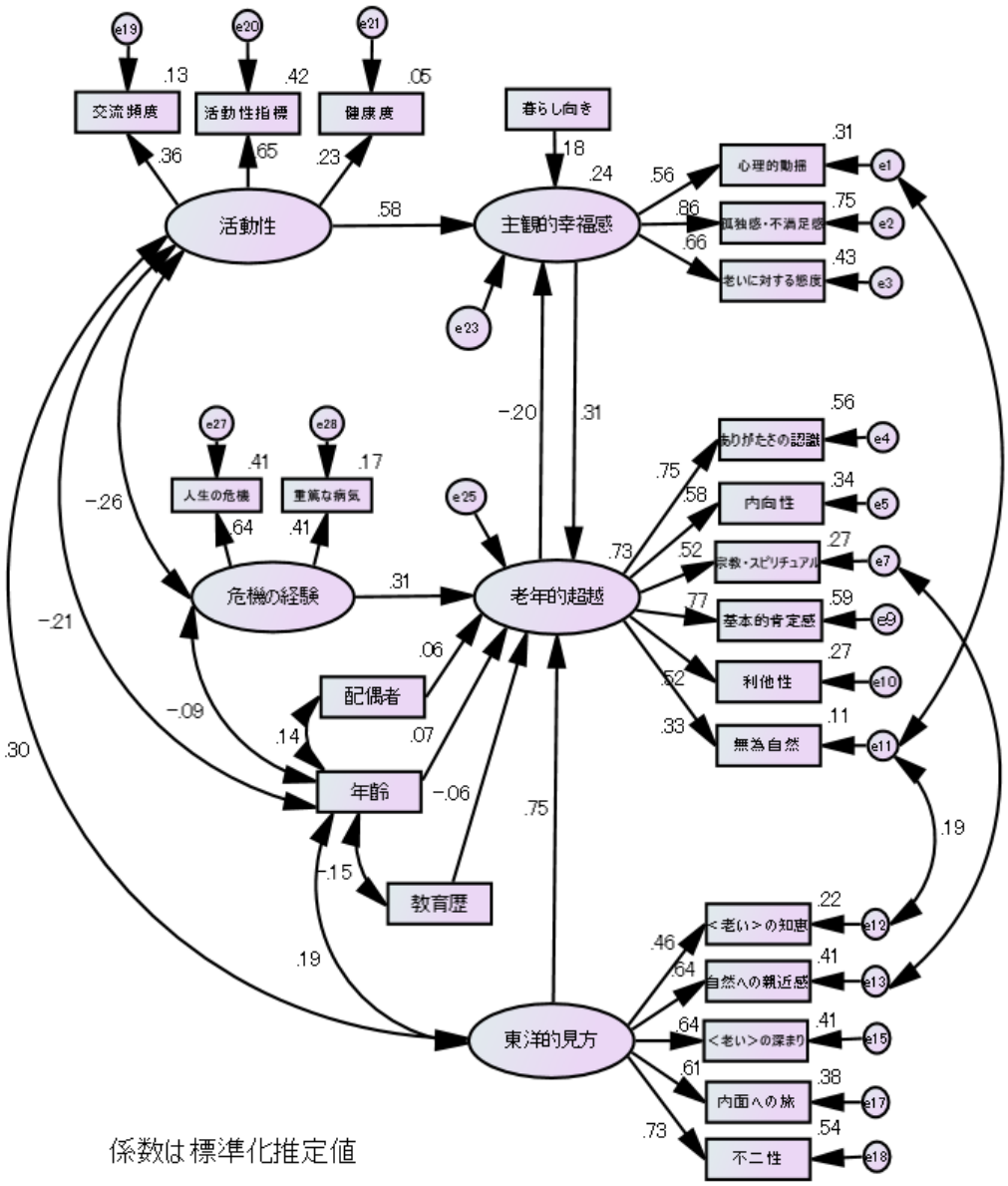


図4-10　男性モデルのパス解析図

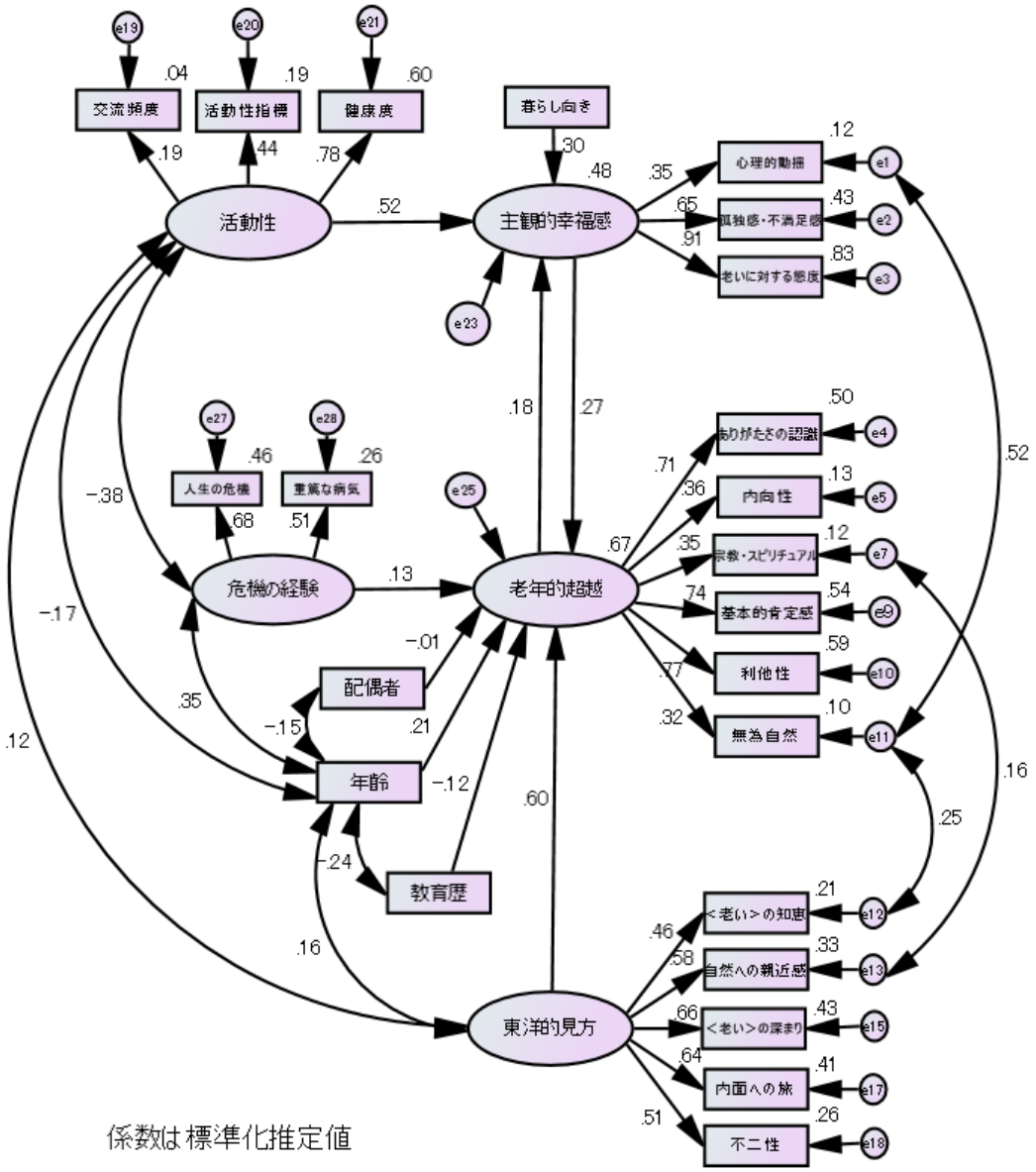


図4-11　女性モデルのパス解析図

表4-10　モデルの適合度、因果係数、決定係数、共分散、因果係数等の検定統計量

	男性	女性	検定統計量
サンプル数（2母集団同時解析）	140	111	
χ^2	625.7		
df	430		
p	0.000		
CFI	0.838		
RMSEA	0.043		
(構造方程式の因果係数)			
活動性→主観的幸福感	0.577 *	0.520	−0.052
危機の経験→老年的超越	0.314	0.134	−0.889
教育歴→老年的超越	−0.065	−0.125	−0.347
暮らし向き→主観的幸福感	0.175	0.301 **	−0.343
東洋的見方→老年的超越	0.754 ***	0.599 ***	−0.869
年齢→老年的超越	0.073	0.211 *	0.948
配偶者→老年的超越	0.057	−0.010	−0.763
主観的幸福感→老年的超越	0.314 **	0.274 *	0.505
老年的超越→主観的幸福感	−0.200	0.183	1.907
(内生潜在変数の決定係数)			
老年的超越	0.727	0.670	
主観的幸福感	0.244	0.485	
(外生変数の共分散)			
活動性⇔危機の経験	−0.264	−0.381	0.209
活動性⇔東洋的見方	0.295	0.120	−1.191
活動性⇔年齢	−0.211	−0.168	0.717
危機の経験⇔年齢	−0.087	0.350 **	2.457 **
東洋的見方⇔年齢	0.194	0.159	−0.174
教育歴⇔年齢	−0.150	−0.242 **	−1.056
配偶者⇔年齢	0.136	−0.149	−2.198 *
誤差項　e7⇔e13	0.305 **	0.157	−1.280
誤差項　e11⇔e12	0.191 *	0.253 **	0.824
誤差項　e1⇔e11	0.490 ***	0.525 ***	1.074

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

注）構造方程式の因果係数、外生変数の共分散については標準化推定値を示す。検定統計量は、因果係数および共分散の男女間における差異を標準正規分布に換算した値を示す。絶対値で1.96以上なら5%水準で有意、2.33以上なら1%水準で有意と判断される。

(2)分析結果の評価

モデル全体の適合性　選択されたモデル C の適合度指標は、CFI は 0.838 と一般的な基準とされる 0.95 を下回っているが、RMSEA は 0.043 と基準とされる 0.05 を下回っており、モデルの全体的評価としては妥当なモデルと判断したが、モデル細部の評価については以下のとおりである。

a　測定方程式の影響指標（観測変数のパス係数）

男性は**図 4-10** に、女性は**図 4-11** に測定方程式の影響指標の標準化推定値を示す。**表 4-10** にはこれらの影響指標の評価確率を記載していないが、男性、女性ともに、『活動性』→「健康度」へのパスが有意ではなかったが、その他のパスはすべて有意となっており、特に、『主観的幸福感』『老年的超越』『東洋的見方』の観測変数については、すべて１％水準で有意となっている。このようなことから、各潜在変数が観測変数によって適切に測定されているものと考えられる。

b　構造方程式の因果係数（パス係数）

図 4-10 および**図 4-11** に構造方程式の因果係数の標準化推定値を、**表 4-10** に標準化推定値（＊：有意水準）および男女の因果係数を一対比較しその有意差を検定した結果を示す。これらの図表から有意なパスおよび共変関係を男女ごとに拾い上げると以下のとおりである。(　　) 内は、パス解析図に表示した標準化推定値を示す。

男性　有意なパスは、『活動性』→『主観的幸福感』(0.58)、『主観的幸福感』→『老年的超越』(0.31)、『東洋的見方』→『老年的超越』(0.75) である。また、有意な共変関係としては、観測変数の誤差項間、e1⇔e11 (0.49)、e7⇔e13 (0.31)、e11⇔e12 (0.19) で認められる。

女性　有意なパスは、「暮らし向き」→『主観的幸福感』(0.30)、『主観的幸福感』→『老年的超越』(0.27)、『東洋的見方』→『老年的超越』(0.60)、「年齢」→『老年的超越』(0.21) である。また、有意な共変関係としては、『危機の経験』⇔「年齢」、「年齢」⇔「教育歴」、観測変数の誤差項間、e1⇔e11 (0.52)、e11⇔e12 (0.25) で認められる。

両母集団の共通点と相違点　構造方程式のパスでは、『主観的幸福感』→『老年的超越』、『東洋的見方』→『老年的超越』が男女とも有意なパスとなっている。一方、『活動性』→『主観的幸福感』、「年齢」→『老年的超越』については男女間で違いが認められる。共変関係については、観測変数の誤差変数間で、e1⇔e11、e11⇔e12 が男女ともに有意となっているが、e7⇔e13 で違いが認められる。

一方、男女間の因果係数や共分散に一対比較で有意な差があるのかどうかを検討した結果をみると、**表 4-10** の検定統計量の欄に示すように、因果係数について有意差は認められず、共分散について『危機の経験』⇔「年齢」、「配偶者」⇔「年齢」において有意差が認められる。

c　内生的潜在変数、内生的観測変数の決定係数

内生的潜在変数、内生的観測変数の決定係数（r^2）は、仮定した因果連鎖が有効なものか否かを判断するうえで重要な指標であり、**図 4-10** および**図 4-11** において、それぞれの該当する変数の右肩に示す数値である。

男性　『主観的幸福感』が r^2 =.24、『老年的超越』が r^2 =.73 となった。因果連鎖の最終的な結果となる『老年的超越』の決定係数が r^2=.73 というのは高い値であり、モデルに導入した構造変数によって『老年的超越』を 70%近く説明できている。一方、内生的観測変数の決定係数をみると、『活動性』では「交流頻度」で r^2=.13、「健康度」で r^2=.05 と 0.2 を下回っており、他にも 0.3 を下回る観測変数が 5 つみられるが、これらの観測変数については、このモデルで想定した潜在変数では説明できる割合が低く、誤差項が寄与している可能性が高い。

女性　『主観的幸福感』が r^2 =.49、『老年的超越』が r^2 =.67 となった。因果連鎖の最終的な結果となる『老年的超越』の決定係数が 0.67 というのは男性と同様十分高い値であるといえる。一方、内生的観測変数の決定係数をみると、『活動性』では「交流頻度」で r^2=.04、「活動性指標」で r^2=.19 と 0.2 を下回っており、他にも 0.3 を下回る観測変数が 7 つみられるが、これらの観測変数については、男性と同様、誤差項が寄与している可能性が高い。

以上の結果は、いわばモデル C の局所的な違いについて、因果係数や共分散の統計的な有意性に基づき検討したものであったが、因果係数の男女間における一対比較（検定統計量）では有意差が認められない。そこで、両母集団の共分散構造の違いを検証するため、モデル C を用いて以下に示すような等値制約を置いたモデル（制約の強さは、C①＜C②＜C③の順）を構成し、CFI、RMSEA、AIC などの適合度指標をもとに両母集団間の等質性・異質性を確認した。

モデル C①：母集団間で、潜在変数の影響指標（因子パターン）をすべて等値

モデル C②：モデル C①に、さらに内生的観測変数の誤差分散・共分散をすべて等値

モデル C③：モデル C②に、さらに構造方程式の因果係数（パス係数）と共分散をすべて等値

以上の 3 つのモデルについて分析を行った結果を**表 4-11** に示す。等値制約を設けなかったモデル C の適合度指標（CFI=.838、RESEA=.043、AIC=961.7）と比べると、モデル C①、C②とはそれほど大きな差はないように思えるが、モデル C③とは明らかな違いがみられる。これらのことから、結論としては次のようなことが言えるであろう。

表4-11 等値制約モデルの適合度

モデル	制約条件	CFI	RMSEA	AIC
C①	測定不変(因子パターン)	0.823	0.044	965.7
C②	測定不変＋内生観測変数の誤差分散･共分散	0.816	0.044	952.1
C③	測定不変＋内生観測変数の誤差分散･共分散＋構造方程式の因果係数･共分散	0.759	0.049	995.5

(1)　モデル C①からは、男女間で同質の因子構造（潜在変数によって説明される観測変数がほぼ等値）が存在することについての有力な証拠が得られた。

(2)　モデル C②からは、観測変数に与える独自因子（誤差）の影響について、男女間で大きな違いは認められない。

(3)　モデル C③の適合度が小さくなるのは、逆説的ではあるが、男女間で構造方程式の因果係数や共分散に違いがあることを示唆するものである。

4.4.3　考察

まず前提として、『老年的超越』へ向かうパスが MIMC モデルとなっているため、この点をふまえて考察する[14]。

男女間の共通点　男女とも『主観的幸福感』と『東洋的見方』が『老年的超越』を高める重要な要因となっていることは明らかである。『老年的超越』の決定係数が男女とも 0.73～0.67 と高い値を示していることからも、この２つの潜在変数からのパスは因果関係の規定力が強い。特に、『東洋的見方』からの影響は 0.1%水準で有意であり、高い確率で因果関係の存在が示唆された。

一方、老年的超越が生活満足度を高めるという Tornstam (2005) の仮説については、本分析では基準変数を主観的幸福感としていることとの違いはあるが、男女とも『老年的超越』から『主観的幸福感』へのパスは有意ではなく、この知見を積極的に支持するものではなかった。ただし、女性の因果係数の値は 0.18 となっており、この方向の影響が全くないとまでは言い切れないであろう。『主観的幸福感』と『東洋的見方』が『老年的超越』に及ぼす影響については、本章 4.5 節においてさらに詳しく検討する。また、「暮らし向き」から『主観的幸福感』への影響については、女性では 1%水準で有意であり、男性でも有意な傾向が認められた。

[14] このモデルのように『老年的超越』に６本ものパスが向かっている場合は、他の変数の性質や条件を考慮しないと適切な解釈はできないが、そうするには自ずと限界がある。したがって、ここでの考察は、構造方程式のパス係数が有意で規定力も大きかった『東洋的見方』『危機の経験』「年齢」を軸に行っている。

なお、「心理的動揺」と「無為自然」、「無為自然」と「<老い>の知恵」の誤差変数間でみられた有意な共変関係からは、潜在変数の『主観的幸福感』『老年的超越』『東洋的見方』では説明しきれない<老い>に対する受容的態度を規定する共通因子の存在が示唆される。本来、「無為自然」からは、“あるがままの状態を受け入れる”といったように受容的な態度がイメージされるが、「無為自然」の決定係数が男女ともに 0.1 程度と極めて小さいということは、JGS-R の下位尺度(無為自然)では『老子』に由来するこの概念を十分に測定できていない可能性があり、このことが上記の共変関係が認められる原因（背景に、<老い>を肯定的に捉える思考の存在）の一つとなっているのではないかと思料される。

男女間の相違点　**表 4-10** で示したように構造方程式の因果係数については男女間で有意差は認められなかったが、等値制約を置いたモデル C③の分析では、男女間で全ての母数が等しいという仮説は受け入れ難かった。したがって、ここでは、モデル C の分析結果で示した男女それぞれの因果係数の統計的有意性(**表 4-10**、**図 4-10** および**図 4-11**)をよりどころに、男女間の相違点について考察する。

まず、『活動性』から『主観的幸福感』への影響については、男性では 5%水準で有意であったが、女性では有意な傾向は認められなかった。しかし、因果係数の値をみると、男性が 0.58 であるのに対して女性は 0.52 と大きな違いは認められず、女性において、『活動性』からの影響が全くないとは言い切れないであろう。また、『活動性』を構成する３つの観測変数の相関関係や決定係数の男女間の違いに着目すると、男性では「交流頻度」と「活動性指標」に r=.29、女性では「活動性指標」と「健康度」に r=.33 の有意な相関が認められる構造となっており、『活動性』という潜在変数が３つの観測変数に与える影響が男女間で異なる。すなわち、男性では他者との交流頻度が、女性では健康度のウェイトが高い構造となっている。以上のことから、男女ともに、生活機能がある程度正常に維持されており(「活動性指標」の値が高い)、暮らし向きが良好な場合には、男性では交流機会を多くもっていること、女性では健康度が高いことが、『主観的幸福感』を高めることに寄与している可能性は否定できない。

次に、『主観的幸福感』と『東洋的見方』を除く、他の４つの変数の『老年的超越』への影響についてである。ここでは、「年齢」『危機の経験』「配偶者」および「教育歴」の影響について「年齢」を軸に考察する。

まず、男女間で明らかに違いが認められるのは、「年齢」と『危機の経験』の影響である。「年齢」については、男性では直接的な影響は認められないが、女性では 5%水準で有意な影響が認められる。『危機の経験』については、男性では有意な傾向が認められるが、女性ではそのような傾向は認められない。「年齢」については、『活動性』『危機の経験』「配偶者」「教育歴」『東洋的見方』との間にそれぞれ共変関係を仮定しており、MIMIC モデルとはいえ、「年齢」を軸に要素間の諸関係を分析すると、次のよ

うな特徴がみえてくる。

男性では、「年齢」と『東洋的見方』との間には相関関係（r=.19）が存在する傾向があり、間接的に『老年的超越』へ影響を及ぼしていることが推察される。一方、女性では、「年齢」と『東洋的見方』との間には有意な相関（r=.16）は認められないが、それぞれが直接的に『老年的超越』へ影響を及ぼしている。

次に、「年齢」と『危機の経験』との関連では、男性では有意な相関（r=-.09）は認められないが、女性では1%水準で有意な相関（r=.35）が認められる。これは、女性では年齢の高い者ほど危機の経験も多いことを示しているのであろうが、男性では、そのような関係は認められない。「年齢」と「配偶者」との相関をみると、性別による違いが明確に認められ（男性 r=.14　女性 r=-.15）、特に女性では、年齢の高い者は配偶者がいない割合が高く（観測変数の「人生の危機」では、近親者の死・大切な人との別れなどの頻度を加算）、このことが「年齢」と『危機の経験』に有意な相関が認められる理由の１つとなっているのであろう。なお、男性では『危機の経験』が直接的に『老年的超越』へ影響を及ぼしている傾向が認められるが、女性では、そのような傾向は認められない。

ほかに、「配偶者」と「教育歴」から『老年的超越』への影響については、男女ともパス係数の値は小さく有意でないため、『老年的超越』へ直接的な影響が及んでいるとは考えにくい。「年齢」と「教育歴」との間には、男性では負の有意な傾向の相関（r=-.15）、女性では負の有意な相関（r=-.24）がみられるが、戦前・戦中世代の高齢者では、まだ高等教育を経験している者が少なかったことによるものであろう。なお、女性において、「教育歴」から『老年的超越』へのパスが有意ではないが負の値（男性は無視できるほど小さな値）となっている。先に述べた「年齢」と「教育歴」との負の相関関係から敷衍して考えれば、戦後生まれで比較的年齢が若く高学歴の女性では、老年的超越に懐疑的(あるいは否定的)なことが示唆される。

まとめ

以上はパス解析図や分析結果の諸指標を詳細に眺めた結果であるが、これらを要約すると、おおよそ次のようになる。

(1)　調査対象の高齢者 251 人(男性 140 人、女性 111 人)の SEM による多母集団分析の結果、男女間でほぼ同質の共分散構造（配置不変性）が認められた。しかし、関連要因の因果関係を判断する根拠となる構造方程式の因果係数の値については、男女間で特徴的な違いが認められた。

(2)　『老年的超越』および『主観的幸福感』の双方向の因果関係については、男女ともに有意な関係は認められなかったが（『主観的幸福感』→『老年的超越』のみが有意)、片方向の分析では、女性において『老年的超越』から『主観的幸福感』

への影響を完全に否定することはできなかった。これらのことは、老年的超越（宇宙的次元や一貫性次元）が生活満足度（本研究では主観的幸福感）を高めるというTornstam（2005）の仮説とは異なる結果である。

(3) 『老年的超越』への因果連鎖において規定力の強い要因は、男女ともに『東洋的見方』であり、次いで『主観的幸福感』である。このことは、少なからず東洋文化の影響をうけている日本人高齢者の≪ものの見方・考え方・感じ方≫が老年的超越を高める有力な要因となっているのではないかという本研究の仮説を支持するものである。

(4) 『活動性』から『主観的幸福感』への影響については、統計的には男性は有意であったが、女性は有意ではなかった（全く影響がないとは言い切れない）。これは、男女間で『活動性』の概念構造が異なる結果であり、男女とも日常の生活機能が一定水準に維持され、暮らし向きが良好な場合には、男性では人との交流機会が多いことが、女性では健康度が高いことが『主観的幸福感』を高める要因となっている可能性は否定できない。

(5) 「年齢」に関しては、MIMICモデルの構造となっているため他の外生的説明（独立）変数との関連も考慮して解釈する必要があるが、それでも「年齢」を軸にして考察すると、次のような特徴が認められる。たとえば、男性では、「年齢」から『老年的超越』への因果係数は有意ではないが、『東洋的見方』を介して間接的に『老年的超越』を高めている可能性は否定できない。一方、女性では、「年齢」から『老年的超越』への因果係数は有意ではあるが、『東洋的見方』との間には有意な相関は認められない。いずれにしても、「年齢」に関しては、男女ともに老年的超越を促進する有力な要因となっていることは間違いないと思われるが、さらに詳細に検討するためには縦断研究が必要となるのであろう。

(6) 『危機の経験』による『老年的超越』への影響では、男性では有意な傾向が認められたが、女性ではそのような傾向は認められなかった。しかし、女性では「年齢」と『危機の経験』との間に有意な正の相関が認められており、MIMICモデルの構造上、影響の可能性は完全には否定できないであろう。男女の平均寿命の違いが影響しているのか、このサンプルでも女性は男性に比べて配偶者のいない者の割合が高く（男性6%　女性49%）、このような結果になっているのではないかと推察される。

(7) 一部の観測変数の誤差変数間に設定した有意な共変関係については、このモデルで想定した『主観的幸福感』『老年的超越』『東洋的見方』では十分説明できない固有因子の存在がうかがわれるが、これが何であるのか手元のデータだけでは明確に述べることはできない。特に、「無為自然」の誤差項は、『主観的幸福感』と『東洋的見方』のそれぞれの観測変数（「心理的動揺」と「〈老い〉の知恵」）の誤差項

とも関わりがあることから、これら３つの潜在変数の背後には共通の二次因子が存在する可能性は高い。一例として、『老子』に由来する「無為自然」については、『老年的超越』から『東洋的見方』の観測変数に組み替えることで、この結果が変わってくることは十分あり得よう。

なお、これまでの分析で明らかとなった老年的超越の関連要因のなかで、主観的幸福感と東洋的見方に関しては、本章4.5節および第５章の質的研究の結果もふまえて、第６章において、さらに総合的な考察を行うこととする。

4.5　主観的幸福感と東洋的見方が老年的超越に及ぼす影響

本章 4.4 節の関連要因分析で明らかとなった『主観的幸福感』と『東洋的見方』の『老年的超越』への複合的な影響について統合的に理解するため、さらに詳細な検討を行う。

4.5.1　方法

本章 4.4 節の関連要因分析で使用した 251 人のデータのうち、さらに背景的変数の欠損値を除いた 237 人のデータを用い、その類似度を手掛かりに階層クラスター分析により調査対象者を分類した。分類の基準とした変数は、PGC モラール・スケールによって計測された『主観的幸福感』(「心理的動揺」「孤独感・不満足感」「老いに対する態度」と３つの下位尺度の合計得点)、および『東洋的見方』(関連要因分析で使用した、「<老い>の知恵」「自然への親近感」「<老い>の深まり」「内面への旅」「不二性」の５つの下位尺度）であり、クラスター化の手法としては Ward 法を用いた。

次に、分類されたクラスターの特徴を把握するため、クラスターを独立変数とし、『主観的幸福感』(前記３つの下位尺度およびその合計得点）および『東洋的見方』(前記５つの下位尺度）を従属変数とする１要因の分散分析を行った。

さらに、クラスターごとで老年的超越にどのような違いがみられるのかを検討するため、『老年的超越』の下位尺度得点（関連要因分析で使用した６つの下位尺度）を従属変数、クラスターを独立変数とする一般線形モデルによる共分散分析を行った。その際、関連要因分析で投入した背景的変数のうち、クラスター間で有意差が認められた変数を共変量としてモデルに投入した。

4.5.2　結果

抽出されたクラスターの特徴　クラスターの形成過程を示したのが**図 4-12** である。この図をもとに分割するクラスターの数を判断することになるが、ここでは、本分析

の目的（『主観的幸福感』と『東洋的見方』の組み合わせ効果の検証や、クラスターに含まれるデータ数のバランス（極端な偏りがないこと）を考慮して、３つのクラスターに分割することとした[15]。

分割されたクラスターの特徴を把握するため、３つのクラスターを独立変数、クラスター分析に投入された９個の変数（主観的幸福感：４個　東洋的見方：５個）を従属変数とする１要因３水準の分散分析を行った結果を**表 4-12** および**図 4-13**、**図 4-14** に示す。表中の数値は、投入した変数のクラスターごとの平均値と標準偏差（*SD*）である。

分散分析の結果は、投入した９変数すべてについて 0.1%水準で有意差が認められた。『主観的幸福感』については下位尺度も含めてほぼ明確に高・中・低と平均得点の差異が認められたが、『東洋的見方』については、中間的なレベルの平均得点は認められず、ほぼ高・低の２階層に分かれた。これらの結果から、３つのクラスターの特徴を挙げると以下のようになる。なお、群の表示で、SWB（subjective well-being）は『主観的幸福感』の略語である。

クラスター１:『主観的幸福感』は、その３つの下位尺度も含めて３群中で最も低い。『東洋的見方』については、５つの下位尺度で低い➡ **低 SWB・低東洋的見方群**（81 人）

クラスター２:『主観的幸福感』は、その３つの下位尺度も含めて中位ではあるが高位寄り。『東洋的見方』については、５つの下位尺度で最も高い➡ **中 SWB・高東洋的見方群**（79 人）

クラスター３:『主観的幸福感』は、その３つの下位尺度も含めて３群中で最も高い。『東洋的見方』については、５つの下位尺度で低くクラスター１とほぼ同様のパターンを示す➡ **高 SWB・低東洋的見方群**（77 人）

[15] Schwartz's Baysian 基準(BIC)による自動判定でも、クラスターの最適な分割数は３となった。

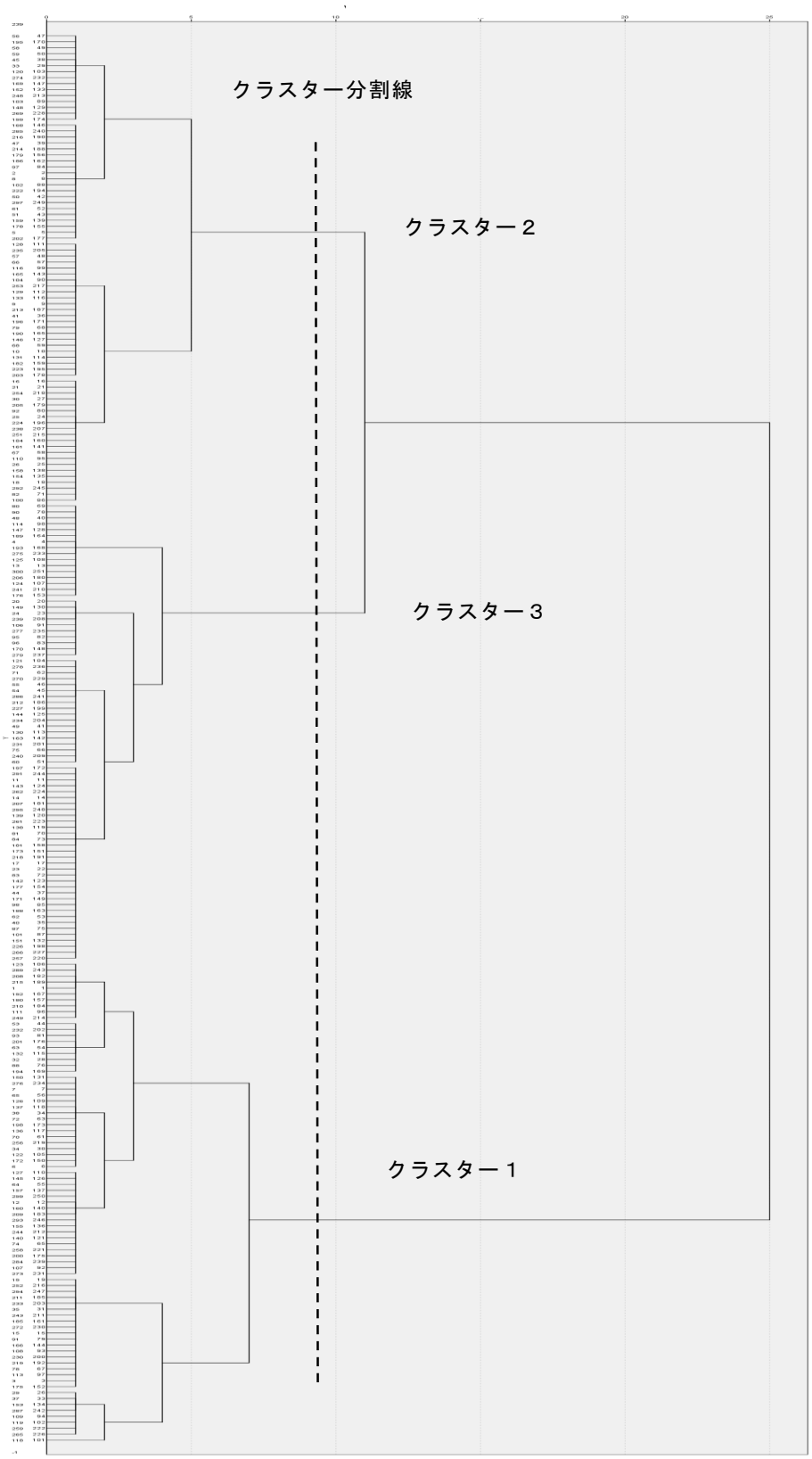


図 4-12 クラスターの形成過程（デンドログラム）

表4-12 分類されたクラスターごとの指標と検定結果

	クラスター1 (n = 81) 低SWB・低東洋的見方群	クラスター2 (n = 79) 中SWB・高東洋的見方群	クラスター3 (n = 77) 高SWB・低東洋的見方群	検定結果			
				df	F値	有意性	多重比較
クラスター分析に投入した変数							
PGCモラールスケール合計点	8.49 (3.02)	13.73 (2.20)	15.16 (1.42)	2 , 234	182.15	$P < .001$	3 > 2 > 1
心理的動揺	3.06 (1.65)	4.95 (1.12)	5.21 (1.03)	2 , 234	64.88	$P < .001$	2,3 > 1
孤独感・不満足感	3.35 (1.42)	4.92 (1.13)	5.52 (0.66)	2 , 234	80.13	$P < .001$	3 > 2 > 1
老いに対する態度	2.09 (1.29)	3.86 (1.15)	4.43 (0.73)	2 , 234	100.48	$P < .001$	3 > 2 > 1
<老い>の知恵	14.35 (3.03)	17.52 (1.94)	13.40 (2.94)	2 , 234	50.72	$P < .001$	2 > 1,3
自然への親近感	7.59 (2.54)	9.70 (1.64)	7.23 (2.31)	2 , 234	28.78	$P < .001$	2 > 1,3
<老い>の深まり	8.67 (1.94)	10.39 (1.53)	8.88 (1.44)	2 , 234	25.50	$P < .001$	2 > 1,3
内面への旅	5.23 (1.72)	6.75 (1.81)	5.60 (1.65)	2 , 234	16.62	$P < .001$	2 > 1,3
不二性	4.14 (1.33)	4.96 (1.23)	4.23 (1.02)	2 , 234	11.11	$P < .001$	2 > 1,3
背景的変数							
年齢	76.30 (6.82)	75.35 (6.21)	74.13 (6.56)	2 , 234	2.18	*n.s*	
性別(男性:0 女性:1)	0.41	0.51	0.42	2 , 234	0.96	*n.s*	
配偶者(あり:1 なし:0)	0.69	0.75	0.81	2 , 234	1.35	*n.s*	
重篤な病気の経験(あり:1 なし:0)	0.53	0.42	0.40	2 , 234	1.56	*n.s*	
人生の危機の経験	1.14	1.06	1.06	2 , 234	0.15	*n.s*	
教育歴	14.72 (1.88)	14.18 (2.20)	14.55 (1.94)	2 , 231	1.43	*n.s*	
暮らし向き	484.88 (118)	534.49 (135)	547.40 (104)	2 , 234	6.08	$P < .01$	2 > 1 , 3 > 1
健康度(健康相当:1 それ以外:0)	0.77	0.90	0.94	2 , 234	5.63	$P < .01$	2 > 1 , 3 > 1
交流頻度	4.26	7.52	6.77	2 , 234	8.66	$P < .001$	2,3 > 1
活動性指標	11.54	12.43	12.42	2 , 231	12.09	$P < .001$	2,3 > 1

注)SWBは主観的幸福感の略記(subjective well-being)
クラスターごとの変数の値は平均値、( )は標準偏差を示す。

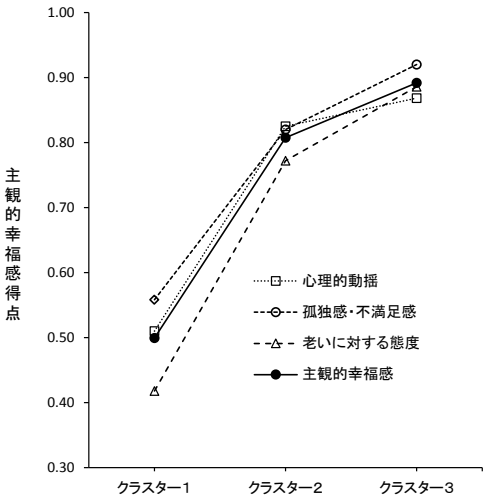


図4-13 クラスターと主観的幸福感の平均得点

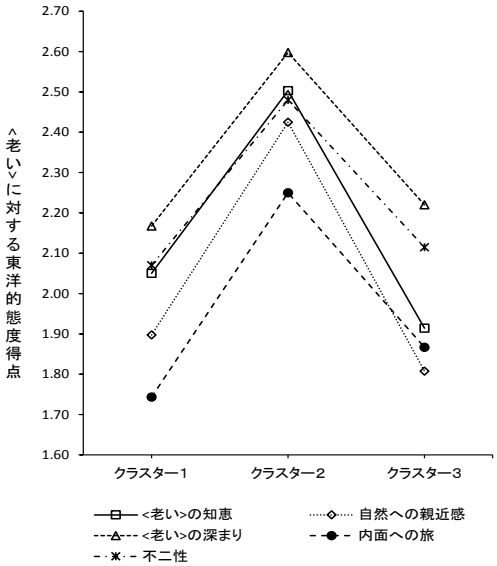


図4-14 クラスターと東洋的見方の平均得点

注) 両図とも縦軸の得点は、項目数で除した平均値を示す。

老年的超越への影響　『老年的超越』の下位尺度得点について、クラスターごとで有意な差があるのかどうか、これを検証するため一般線形モデルを用いた共分散分析を行った。投入する共変量は、**表 4-12** の下欄に示す 10 個の背景的変数の中からクラスター間で有意差が認められた４つの変数（「暮らし向き」「健康度」「交流頻度」「活動性指標」）を用いた。したがって検定結果は、この４つの変数の影響を取り除いたものとなっている。

共分散分析の結果を**表 4-13** および**図 4-15** に示す。表中の数値は『老年的超越』の６つの下位尺度得点のクラスターごとの平均値と *SD* であり、全ての下位尺度においてクラスター間で有意差が認められた。以下は、３つのクラスターからみた『老年的超越』の下位尺度（次元）ごとの特徴である。

「ありがたさの認識」: クラスター２の得点が高く、クラスター１およびクラスター３の得点が低い。

「内向性」: クラスター２の得点が高く、クラスター１およびクラスター３の得点が低い。

「宗教・スピリチュアル」: クラスター２の得点が高く、クラスター１およびクラスター３の得点が低い。

「基本的肯定感」: クラスター２とクラスター３の得点が高く、クラスター１の得点が低い。統計的に有意とはいえないが、クラスター１＜クラスター３＜クラスター２の傾向が読み取れる。

「利他性」: クラスター２の得点が高く、クラスター１およびクラスター３の得点が低い。

「無為自然」: ３つのクラスター間で有意差が認められ、クラスター１＜クラスター３＜クラスター２の順に得点が高くなっている。

表4-13 分類されたクラスターごとの共分散分析の結果

	クラスター1 (n = 81) 低SWB・低東洋的見方群		クラスター2 (n = 79) 中SWB・高東洋的見方群		クラスター3 (n = 77) 高SWB・低東洋的見方群		検定結果			
							df	*F*値	有意性	多重比較
老年的超越下位尺度										
ありがたさの認識	6.33	(0.15)	7.33	(0.15)	6.54	(0.15)	2 , 227	12.11	$P < .001$	2 > 1,3
内向性	5.85	(0.14)	6.50	(0.14)	5.75	(0.14)	2 , 227	8.71	$P < .001$	2 > 1,3
宗教・スピリチュアル	6.79	(0.29)	8.00	(0.28)	6.29	(0.29)	2 , 227	9.89	$P < .001$	2 > 1,3
基本的肯定感	7.18	(0.23)	8.73	(0.23)	8.20	(0.23)	2 , 227	10.84	$P < .001$	2,3 > 1
利他性	5.41	(0.18)	6.07	(0.17)	5.49	(0.18)	2 , 227	4.16	$P < .050$	2 > 1,3
無為自然	4.52	(0.19)	5.99	(0.19)	5.47	(0.19)	2 , 227	14.27	$P < .001$	2 > 3 > 1

注) 共分散分析では、背景的変数の有意性分析（表4-12）で有意となった「暮らし向き」「健康度」「交流頻度」「活動性指標」を共変量として取り込んでいる。したがって、検定結果は、これらの共変量の影響を取り除いたものである。

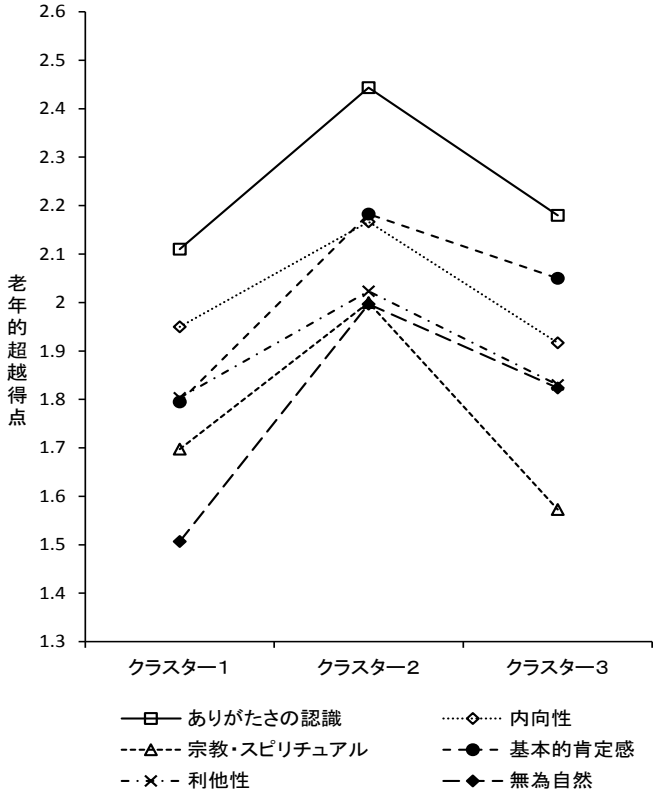


図4-15 クラスターと老年的超越の平均得点

注）縦軸の得点は、項目数で除した平均値を示す。

4.5.3　考察

クラスター分析は、多次元空間における個体の点のバラツキの状態から似た者同士を集めてクラスターを作る手法であることから、データ間の空間的な距離だけが決め手となり、グループを分ける際の絶対的な基準があるわけではない。先にも述べたように、本分析では３つのクラスターに分割したが、BIC（Schwartz's Baysian 基準）による自動判定でも３クラスターが最適と判断されたところであり、この結果は妥当なものといえるであろう。ここでは、以下の４つの観点から考察を行う。

(1)　クラスターからみた『老年的超越』の２つのパターン

共分散分析の多重比較の結果から、『老年的超越』の下位尺度得点のクラスター間の違いを読み取ることができる(**表 4-13**)。また、この結果を図示した**図 4-15** からも明らかな２つのパターンが見えてくる。

第１のグループは、「ありがたさの認識」「内向性」「宗教・スピリチュアル」「利他性」において類似したパターン（クラスター２の得点が最も高いが、クラスター１およびクラスター３の得点が同様に低い）を示すグループであり、第２のグループは、「基本的肯定感」「無為自然」において類似したパターン（クラスター２の得点は最も高く、次いでクラスター３、クラスター１の得点は最も低い）を示すグループである。

２つのグループに共通するのは、①クラスター２において、『老年的超越』下位尺度の得点が６つとも最も高いこと、②クラスター１において、同得点が、６つとも低いことである。異なるのはクラスター３の傾向であり、第１のグループでは、先にも述べたように４つの下位尺度は、クラスター１と同様得点は低いが、第２のグループでは、２つの下位尺度の得点がやや高位寄りの中位にあることである。この違いは何を意味しているのか。

(2)　『主観的幸福感』の『老年的超越』への効果は非線形的

図 4-14 を見ると、『東洋的見方』については、５つの下位尺度得点の分布パターンの違いはほとんど認められないが（クラスター２に比べて、クラスター１およびクラスター３の得点が同程度に低い)、**図 4-13** の『主観的幸福感』については、その３つの下位尺度も含めてクラスター間で明らかな正の増加傾向が認められる。このことは、(1)で述べた２つのグループの違いが、共変量（「暮らし向き」「健康度」「交流頻度」「活動性指標」）の影響を除くと、『主観的幸福感』の違いから説明できる可能性があることを示唆するものである。

すなわち、第１のグループでは、グループの４つの下位尺度得点（「ありがたさの認識」「内向性」「宗教・スピリチュアル」「利他性」）に、『主観的幸福感』が線形的な正の影響を及ぼすとは考えられないが（クラスター１からクラスター２にかけては増加

するが、クラスター３ではクラスター１と同程度に低下する)、第２のグループでは、『主観的幸福感』の高さの違いが、グループの２つの下位尺度得点（「基本的肯定感」「無為自然」）のクラスター間の違いとなって表れている（クラスター２が高いのは第１のグループと同じであるが、クラスター３はクラスター１よりは高い)。

要するに、第１のグループでは、クラスター３の『主観的幸福感』が高いにもかかわらず、『老年的超越』の下位尺度得点はクラスター１と変わらず、第２のグループでは、『主観的幸福感』の高さの違いが、３つのクラスターの『老年的超越』得点の違いとなって現れていることである。このことは、『主観的幸福感』が高いからといって、『老年的超越』も高くなるということではないことを示唆している。

(3) クラスターごとの『老年的超越』の特徴

図 4-15 をクラスターごとに見ると、クラスター１については、『老年的超越』の６つの下位尺度すべてにおいて得点が低く、『老年的超越』には懐疑的(あるいは否定的)な群と考えられる。一方、クラスター２については、『老年的超越』の６つの下位尺度すべてにおいて得点が高く、『老年的超越』を肯定的に捉えている群と考えられる。

さらにクラスター３については、傾向的には『老年的超越』に懐疑的（否定的）ではあるが、「基本的肯定感」と「無為自然」については若干様子が異なる。この点は(2)で述べたように、『主観的幸福感』が影響している可能性が高い。そもそも「基本的肯定感」は、自己に対する肯定的な評価やポジティブ感情を、「無為自然」は、老いに対する肯定的な態度を測定している尺度であり、いずれもポジティブで、かつ受容的な概念であることから考えれば、『主観的幸福感』の高さが正の影響を及ぼすことは理解できるところである。

なお、本章 4.4 節の相関分析の結果(**表 4-6**、**表 4-7**：本章末)を見ても、「基本的肯定感」と「無為自然」は、『主観的幸福感』の下位尺度と正の有意な相関を有していることから明らかである（男性：「基本的肯定感」r=.23～.42 ，「無為自然」r=.19～.48 女性：「基本的肯定感」r=.35～.53 ，「無為自然」r=.20～.57)。

また、クラスター３で「宗教・スピリチュアル」の得点が若干低い傾向にあるのは、『主観的幸福感』が高い者ほど、宗教や霊的なことに対する関心がそれほど高くないことの表れではないかと考えられる。

(4) 『主観的幸福感』と『東洋的見方』の効果の非対称性

『主観的幸福感』が高く、かつ、『東洋的見方』の得点も高い群が抽出されなかったことは、一見意外な気もするが、日本の高齢者の『老年的超越』の特徴を理解する上で、一つの知見が得られたのではないかと考えている。

『主観的幸福感』と『東洋的見方』の関係については、本章 4.4 節の相関分析の結

果からも確かめることができ、女性では、『主観的幸福感』の下位尺度と『東洋的見方』の下位尺度には、ほとんど有意な相関は認められず、男性でも『主観的幸福感』の「老いに対する態度」との間にわずかに相関が認められる程度である。

なお、『主観的幸福感』と『東洋的見方』の非対称的な効果については、第６章の総合的考察でもふれる。

まとめ

この節では、本章 4.4 節の老年的超越の関連要因分析から明らかになった知見を手掛かりに、さらに要因を『主観的幸福感』と『東洋的見方』に絞り込み、クラスター分析の手法を用いて『老年的超越』の個々の下位次元への影響を詳細に分析した。本節の結果を要約すると次のとおりである。

(1) サンプル数 251 人(有効数 237 人)のデータを用いた階層クラスター分析の結果、次のような特徴を有する３つのクラスターに分割された。

クラスター１：低 SWB・低東洋的見方群（81 人）

クラスター２：中 SWB・高東洋的見方群（79 人）

クラスター３：高 SWB・低東洋的見方群（77 人）

(2) 『老年的超越』の下位尺度得点を従属変数、各クラスターを独立変数とする一般線形モデルを用いた共分散分析を行った結果、クラスターごとに次のような特徴が明らかとなった。

クラスター１：『老年的超越』に懐疑的（あるいは否定的）な群

クラスター２：『老年的超越』を肯定的に捉えている群

クラスター３：傾向としては『老年的超越』に懐疑的（あるいは否定的）ではあるが、『老年的超越』のポジティブな側面については肯定的に捉えている群

(3) 『東洋的見方』は、『老年的超越』に強い影響（高める）を及ぼす要因である。

(4) 『主観的幸福感』が低い場合は、『老年的超越』の到達度も低い。しかし、『主観的幸福感』が高いからといって『老年的超越』の到達度が高くなるというものではない。むしろクラスター２にみられるように、『主観的幸福感』が中庸のレベルにある場合に『老年的超越』を高める傾向がうかがえる。このことは、東洋文化の影響をうける日本人高齢者の老年的超越の特徴を理解する上で新たな知見が得られたことを示唆している。また、幸福感についても、東洋の知恵（「足るを知る」など）でもある「バランス志向的幸福観[16]」に通じるところがあるのであろう。

---

16 背景には「陰陽思想」の影響があるとされ、日本では、「あまり幸福であることはかえって不幸を招き、良いこと・悪いことが同数存在するのが真の人生である」とする考え方が根づいている（内田，2020，P.67)。また、バランス志向という点では、『老子』にも「知足の教え」や「禍福倚伏」（一つの事柄には一つの面だけではなく、いろんな面が含まれている）など、東洋の知恵を表すよく知られた言葉がある（蜂屋，2013)。

表4-6　投入した変数の相関係数行列（男性）

変数	年齢	配偶者	同居既婚子	居住地	重篤な病気	人生の危機	教育歴	暮らし向き	健康度	交流頻度
年齢	1									
配偶者	0.151	1								
同居既婚子	0.271 **	0.084	1							
居住地	0.066	-0.097	0.048	1						
重篤な病気	-0.051	-0.025	-0.029	0.113	1					
人生の危機	-0.041	0.014	0.009	0.078	0.258 **	1				
教育歴	-0.125	0.031	-0.019	-0.143	-0.012	-0.044	1			
暮らし向き	-0.066	0.009	0.044	0.094	-0.017	-0.130	-0.017	1		
健康度	-0.048	-0.097	-0.032	0.125	-0.235 **	-0.207 *	-0.086	0.023	1	
交流頻度	0.082	-0.125	-0.100	0.176 *	-0.058	-0.090	-0.086	0.107	0.105	1
活動性指標	-0.151	0.069	-0.239 **	0.165	0.004	-0.066	-0.146	0.199 *	0.138	0.286 **
心理的動揺	-0.082	-0.050	-0.130	-0.031	-0.187 *	-0.143	0.030	0.134	0.081	0.018
孤独感・不満足感	-0.170 *	0.024	-0.113	-0.010	-0.139	-0.106	0.031	0.190 *	0.090	0.168 *
老いに対する態度	-0.120	-0.015	-0.036	-0.064	-0.163	-0.099	0.055	0.184 *	0.258 **	0.211 *
ありがたさの認識	0.118	0.081	-0.081	0.016	-0.010	0.108	-0.075	0.016	-0.061	0.114
内向性	0.098	0.097	0.043	-0.065	0.070	0.067	-0.013	0.201 *	-0.206 *	-0.010
脱二元論	0.245 **	0.204 *	0.148	0.032	0.096	0.084	-0.036	-0.004	-0.184 *	-0.136
宗教・スピリチュアル	0.176 *	0.131	0.025	0.004	0.146	0.118	-0.024	0.001	-0.142	0.009
脱社会的自己	-0.086	-0.133	-0.119	-0.142	-0.107	-0.108	0.061	0.157	0.056	0.073
基本的肯定感	0.086	0.114	-0.005	0.004	-0.024	0.081	-0.099	0.206 *	0.083	0.146
利他性	0.090	-0.012	-0.058	0.034	0.120	0.300 **	-0.076	-0.091	-0.068	0.120
無為自然	0.084	0.026	-0.097	0.004	-0.092	0.065	0.012	0.134	-0.116	0.153
〈老い〉の知恵	-0.023	0.106	-0.094	-0.105	-0.061	0.052	0.016	0.002	-0.110	-0.004
自然への親近感	0.227 **	0.040	0.048	-0.013	0.040	0.112	-0.057	-0.050	-0.116	0.087
運命の受容	0.335 **	0.249 **	0.094	0.046	0.010	0.057	0.006	-0.033	-0.166 *	-0.094
〈老い〉の深まり	0.056	0.176 *	-0.049	-0.106	-0.128	-0.038	0.110	-0.004	-0.071	0.104
囚われのない自由	0.212 *	0.101	0.026	-0.115	-0.076	0.131	0.006	-0.039	-0.181 *	-0.024
内面への旅	0.145	0.027	-0.031	-0.213 *	-0.053	0.022	0.013	0.014	-0.142	-0.017
不二性	0.205 *	0.057	0.052	-0.072	0.026	-0.029	-0.126	0.038	-0.009	0.039

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表4-6b　投入した変数の相関係数行列（男性）（続き）

変数	活動性指標	心理的動揺	孤独感・不満足感	老いに対する態度	ありがたさの認識	内向性	脱二元論	宗教・スピリチュアル	脱社会的自己	基本的肯定感
年齢										
配偶者										
同居既婚子										
居住地										
重篤な病気										
人生の危機										
教育歴										
暮らし向き										
健康度										
交流頻度										
活動性指標	1									
心理的動揺	0.160	1								
孤独感・不満足感	0.278 **	0.554 **	1							
老いに対する態度	0.263 **	0.375 **	0.570 **	1						
ありがたさの認識	0.119	0.054	0.083	0.207 *	1					
内向性	0.187 *	0.010	-0.018	0.108	0.437 **	1				
脱二元論	-0.165	-0.259 **	-0.308 **	-0.182 *	0.146	0.200 *	1			
宗教・スピリチュアル	0.012	-0.099	-0.051	0.010	0.502 **	0.329 **	0.216 *	1		
脱社会的自己	0.084	0.496 **	0.241 **	0.084 **	-0.102	-0.114	-0.391 **	-0.265 **	1	
基本的肯定感	0.262 **	0.057	0.231 **	0.422 **	0.560 **	0.440 **	0.065	0.350 **	-0.158	1
利他性	0.103	-0.169 *	-0.099	0.179 *	0.396 **	0.326 **	0.305 **	0.174 *	-0.263 **	0.413 **
無為自然	0.129	0.481 **	0.185 *	0.256 **	0.271 **	0.209 *	0.050	0.082	0.223 **	0.143
〈老い〉の知恵	0.100	0.112	0.008	0.084	0.279 **	0.289 **	0.041	0.258 **	0.017	0.161
自然への親近感	0.189 *	-0.125	-0.087	0.065	0.362 **	0.274 **	0.169 *	0.442 **	-0.098	0.282 **
運命の受容	-0.115	-0.091	-0.235 **	-0.301 **	0.120	0.122	0.327 **	0.130	-0.199 *	0.055
〈老い〉の深まり	0.157	0.042	0.032	0.248 **	0.419 **	0.441 **	0.173 *	0.197 *	-0.119	0.475 **
囚われのない自由	-0.051	0.090	-0.045	-0.153	0.026	0.246 **	0.091	0.183 *	-0.030	0.058
内面への旅	0.145	-0.076	0.006	0.209 *	0.298 **	0.302 **	0.013	0.312 **	-0.133	0.350 **
不二性	0.036	-0.137	0.054	0.173 *	0.450 **	0.299 **	0.194 *	0.271 **	-0.178 *	0.565 **

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表4-6b　投入した変数の相関係数行列（男性）（続き）

変数	利他性	無為自然	〈老い〉の知恵	自然への親近感	運命の受容	〈老い〉の深まり	囚われのない自由	内面への旅	不二性
年齢									
配偶者									
同居既婚子									
居住地									
重篤な病気									
人生の危機									
教育歴									
暮らし向き									
健康度									
交流頻度									
活動性指標									
心理的動揺									
孤独感・不満足感									
老いに対する態度									
ありがたさの認識									
内向性									
脱二元論									
宗教・スピリチュアル									
脱社会的自己									
基本的肯定感									
利他性	1								
無為自然	0.135	1							
〈老い〉の知恵	0.110	0.316 **	1						
自然への親近感	0.295 **	0.089	0.312 **	1					
運命の受容	0.123	0.020	0.145	0.086	1				
〈老い〉の深まり	0.225 **	0.265 **	0.416 **	0.331 **	0.200 *	1			
囚われのない自由	-0.036	0.161	0.346 **	0.104	0.202 *	0.225 **	1		
内面への旅	0.325 **	0.024	0.364 **	0.488 **	0.057	0.314 **	0.165	1	
不二性	0.318 **	-0.005	0.285 **	0.475 **	0.202 *	0.460 **	0.012	0.438 **	1

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表4-7　投入した変数の相関係数行列（女性）

変数	年齢	配偶者	同居既婚子	居住地	重篤な病気	人生の危機	教育歴	暮らし向き	健康度	交流頻度
年齢	1									
配偶者	-0.239 *	1								
同居既婚子	0.159	-0.211 *	1							
居住地	0.092	-0.187 *	0.155	1						
重篤な病気	0.177	-0.169	0.053	-0.038	1					
人生の危機	0.269 **	-0.133	0.042	0.213 *	0.347 **	1				
教育歴	-0.267 **	0.068	-0.150	0.025	-0.095	0.039	1			
暮らし向き	-0.015	0.209 *	-0.028	-0.146	-0.110	-0.108	0.037	1		
健康度	-0.108	0.143	-0.101	-0.051	-0.218 *	-0.203 *	-0.054	0.210 *	1	
交流頻度	0.196 *	-0.055	-0.008	0.116	-0.111	-0.042	-0.086	0.013	0.106	1
活動性指標	-0.283 **	0.082	-0.249 **	0.095	-0.194 *	-0.100	0.126	0.167	0.329 **	0.157
心理的動揺	0.014	0.091	0.030	0.029	-0.066	-0.123	-0.238 *	0.114	0.124	0.236 *
孤独感・不満足感	-0.053	0.260 **	0.080	-0.045	-0.065	-0.057	-0.172	0.236 *	0.313 **	0.247 **
老いに対する態度	-0.026	0.180	0.048	-0.042	-0.045	-0.005	-0.065	0.389 **	0.459 **	0.150
ありがたさの認識	0.266 **	-0.088	0.061	0.061	0.022	-0.040	-0.136	0.099	0.106	0.279 **
内向性	0.128	-0.161	0.115	0.093	-0.007	0.057	-0.098	0.037	-0.029	0.103
脱二元論	0.280 **	-0.070	0.042	0.033	0.084	0.061	-0.030	0.045	-0.230 *	-0.137
宗教・スピリチュアル	0.096	-0.163	0.048	0.077	-0.054	-0.074	-0.105	-0.024	-0.069	-0.050
脱社会的自己	0.124	0.006	0.046	0.002	0.090	-0.049	-0.293 **	0.117	0.119	0.089
基本的肯定感	0.251 **	-0.050	0.150	0.141	0.071	0.177	-0.173	0.169	0.127	0.229 *
利他性	0.389 **	-0.065	0.145	0.106	0.135	0.120	-0.246 **	0.103	0.037	0.267 **
無為自然	0.108	-0.011	0.061	0.066	0.039	-0.025	-0.208 *	0.063	0.009	0.091
〈老い〉の知恵	0.076	-0.130	-0.022	0.056	0.063	-0.024	-0.062	-0.025	-0.062	0.065
自然への親近感	0.138	-0.084	-0.031	0.084	-0.036	-0.053	-0.022	0.083	0.033	0.073
運命の受容	0.218 *	-0.043	0.139	0.011	-0.074	0.082	-0.169	0.035	-0.161	-0.025
〈老い〉の深まり	0.077	-0.108	0.137	0.007	0.044	-0.072	-0.073	0.080	0.085	0.067
囚われのない自由	0.042	-0.023	-0.076	-0.057	0.065	-0.039	0.106	0.037	-0.103	-0.203 *
内面への旅	0.119	-0.060	-0.159	0.087	-0.024	0.041	-0.124	0.105	0.077	0.210 *
不二性	0.216 *	-0.173	-0.057	0.018	0.064	0.040	-0.106	-0.040	0.018	0.240 *

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表4-7b　投入した変数の相関係数行列（女性）（続き）

変数	活動性指標	心理的動揺	孤独感・不満足感	老いに対する態度	ありがたさの認識	内向性	脱二元論	宗教・スピリチュアル	脱社会的自己	基本的肯定感
年齢										
配偶者										
同居既婚子										
居住地										
重篤な病気										
人生の危機										
教育歴										
暮らし向き										
健康度										
交流頻度										
活動性指標	1									
心理的動揺	-0.075	1								
孤独感・不満足感	0.230 *	0.464 **	1							
老いに対する態度	0.213 *	0.363 **	0.605 **	1						
ありがたさの認識	0.025	0.073	0.089	0.221 *	1					
内向性	0.011	0.003	0.013	0.050	0.286 **	1				
脱二元論	-0.130	-0.216 *	-0.294 **	-0.292 **	0.030	0.176	1			
宗教・スピリチュアル	-0.120	-0.015	-0.173	-0.055	0.362 **	0.248 **	0.128	1		
脱社会的自己	-0.162	0.453 **	0.423 **	0.360 **	0.123	0.001	-0.245 **	0.064	1	
基本的肯定感	0.062	0.160	0.346 **	0.527 **	0.458 **	0.285 **	-0.139	0.211 *	0.337 **	1
利他性	-0.045	0.071	0.158	0.236 *	0.594 **	0.320 **	0.105	0.292 **	0.307 **	0.566 **
無為自然	-0.144	0.566 **	0.251 **	0.196 *	0.193 *	0.121	0.028	0.206 *	0.404 **	0.285 **
〈老い〉の知恵	-0.079	0.161	-0.090	-0.039	0.204 *	0.228 *	0.125	0.153	0.078	0.096
自然への親近感	0.207 *	0.072	0.031	0.142	0.361 **	0.088	0.002	0.318 **	0.191 *	0.343 **
運命の受容	-0.160	0.178	-0.024	-0.122	0.013	0.167	0.220 *	0.259 **	0.059	0.028
〈老い〉の深まり	-0.080	0.077	0.032	0.160	0.400 **	0.120	-0.095	0.190 *	0.170	0.358 **
囚われのない自由	-0.152	0.028	-0.163	-0.090	0.016	0.094	0.085	0.107	-0.076	-0.029
内面への旅	0.167	0.105	0.194 *	0.099	0.430 **	0.036	-0.018	0.176	0.083	0.277 **
不二性	0.039	0.089	0.076	0.054	0.371 **	0.185	0.127	0.253 **	0.141	0.230 *

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表4-7b　投入した変数の相関係数行列（女性）（続き）

変数	利他性	無為自然	〈老い〉の知恵	自然への親近感	運命の受容	〈老い〉の深まり	囚われのない自由	内面への旅	不二性
年齢									
配偶者									
同居既婚子									
居住地									
重篤な病気									
人生の危機									
教育歴									
暮らし向き									
健康度									
交流頻度									
活動性指標									
心理的動揺									
孤独感・不満足感									
老いに対する態度									
ありがたさの認識									
内向性									
脱二元論									
宗教・スピリチュアル									
脱社会的自己									
基本的肯定感									
利他性	1								
無為自然	0.123	1							
〈老い〉の知恵	0.093	0.353 **	1						
自然への親近感	0.330 **	0.085	0.151	1					
運命の受容	0.010	0.368 **	0.030	0.107	1				
〈老い〉の深まり	0.220 *	0.193 *	0.508 **	0.374 **	-0.009	1			
囚われのない自由	-0.099	0.254 **	0.482 **	0.107	0.037	0.258 **	1		
内面への旅	0.469 **	0.075	0.191 *	0.429 **	-0.075	0.379 **	0.084	1	
不二性	0.330 **	0.130	0.300 **	0.270 **	0.140	0.296 **	0.019	0.318 **	1

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

第５章　質的研究

第４章の量的研究では、質問紙調査によって得られた数値データを統計解析することによって、調査対象者の一般的な傾向やパターン、老年的超越に影響を及ぼす要因などについて明らかにしてきた。しかし、現在を生きる高齢者が自分の〈老い〉や、その先に確実に訪れる〈死〉についてどのように捉えているのか、この点を理解するためには量的研究だけでは限界がある。第４章の量的研究が「森を見る」ことに主眼を置いたものであるとするならば、本章の質的研究は「木を見る」ことに焦点を当てるものであり、視点の異なるこれらの分析をふまえて、さらに日本人の老年的超越の特徴について考察する。したがって、本章における問いは、次のように設定した。

(1)　量的研究で明らかとなった３つの類型について、質的研究でも確認できるのか。確認できるとすれば、どのような個別性や特殊性があるのか。

(2)　３つの類型の個別性や特殊性を超えて、共通する要素、異なる要素はどのようなものか。類型を超えた一般的なパターンが存在するのか。

5.1　方法

第４章でも述べたが、17 人の高齢者[1]（後期高齢者：8 人、超高齢者：9 人）を分析対象とした（以下、研究協力者という）。この人たちの選定にあたっては、①年齢は 75 歳以上で 80 歳代を中心に 90 歳代も含まれること、②構成は男女のバランスがおおよそ保たれていること、③60 分程度のインタビューに応えられる体力・健康度を有していること、④調査の内容に関心があり自主的な協力が得られること、⑤京都府内に在住しており、農村部・都市部のバランスがある程度保たれていることを条件とし、具体的には、公益財団法人京都 SKY センターから紹介を受けた人、筆者が個人的に研究協力を依頼した人を分析対象とした。質問紙は事前に郵送し、インタビューは半構造化自由回答法にもとづき行った。調査期間は、2019 年 2～3 月であった。

本研究の主要テーマが老年的超越の関連要因、なかでも東洋的見方の影響を考察することにあるので、第３章でも述べたように中核的なコード（概念的カテゴリー）は概ね絞り込まれている[2]。したがって、インタビューでの設問項目は、この考え方に基づき次の 12 項目（太字）のコード（概念的カテゴリー）とした。

生まれ育った時代や文化の影響は、その人の性格や自己観・人間観、ひいては幸福観に影響を及ぼすと考えられるので（コホート効果）、コード名は、**生きた時代、幸福観、性格・自己観・人間観**とした。さらに Tornstam（2005）の老年的超越理論（以下、老

[1] 高齢者の区分は、第４章 脚注１に示した定義による。

[2] 第３章の図 3-1（「東洋的見方」とその構成要素）や表 3-3（〈老い〉に対する東洋的態度の設問項目）を手掛かりに類似した要素をグルーピングし、「小見出し」（表札）をつけたものがコードである。

年的超越理論とする）の３つの次元（宇宙的次元、自己の次元、社会と個人との関係の次元）のうち、東洋文化の影響を受ける日本人高齢者では「宇宙的次元」との関連が考えられるので、コード名は、**自然・芸術に共感する心、回想、人生の危機、無常観・死生観、宇宙的感覚（命の連鎖）、共時的体験(夢と現実の一致)、時間認識、空間認識**とした。また、老年的超越理論の３つの次元には含まれないが、東洋の老子哲学に因んで**無為自然**とした。

実際のインタビューでは、これらのコードが意味するところを念頭に置きながら、対話を通じて体験談や考え方を聴取した。コードの含意する内容は、第３章で述べた「東洋的見方」に基づくものであるが、抽象的で難解にならないよう留意しながら会話を組み立てた。

なお、**宇宙的感覚（命の連鎖）**については、その人の宇宙観のほかに、一体性（母性的な愛）の象徴としての「月」と、二元性（光と闇）の象徴としての「太陽」を例示し、どちらに親近感を覚えるかを聞いた[3]。また、**時間認識**[4]**と空間認識**[5]については、簡易なサークル・テストを行った。

分析手法としては、まず、研究協力者 17 人の質問紙調査で得られた量的データおよびインタビューで得られた質的データのすべてについて 1 次情報処理（発話内容を文書セグメントとして要約）を行い２次元のマトリックス表[6]で整理した。この表は巻末資料に**要約版**として添付しているが、表側の類型は、第４章のクラスター分析で３つの類型[群]に分類されているのでこの区分に従っている。なお、インタビューでは、その場で調査者が質問を読み上げ、本人が質問紙の設問を埋めていったケースもあったため、制限時間切れとなり予定した設問の一部は未回答となったものもあった。したがって、マトリックス表のコード（概念的カテゴリー）欄については空欄となっている個所がある。

ところで、この**要約版**では類型ごとに区分されているとはいえ、個々人の発話内容がマトリックス表に埋め込まれているだけで絞り込まれていないため、全体のパターンを大づかみに捉えることは困難である。そこで、さらに量的データと文書セグメン

---

[3] 河合（1977）は、日本人の意識構造について「夢」を例に挙げ説明するなかで、「西洋の意識は太陽の意識であり、東洋のそれは月の意識であるという言いかたもできる」（p.184）と述べており、この話を参考にした。

[4] 正規のサークル・テスト（都築他，2007，p.30）ではないが、過去（これまでに生きてきた時間）、現在（今生きている時間）、未来（このあと生きるであろう時間）について、現時点での関心の度合いをサークルの大きさで表現してもらった。

[5] 自分が生活を営む空間領域について、近景（自分や家族の身近な問題）、中景（地域や文化に関わる問題）、遠景（神仏や宇宙などのスピリチュアルな世界）と区分した場合、現時点における関心の度合いをサークルの大きさで評価してもらった。

[6] 縦方向は、類型ごとに分類された 17 人の研究協力者、横方向は、背景的変数（属性等）、老年的超越下位尺度得点（JGS-R）、〈老い〉に対する東洋的態度の下位尺度得点、主観的幸福感（PGC モラール・スケール）、および 12 項目のコード（概念的カテゴリー）で構成している。

トの内容を圧縮・要約して示したのが**事例 ― コード・マトリックス表**である（**表 5-1**：本章末）。

表側は３つの類型を示し、研究協力者の数は、類型Ⅰ：６人、類型Ⅱ：６人、類型Ⅲ：５人であった。また、表頭は**要約版**と同様、背景的変数（属性）、老年的超越下位尺度得点、〈老い〉に対する東洋的態度下位尺度得点、主観的幸福感、および 12 項目のコード（概念的カテゴリー）を示す。表中の得点化された数値については、類型内の平均値および標準偏差（*SD*）である。

各類型に対応するコード（概念的カテゴリー）の内容については、**要約版**で共通する発話内容がある場合にはこれを集約・縮約し、そうでない場合には個々の発話内容をさらに圧縮するなどの２次加工を行ったものを記載した。集約や縮約にあたって判断に迷う場合は発話内容に立ち還り、調査者の恣意性を排するよう留意した。

5.2　分析

5.2.1　事例分析

本節では、巻末資料のインタビューデータの事例 ― コード・マトリックス表（**要約版**）および**表 5-1**（本章末）を用い、３つの類型ごとに事例分析を行った結果について述べる。ここでの主たる内容は、(A) 類型ごとの特徴についての定性的分析であるが、(B) 年齢と老年的超越、東洋的見方、主観的幸福感との関係については、類型ごとでは各々のサンプル数が少数となり傾向を捉えるには無理があるため、性別による違いに留意しつつ研究協力者 17 人全体のおおまかな傾向を論じることとする。

（A）類型ごとの特徴

ここでの内容としては、第１は、量的データとして収集された背景的変数（属性等）、および、老年的超越、東洋的見方、主観的幸福感の下位尺度得点について類型ごとに整理を行い、クラスター分析の結果（*N*=237 人の全体平均）と比較すること[7]。第２は、12 個のコード（概念的カテゴリー）ごとに、類型ごとの特徴を集約して記述することである。なお、類型の属性（群）としては、クラスター分析で用いたものをそのまま当てているが、これは、主観的幸福感と東洋的見方を基準変数として類分けしたものであり、本節以降でも明らかになるように、質的データと組み合わせることによって、単なる２次元（主観的幸福感と東洋的見方）では捉えきれない研究協力者の「生きざま」にかかわる意味深い側面が浮き出てくることに留意が必要である。

[7] 事例分析およびコード分析では、老年的超越と東洋的見方の得点として下位尺度の単純加算値を指標に用いたが、老年的超越については、増井他（2019）の研究でも８つの下位尺度の合計点が用いられている事例がある。

類型Ⅰ：低 SWB[8]・低東洋的見方群（対象者[9]A～F）

（1）量的データの分析

背景的変数（属性等）　対象者６人のうち性別は、男性１人・女性５人、平均年齢は 85.8 歳（*SD* 5.9 歳；範囲 75-92 歳）、配偶者は「あり」２人・「なし」４人、教育歴は「中等教育」２人・「高等教育」４人である。活動性については、交流頻度は 8.5 人／月（*SD* 5.1 人／月）、活動性指標は 11.0（*SD* 4.0）、健康度は「健康」４人・「不健康」２人、暮らし向きは６人とも「普通」、重篤な病気の経験は６人のうち３人が「あり」となっている。

老年的超越[10]　**図 5-1** に示すように、男性 84 歳の D さん以外は、クラスター１（*n*=81 人）の平均得点（36.08）および全体平均（38.80；*N*=237 人）よりも高い。この点はクラスター分析の結果（クラスター１は低位）とは異なる。３つの類型間で明らかな違いがあるようには思えないが、類型Ⅰは、類型Ⅱおよび類型Ⅲより若干高いようにみえる。

東洋的見方[11]　**図 5-2** に示すように、女性 92 歳の A さん、男性 84 歳の D さん以外は、クラスター１の平均得点（39.98）より高い。全体平均（42.89）との比較では、加えて女性 88 歳の E さんがわずかに下回る程度で、３つの類型間で明らかな違いは認められないが、類型Ⅱを若干下回っているようにみえる。この点はクラスター分析の結果（クラスター１は低位）とも整合する。

主観的幸福感　**図 5-3** に示すように、女性 75 歳の B さん以外はクラスター１の平均得点（8.49）より高いが、全体平均（12.41）との比較では、加えて女性 92 歳の A、男性 84 歳の D、女性 88 歳の E、女性 88 歳の F さんが低い値となっている。類型Ⅰの得点が総じて低いのはクラスター分析の結果（クラスター１は低位）とも整合する。

（2）質的データの分析

生きた時代　70 歳代が１人、80 歳代が４人、90 歳代が１人であるが、この人たちにとって、少年・少女時代は軍国教育一色で外来語が禁止されるなど楽しい思い出は何もない。戦時中は女学生も勤労動員され、また、88 歳女性の E さんは、子供が目の前で機関銃で殺されるのを目撃するなど空襲や爆撃の恐怖も体験した。92 歳女性の A さ

---

[8] Subjective well-being（主観的幸福感）の略語である。

[9] 対象者は、巻末資料に添付した「インタビューデータの事例 ― コード・マトリックス表（要約版）」による。

[10] 第４章（4.4.1（3））での考察に基づき、６つの下位尺度（ありがたさの認識、内向性、宗教・スピリチュアル、基本的肯定感、利他性、無為自然）を用いた。

[11] 第４章（4.4.1（3））での考察に基づき、〈老い〉に対する東洋的態度の５つの下位尺度（〈老い〉の知恵、自然への親近感、〈老い〉の深まり、内面への旅、不二性）を用いた。

んは、終戦直後は厳しい食糧難で食べるものがなく、野草のようなものまで食材として摘みにいった記憶がある。そんな時代でも、あるところには（食べ物が）あるもので世の中の不公平さ・理不尽さを感じたと話す。また 84 歳男性の D さんは、戦後は精神文化が否定され行き過ぎもあったが、科学的になり世の中が明るくなった印象もあったと話す。

青年時代以降は、６人全員が職業（商売、医院手伝い、宗教人、公務員、教員）に従事しており、うち５人（B,C,D,E,F）は、現在でも積極的に地域活動にも関わりをもっている。

生きた時代を振り返ってみて、全員共通して話すのは、「戦争は絶対ダメ。こんな時代はもうコリゴリ」という思いである。

幸福観　４人（A,B,C,D）は、家族や友人、居住している地域の人たちとの良き人間関係に幸福を感じている。また 88 歳女性の F さんは、ありのままの自分を見せることができるようになったという自己解放感に幸福を感じている。この点は、老年的超越理論の３つの次元[12]のうち「社会と個人との関係の次元」に含まれる＜社会的因習からの決別＞に通じる。

性格・自己観・人間観等　６人全員、対人関係では外向的な態度が強く出ているように思われるが、その陰には内向的な態度（自己の内面へと向かう意識の変化）が隠れているようにもみえ、単純な二元化には注意が必要である[13]。特に 88 歳女性の F さんは、「自由に育ったため人の気持ちがわからなかった。この年になって人間は生かされているということをしみじみと思うようになった」と話す。この点は、老年的超越理論の「自己の次元」に含まれる＜自己との向き合い＞や、JGS-R の下位次元に含まれる「宗教もしくはスピリチュアルな態度」に通じる。また、宗教人の 88 歳女性の C さんは、「人は自分で自分の欠点はわからない。人から言われて反省するもの」と話し、同じく 88 歳女性の E さんは、戦時中に出会ったある先生の印象に残る勇気ある振る舞いが、戦後教員となった自分の心の支えとなっていると話す。

無為自然　この言葉から連想される共通のイメージは、「あるがまま」「がんばらない」といったところであるが、84 歳男性の D さんは、「がんばらないに共感はするが、坊さんのような悟りは難しい」という。一方、宗教人の 88 歳女性の C さんは、「自然体もいいが能動的に変えていくことが必要な場合もある」と考えている。学生時代に『老子』を勉強した 88 歳女性の F さんは、「老子はすべてを含んでいる。この点で孔子より老子に共感する」という。

---

[12] 第１章で示した「表 1-1 老年的超越の３つの次元とコードおよび内容」による。なお、本章におい老年的超越理論の３つの次元」といえば、この表で整理したものを指す。

[13] ここでは本人の回答に基づきタイプ分けを行っているが、ユングはすべての人が外向と内向、両方の資質を備えていると指摘している（河合，1967）。以下の類型Ⅱ、Ⅲにおける記述においても同様である。

自然・芸術に共感する心　６人全員、自然が好きで芸術的なことにも関心がある。88歳女性のＣさん、84歳男性のＤさんは、年とともに芸術への共感力が増してきたという。また88歳女性のＦさんは、若いときは演奏のテクニックに感動していたが、今は一生懸命に演奏しようとするその姿に感銘を受けるようになったという。この点は老年的超越理論の「社会と個人との関係の次元」に含まれる＜平凡にして深い知恵の獲得＞に通じる。

回想　84歳男性のＤさんは、1歳の子供を亡くしたときのこと、また、親しい友人を亡くしたときのことを時々思い出すが、このような過去の回想は悲しいもので、未来志向的な回想をすることはないと話す。

人生の危機　６人のうち３人（A,C,D）が、がんなどの重篤な病気を経験している。「人生の危機」ということでは、75歳女性のＢさんは５歳の娘を亡くした経験、88歳女性のＦさんは、子供が学術調査で滞在していたケニアでひき逃げに遭い、ロンドンで緊急手術をしたときの途方に暮れた経験を話した。また、宗教人の88歳女性のＣさんは、がんによる手術で障がい者になったことで人の助けを借りるようになり、おかげさまを実感するようになったと話す。なお、92歳女性のＡさんは、（家族によると）２回の大手術を経験しているにもかかわらず、今はそのことを思い出せない。

無常観・死生観　無常観については、３人（B,D,F）が共感を示す。死生観については、宗教者の88歳女性のＣさんは「死んだら仏になる。人は神仏の加護により助けられている」と明快であるが、88歳女性のＦさんは、「まだ死を受け入れてはいない。生きていることに感謝している」と話し、魂は残された人の記憶に残るので「ちゃんと生きなければ」と考えている。84歳男性のＤさんは、「風にそよぐ葦」のような生き方をしてきたので今さら人生観は変わらないと話す。また92歳女性のＡさんは、「死は誰にでも訪れるもので受け入れるよりしょうがないが、あの世はどんな所かわからないので不安だ」と話す。

宇宙的感覚（命の連鎖）　４人（A,B,D,F）が、一体性（母性的な愛）の象徴として例示した「月」に親近感を覚えると答えた。二元性（光と闇）の象徴として例示した「太陽」に親近感を覚えると答えた人はいなかった。宗教者の88歳女性のＣさんは、「神は宇宙に存在するもので、自分には宇宙に包まれている感覚がある」と話す。88歳女性のＦさんも、「人間は宇宙の一員で一体のもの」と考えている。この２人（C,F）は、地上と宇宙を時空の連続体と捉える東洋的な宇宙観をもっている。

共時的体験（夢と現実の一致）　このような体験を有するのは、６人のうち88歳女性のＦさんのみである。「息子がケニアで事故に遭う前々日に赤ちゃんになっている夢をみた。３日後に事故の知らせがきた。偶然には意味があると思っている」と話す。

時間認識　簡易なサークル・テストを実施した結果、サークルの大きさでは、３人（C,D,F）は、現在＞過去＞未来と「現在」を重視する傾向があり、次いで「過去」、遠

い「未来」のことはわからないという。92 歳女性の A さんは軽い認知症の症状があり、（近い）過去や現在のことについても記憶に残っていないという。ましてや未来のことを考えることはない。また 75 歳女性の B さんは、過去・現在・未来は連続的なもので、それぞれに「境」はないという。この点は、老年的超越理論の「宇宙的次元」に含まれる＜時間定義の変化＞（過去と現在の境界の超越）に通じる。

空間認識　簡易なサークル・テストを実施した結果は、92 歳女性の A さんを除いて４人（B,C,D,F）は、「中景」（地域や文化）を重視する傾向があり、次いで「近景」（自分や家族)、「遠景」（神仏や宇宙）は「近景」と同程度または「近景」より小さい。この４人は、現在も地域活動に関わりをもつ人たちである。「近景」と「遠景」が同程度と答えた２人（C,D）と F さんは、宇宙における魂の存在を肯定する（否定はしない)。

まとめ

６人（男性１人、女性５人）の平均年齢が 85.8 歳と３つの類型の中では一番高い。**老年的超越**に関しては、類型Ⅰの得点は類型Ⅱおよび類型Ⅲより若干高いようにみえ、クラスター分析の結果（クラスター１は低位）とは異なるが、６人のうち５人が女性であること、年齢が１人を除いて 80 歳以上であることによるものであろう。**東洋的見方**に関しては、類型Ⅰの得点は類型Ⅱを若干下回っているようにもみえ、クラスター分析の結果（クラスター１は低位）と大きくは違わない。**主観的幸福感**に関しては、類型Ⅰの得点が総じて低いのはクラスター分析の結果（クラスター１は低位）とも整合するが、インタビュー時の印象からすると３人（B,E,F）の得点が低いのは実態と大きく乖離しているように感じられる。

コード（概念的カテゴリー）に関しては、類型Ⅰの年齢幅が 75～92 歳と広いことなどから、その特徴を一括りで表すことは難しいが、共通項を軸にまとめると、おおよそ以下のようになるであろう。

まず**生きた時代**である。おおむね共通するのは、①少年・少女時代は軍国教育一色で楽しい思い出はなく、終戦直後の厳しい食糧難を経験していること、②全員職業に就いていたこと、③困難な時代を生き延びてきた逞しさがあること、④戦争は絶対ダメとの強い思いをもっていること、⑤今でもボランティア等で社会と関わりをもっていること――である。

幸福観については、家族や友人、地域の人たちとの良き人間関係を挙げる人が多い。F さんのように自己解放感を挙げる人もあり、老年的超越理論の「社会と個人との関係の次元」に含まれる＜社会的因習からの決別＞に通じる。

性格・自己観・人間観等については、外向的な側面が強く出ているが、F さんの「この年になって人間は生かされていると感じる」という点は、老年的超越理論の「自己の次元」に含まれる＜自己との向き合い＞や、JGS-R の下位次元を構成する「宗教もしく

はスピリチュアルな態度」に通じる。

無為自然の共通するイメージは「あるがまま」「がんばらない」であるが、C さんのようにポジティブな捉え方をする人もいる。

６人全員、**自然**が好きで**芸術的**なことにも関心があり、年とともに芸術への共感力が増してきた。F さんは、演奏のテクニックより一生懸命に演奏しようとする姿に感銘を受ける。老年的超越理論の「社会と個人との関係の次元」に含まれる＜平凡にして深い知恵の獲得＞に通じる。

D さんは、子供や親しい友人を亡くしたときのことを時々思い出すが、未来志向的な**回想**をすることはない。

３人が、がんなどの重篤な病気を経験している。特に C さんは、自身が障がい者になったことで、おかげさまを実感するようになった。B さんは５歳の娘を亡くした経験、F さんは子供がケニアでひき逃げに遭い途方に暮れた経験をもつ。ほぼ全員が何らかの**人生の危機**を経験している。

３人が**無常観**に共感を示すが、**死生観**については個々人で異なる。C さんは「死んだら仏になる」と明快であるが、F さんは「魂は残された人の記憶に残るので、ちゃんと生きなければ」と考えている。A さんは、死を受け入れつつも未知なるが故の不安を覗かせる。

４人が「月」に親近感を覚えたが、「太陽」に親近感を覚える人はいない。C さんは「自分は宇宙に包まれている」、F さんも「人間は宇宙の一員で一体のもの」と感じており、この２人は**東洋的な宇宙観**をもっている。

時間認識については、３人は「現在」を重視する傾向があり、次いで「過去」、遠い「未来」のことはわからない。B さんの「過去・現在・未来は連続するもので境はない」との考え方は、老年的超越理論の「宇宙的次元」に含まれる＜時間定義の変化＞に通じる。

空間認識については、４人は「中景」（地域や文化）を重視する傾向があり、次いで「近景」（自分や家族）、「遠景」（神仏や宇宙）は「近景」と同程度か、または「近景」より関心が低い。「近景」と「遠景」が同程度と答えた２人（C,F）は、東洋的な宇宙観をもち魂の存在を肯定する。

類型Ⅱ：中 SWB・高東洋的見方群（対象者 G～L）

（1）量的データの分析

背景的変数（属性等）　対象者６人のうち性別は、男性３人・女性３人、平均年齢は 83.8 歳（*SD* 5.5 歳；範囲 79-94 歳）、配偶者は「あり」３人・「なし」３人、教育歴は「中等教育」３人・「高等教育」３人である。活動性については、交流頻度は 13.8 人／

月（*SD* 6.6 人／月）、活動性指標は 12.3（*SD* 1.2）、健康度は６人全員「健康」、暮らし向きは「普通」５人・「ゆとりあり」1 人、重篤な病気の経験は６人のうち２人が「あり」となっている。

老年的超越　**図 5-1** に示すように、女性 94 歳の H さん以外はクラスター２（*n*=79 人）の平均得点（42.62）を下回っている。また、全体平均（38.80；*N*=237 人）との比較でも、男性 81 歳の J さん、男性 79 歳の K さん、女性 82 歳の L さんは下回っており、このことはクラスター分析の結果（クラスター２は高位）と整合しない。

東洋的見方　**図 5-2** に示すように、女性 94 歳の H さん、女性 81 歳の I さん、女性 82 歳の L さんは、クラスター２の平均得点（49.32）より高い。全体平均（42.89）との比較では、加えて男性 86 歳の G さん、男性 81 歳の J さんの得点が高い。男性 79 歳の K さん以外は総じて得点が高く、このことはクラスター分析の結果（クラスター２は高位）とも整合する。

主観的幸福感　**図 5-3** に示すように、男性 86 歳の G さん、女性 94 歳の H さん、女性 81 歳の I さんは、クラスター２の平均得点（13.73）より高い。全体平均（12.41）との比較では、加えて男性 81 歳の J さんの得点が高い。６人の得点のバラツキは大きいが、傾向としてはクラスター分析の結果（クラスター２は中位）とは整合する。

（2）質的データの分析

生きた時代　70 歳代が１人、80 歳代が４人、90 歳代が１人であるが、少年・少女時代は戦争一色で、３回目の出征となる父親との寂しい別れを経験した人（L）、釜山からの引き揚げで魚雷の恐怖を経験した人（I）、また、農村でも労働力不足でとにかくよく手伝わされたと話す人もいた（J,K）。94 歳女性の H さんは、女学校が終わってすぐに女中に出され、その後も父に言われるまま農家に嫁入りし大家族の下で苦労した経験を話す。

終戦直後は厳しい食糧難で食べるものに苦労したが、81 歳男性の J さんは、ある種の解放感もあったという。戦争が終わって子供も生まれ、ようやく自分の人生が実感できるようになって両親に感謝しているという 81 歳女性の I さん、英語教員になるため大学の英文科へ進学した 86 歳男性の G さん、これからの時代は女性も手に職をと看護学校へ進んだ 82 歳女性の L さん。これらの人たちは、いわゆる戦後の民主主義教育を体験した人たちである。

青年時代以降は、６人全員が職業（教員、農業、公務員、会社員、看護師）に従事しており、うち２人（H,J）は現在でも積極的に地域活動に関わりをもっている。

生きた時代を振り返ってみて共通して話すことは、「戦争はもうコリゴリ、嫌な思い出ばかり」。82 歳女性の L さんは、自分が経験した戦争の悲惨さを孫にきっちりと伝えておくことが大切だという。また、94 歳女性の H さんは 80 歳になったとき、戦争を経

験した者の一声が必要と思って「女性の会」を立ち上げ活動を始めた。

幸福観　３人（H,I,J）は、健康でこの年まで生きてこれたことに感謝（十分に生きた）しつつ、時々の状況に柔軟に対処していくことで生の充実感を感じている。また３人（J,K,L)は、気の置けない仲間や思いを同じくする同好の士との交流に喜びを感じている。特に 82 歳女性の L さんは看護師としての仕事を無事に勤め上げたことに幸福を感じている。ほぼ全員、今が一番幸せだという。

性格・自己観・人間観等　外向的な人（H,L）は、自分軸が振れることなく相手の立場に立って考える傾向がみられる。内向的な人（I,J）は、周りをよく見て状況に応じて自分軸をしなやかに変化させていく。86 歳男性の G さんのように、悟りに近い死生観(死は天命）をもつ人もいる。

無為自然　この言葉のイメージは、「なるようになる」「がんばり過ぎない」「成り行きに任せる」(H,I,J,L)。94 歳女性の H さんは、「自然の力に比べれば、人間の力はしれたもので、自分だけあがいてみても何もできない」と達観している。

自然・芸術に共感する心　自然を好み芸術に関心をもつ人が多い。木や花など身近な自然との対話に喜びを感じるという 94 歳女性の H さん。年とともに芸術的なものへの共感力が増してきた 84 歳男性の G さん。若い頃は洋楽に関心があったが今は日本的なもののほうが気持ちが落ち着くという 81 歳女性の I さん。82 歳女性の L さんは、お気に入りの詩集を読み返すと、その頃の情景が蘇ってきて心が動かされると話す。これらの点は、老年的超越理論の「宇宙的次元」に含まれる＜神秘性の気づき/宇宙との一体感＞に通じる。

回想　過去回想が主であるが、94 歳女性の H さんは子供の頃の楽しい思い出、81 歳女性の I さんは忘れたいが苦しかったこと、81 歳男性の J さんは過去を回想したところで今さら戻れないという。82 歳女性の L さんは、「戦争で苦しかった時代があったことを孫に伝える」と話しており、未来志向的な回想といえる。

人生の危機　重篤な病気を経験した人は２人（H,K)だが、ともにこのような危機の経験により人生観が変わったという。94 歳女性の H さんは、健康のありがたみを実感し氏神さんに参ることが以来日課になっている。79 歳男性の K さんは、完治後３年かけて四国霊場巡りを行い人生観がプラスの方向に変化したという。

無常観・死生観　５人（G,H,I,J,L)は、「死は天命」として受け入れられる（あるいは、受け入れられると思う）と話し、どこか恬淡としたところがある。少年・少女時代とはいえ、この人たちの戦争経験が背景にあるのかもしれない。94 歳女性の H さんは、「死ねば形はなくなるが、他者とつながる魂の存在は感じる」と話す。この点は、老年的超越理論の「宇宙的次元」に含まれる＜世代間のつながりの認識＞に通じる。

宇宙的感覚　「月」に親近感を覚える２人のうち、94 歳女性の H さんは、自分の人生が投影されているように感じ、81 歳男性の J さんは、その神秘性に惹かれ夜空を見

上げることが多くなったという。「太陽」に親近感を覚える２人のうち農業を営む 81 歳女性のＩさんは「太陽とともに生きている」と話し、82 歳女性のＬさんは「太陽は生き生きとしており、その光と影に惹かれる」という。84 歳男性のＧさんは東洋的な宇宙観をもっており、94 歳女性のＨさんは、「太陽」を宇宙の象徴として捉えている。

共時的体験（夢と現実の一致）　６人のうち共時的体験を有する人はいない。

時間認識　おおむね今をどう生きるかに関心があり、サークルの大きさでは「現在」を重視する傾向があるが、「過去」については評価が分かれる。「過去」を最も重視しているのは 81 歳女性のＩさん、82 歳女性のＬさんは「現在」と同レベルで関心があり、今さら戻れないので見ないようにしているのは 81 歳男性のＪさん。「未来」については、３人（I,J,L）とも関心が低い。84 歳男性のＧさんは、時間（過去・現在・未来）の実体は「無」と東洋哲学的な捉え方をしている。

空間認識　サークルの大きさでは、３人（I,K,L）が近景＞中景＞遠景となっており、自分や家族のこと（近景）について最も関心が高く、次いで、地域や文化（中景）、神仏や宇宙（遠景）については関心が低い。「中景」に最も関心が高い２人（H,J）は、地域との関わりが深い人たちである。

まとめ

対象者６人（男性３人、女性３人）の平均年齢が 83.8 歳と３つの類型の中では一番低い。**老年的超越**に関しては、類型Ⅱの得点は類型Ⅰと比べて若干低く、クラスター分析の結果（クラスター２が高位）とは整合しない。４人の年齢が 80 歳前後と比較的若いことが関連している可能性も考えられる。**東洋的見方**に関しては、類型Ⅱの得点は類型Ⅰおよび類型Ⅲをわずかに上回っており、クラスター分析の結果（クラスター２は高位）とも整合する。**主観的幸福感**に関しては、６人の得点のバラツキは大きいが、傾向としては３つの類型のうち中間にありクラスター分析の結果（クラスター２は中位）とは整合する。

コード（概念的カテゴリー）に関しては、共通項を軸にまとめると、おおよそ以下のようになるであろう。

まず**生きた時代**である。おおむね共通するのは、①少年・少女時代は戦争で過酷な体験をしていること、②80 歳前後の４人は、いわゆる民主主義教育を体験していること、③戦後、結婚、進学など、それぞれの道を自ら選択し歩き始めたこと、④全員仕事に就き、２人は現在でも地域活動に関わりをもっていること、⑤「戦争はもうコリゴリ」との思いが強く、戦争の悲惨さを子孫や地域の女性に語り継ぐ活動をしていること――である。

幸福観については、健康でこの年まで生きられたことに感謝（十分に生きた）しつつ、生の充実感を感じている。仲間や思いを同じくする同好の士との交流に喜びを感

じている人。仕事を無事に勤め上げたことに幸福を感じている人など、ほぼ全員が「今が一番幸せ」だという。

性格・自己観・人間観等ということでは、外向的な人は自分軸が振れることなく、内向的な人は状況に応じて自分軸をしなやかに変化させていく。悟りに近い死生観（生即死、死即生）をもつ人もいる。

無為自然から連想される共通のイメージは、「なるようになる」「がんばり過ぎない」「成り行きに任せる」。H さんは「自然の力に比べれば人間の力はしれたもので、自分だけあがいてみても何もできない」と達観している。

自然を好み**芸術**に関心をもつ人が多い。年とともに芸術的なものへの共感力が増している。木や花など身近な自然との対話に喜びを感じる人。西洋的なものより日本的なもののほうが気持ちが落ち着くという人。お気に入りの詩集を読み返すと、その頃の情景が蘇ってきて心が動かされるという人。これらの事象は、老年的超越理論の「宇宙的次元」に含まれる＜神秘性の気づき/宇宙との一体感＞に通じる。

回想については、子供の頃の楽しい思い出や、忘れたいが苦しかったこと、など過去回想が主である。中には L さんのように「戦争で苦しかった時代があったこと、戦争は絶対にしてはいけないことをきちっと孫に伝えておく」と、未来志向的な回想をする人もいる。

H、K さんは、重篤な病気を経験（**人生の危機**）したことで人生観が変化した。**無常観・死生観**については、「死は天命」として受け入れられる（あるいは、受け入れられると思う）と恬淡としたところがある。「死ねば形はなくなるが、他者とつながる魂の存在は感じる」(H) と話す人もあり、老年的超越理論の「宇宙的次元」に含まれる＜世代間のつながりの認識＞に通じる。

農業を営むＩさんは、「太陽」をエネルギーの象徴として捉えている。G さんは「宇宙は陰陽が関係している」と**東洋的な宇宙観**をもつ。

時間認識については、「現在」を重視する傾向があるが、「過去」については評価が分かれる。「過去」を最も重視しているのはＩさん、L さんは「現在」と同レベルで関心がある。「未来」については関心が低い。G さんは、時間（過去・現在・未来）の実体は「無」と東洋哲学的な捉え方をしている。

空間認識については、自分や家族のこと（近景）について最も関心が高く、次いで、地域や文化（中景）、神仏や宇宙（遠景）については関心が低い。「中景」に最も関心が高い２人（H,J）は、農村地域に住み地域との関わりが深い人たちである。

類型Ⅲ：高 SWB・低東洋的見方群（対象者 M～Q）

（1）量的データの分析

背景的変数（属性等）　対象者５人のうち性別は男性３人・女性２人、平均年齢は85.6歳（*SD* 4.4歳；範囲81-92歳）、配偶者は「あり」４人・「なし」１人、教育歴は「中等教育」２人・「高等教育」３人である。活動性については、交流頻度は11.6人／月（*SD* 6.7人／月）、活動性指標は12.8（*SD* 0.4）、健康度は「健康」４人・「不健康」1人、暮らし向きは「普通」４人・「ゆとりあり」1人、重篤な病気の経験については、５人のうち４人が「あり」となっている。

老年的超越　**図 5-1** に示すように、男性92歳のPさん以外はクラスター３（*n*=77人）の平均得点（38.00）および全体平均（38.80；*N*=237人）を上回っている。特に女性86歳のOさん、男性87歳のQさんの得点が突出している。Pさんを除くと傾向としてはクラスター分析の結果（クラスター３は中～低位）とおおむね整合する。

東洋的見方　**図 5-2** に示すように、女性86歳のOさん、男性92歳のPさんは、クラスター３の平均得点（39.34）および全体平均（42.89）より高い。この２人以外はクラスター分析の結果（クラスター３は低位）とおおむね整合する。

主観的幸福感　**図 5-3** に示すように、M、O、Pさんは、クラスター３の平均得点(15.16)より高い。全体平均（12.41）と比較しても５人全員の得点が高い。この傾向はクラスター分析の結果（クラスター３は高位）とも整合する。

(2) 質的データの分析

生きた時代　80歳代が４人、90歳代が１人であるが、少年・少女時代は戦争一色で、内地では空襲・爆撃の恐怖を経験。そんな時代でも外地（上海）にいた82歳女性のMさんは、生活は裕福であったという。しかし、引き揚げ後の生活は食糧難等で苦労し、病気のため高校進学を断念。92歳男性のPさんは、天皇のために死ぬことも覚悟していたが、戦後巷では簡単に戦争批判がなされ世間の変わり身の早さに違和感を覚えたという（87歳男性のQさんも同じ）。戦後、海外への渡航が認められるようになり86歳女性のOさんは、好きな洋裁を学ぶため単身アメリカに渡った。

青春時代以降は、５人全員が職業（会社員、公務員、障がい者施設職員、研究者）に従事しており、Oさんは海外ボランティアとして、Pさんは博物館での英語ボランティアを経て現在は地元で「居場所」を運営しており、積極的に地域活動にも関わりをもっている。

振り返ってみて、５人全員「あんな時代はもうコリゴリ」という。Mさんは、戦後の厳しい時代のことを思えば少々のことは辛抱できると話す。

幸福観　５人（M,N,O,P,Q)は、戦争が終わって自由に生きられる世の中に変わり、自らの意志で人生を切り開いてこれたことに充実感を感じると話す。82歳女性のMさんは、健康で束縛なく好きな時間を過ごせる今は一番幸せという。81歳男性のNさんは、かつての仕事仲間との人間関係に、87歳男性のQさんは、妻子が近くにいてくれ

ることに、92 歳男性の P さんは、自著が今も業界のテキストとして使われていることに、それぞれ幸せを感じている。86 歳女性の O さんは、若い頃に夢を実現させた米国での生活、親しいボランティア仲間、日々平和に過ごせることに幸せを感じると話す。

性格・自己観・人間観等　おおむね外向的な人が多く、物事に対して柔軟性があり固執しない（M,O,P)。若いときには内向的であった人（O,P）が様々な人生経験を積むなかで外向的に変化してきたのが特徴である。87 歳男性の Q さんは、神仏の力に頼ることには懐疑的で、この考えが自分の人生観の背後にあると話す。

無為自然　82 歳女性の M さんのイメージは「手術台に乗った気分」、若い頃『荘子』を愛読した 92 歳男性の P さんは「自然体」、87 歳男性の Q さんは「無理に頑張らない」を挙げる。86 歳女性の O さんは「できなくなったことを嘆いてもしょうがない。できる範囲で楽しく、それで十分」だという。この人たちに共通するイメージは「あるがまま」ということなのであろう。

自然・芸術に共感する心　演芸、音楽、アートを楽しむ人が多い。わからんなりに、ぼんやりと邦楽や洋楽を聴いているという 92 歳男性の P さん。老年的超越理論の「宇宙的次元」に含まれる＜神秘性の気づき＞に通じる。

回想　過去回想が主で、86 歳女性の O さんは意識的に楽しかったことを思い出すようにしているが、未来志向の回想はしない。92 歳男性の P さんも子供の頃の思い出を折に触れ懐かしんでいる程度だという。87 歳男性の Q さんは、「過去のことを思い出しても今さらどうしようもない」と回想に意味を感じていない。

人生の危機　２人（M,Q)は、がんによる手術の経験があり、82 歳女性の M さんは、ある種の覚悟ができており、今を生きることを楽しんでいる。87 歳男性の Q さんは、術後 30 年近くになるが、再発もなく医者が驚いているという。

無常観・死生観　死生観については、４人（M,O,P,Q)それぞれに違いがあるが、「死んだら『無』になる」という 82 歳女性の M さん、「好奇心というものがありこの世の行く末を見届けたい」という 92 歳男性の P さん、「ぼちぼち神仏に頼ることも考えなければ」という 87 歳男性の Q さん。いずれも、寿命が至れば死も受容できるだろうという態度はおおむね共通している。

宇宙的感覚　「月」に親近感を覚える人は２人（O,Q)、87 歳男性の Q さんは「静」をイメージするが、「月」に母性愛を感じることはないという。２人（M,N)は「太陽」に親近感を覚える。東洋的な宇宙観をもつ人はいないが、92 歳男性の P さんは、身近な経験として、見えないものの気配（一人でいるときに、ふと肩をたたかれるような錯覚）を感じることがあるという。

共時的体験（夢と現実の一致）　このような体験を有するのは 86 歳女性の O さんのみである。O さんは、父の死も母の死も事前に夢で知ったという。「母のときは、華やかな花の夢をみた。女性の声で『お母さんが死ぬよ』と聞こえてきた。すると兄から電

話がかかってきた。父のときは、棺に入れる花が夢に出てきて、死を知らせてきた」。これは、ユングのいう「意味のある偶然の一致」であり共時性といわれる現象である。「意味のある偶然の一致」には元型的なものが関連しており、情動的な因子が重要な役割を果たしているとされる。Tornstam (2005) によれば、元型の現れ方は文化に依存するとされているが、O さんの文化的な背景は確認できていない。

時間認識　３人（N,O,Q)は「現在」を重視する傾向を示すが、「過去」と「未来」については捉え方が異なる。「未来」と「過去」を同じように重視するのが 81 歳男性の N さん、「過去」を重視するのが 86 歳女性の O さん、「未来」を重視するのが 87 歳男性の Q さん。「過去」を最も重視する P さんは、92 歳にもなればもはや「未来」はないという。82 歳女性の M さんは、時々に合わせて身を任せてきたので、過去・現在・未来と区切るような時間認識はないという。この考え方は、老年的超越理論の「宇宙的次元」に含まれる＜時間定義の変化＞に通じる。

空間認識　２人（N,P）が中景＞近景＞遠景となっており、自分や家族（近景）のことよりも地域や文化（中景）により関心が高い傾向を示す。「近景」に最も関心が高い人が２人（M,Q）いるが、重篤な病気（がん）の経験をもつ人である。「遠景」に最も高い関心をもつ 86 歳女性の O さんは、海外ボランティアにも参加し平和に過ごせることに幸福を感じている。

まとめ

対象者５人（男性３人、女性２人）の平均年齢は 85.6 歳と３つの類型の中では２番目に高いが、類型Ⅰ（85.8 歳）とほとんど変わらない。**老年的超越**に関しては、類型Ⅲの傾向としては、92 歳男性の P さんを除いてクラスター分析の結果（クラスター３は中～低位）とおおむね整合する。P さんの得点が突出して低いのは、P さんが合理性を重視する元研究者であることが影響している可能性が高い。**東洋的見方**に関しては、類型Ⅲの傾向としては、女性 86 歳の O さん、男性 92 歳の P さん以外はクラスター分析の結果（クラスター３は低位）とおおむね整合する。**主観的幸福感**に関しては、５人全員の得点が高く、類型Ⅲの傾向としてはクラスター分析の結果（クラスター３は高位）とも整合する。

コード（概念的カテゴリー）に関しては、共通項を軸にまとめると、おおよそ以下のようになるであろう。

まず**生きた時代**である。おおむね共通するのは、①少年・少女時代は戦争一色、さらに戦後は厳しい食糧難を経験していること、②「あんな時代はもうコリゴリ」という切実な思いをもっていること、③全員が職業に就いていたこと――である。しかし、時代の感じ方はそれぞれに異なり、80 歳代後半から 90 歳代の人は、④戦前は天皇のために死ぬことも覚悟していたが、戦後、世間の変わり身の早さに違和感を覚えた（P,Q)、⑤

現役引退後、O さんは海外ボランティアとして、P さんは「居場所」の運営など地域活動とも関わりをもっていること――である。

個々には**幸福**の対象は異なるが、戦争が終わって自由に生きられる世の中に変わり、自らの意志で人生を切り開いてこれたことに充実感を感じている：健康で束縛なく好きな時間を過ごせる今は一番幸せ（M)。かつての仕事仲間との人間関係（N)、妻子が近くにいてくれること(Q)、自著が今も業界のテキストとして使われていること(P)、夢を実現させた米国での生活、ボランティア仲間、日々平和に過ごせること（O）――など、それぞれの幸福観は多様である。

性格・自己観・人間観等ということでは、外向的な人が多く、物事に対して柔軟性があり固執しない。若いときには内向的であった人が人生経験を積むなかで外向的に変化してきたのが特徴である。

無為自然については、大病を経験した M さんのイメージは「手術台に乗った気分」、若い頃『荘子』を愛読した P さんは「自然体」、Q さんは「無理に頑張らない」。O さんは「できなくなったことを嘆いてもしょうがない。できる範囲で楽しく」――共通するのは「あるがまま」ということなのであろう。

自然・芸術に共感する心については、演芸、音楽、アートを楽しむ人が多い。この年になって本が好きになったという O さん、わからんなりに、ぼんやりと邦楽や洋楽を聴いているという P さん。これらは、老年的超越理論の「宇宙的次元」に含まれる＜神秘性の気づき＞に通じる。

回想については、楽しかったことや子供時代のことを時々思い出す程度で、未来志向の回想をする人はいない。Q さんは、過去のことを思い出しても今さらどうしようもない、と回想に意味を感じていない。

人生の危機ということでは、がん手術の経験がある M さんは、ある種の覚悟ができており今を生きることを楽しんでいる。Q さんは、がんの手術後 30 年近くになるが、再発もない。「死んだら無になる」という M さん、「好奇心というものがありこの世の行く末を見届けたい」という P さん、「ぼちぼち神仏に頼ることも考えなければ」という Q さん。いずれも、寿命が至れば死も受容できるだろうという**死生観**はおおむね共通している。

「月」に親近感を覚える人は２人、「太陽」に親近感を覚える人も２人と分かれた。**東洋的な宇宙観**をもつ人はいないが、P さんは身近な経験として見えないものの気配を感じることがある。

共時的体験（夢と現実の一致）を有するのは O さんのみである。O さんは、父の死も母の死も事前に夢で知った。これは、ユングの共時性といわれる現象である。「意味のある偶然の一致」には元型的なものが関連しており、その現れ方は文化に依存するとされるが、O さんの文化的な背景は確認できていない。

時間認識については、３人は「現在」を重視する傾向を示すが、「過去」と「未来」の捉え方が異なる。「過去」を最も重視するＰさんは、92 歳にもなればもはや「未来」はないという。Ｍさんは、過去・現在・未来と区切る時間認識はない。

空間認識については、２人（N,P）が、自分や家族（近景）のことよりも地域や文化（中景）により関心が高い傾向を示す。「近景」に最も関心が高い２人（M,Q）は、重篤な病気（がん）の経験をもつ。「遠景」に高い関心をもつＯさんは、海外ボランティアの経験があり、平和に過ごせることに幸福を感じている。

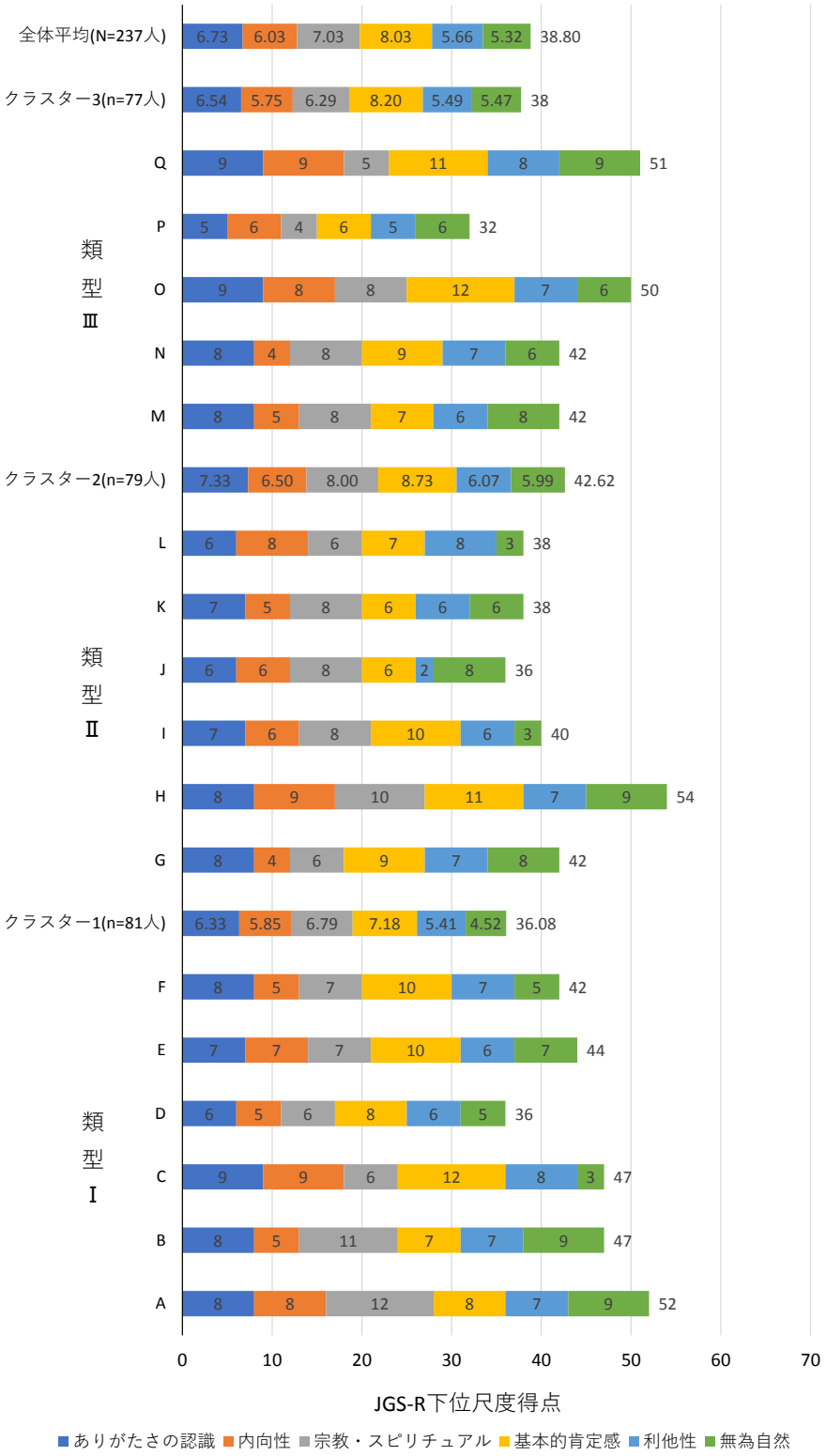


図5-1　老年的超越の構成要素の相対比較

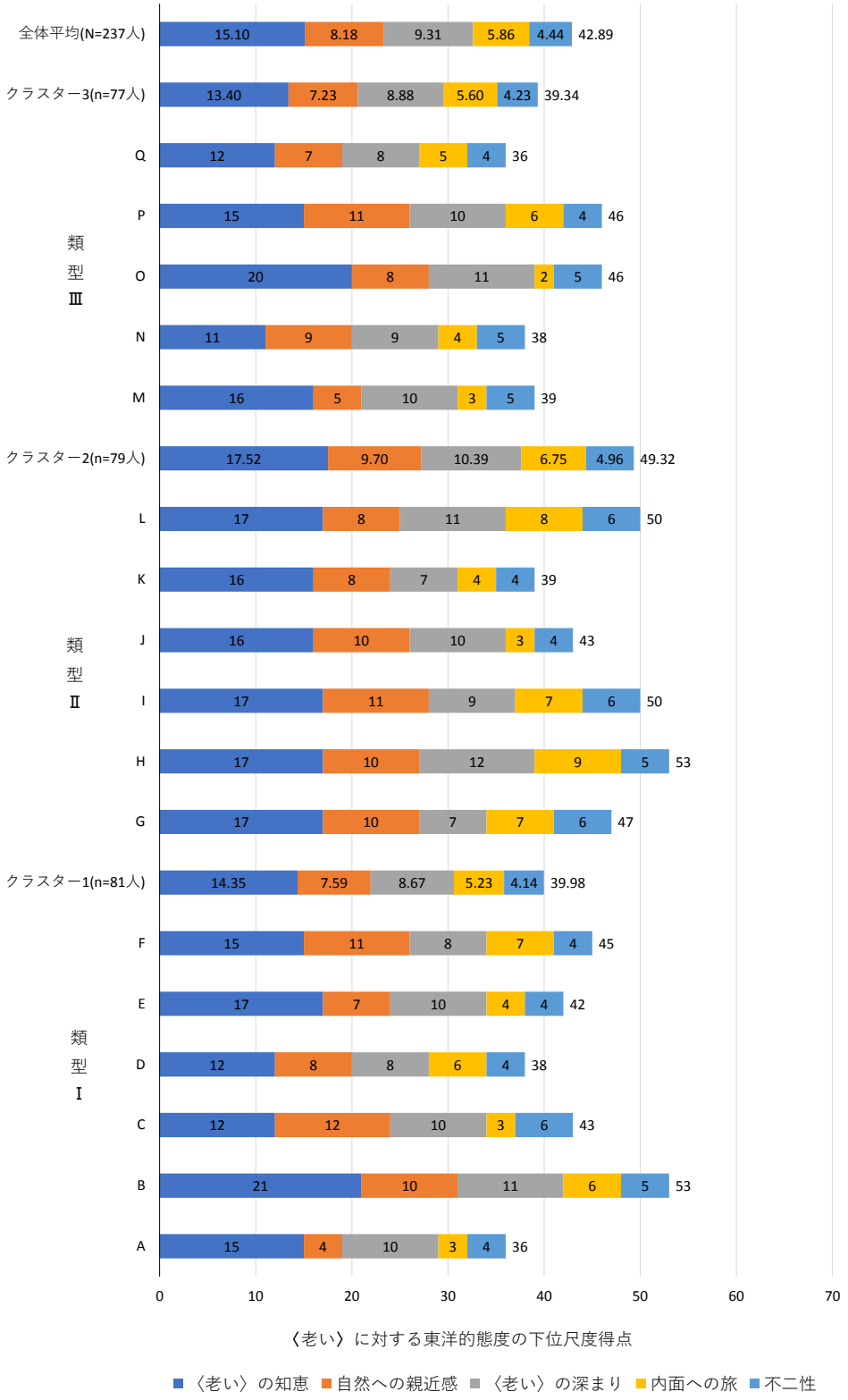


図5-2　東洋的見方の構成要素の相対比較

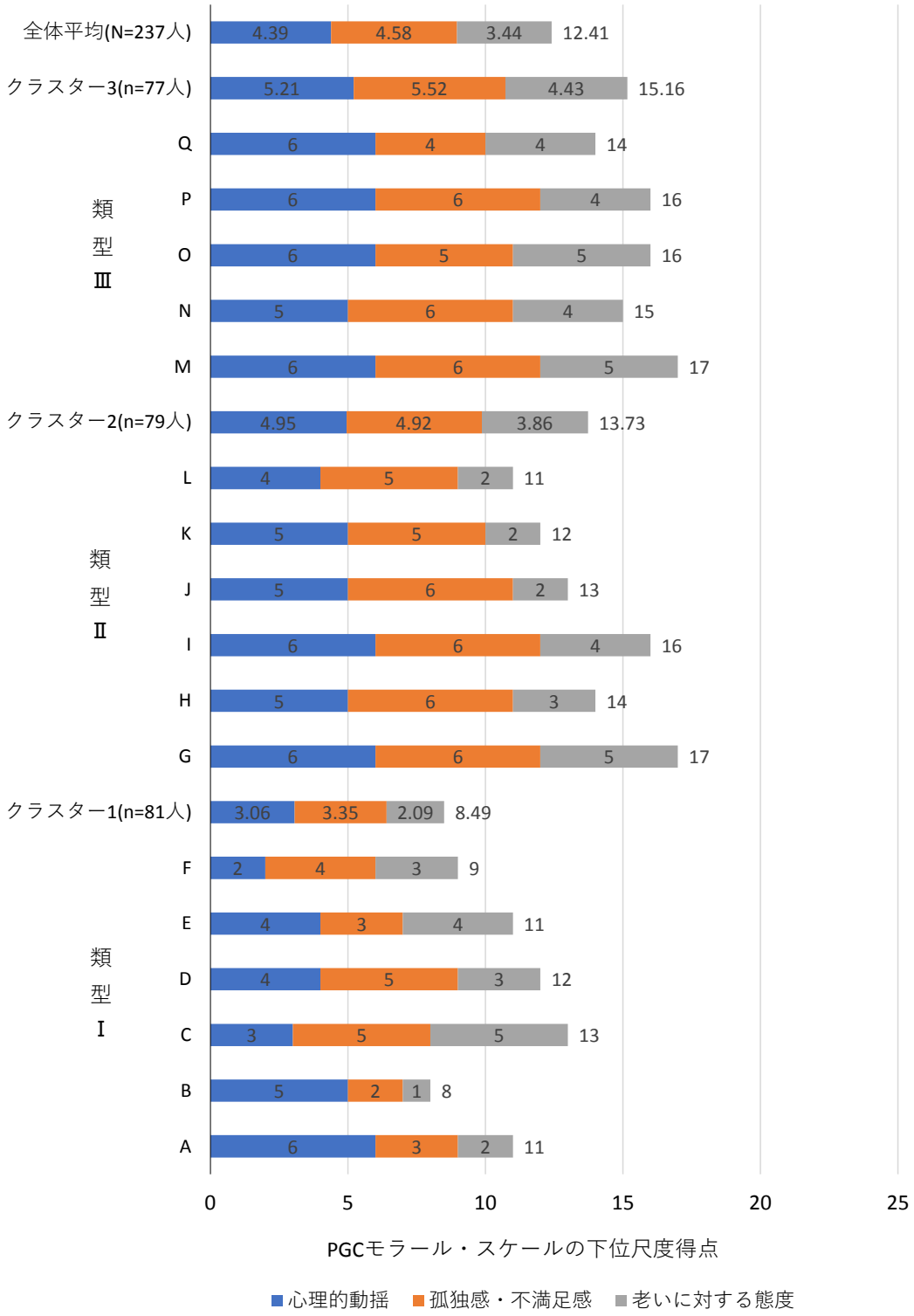


図5-3　主観的幸福感の構成要素の相対比較

（B）年齢と老年的超越、東洋的見方、主観的幸福感との関係

先にも述べたように、ここでは研究協力者 17 人全員の散布図から全体としての傾向をみることとする。まず、年齢と老年的超越の関係（**図 5-4**）であるが、２つの外れ値（75 歳女性 B、92 歳男性 P さん）はあるものの、全体的には年齢の高い人は老年的超越得点も高い傾向が読み取れる。また、男性より女性の得点が高いといえるであろう。この点は、第４章の JGS-R の年齢・性別による差異の検討結果とも整合している。

次に、年齢と東洋的見方の関係（**図 5-5**）であるが、両者の間に明らかな共変関係（年齢に対応した変化）は認められない。しかし性別ごとにみると、年齢にかかわらず女性のほうが男性より東洋的見方の得点が高いようにみえる。第４章の関連要因分析における投入変数の t 検定（**表 4-8**）でも、東洋的見方に関しては、５つの下位尺度で女性の得点が男性より有意に高い結果となっている。一方、SEM 分析における年齢と東洋的見方の関係では、男性で有意な傾向の共変関係が認められたが、女性では認められていないので、この点では事例分析の結果は異なるものであった。

さらに、年齢と主観的幸福感の関係（**図 5-6**）であるが、バラツキが大きく両者の間には共変関係は全く認められない。特に、破線で囲った４人の女性（75 歳 B, 82 歳 L, 88 歳 E, F さん）の得点が低いのは、インタビュー時の印象（地域やサークルでの活動に熱心で「生きがい感」が高い）とは大きく異なるものであった。

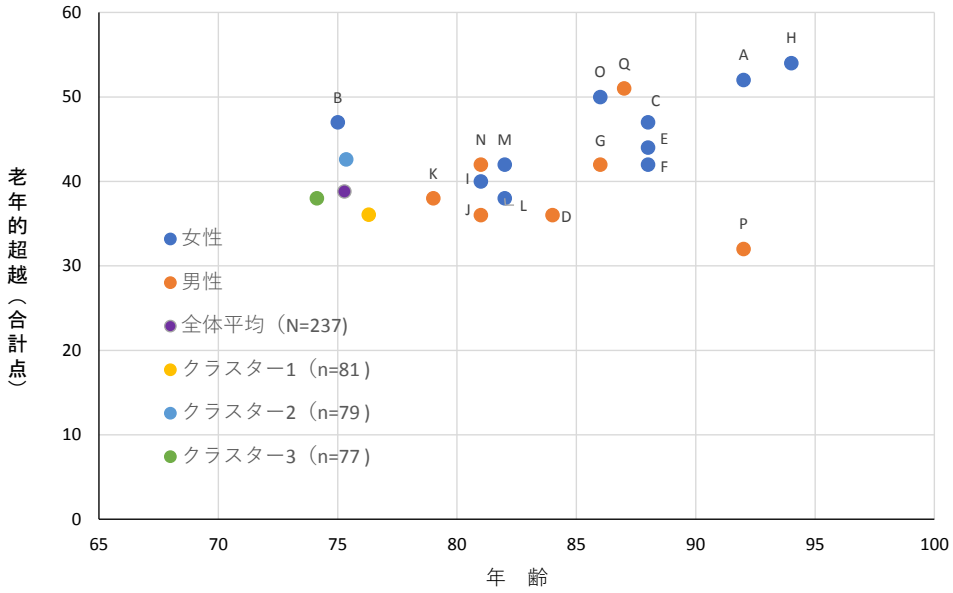


図5-4　年齢と老年的超越の関係

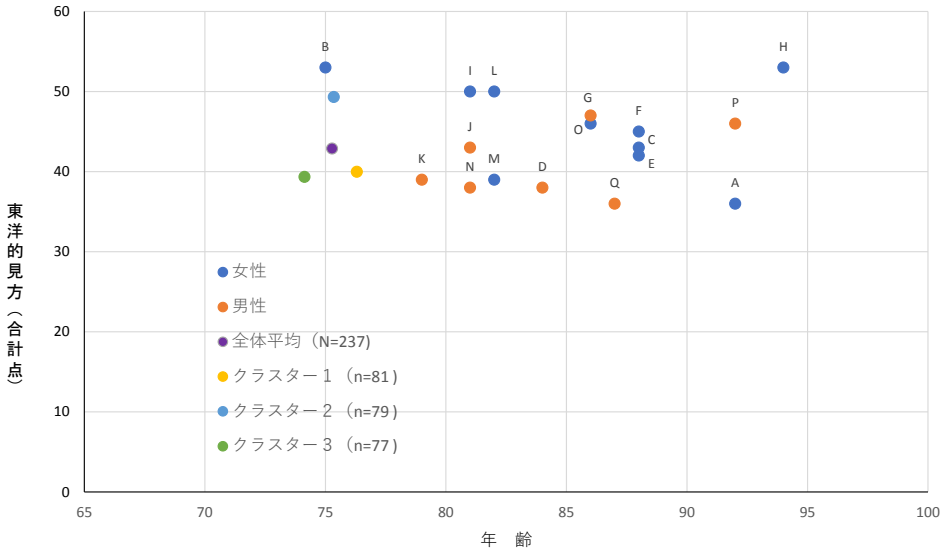


図5-5　年齢と東洋的見方の関係

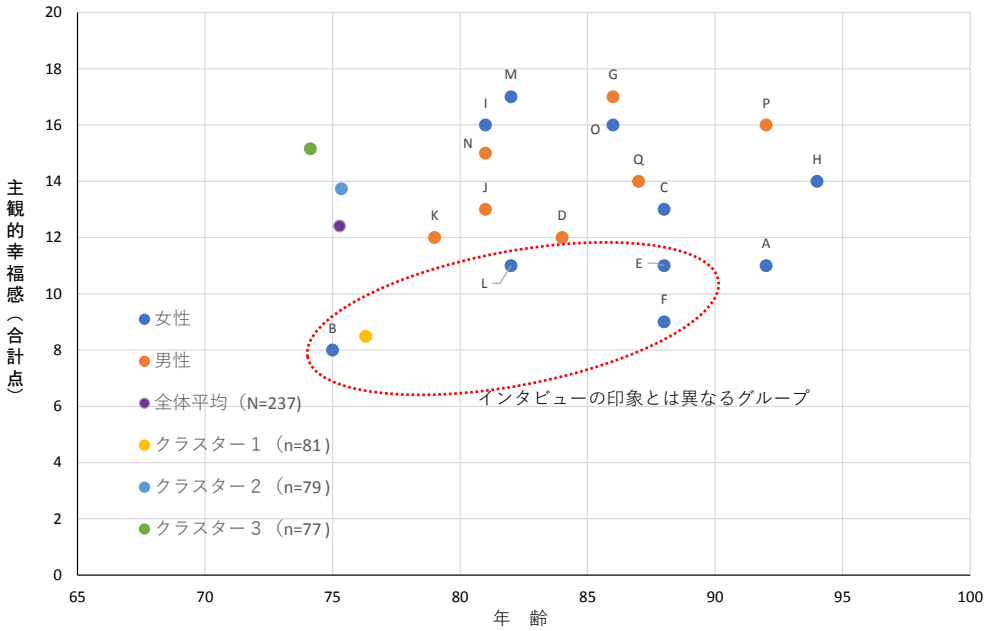


図5-6　年齢と主観的幸福感の関係

5.2.2　コード分析

事例分析における量的データの分析では、老年的超越得点に関して類型Ⅱの得点は類型Ⅰの得点と比べて幾分低くなっており、これはクラスター分析の結果とは異なるものであった。その理由として考えられるのは、研究協力者 17 人のサンプルの偏りである。

図 5-4 は、年齢と老年的超越との関係を性別ごとに散布図で示したものであるが、この図から明らかなように年齢の全体平均は 75.28 歳（*N*=237 人）、老年的超越得点の全体平均は 38.80（*N*=237 人）であるが、当然のこととはいえ 17 人のサンプルと比較すると、年齢では、女性 75 歳の B さん以外はすべて全体平均を上回っている。また、老年的超越得点でも、男女 12 人（A,B,C,E,F,G,H,I,M,N,O,Q）が全体平均を上回っている。類型Ⅰを例にとっても、性別では６人中５人が女性であることなど、事例分析で類型ごとに類分けされた少数のサンプルをもって各類型を代表しているとは言い難い面がある。

また、質的データの分析結果（まとめ）から明らかなように、たとえ５～６人程度の類型といえども個々人にはそれぞれの人生があり、所属する類型の特徴を安易に縮約してしまうと、情報価値の高い大事な発言を捨象してしまうおそれがあり弊害のほうが大きい。

したがってコード分析では、クラスター分析の結果の検証という側面よりも、個々の事例間の共通点や個別性に着目し、コード（概念的カテゴリー）が老年的超越を高める要因としてどのような働きをしているのかを分析することに照準を合わせることとした。

手順としては、まず、(1) 17 人の老年的超越得点をクラスター分析の全体平均を指標に「中位以上/中位以下」に区分し、背景的変数（属性等）との関連を分析する。さらに、(2) 前記 (1) の区分に基づき、コード(概念的カテゴリー)を軸に個々人の発話内容（文書セグメント）の共通点・差異に着目し、「中位以上/中位以下」の特徴を記述する。

(1) 背景的変数（属性等）からみた老年的超越への影響

老年的超越下位尺度（JGS-R）の得点については、この尺度の使用実績がまだそれほど多くはなく、具体的な評価基準が定まっているわけではない。したがって得られた得点については、あくまで分析対象となったサンプル内での相対的評価の指標として扱うのが妥当と考えられる。

ここでは、研究協力者 17 人の老年的超越得点[14]について全体平均（38.80；*N*=237 人）

[14] 老年的超越下位尺度の合計点を使用する根拠は、本章脚注 7 による。

との比較を行い、全体平均を上回る人を「老年的超越の傾向が中位以上の人」（以下、「中位以上」とする)、全体平均を下回る人を「老年的超越の傾向が中位以下の人」(以下、「中位以下」とする）と２つに区分することとした。

この考え方に基づき、17 人のデータを男女別に分類すると以下のようになった。なお、女性のＬさんは、全体平均を僅か（-0.80）下回っているが、インタビュー時の印象からして「中位以下」とは考えづらく、「中位以上」に含めることとした。この区分をもとに背景的変数（属性等）の特徴を分析する。

a. 男性について

「中位以上」は、G（86 歳)、N（81 歳)、Q（87 歳）さんが該当する。３人に共通する点を挙げると、年齢は 80 歳以上、健康で、暮らし向きは普通、「人生の危機」の経験があることであった。一方、異なるのは、配偶者については２人（N,Q）が「あり」、活動性指標について全体平均以上は２人（N,Q)、交流頻度について全体平均以上は２人（G,N)、重篤な病気の経験も２人（N,Q）が「あり」となっている。

次に「中位以下」は、D（84 歳)、J（81 歳)、K（79 歳)、P（92 歳）さんが該当する。４人に共通する点を挙げると、有配偶者であること、暮らし向きは「普通」となっていることである。一方、異なるのは、年齢では 70 歳代、90 歳代の人がそれぞれ１人いること、活動性指標で全体平均以上は３人(D,K,P)、交流頻度で全体平均以上は２人(J,P)、健康度は３人（D,J,K）が健康、90 歳代のＰさんは不健康と答えている。また、「重篤な病気」の経験については、70 歳代のＫさん以外の３人は「なし」と答えているが、「人生の危機」については、２人（D,K）が「あり」、２人（J,P）が「なし」と答えている。

以上のことから、男性については「中位以上」の共通点は、①年齢は 80 歳以上であること、②健康であること、③暮らし向きが普通レベル（以上）であること、④「人生の危機」の経験を有していること――となる。「中位以下」については、年齢幅（70～90 歳代）をはじめ他の変数のバラツキが大きく、一定の傾向を読み取ることは困難であった。

なお、「中位以下」の中にも、当然のことながら上記の①～④の条件に該当する人はあり、にもかかわらず「中位以上」に含まれないことは、老年的超越という心の現象が単なる背景的要因だけでは説明できないことを示唆しているのであろう。

b.女性について

「中位以上」は、A（92 歳)、B（75 歳)、C（88 歳)、E（88 歳)、F（88 歳)、H（94 歳)、I（81 歳)、L（82 歳)、M（82 歳)、O（86 歳）さん、10 人全員が該当する。なお、留意が必要なのは、A さんは 92 歳と高齢で老人保健施設に入所しており軽い認知症の症状

を有することである。10 人に共通する点を挙げると、年齢では B さん以外は 80 歳以上、暮らし向きについては「普通」以上、「人生の危機」については、B さん以外は全員「あり」と答えている。一方、回答に偏りがあり二択式の片方が７～８割以上を占めるのは、配偶者（７人は「なし」)、活動性指標（８人は全体平均以上)、交流頻度（８人は全体平均以上)、健康度（８人は健康）である。

これらのデータが「中位以上」のものであることを考えれば、少なくとも老年的超越を高める十分条件となっていることは確かであろう。なお、「重篤な病気」の経験については、６人が「あり」、４人が「なし」であり、強い影響要因であるとは言い切れない。

以上のことから、女性については「中位以上」の共通点は、①年齢が高いこと、②無配偶者（「なし」の傾向が強い）であること、③高次生活機能（活動性指標の高さ）が維持されていること、④健康であること、⑤交流頻度が高いこと、⑥暮らし向きが普通レベル以上であること、⑦「人生の危機」の経験を有すること――となる。

(2) コード(概念的カテゴリー)からみた老年的超越への影響

a. 男性について

a-1「中位以上」: G (86 歳)、N (81 歳)、Q (87 歳)

生きた時代　少年時代は軍国教育一色。戦後は厳しい食糧難。戦後はある種の解放感もあり、目指す仕事のために大学へ進学した人もいる (G)。戦後の「天皇の人間宣言」には違和感を覚えた (Q)。3 人とも「あんな時代はもうコリゴリ」との思いが強い。

幸福観　幸福の対象は個々人では異なるが、「文化を大事にする今の生活」(G)、「家族や友人と仲良く過ごせること」(N,G) など、身近なことのなかに「幸せ」を感じている。

性格・自己観・人間観等　３人 (G,N,Q) に共通項は認められない:「生きることは死ぬこと、死ぬことは生きること」(G)、「人とのトラブルを避ける習性があり表立ったことはしない」(N)、「神仏の力に対する懐疑的な思いが人生観の背後にある」(Q)。

無為自然　「若い頃のようにはできない。無理して頑張る必要はない」(Q)。

自然・芸術に共感する心　２人 (G,Q) は、日本の自然に対する親近感や芸術に共感する心をもっている。

回想　３人全員、回想はしない。Q さんは「過去のことを思い出しても、どうしようもない」と回想することに否定的。

人生の危機　60 歳代のときにがんの宣告を受けつつも、サジを投げていた医者を諭す逞しさをもつ (Q)。

無常観・死生観　３人 (G,N,Q) に共通項は認められない:「生まれたものはすべて死ぬ」(G)。「年をとったのでボチボチ神仏に頼らないかんのかも」(Q)。「まだ、死につい

ては考えていない」(N)。

宇宙的感覚（命の連鎖）　G さんは東洋的な宇宙観をもつ:「インドの思想では、宇宙は陰陽が関係。宇宙のスケールは脳が感じた結果」

共時的体験（夢と現実の一致）　３人全員、このような体験はない。

時間認識　２人（N,Q）に共通するのは「現在」に関心が高いが、「未来」と「過去」については認識が異なり、同レベル（N)、未来を重視する（Q)、G さんは「過去・現在・未来は脳の判断によるもので実体は〈無〉」と常識的な時間感覚を超越している。

空間認識　「中景」（地域や文化）に関心が高い N さん、「近景」（自分や家族）に関心が高い Q さんと傾向は異なるが、「遠景」（神仏や宇宙）については２人とも関心が低い。

a-2「中位以下」: D（84 歳）、J（81 歳）、K（79 歳）、P（92 歳）

生きた時代　少年期・青年期に戦争を経験。戦後の厳しい食糧難。「天皇のために死ぬことも覚悟。戦後は手のひらを返したような戦争批判、世間の変わり身の早さに違和感を覚えた」(P)。「戦後は世の中が科学的になり、ある種の解放感を感じた」(D)。「戦争は絶対ダメ、こんな時代はもうコリゴリ」との思いが身に沁みている。現役をリタイア後は、地域での活動に関わりをもつ（D,P)。

幸福観　幸福の対象は個々人で異なる:「年相応、体力に応じて楽しみを見つけていく。良き人間関係」(D)。「この年まで生きてこられたことに感謝。自分らしく生きられればよい」(J)。「便利になった今の生活、親しい仲間との飲み会」(K)。「戦前と違って自由に生きられること。現役時代の仕事での実績」(P)。

性格・自己観・人間観等　D さんは外向的（人から悪口を言われることがない)、J さんは内向的（角が立たないよう周りに気を使う)、ともに対人関係に気を使う。P さんは、若いときは内向的、年寄りになって外向的に変化、フレキシビリティがあり、物事に固執しない。

無為自然　共通するイメージは、「がんばらない」「成り行きに任せる」「自然体」であり、おおむね共感を示す。

自然・芸術に共感する心　２人（D,P）は、芸術的なことに関心をもつ。

回想　振り返り型の回想が中心となっている。「子供や親しい人を亡くした悲しい思い出」(D)。「折に触れ、子供の頃の思い出を懐かしむ程度」(P)。J さんは「回想したところで、今さら過去には戻れない」と回想することに否定的。

人生の危機　２人（D,K）が「人生の危機」の経験をもつ:「脳内出血で１週間記憶を喪失。高齢になってからもがんを経験」(D)。「手術がきっかけで、人生観がプラスの方向に変化」(K)。

無常観・死生観　３人（D,J,P）とも死については恬淡としたところがある:「病気を

受け入れる覚悟はできている。今さら人生観は変わらない」(D)。「この世は仮の宿、縁があって居るだけ」(J)。「いずれ死ぬことはわかっているが、好奇心があるのでこの世の行く末を見届けたい」(P)。

宇宙的感覚（命の連鎖）　２人（D,J）は「月」に親近感を覚える:「無神論者だが、人智の及ばないものはあると思う」(D)。P さんの「歩いているときや、ひとりのときに、ふと肩を叩かれたように感じることがある」というのは超高齢者ゆえの意識を超えた感覚なのか、ただし P さんの老年的超越得点は低い。

共時的体験（夢と現実の一致）　４人全員、このような体験はない。

時間認識　３人（D,J,K）とも「現在」をどう生きるかに関心があるが、「未来」は関心が低い。K さんは「過去」と「未来」に同程度の関心をもつ。J さんは「過去」は見ないようにしている。

空間認識　３人（D,J,P）が「中景」（地域や文化）に最も関心がある。次に「近景」（自分や家族)、「遠景」（神仏や宇宙）には関心が薄い。D さんは「近景」と「遠景」に同程度の関心をもっている。

b. **女性について**

「中位以上」: A（92 歳)、B（75 歳)、C（88 歳)、E（88 歳)、F（88 歳)、H（94 歳)、I（81 歳)、L（82 歳)、M（82 歳)、O（86 歳）

生きた時代　少女・青年時代における過酷な戦争体験、戦後の厳しい食糧難。「戦争は絶対ダメ、こんな時代はもうコリゴリ」との思いが身に沁みている。戦後の民主主義教育を体験、女性なるが故にとの側面もあるが、歩むべき道を自らが求め全員仕事に従事。現役引退後はボランティアや地域での活動に関わりをもつ人もいる（B,C,E,F,H,O)。

幸福観　幸福の対象は個々人により異なるが、10 人全員、おおむね次のようなこと(相互連関的)に幸せを感じている：子供の成長（良い家庭をもってくれたこと等)、健康で自由な生活(健康で束縛なく好きな時間を過ごせること等)、他者との良き関係(温かい人間関係、趣味や思いを同じくする友人との交流)、好きな活動・平穏な日常（仕事の充実感、夢の実現、ボランティア、日々平和に過ごせること等)、内面の充実（ありのままの自分という自己解放感、十分に生きたという実感。人から慕われること）――など。

性格・自己観・人間観等　性格的にはおおむね外向的であることが特徴。自分軸が振れることなく相手の立場に立って考えることができ、物事に対して柔軟性があり固執しない:「くよくよしない、何があってもしょうがない。明日になればまた変わる」(M)――など。内向的な人は、周りの状況に応じて自分軸を変化させ処していく。「若いときには内向的であった人が人生経験を積むなかで外向的に変化」(O)。「外向的な中にも

内向的な態度が隠れていて、年を重ねるなかで自己意識が変化し、人間は生かされていると感じるようになった」(F) という人もいる。

無為自然　それぞれのイメージは、「すべてを含む」「あるがまま」「なるようになる」「がんばり過ぎない」「成り行きに任せる」「手術台に乗った気分」。ほぼ全員が無為自然に共感を示す。「自然の力に比べれば、人間の力はしれたもので、自分だけあがいてみても何もできない」(H)。

自然・芸術に共感する心　ほぼ全員が自然や芸術に共感を示す。海や山、雲、木、花などとの対話を挙げる人の自然観はアニミズムに通じるもので東洋的でもある。芸術についても、技術的・表面的なことよりも自己の内面にどのように響くかを大切にしている。

回想　３人（H,I,O）は、振り返り型の回想をする。L さんのように「戦争記憶の孫への伝承」ということでは未来志向的な回想といえる。

人生の危機　４人（A,C,H,M）が、がんなどの重篤な病気の経験を有する。この経験はそれぞれの人生や人生観に大きな影響を及ぼしている：「脳の手術が原因で認知症を発症」(A)、「障がい者になったことで、人に助けられおかげさまを実感」(C)、「健康のありがたみを実感、氏神さんへの毎朝の参詣を習慣化」(H)、「健康のありがたさを実感、いつ何があっても受け入れられる覚悟ができた」(M)。２人（B,F）は、子供に関わる危機を経験：「５歳の娘を亡くした経験」(B)、「子供がケニアでひき逃げ事故に遭遇、ロンドンで緊急手術。自分も死を覚悟」(F)

無常観・死生観　無常観については、４人（B,F,H,L)が共感を示すが、死生観については、５人（A,C,I,O,M）は恬淡として受容的であるが、F さんは「今は生きていることに感謝し、自分の魂が残された人の記憶にどう刻まれるかに関心がある」。

宇宙的感覚（命の連鎖）　一体性の象徴として例示した「月」に親近感（人生の投影やその神秘性）を覚えると答えた人が４人（A,B,F,H)。エネルギーの源、光と影の二元性に惹かれるとして「太陽」と答えた人は２人（C,F)。C さんは「宇宙の象徴」として、F さんは「人間は宇宙の一員、一体のもの」とする東洋的な宇宙観をもつ。

共時的体験（夢と現実の一致）　共時的体験を有する人が２人（F,O）いるが、その人の文化的な背景（元型的なもの）については未確認である：「息子がケニアで事故に遭う前々日に赤ちゃんになっている夢をみた。偶然には意味があると思う」(F)。「父の死も母の死も事前に夢で知った」(O)。

時間認識　４人（C,F,O,L）は、今をどう生きるかに関心があり「現在」を重視するが、「過去」については評価が分かれる。最も重視しているのは I さん、L さんは「現在」と同レベルで関心がある。「未来」については、４人（C,F,O,L,I)は関心が低い。B さんは、過去・現在・未来は連続的なもので境はないと考えている。M さんは、時々に合わせて身を任せてきたので、そのような時間認識はないという。

空間認識　３人（I,L,M）は、「近景」（自分や家族のこと）について最も関心が高い。「中景」に最も関心が高い４人（B,C,F,H）は、地域との関わりが深い人たちである。「遠景」に最も高い関心をもつ０さんは、海外ボランティアにも参加し、日々平和に過ごせることに幸福を感じている。「近景」と「遠景」が同程度と答えた２人（H,C）は、宇宙における魂の存在を肯定する。

5.2.3　コード分析 ── まとめ

コード分析の結果について、さらに文書セグメントの内容を圧縮し総括表としてまとめたのが**表 5-2** である。表頭の男性欄については、「中位以上/中位以下」に区分し、女性欄については「中位以上」としている。以下では、老年的超越を高める要因を抽出するという観点から、男性については、「中位以上/中位以下」の差異や共通点に着目し、また、女性については、「中位以上」の共通点に着目して述べる。併せて、老年的超越理論の３つの次元（第１章 **表 1-1**）との関連を記す（例示：「次元」＜コード＞、以下同じ）。

表5-2　コード分析の総括表

	老年的超越の傾向			Tornstamの老年的超越理論の次元との関連
	男性		女性	
	中位以上（3人）	中位以下（4人）	中位以上（10人）	
背景的変数（属性等）				
年齢	・全員80代	・70代1人、80代2人、90代1人	・70代1人、80代7人、90代2人	
配偶者	・「あり」2人、「なし」1人	・全員「あり」	・「あり」3人、「なし」7人	
活動性指標	・全体平均以上　2人	・全体平均以上　3人	・全体平均以上　8人	
健康度	・全員「健康」	・「健康」3人、「不健康」1人	・「健康」8人、「不健康」2人	
交流頻度	・全体平均以上　2人	・全体平均以上　2人	・全体平均以上　8人	
暮らし向き	・普通	・普通	・普通以上（ゆとりあり　2人）	
重篤な病気	・「あり」2人、「なし」1人	・「あり」1人、「なし」3人	・「あり」6人、「なし」4人	
人生の危機	・全員「あり」	・「あり」2人、「なし」2人	・「あり」9人、「なし」1人	
コード（概念的カテゴリー）				
生きた時代	・少年時代は軍国教育。戦後の厳しい食糧難 ・「天皇の人間宣言」には違和感 ・戦後はある種の解放感（進学等） ・「戦争はもうコリゴリ」との強いの思い ・リタイア後、地域活動に参加	・少年/青年時代は軍国教育・戦争 ・戦後の食糧難。価値観の激変（世間では簡単に戦争批判）。ある種の解放感（科学的） ・戦争は絶対ダメ。あんな時代はコリゴリ ・リタイア後、地域活動に参加（２人）	・少女/青年時代の過酷な戦争体験 ・戦後の食糧難。民主主義教育を体験、女性なるが故の生き方、進路を選択 ・戦争は絶対ダメ。こんな時代はコリゴリ ・リタイア後、地域活動に参加（６人）	
幸福観	・「幸せ」の対象は個々人で相違 ・２人に共通：家族・友人関係など身近なことの中に「幸せ」を実感 ・１人は、文化を大事にできる今の生活	・「幸せ」の対象は個々人で相違 ・２人に共通：良き人間関係 ・その他：自分らしく生きられればそれでよい、戦前と違って自由に生きられること、戦時中に比べて便利になった今の生活	・「幸せ」の対象は個々人で相違 ・「子供の成長/健康/他者との関係/活動・生活/自己意識」；これらの項目は複合的に関連	
性格・自己観・人間観等	・インタビューの印象：３人は外向的・楽天的。「生きることは死ぬこと、死ぬことは生きること」「神仏の力には懐疑的」「人との諍いを好まず、表立ったことはしない」	・インタビューの印象：３人は外向的。内向的な人も対人関係には気を使う。 ・年取ってから外向的になったという人：「フレキシブルになり、物事に固執しなくなった」	・インタビューの印象：全員外向的 ・年を重ねるなかで意識が内面に向かうという人：「人間は生かされていると、しみじみと思う」	**「自己の次元」** ・自己との向き合い **「社会と個人の関係の次元」** ・人間関係の意味づけの変化
無為自然	・「若い頃のようにはできない。無理して頑張る必要はない」	・ほぼ全員共感 ・イメージ：「頑張らない」「成り行きに任せる」「自然体」	・ほぼ全員共感 ・イメージ：「すべてを含む」「あるがまま」「なるようになる」「頑張りすぎない」「成り行きに任せる」「手術台に乗った気分」	
自然・芸術に共感する心	・２人は、日本の自然に対する親近感。芸術的なことに関心あり	・２人は、芸術的なことに関心を持つが、１人は関心希薄	・ほぼ全員が自然・芸術に共感 ・自然観はアニミズム的で東洋的 ・芸術の技術的・表面的なことよりも自己の内面にどう響くかに関心	**「宇宙的次元」** ・宇宙との一体感 ・神秘性の気づき

	老年的超越の傾向			Tornstamの老年的超越理論の次元との関連
	男性		女性	
	中位以上（3人）	中位以下（4人）	中位以上（10人）	
回想	・３人とも回想をしない。「過去を振り返っても、今さらどうしようもない」	・２人は、振り返り型の回想（時々） ・１人は、「今さら過去へは戻れない」と否定的	・３人は、振り返り型の回想（時々） ・１人は、「戦争記憶の孫への伝承」；未来志向型の回想	**「宇宙的次元」** ・幼年時代への回帰 ・世代間のつながりの認識
人生の危機	・３人とも「人生の危機」の経験 （サジを投げていた医者を諭す逞しさを持つ人もあり）	・２人は、「人生の危機」の経験 （手術がきっかけで人生観がプラスの方向に変化した）	・４人は、がんなどの重篤な病気を経験 ・２人は、子供に関わる危機（死、事故）を経験	
無常観・死生観	・３人に共通項は認められず ・１人：「生まれたものはすべて死ぬ」と達観 ・その他：「年取ったのでボチボチ神仏に頼らないかんのかも」「まだ、そこまでは考えていない」	・３人は「死」については恬淡で受容的： 「病気を受け入れる覚悟はできている」 「この世は仮の宿、縁があっているだけ」 「死ぬことはわかっているが、この世の行く末を見届けたい」	・無常観については、４人が共感 ・死生観については、５人が恬淡として受容的、他に「死んだら自分の生きざまや魂が残された人の記憶にどう刻まれるか」に関心	**「宇宙的次元」** ・死生観の変化 ＊無常観については東洋的
宇宙的感覚（命の連鎖）	・80代の男性：「インドの思想では、宇宙は陰陽が関係している」とする東洋的な宇宙観を持つ。	・「月」に親近感を覚えるのは２人 ・90代の男性：「ひとりのとき、ふと肩をたたかれたように感じることがある」「この世には人智の及ばないこともある」	・「月」に親近感を覚えるのは４人 ・「太陽」に親近感を思えるのは２人 ・宇宙を地上との連続体と捉える東洋的な宇宙観を持つ人が２人	**「宇宙的次元」** ・神秘性の気づき
共時的体験（夢と現実）	・ない	・ない	・共時的現象の体験者（女性２人）は、「偶然には意味がある」と考える。	
時間認識	・２人に共通：「現在」への関心が最も高く、次いで「過去」か「未来」 ・１人は、時間の実体は「無」と東洋的捉え方	・３人は、「現在」をどう生きるかに関心が高く、「未来」への関心は低い ・「過去」については評価が分かれる。意識して「見ないようにしている」という人も	・４人は、「現在」をどう生きるかに関心が高く、「過去」については評価が分かれるが、「未来」については関心が低い （過去・現在・未来は連続するもので境はないと考える人もあり）	**「宇宙的次元」** ・時間定義の変化 ・神秘性の気づき
空間認識	・１人は「近景」に、１人は「中景」に最も関心が高い。 ・「遠景」については、２人とも関心が低い。	・３人は「中景」に最も関心があり、次に「近景」、「遠景」は関心が低い。 ・１人は、「近景」と「遠景」に同程度の関心	・３人は「近景」に、４人は「中景」に最も関心が高い。 ・「遠景」に最も関心が高い人は平和に過ごせることに「幸せ」を実感 ・「近景」「遠景」への関心が同程度の２人は、宇宙や魂の存在を肯定	**「宇宙的次元」** ・神秘性の気づき **「社会と個人の関係の次元」** ・人間関係の意味づけの変化

注）老年的超越の傾向欄の「中位」とは、クラスター分析の対象となった調査対象者（N=237人）の老年的超越得点（６要素合計点）の平均値である。
男性　中位以上（３人）：G(86歳）、N(81歳）、Q(87歳)
男性　中位以下（４人）：D(84歳）、J(81歳）、K(79歳）、P(92歳)
女性　中位以上（10人）：A（92歳）、B(75歳）、C(88歳）、E(88歳）、F（88歳）、H（94歳）、I（81歳）、L(82歳）、M(82歳）、O（86歳）

a. 男性について

年齢については、「中位以上」では全員 80 歳代であるのに対して、「中位以下」では 70～90 歳代と幅が広い。配偶者については、「中位以上」で「あり」が２人、「中位以下」では４人全員が「あり」となっている。その他の背景的変数（属性等）については、双方で大きく異なるものはみられないが、しいて言えば「重篤な病気」と「人生の危機」については、「中位以上」のほうがそれを経験している人の数が多いようにみえる。

次にコード(概念的カテゴリー)についてである。**生きた時代**では、双方とも少年時代・青年時代には軍国教育を受け、従軍した人はいないが空襲・爆撃、戦後の食糧難を経験しており、「戦争はもうコリゴリ」との思いが強い。特に「中位以上」の 87 歳 Q さん、「中位以下」の 92 歳 P さんは、戦後の価値観の激変（軍国主義から民主主義へ）に戸惑いを覚えた。現役リタイア後の地域活動については、「中位以上」「中位以下」ともに何らかの関わりをもっている人が多い。

幸福観については、「幸せ」の対象は個々人で異なるが、「中位以上」「中位以下」とも家族や友人など身近な人との人間関係に楽しさや喜びを見いだしている。「中位以下」の人の中の「便利になった今の生活」(K)、「自分らしく生きられればそれでよい」(J)、「戦前と違って自由に生きられること」(P) などは、東洋的バランス志向性（内田, 2020, p. 69）の幸福観の特徴を示すものといえよう。

性格・自己観・人間観等では、「中位以上」「中位以下」ともおおむね外向的で対人関係には気を使う。「中位以下」の人の中には「年取ってフレキシブルになり、物事に固執しなくなった」(P) という人がいる。「自己の次元」に含まれる＜自己との向き合い＞に通じるところがあるが、この人が「中位以下」に分類されるのは、現役のときは工学系の研究者であり、物事を合理的に判断する傾向があることが影響しているのかもしれない。

無為自然については、「中位以上」「中位以下」とも「無理して頑張らない」などには共感を示めす。無為自然は、老年的超越理論の３つの次元にはない東洋的な考え方である。

自然・芸術に共感する心では、「中位以上」の人は、自然に対する親近感や芸術に共感する心をもっている。「中位以下」の人では、２人 (D,P) は芸術的なことに関心をもっている。「宇宙的次元」に含まれる＜宇宙との一体感/神秘性の気づき＞に通じる。

回想については、「中位以上」の人は「過去を振り返っても今さらどうしようもない」(Q) と否定的であるが、「中位以下」の人ではそのように感じている人もいるが、２人 (D,P) は時々振り返り型の回想（子供や親しい人を亡くした悲しい思い出/子供の頃のことを懐かしむ程度）をしている。「宇宙的次元」には＜幼年時代への回帰＞が含まれるが、このケースではそのような肯定的な回想ではない。

人生の危機については、「中位以上」の人は全員その経験をもつが、「中位以下」の人

では半数となっている。

無常観・死生観については、「中位以上」の人の中に「まだ、そこまで考えていない」（N）という人がいるが、それ以外の人は「中位以下」の人も含めて、「死」については恬淡としていて受容的である。「宇宙的次元」に含まれる＜死生観の変化＞に通じる。

宇宙的感覚（命の連鎖）については、「中位以上」の人の中に東洋的な宇宙観をもつ人がいるが、「中位以下」の人の中にも「人知の及ばないもの（こと）はこの世に存在する」（D）と考えている人もいる。「宇宙的次元」に含まれる＜神秘性の気づき＞に通じる。

共時的体験（夢と現実の一致）については、「中位以上」「中位以下」ともにそのような経験をもつ人はいない。

時間認識については、「中位以上」「中位以下」ともにおおむね「現在」への関心が最も高く、「未来」への関心は低い。「過去」については「中位以上」「中位以下」ともに評価が分かれる。「中位以上」の人の中に「時間の実体は〈無〉」（G）と東洋的な捉え方をする人がいるが、「宇宙的次元」に含まれる＜神秘性の気づき＞に通じる考え方であろう。

空間認識については、「中位以上」「中位以下」ともに「遠景」（神仏や宇宙）には関心が低かったが、「近景」（自分や家族）に最も関心が高いとした人が「中位以上」に１人、「中景」（地域や文化）に最も関心が高いとした人が「中位以上」に１人、「中位以下」に３人いた。「中位以下」の人では、「中景」に関心が高い傾向がうかがえる。

b.女性について

年齢については 70～90 歳代と幅が広い。配偶者については「なし」と答えた人が 10 人中７人となっており一つの傾向といえる。活動性指標では全体平均以上が８人、健康度も８人が「健康」、交流頻度も８人が全体平均以上で、暮らし向きは全員が「普通」以上となっており、一般の後期・超高齢者と比べて生活機能が高く健康で活動的であることがうかがえる。ただし、「重篤な病気」の経験が半数以上あり、「人生の危機」にいたっては 10 人中９人が「あり」と答えている。

次にコード(概念的カテゴリー)についてである。**生きた時代**では、当然のことながら男性とも共通するところがあるが、戦後の民主主義教育を経験するなかで女性なるが故の生き方・進むべき道の選択が行われてきたことをうかがわせる。戦争に対する厭戦感は強く、戦争の悲惨さを後世に伝えるべく記憶の伝承や活動を行っている人もいる。このような活動も含めて６人が現在も地域活動に関わりをもっている。

幸福観については、「幸せ」の対象は個々人では異なるものの、カテゴリーで括ると「子供の成長」「健康で自由な生活」「他者との良き関係」「好きな活動・平穏な日常」「内面の充実」に集約でき、それぞれのことの中に喜びや幸福を実感しているが、同時

にカテゴリー間で複合的に連関しているのが特徴である。

性格・自己観・人間観等については、インタビュー時の印象からすると全員外向的であったが、外向的な人でも年を重ねるなかで「人間は生かされていると、しみじみ思う」(F) と意識が内面に向かうという人もいる。「社会と個人の関係の次元」に含まれる＜人間関係の意味づけの変化＞に通じる。

無為自然については、言葉のイメージとしては「すべてを含む」「あるがまま」「なるようになる」「頑張りすぎない」「成り行きに任せる」「手術台に乗った気分」と、それぞれの経験に応じて言葉を紡ぎだしているが、ほぼ全員共感を示す。

自然・芸術に共感する心については、ほぼ全員がそのような心をもっている。特に自然観はアニミズム的であり、芸術については技術的・表面的なことよりも自己の内面にどう響くかを大切にしている。「宇宙的次元」に含まれる＜宇宙との一体感/神秘性に気づき＞に通じる。

回想については、３人（H,L,O）が振り返り型の回想（子供の頃の楽しかった思い出/苦しかったこと等）を時々する。「戦争記憶の孫への伝承」(L) という未来志向型の回想をする人もいる。これは、「宇宙的次元」に含まれる＜世代間のつながりの認識＞に通じる。

人生の危機については、４人 (A,C,H,M) が、がんなどの重篤な病気を経験しており、２人 (B,F) は自身の子供に関わる危機 (娘の死/アフリカでの学術調査中の交通事故) を経験している。

無常観・死生観については、無常観に４人（B,F,H,L）が共感を示し、死生観については５人（A,C,I,M,O）が恬淡として受容的である。同時に「今生きていることに感謝し、死んだら自分の生きざまや魂が残された人の記憶にどう刻まれるか」に関心をもつ人もいる（F)。これは、「宇宙的次元」に含まれる＜死生観の変化＞に通じる。

宇宙的感覚（命の連鎖）については、一体性（母性愛）の象徴として示した「月」に親近感を覚えるのは４人（A,B,F,H)、二元性（光と闇）の象徴として示した「太陽」に親近感を覚えるとしたのが２人（I,L）であった。ただし、この２人は地上と宇宙を連続体と捉える東洋的な宇宙観をもっており、二元性とは相容れないところがあるが、「宇宙的次元」に含まれる＜神秘性の気づき＞に通じるところがある。

共時的体験（夢と現実の一致）については、２人（F,O）が体験しており「偶然には意味がある」と考えている。

時間認識については、４人（C,F,L,O）は「現在」をどう生きるかに関心が高く、「過去」については評価が分かれるが、「未来」については関心が低い。「過去・現在・未来は連続するもので境は存在しない」(B,M) という人もいるが、「宇宙的次元」に含まれる＜時間定義の変化＞に通じる。

空間認識については、３人（I,L,M）は「近景」（自分や家族）に、４人（B,C,F,H)

は「中景」（地域や文化）に最も関心が高い。「遠景」（神仏や宇宙）に最も関心が高い人が１人（O）いるが、この人は日々平和に過ごせることに幸せを感じている。「近景」「遠景」が同程度の人が２人（C,H）いるが、宇宙や魂の存在を肯定する。これは、「宇宙的次元」に含まれる＜神秘性の気づき＞に通じる。

5.3　考察

第４章のクラスター分析では、特性値として主観的幸福感（SWB）と東洋的見方の得点の組み合わせにより、クラスター１を「低 SWB・低東洋的見方群」、クラスター２を「中 SWB・高東洋的見方群」、クラスター３を「高 SWB・低東洋的見方群」とした。さらに、この３つのクラスターごとに老年的超越の傾向を当てはめると、クラスター１は「老年的超越に懐疑的（あるいは否定的）な群」、クラスター２は「老年的超越を肯定的に捉えている群」、クラスター３は「傾向としては老年的超越に懐疑的（あるいは否定的）ではあるが、老年的超越のポジティブな側面については肯定的に捉えている群」となった。

質的研究における研究協力者 17 人の類型区分は、このクラスター分析の結果に基づくもので、類型Ⅰは６人（男性１人、女性５人）、類型Ⅱは６人（男性３人、女性３人）、類型Ⅲは５人（男性３人、女性２人）に分類された。事例分析とコード分析は、この類型区分に基づき行ったものである。以下ではこの結果について考察する。

（1）事例分析

ここでは、**老年的超越**、**東洋的見方**、**主観的幸福感**を主軸に据えて類型間の差異について考察する。

まず**老年的超越**である。老年的超越得点の全体平均（*N*=237 人）を基準にしてみると、類型Ⅰでは全体平均を超える者が６人中５人、類型Ⅱでは 6 人中３人、類型Ⅲでは５人中４人となっており、類型Ⅱが、類型Ⅰや類型Ⅲとくらべて老年的超越得点が若干ではあるが低くなっている。各類型内での得点にバラツキがありクラスター分析のような明確な差異は認められず、クラスター分析の結果（クラスター２は高位）とは異なる。

類型Ⅰの得点が高いのは、６人中５人が女性であること、年齢が 75 歳の女性以外は 80 歳以上であることによるものであろう。第４章の量的研究でも性別と年齢（女性であること、年齢が高いこと）は老年的超越を高める要因となっていることを明らかにしている。類型Ⅱの得点が若干低くなっているのは、４人（男性２人、女性２人）の年齢が 80 歳前後と 17 人の中では低いことによるものであろう。また、コホートという面では、この世代は多感な小学生のときに太平洋戦争を経験していることである。

一方で、類型Ⅱの 94 歳女性（H）の得点は 17 人の中でも最も高く、高齢の女性ほど

老年的超越の得点が高いというこの傾向は、類型Ⅰ（A：92 歳）でも類型Ⅲ（O：86 歳）でもみられる。ただし、類型Ⅲで 92 歳の男性（P）の得点が突出して低いのは、この男性が工学系の元研究者であり合理性を重視する性格が影響している可能性が考えられる。

次に**東洋的見方**である。東洋的見方得点の全体平均（*N*=237 人）を基準にしてみると、類型Ⅰでは全体平均を超える者が６人中３人、類型Ⅱでは６人中５人、類型Ⅲでは５人中２人となっている。やはり各類型内でのバラツキはあるが、クラスター分析にほぼ整合する結果（クラスター２が高位）となっている。

類型Ⅰで東洋的見方の得点が最も高い 75 歳の女性（B）は老年的超越得点も高い。この女性は若い頃に幼い娘を亡くした経験、さらに後年、配偶者を亡くした経験があるが、現在は地域活動の中心的存在としての役割を担っている人である。

類型Ⅱでは、やはり 94 歳女性（H）の得点が高く、この女性も過酷な戦争体験があり、高齢になった今、「十分に生きた」という実感をもっており老年的超越の得点も突出して高い。

類型Ⅲにおいて 86 歳女性（O）の東洋的見方の得点が高いが、この人は死に対して恬淡として受容的であり、やはり老年的超越得点も高くなっている。なお、類型Ⅲの 92 歳男性（H）については、若い頃に『荘子』を愛読したことが影響しているのか、東洋的見方の得点が高いにもかかわらず老年的超越の得点が低くなっており、先述した理由（合理性を重視する性格）が影響しているのかもしれない。

次に**主観的幸福感**についてである。主観的幸福感の全体平均（*N*=237 人）を基準にしてみると、類型Ⅰでは全体平均を超える者が６人中１人、類型Ⅱでは６人中４人、類型Ⅲでは５人全員となっている。類型Ⅰおよび類型Ⅱでは得点にバラツキがあるが、主観的幸福感の高さは、類型Ⅰ＜類型Ⅱ＜類型Ⅲの順となっている。このことはクラスター分析にほぼ整合する結果である。なお、類型Ⅰの 87 歳（B）と 88 歳の女性２人（E,F）、類型Ⅱの 82 歳女性（L）の得点が低いが、インタビュー時の印象からすると明らかに実態とは異なる。特に類型Ⅰの３人は現在でも積極的に地域活動に取り組むリーダー的存在である。主観的幸福感の測定には、数多くの高齢者研究で使用実績のある PGC モラール・スケールを用いたが、超高齢者の幸福感の深層には、この尺度では測りきれない時間の長さをはらんだ要素と関連する次元（たとえば、ユーダイモニア[15]に相応する幸福感）が潜在している可能性が示唆される。

---

15 ユーダイモニア（eudaimonia）は、hedonism（快楽主義）に対置されるアリストテレスの考え方で、刹那的な幸福よりもむしろ真の潜在能力の具現化と訳される。すなわち、短期間の情緒的な幸福感（happiness）ではなく、目的・目標をもつこと、他者との満足な関係を築くことで達成される幸福感を指す（Ryff,1989. 筆者抄訳）。

（2）コード分析

老年的超越得点の全体平均（*N*=237 人）を基準に、性別ごとに全体平均を上回る者を「中位以上」、全体平均を下回る者を「中位以下」とし、研究協力者 17 人を分類したところ、7 人の男性のうち「中位以上」に分類された者は３人、「中位以下」に分類された者は４人であった。また、女性については、10 人全員が「中位以上」であった。この分類にしたがってコード分析を行い、その結果について、さらに要約したものを**5.2.3 コード分析―まとめ**に記した。

しかし、ここでの記述内容をみればわかるように、性別ごとに「中位以上/中位以下」に分類したとしても、まだ 17 人のコード（概念的カテゴリー）ごとの発話内容は多様で個別性があり、また一部にデータの欠損個所があることなどから、分類内で無理に抽象化すると、個々の「語り」に内在する重要な情報を捨象してしまうおそれがある。したがって、ここでは 5.2.3 節の内容を再構成するとともに、17 人に共通する時代背景、老年的超越に影響を及ぼすと考えられる要因、および Tornstam の３つの次元との関連について示す。

a. 男性について

① 「中位以上」が３人、「中位以下」が４人とそれぞれ少人数であるため、年齢などの背景的変数（属性等）の違いが老年的超越の高低にどう影響しているかについては明確なことはいえない。ただ、「重篤な病気」と「人生の危機」については、「中位以上」のほうがそれを経験している人の数が多く、Tornstam（2005）の研究や日本の先行研究（増井他，2012；増井，2013；増井他，2019）と同様、「人生の危機」は老年的超越の促進要因の一つである可能性が示唆される。

② 7 人全員、少年時代あるいは青年時代に戦争を経験しており、従軍経験はないが共通して厭戦感は強い。

③ 幸福観については、「中位以上」「中位以下」ともに、おおむね家族や友人など身近な人との人間関係に楽しさや喜びを見いだしている。「中位以下」の人の発言ではあるが、「戦時中に比べて便利になった今の生活」「自分らしく生きられればそれでよい」などは、東洋的バランス志向性（内田，2020,p.69）の幸福観の特徴を示すものといえるであろう。

④ 性格・自己観・人生観は、「中位以上」「中位以下」ともに、おおむね外向的で対人関係には気を使う。「年とってフレキシブルになり、物事に固執しなくなった」という 92 歳の人がいるが、「自己の次元」に含まれる＜自己との向き合い＞に通じる。ただし、この人が「中位以下」に分類されているのは、合理性を重視する元研究者としての性格が影響している可能性が考えられる。

⑤ 「無為自然」については、「中位以上」「中位以下」ともに、「無理して頑張らない」

など、おおむね共感を示す。Tornstam（2005）は、「東洋哲学の視点を踏まえれば、加齢とともに円熟味が増すことによって、物質的で合理的な視点から、より宇宙的で超越的な視点へ移行することで、生活満足度が高まる」（p.41，筆者抄訳）と述べているが、『老子』の無為自然という思想は老年的超越と関わりの深い概念なのであろう。

⑥　「中位以上」「中位以下」ともに、自然に対する親近感と芸術に共感する心をもっているが、「宇宙的次元」に含まれる＜宇宙との一体感＞に通じる。

⑦　回想については、「中位以上」「中位以下」ともに「過去を振り返っても今さらどうしようもない」と否定的である。「中位以下」の人の中に、振り返り型（悲しい出来事）の回想をする人があり、「宇宙的次元」に含まれる＜時間定義の変化＞（ 幼年時代への回帰）に通じるが、この人の場合は老年的超越の促進要因とはなっていない。

⑧　「人生の危機」については、「中位以上」の人は全員経験があるが、「中位以下」の人では半数となっている。①でも記したように「人生の危機」は、老年的超越の促進要因の一つとされている。

⑨　「中位以下」の人は、おおむね「死」については恬淡として受容的である。「中位以上」でも一人は、「生まれたものはすべて死ぬ」と達観している。これらは「宇宙的次元」に含まれる＜死生観の変化＞に通じる。

⑩　「中位以上」の人の中に東洋的な宇宙観をもつ人がいるが、「中位以下」の人の中にも「人知の及ばないもの（こと）はこの世に存在する」と考えている人がいる。これらは「宇宙的次元」に含まれる＜神秘性の気づき＞に通じる。

⑪　「現在」への関心が最も高く、「未来」への関心は低い。「過去」については評価が分かれる。「中位以上」の人の「時間の実体は〈無〉」とする東洋的な見方は、「宇宙的次元」に含まれる＜神秘性の気づき＞に通じる。

⑫　「近景」（自分や家族）または「中景」（地域や文化）に最も関心が高いが、「遠景」（神仏や宇宙）には関心が低い。「中位以下」の人では「中景」に関心が高い傾向がうかがえる。「近景」への関心という面では、「社会と個人の関係の次元」に含まれる＜人間関係の意味づけの変化＞に通じるところがあるが、身近な人々との「つながり」という側面からみれば幸福観とも関連がある。

b.女性について

①　10 人全員が「中位以上」に分類された。年齢については 70～90 歳代と幅が広い。配偶者は７人が「なし」。活動性指標、交流頻度についても８人が全体平均以上、健康度も８人が「健康」、暮らし向きは全員が「普通」以上となっており、一般的な後期・超高齢者と比べても生活機能が高く健康で活動的であることがうかがえる。

② 半数以上が「重篤な病気」の経験があり、「人生の危機」にいたっては 10 人中９人が「あり」となっており、男性のところで記したように、「人生の危機」は老年的超越の促進要因の一つである。

③ 戦後の民主主義教育を経験するなかで女性なるが故の生き方・進むべき道の選択が行われてきたことをうかがわせる。戦争に対する厭戦感は強く、中には戦争の悲惨さを後世に伝えるべく記憶の伝承や活動を行っている人もいる。半数以上が現在も地域活動に関わっており、身近な人たちとの「つながり」を大切にしている。また、このことが幸福観を高める要因にもなっている。

④ 「幸せ」を感じる対象は多様であるが、カテゴリーで括ると「子供の成長」「健康で自由な生活」「他者との良き関係」「好きな活動・平穏な日常」「内面の充実（生かされている)」に集約できるが、これらが複合的に関連しているのが特徴である。

⑤ 「性格」は、ほぼ全員外向的であるが、外向的な人でも年を重ねるなかで意識が内面に向かうという人もいる。「自己の次元」に含まれる＜自己との向き合い＞に通じる。

⑥ 「無為自然」のイメージは「すべてを含む」「あるがまま」「なるようになる」「頑張りすぎない」「成り行きに任せる」「手術台に乗った気分」と、ほぼ全員共感を示す。男性と同様、無為自然という考え方は老年的超越を高める要因となっているのであろう。

⑦ ほぼ全員が自然や芸術に関心を示す。特に、自然観はアニミズム的であり、芸術については技術的・表面的なことよりも自己の内面にどう響くかを大切にする。「宇宙的次元」に含まれる＜宇宙との一体感/神秘性の気づき＞に通じる。

⑧ 振り返り型の回想（子供の頃の楽しかった思い出/苦しかったこと等)、未来志向型の回想（戦争記憶の孫への伝承）をする人がいるが、総じて回想する人は少ない。男性と同様、老年的超越の促進要因となっているようには思えない。

⑨ ４人が、がんなどの重篤な病気を経験しており、２人は自身の子供に関わる危機（娘の死/アフリカでの学術調査中の交通事故）を経験している。②でも述べたように「人生の危機」の経験は老年的超越の促進要因となっている。

⑩ 「無常観」に４人が共感を示し、「死生観」については５人が恬淡として受容的である。「宇宙的次元」に含まれる＜死生観の変化＞に通じる。

⑪ 「月」（一体性の象徴）に親近感を覚えるのは４人、「太陽」（二元性の象徴）に親近感を覚えるのは２人と分かれた。「太陽」と答えた２人は、地上と宇宙を連続体と捉える東洋的な宇宙観をもっており、「宇宙的次元」に含まれる＜神秘性の気づき＞に通じる。

⑫ ２人には「共時的体験（夢と現実の一致)」があり、「偶然には意味がある」と考えている。ユングは「意味のある偶然の一致」は元型的な基盤をもっているとし、

Tornstam(2005)も元型は老年的超越の文化的な背景として調節項になっていると述べている(p.107)。しかし、この２人の文化的な背景(元型的なもの)は不明である。

⑬　総じて、「現在」をどう生きるかに関心が高く、「過去」については評価が分かれるが、「未来」については関心が低い。男性では、「過去と現在の境界の超越」は確認できなかったが、女性では、「過去・現在・未来は連続するもので境は存在しない」という見方をしている人がおり、「宇宙的次元」に含まれる＜時間定義の変化＞に通じる。

⑭　総じて、「近景」(自分や家族)や「中景」(地域や文化)に関心が高いが、「遠景」(神仏や宇宙)には関心が低い。「近景」「遠景」ともに関心が高い人は、宇宙や魂の存在を肯定する。「宇宙的次元」に含まれる＜神秘性の気づき＞に通じる。また、「近景」への関心という面では、男性と同様、「社会と個人の関係の次元」に含まれる＜人間関係の意味づけの変化＞に通じるところがあり、身近な人々との「つながり」という面で幸福観とも関連している。

(3) 結論

質的研究における当初の問いは、次の二点であった。

(1)　量的研究で明らかとなった３つの類型について質的研究でも同様に確認できるのか。確認できるとすれば、どのような個別性や特殊性があるのか。

(2)　３つの類型の個別性や特殊性を超えて共通する要素はあるのか。すなわち、類型を超えた老年的超越を促進する一般的なパターンが存在するのか。

しかし、**事例分析**の結果、(1)についてはサンプルの属性等の偏りから類型間の明確な違いは確認できなかった。そこで**コード分析**では、老年的超越得点の全体平均(38.80；*N*=275 人)を基準に、男女ごとに「中位以上/中位以下」に区分し、性別による背景的変数(属性等)やコード(概念的カテゴリー)の特徴を分析した。

その結果、類型間や性別の違いを超えて、質的な側面で老年的超越への影響が示唆される関連要因が抽出された。特に、研究協力者 17 人の「生きた時代」「幸福観」「性格・自己観・人間観等」については、相当な部分で共通点が認められた。

また、本研究の主たる目的の一つに、老年的超越への「東洋的見方」の影響を検証することを挙げているが、老年的超越理論の３つの次元のうち「宇宙的次元」の内容は、東洋的な時間認識や宇宙観、自然観に根ざすものが含まれており、この観点からも多くの共通点が認められた。

このようなことから以下では、(1)生まれ育った時代や文化の影響(コホート効果)、(2)老年的超越理論の３つの次元(特に「宇宙的次元」)との関連、に的を絞って取りまとめる。なお、第４章の量的研究と第５章の質的研究との統合については第６章で行うこととし、ここでは第５章の「まとめ」として述べる。

(1) 生まれ育った時代や文化の影響（コホート効果）

生まれ育った時代や社会・文化の影響は、その人の性格や自己観・人間観、ひいては幸福観に影響を及ぼす。このような観点から質的データ分析では、コード(概念的カテゴリー)として、「生きた時代」「幸福観」「性格・自己観・人間観等」を取り上げた。老年的超越への影響（効果）という観点から整理すると次のとおりである。

① 「生きた時代」ということでは、男女ともに少年・少女時代あるいは青年時代に戦争を経験しており、「戦争はもうコリゴリ」との思いが強く、今の平和で自由な生活ができることに喜びや幸せを感じている。特に女性は戦争に対する厭戦感は強く、戦争の悲惨さを後世に伝えるべく記憶の伝承や活動を行っている人もいる。このような活動が「生きがい」にもなっており、主観的幸福感や老年的超越（ありがたさの認識、基本的肯定感）を高める要因となっている。

② 「幸福観」ということでは、男性では、家族や友人など身近な人との人間関係に楽しさや喜びを見いだしている。女性では「子供の成長」「健康で自由な生活」「他者との良き関係」「好きな活動・平穏な日常」「内面の充実（生かされている）」と、「幸せ」を感じる対象は多様である。しかし、いずれも身近なことの中に喜びを見いだしており、「関係志向的・バランス志向的幸福観」（内田，2021）といえる。また、このような他者との「つながり」のなかで味わう東洋的な幸福観は、老年的超越（ありがたさの認識、基本的肯定感、利他性）を高める要因でもある。

③ 「性格・自己観・人間観等」ということでは、男女ともに、おおむね外向的な人が老年的超越得点も高いようにみえるが、外向的な人の中にも年を重ねるなかで意識が内面に向かうという人もいる。老年的超越理論の「自己の次元」に含まれる＜自己との向き合い＞（パーソナリティの隠れた側面に気づく）に通じることであるが、老年的超越の促進要因が「外向的」か「内向的」かは、短絡的に決めつけられるものではない。

(2) 老年的超越の３つの次元（特に「宇宙的次元」）との関連

Tornstam は「宇宙的次元」のコード（第１章 **表 1-1**）として、「時間定義の変化」「世代間のつながりの認識」「死生観の変化」「神秘性の気づき」「宇宙との一体感」を挙げている。特に「宇宙的次元」は東洋文化とも深く関わる側面があり、インタビュー調査では、第３章での考察に基づき以下のコード(概念的カテゴリー)を設問項目として設定した。

自然・芸術に共感する心 / 回想 / 人生の危機 / 無常観・死生観 / 宇宙的感覚（命の連鎖）/ 共時的体験(夢と現実の一致）/ 時間認識 / 空間認識

以下の記述において、①～⑦は「宇宙的次元」との関連についてであるが、＜　　＞

内には該当する「宇宙的次元」のコード、また（　　）内にはその内容を示している。

① 男女ともに自然に対する親近感と芸術に共感する心をもっている。特に自然観はアニミズム的であり、山や樹木など自然物との対話に喜びを感じる点は東洋的見方に通じる。また、芸術については技術的・表面的なことよりも自己の内面にどう響くかを大切に考える。これらの点は、＜神秘性の気づき＞（音楽や絵画によって言葉の壁を超越し、生命の神秘に気づく）や、＜宇宙との一体感＞（自然の中での体験は宇宙との一体感を覚醒し、自己と宇宙との障壁を超越する喜びを喚起する）と相通ずるものがある。

② 男性では 3 人が、女性では 6 人が重篤な病気を経験しており、男女ともに「人生の危機」を経験している人は老年的超越得点が高い。日本の先行研究（増井他，2012；増井，2013；増井他，2019）でも同様の報告がなされており、「人生の危機」が老年的超越を高める要因となっているのは明らかであろう。

③ 男女ともに、おおむね「死」については恬淡として受容的であり、「死は天命」とする日本人の死生観に通じる。また「無常観」に共感を示す人も数人いるが、その背景には、諸行無常や仏教の無常観といった東洋的な考え方がある。②も含めて＜死生観の変化＞（死ぬような体験をすると死への恐怖心が消える/人生後半期での成熟は、生と死に対する新たな見方を喚起する）と通じるところがある。

④ 女性では、一体性の象徴として例示した「月」に親近感を覚える人、二元性の象徴として示した「太陽」に親近感を覚える人と二分された。「太陽」と答えた２人は、地上と宇宙を連続体と捉える東洋的な宇宙観をもっている。「月」や「太陽」に親近感を覚えるということは、＜宇宙との一体感＞（自己と宇宙との障壁を超越する喜び）に通じる。

⑤ ２人の女性に限られるが「共時的体験（夢と現実の一致）」があり、「偶然には意味がある」と考えている。この２人の女性の老年的超越の得点は高く、共時的体験が関連している可能性は否定できないが、文化的な背景（元型的なもの）は未確認である。

⑥ 「時間認識」では「現在」をどう生きるかに関心が高く、「過去」については評価が分かれるが、「未来」については関心が低い。女性で「過去・現在・未来は連続するもので境は存在しない」という見方をする人がいるが、時間概念の捉え方は＜時間定義の変化＞（過去と現在の境界の超越）と共通する。男性で「時間の実体は〈無〉」と考える人は、東洋の宇宙観と通じるところがある。なお、振り返り型の回想（子供の頃の楽しかった思い出/苦しかったこと等）をする人が男女ともにいるが少数であり、回想が老年的超越を高める要因となっているとは考えにくい。

⑦ 「空間認識」では、「近景」（自分や家族）または「中景」（地域や文化）に最も関心が高いが、「遠景」（神仏や宇宙）には関心が低い。「近景」と「遠景」に同じよう

に関心が高い人は、宇宙における魂の存在を肯定する。これは、＜神秘性の気づき＞（この世には人知や感覚を超えた未知なるものが多々ある）に通じる。「近景」や「中景」への関心は、(1) ②でも述べたように個人と他者との「つながり」という意味で「関係志向的幸福」（内田，2021）とも関わってくる。

⑧ 「無為自然」は、老年的超越理論の３つの次元には含まれないが、日本人高齢者における老年的超越の特徴を示す JGS-R の下位因子である（増井他，2010)。「すべてを含む」「あるがまま」「なるようになる」「頑張りすぎない」「成り行きに任せる」など、そのイメージは男女ともに、ほぼ共通したものがある。『老子』の「無為」とは、「道は常に無為にして、而も為さざる無し」（蜂谷，2013）と解釈されるが、「多くを求めず、作為的なことは行わず、あるがままに生きよ」とする考え方であり、まさに「東洋的見方」を象徴する言葉である。

表5-1　類型ごとの事例 ― コード・マトリックス総括表（全12頁）

注）表中、年齢、交流頻度、活動性指標、人生の危機、主観的幸福感、および２つの尺度の下位尺度得点については、上段が平均値、下段は標準偏差（SD）を示す。

⇧：上段は下段の発話内容（要約）をさらに縮約したものを示す。

類型	背景的変数（属性等）												老年的超越下位尺度得点					
	性別	年齢	配偶者	同居既婚子	教育歴	居住地	交流頻度	暮らし向き	健康度	活動性指標	重篤な病気	人生の危機	ありがたさの認識	内向性	脱二元論	宗教・スピリチュアル	脱社会的自己	基本的肯定感
I （低ＳＷＢ・低東洋的見方群）	男 1 女 5	85.8 (5.9)	有 2 無 4	有 2 無 4	中等２ 高等４	都市３ 農村３	8.5 (5.1)	普通６	健康４ 不健康２	11.0 (4.0)	有 3 無 3	1.8 (1.0)	7.7 (1.0)	6.5 (1.8)	6.7 (2.0)	8.2 (2.6)	7.2 (3.5)	9.2 (1.8)

類型			〈老い〉に対する東洋的態度の下位尺度得点							主観的幸福感		
	利他性	無為自然	＜老い＞の知恵	自然への親近感	運命の受容	＜老い＞の深まり	囚われのない自由	内面への旅	不二性		生きた時代	幸福観
Ⅰ （低ＳＷＢ・低東洋的見方群）	6.8 (0.8)	6.3 (2.4)	15.3 (3.4)	8.7 (2.9)	7.8 (1.3)	9.5 (1.2)	4.3 (2.7)	4.8 (1.7)	4.5 (0.8)	10.7 (1.9)	**年齢**：70代(B)、80代(C,D,E,F)、90代(A) **少年時代**：軍国教育一色。戦時中は女学生も勤労動員、空襲・爆撃を体験。戦後は厳しい食糧難、世間の不公平と理不尽さ(A)。それでも世の中が明るくなりある種の解放感を感じた人も(D) **青年時代**：外来語の禁止、楽しい思い出は何もない(A)。教員になりPTA活動に参加(F)。全員職業（商売、医院手伝い、宗教人、公務員、教員）を持つ。 **壮年以降**：全員仕事、4人(B,C,D,F)は地域活動に関わる。 **振り返って**：戦争は絶対ダメ、こんな時代は”もうコリゴリ”との思いが身に沁みている。	4人（A,B,C,D)は、家族・隣人・友人との良き人間関係に、Fさんは、自己解放感という内面的な変化に幸福感を感じている。この点は老年的超越の「社会と個人との関係の次元」（社会的因習からの決別）に通じる。 ⇧ ・子供が家庭を持ってくれたこと(A) ・かつて生活した土地への帰還に際して、人も自然も温かく迎えてくれたこと（B) ・宗教人なので人の幸福を考える立場。人から慕われる人間でありたい（C) ・年相応、体力に応じて楽しみを見つけていく。良き人間関係(B,D) ・ありのままの自分を見せることができるようになった自己解放感(F)

類 型	コード(概念的カテゴリー)				
	性格・自己観・人間観等	無為自然	自然・芸術に共感する心	回想	人生の危機
Ⅰ (低ＳＷＢ・低東洋的見方群)	6人全員、対人関係においては外向的な態度が強く出ているように思われるが、内向的な態度が隠れている場合もある。年を重ねるなかで、自己の内面に意識が向かっている人もいる。 ⇧ **外向的：** ・楽天的。本も読み老いを受け入れる心の準備はできていたつもりだが、難しいこと (A) ・人を差別しない。嫌なことは忘れ、良いことだけ覚えておく。引き受けた役は責任を果たす (B) ・優柔不断なのか、人から悪口を言われることがない (D) ・この年になってしみじみと思う。人間は生かされているんだと (F) **未確認：** ・宗教人なので人を生かすことを考える (C) ・戦時中、ある先生の印象に残る行為、戦後教員となった自分の心の支え (E)	孔子よりも老子に共感する (F)。イメージは「すべてを含む」「あるがまま」「がんばらない」 (A,D)。ただし、悟りのレベルには未だ遠し (D)。自然体もいいが能動的に変えていくことが必要な場合もある (C) ⇧ ・「あるがまま」ということ (A) ・自然体でいい場合もあるが、積極的に変えていくことが必要な場合も (C) ・「がんばらない」には共感するが、悟りは難しい (D) ・老子はすべてを含む。孔子はあまりにも道徳的 (F)	自然が好きで芸術的なことに関心を持つ人が多い(全員)。年とともに芸術への共感力が増してきたという人 (C,D)、演奏のテクニックより一生懸命に演じようとしている姿に感銘を受けるようになったという人も (F) ⇧ ・自然や花が好き。白い雲は変化があって見飽きない (A) ・自然が好き、丹後の海には励まされる (B) ・芸術に関心。老いてなお熟成させていく心境 (C) ・芸術に共感する心は増してきた (D) ・子供の頃の自然につながる体験は、自分の考え方にも影響 (E) ・若いときは演奏のテクニックに感動、今は一生懸命やろうとする心に感銘 (F)	過去回想が主で未来志向的な回想はない。 ⇧ ・1歳の子供を亡くしたこと、親しい友人を亡くしたこと。時々思い出すが悲しい (D)	３人 (A,C,D) ががんなどの重篤な病気を経験、２人 (B,F)が子供の死・瀕死の事故で人生の危機を経験している。 障がい者になったことで、人に助けられること、おかげ様を実感するようになったという人 (C) ⇧ **重篤な病気；** ・色々あった(２回の大手術) と言われるが思い出せない。子供がいたから乗り越えられたと思う (A) ・がんの手術。障がい者になったことで、人に助けられ”おかげ様”を実感 (C) ・脳内出血で1週間記憶を喪失。高齢になってからもがんを経験 (D) **人生の危機：** ・５歳の娘を亡くした経験 (B) ・子供がケニアでひき逃げされロンドンで緊急手術。ダメなら自分も死を覚悟 (F)

類型	コード(概念的カテゴリー)				
	無常観・死生観	宇宙的感覚 (命の連鎖)	共時的体験 (夢と現実の一致)	時間認識	空間認識
Ⅰ (低ＳＷＢ・低東洋的見方群)	無常観については、３人(B,D,F)が共感を示すが、死生観については、宗教者のCさんは明快であるが、Fさんはまだ死を受容していないが、”どう生きたか”に関心がある。 ⇧ **無常観：** ・無常感がないと人は生きていけない。車に乗るので事故死の可能性は覚悟 (B) ・病気を受け入れる覚悟はできている。「風にそよぐ葦」のような生き方をしてきたので、今さら人生観は変わらない (D) ・どんなにお金があっても、結局、人間は死ぬ (F) **死生観：** ・死は誰にでも訪れるもので受け入れるよりしょうがないが、わからないので不安 (A) ・死んだら仏になる。人は神仏の加護で助けられている (C) ・まだ死を受け入れてはいない。生きてることに感謝。魂は残された人の記憶に残る、ちゃんと生きなければ (F)	母性的な愛の象徴として例示した「月」に親近感を覚えると答えた人が４人 (A,B,D,F)、光と闇の象徴としての「太陽」と答えた人は０であった。 宇宙を連続体と捉える東洋的な宇宙観を持つ人も (C,F) ⇧ **月に親近感：** ・月が夜空に浮いている不思議 (A) ・月や星を見ると心が安らぐ (B) ・ (D),(F) **太陽に親近感：** ・なし **宇宙（命の連鎖）：** ・世代間のつながりは感じない (A) ・神は宇宙に存在するもの。宇宙に包まれている感覚がある (C) ・無神論者だが、人智の及ばないものもあると思う (D) ・人間は宇宙の一員、宇宙とは一体のもの (F)	共時的体験を有するのはFさんのみ。 ⇧ ・息子がケニアで事故に遭う前々日に赤ちゃんになっている夢をみた。３日後に事故の知らせがきた。偶然には意味があると思う。	３人 (C,D,F)は、現在＞過去＞未来と**現在**を重視する傾向があり、次いで**過去**、遠い**未来**のことはわからないという。Bさんは、過去・現在・未来は連続的なもので境はないという。 ⇧ A：過去のことも、現在のこともすぐに忘れる。未来はない。 B：過去・現在・未来の間に境界はないと思う。 C：現在＞過去＞未来。過去は苦労した思い出。未来はわからない。 D、F：現在＞過去＞未来	Aさんを除いて４人は**中景**（地域や文化）を重視する傾向があり、次いで**近景**（自分や家族）、**遠景**（神仏や宇宙）は近景と同程度または近景より小さい。 これらの4人は、現在も地域活動に関わりを持つ人たちである。 **近景**と**遠景**が同程度と答えた２人 (C,D) とFさんは、宇宙や魂の存在を肯定または否定はしない人である。 ⇧ A：見当識障害あり B：中景を重視 C：中景＞近景・遠景 D：中景＞近景・遠景 F：中景＞近景＞遠景

類型	背景的変数（属性等）												老年的超越下位尺度得点					
	性別	年齢	配偶者	同居既婚子	教育歴	居住地	交流頻度	暮らし向き	健康度	活動性指標	重篤な病気	人生の危機	ありがたさの認識	内向性	脱二元論	宗教・スピリチュアル	脱社会的自己	基本的肯定感
Ⅱ （中ＳＷＢ・高東洋的見方群）	男 3 女 3	83.8 (5.5)	有 3 無 3	有 0 無 6	中等3 高等3	都市2 農村4	13.8 (6.6)	普通 5 ゆとり1	健康 6 不健康0	12.3 (1.2)	有 2 無 4	1.0 (0.6)	7.0 (0.9)	6.3 (1.9)	6.0 (1.3)	7.7 (1.5)	8.8 (1.5)	8.2 (2.1)

類型			〈老い〉に対する東洋的態度の下位尺度得点							主観的幸福感		
	利他性	無為自然	＜老い＞の知恵	自然への親近感	運命の受容	＜老い＞の深まり	囚われのない自由	内面への旅	不二性		生きた時代	幸福観
Ⅱ （中ＳＷＢ・高東洋的見方群）	6.0 (2.1)	6.2 (2.6)	16.7 (0.5)	9.5 (1.2)	7.0 (1.7)	9.3 (2.1)	5.3 (2.1)	6.3 (2.3)	5.2 (1.0)	13.8 (2.3)	**年齢**：70代（K）、80代（G,I,J,L）、90代（H） **少年時代**：軍国教育一色。出征する父との寂しい別れ（L）、引き揚げ時の恐怖体験（I）、農村では子供も労働力（J,K）。戦後の厳しい食糧難 **青年時代**：戦中、女中奉公、農家への嫁入り、家族関係に苦労（H）。戦後、子供が生まれ、ようやく自分の人生が実感（I）。英語教員になるため大学へ（G）、手に職をと看護学校へ進んだ人も（L）。全員職業（教員、農業、公務員、会社員、看護師）を持つ。 **壮年以降**：全員仕事、地域活動（H,J）に関わる。 **振り返って**：戦争は”もうコリゴリ”。戦争の悲惨さを孫に話しているという人（L）、80歳にして不戦の思いから「女性の会」を立ち上げ活動を始めた人も（H）	この年まで来れたことに感謝しつつ、時々の状況に柔軟に処していくことで生の充実感（H,I,J） 気の置けない仲間や思いを同じくする同好の士との交流に喜び（J,K,L）。 ⇧ ・幸福感は文化を大事にする生活のなかにある。今が一番幸せ（G） ・状況に応じて感じ方は変わるが根っこは同じ。”十分に生きた”という実感。今は幸せ（H） ・健康であること。自分の思いを状況に合わせて変えることで喜びにつなげる（I） ・この年まで来れたこと。自分らしく生きられればよい（J） ・便利になった今の生活、親しい仲間との飲み会（K） ・仕事を無事に勤め上げたこと。趣味や思いを同じくする友人との交流（L）

類 型	コード(概念的カテゴリー)				
	性格・自己観・人間観等	無為自然	自然・芸術に共感する心	回想	人生の危機
Ⅱ (中ＳＷＢ・高東洋的見方群)	外向的な人は、自分軸が振れることなく相手の立場に立って考える傾向がみられる。内向的な人は、周りをよく見て状況に応じて自分軸を変化させていく。悟りに近い死生観(天命)を持つ人も (G) ⇧ **外向的：** ・相手の立場に立って考え、自分はどう生きるかを考える。頼まれた役は断らない (H) ・専門的なことは外向的。ただし主張しすぎて対立することは好まない (L) **内向的：** ・"そうなりたくない"と思う年寄りにならないよう心掛け (I) ・角が立たないよう周りに気を使う (J) **未確認：** ・生きることは死ぬこと、死ぬことは生きること (G)	イメージは「なるようになる」「がんばり過ぎない」「成り行きに任せる」 (H,I,J,L)。自然の力に比べれば、人間の力はしれたもので、自分だけあがいてみても何もできない (H) ⇧ ・自然の力に比べれば、人の力なんかしれたもの。なるようになる (H) ・もう"がんばる"のは御免。できることだけをすれば、それでよい (I) ・できないことは、成り行きに任せる。自分だけあがいてみても、何もできない (J) ・何事もがんばりすぎないよう心がけている (L)	自然を好み芸術に関心を持つ人が多い。木や花など身近な自然との対話に喜びを感じるという人 (H)。年とともに芸術的なものへの共感力が増してきた人 (G)。若い頃は洋楽に関心、今は日本的なもののほうが気持ちが落ち着く人 (I)。お気に入りの詩集を読み返すと、その頃の情景に心が動かされる人 (L) ⇧ ・日本の自然に対する親近感。年とともに芸術的なものへの共感力が増す (G) ・自然はいい。山があり、木があり、花があり、対話できる (H) ・若い頃には洋楽に関心、今は日本的なもののほうが気持ちが落ち着く (I) ・若い頃から詩や文学に関心。好きな詩集を読み返すと、その頃の情景が浮かんできて心が動かされる (L)	過去回想が主であるが (H,I)，回想に否定的な人 (J),Lさんのように未来志向的な回想をする人もいる。 ⇧ ・子供の頃、みんなと仲良く遊んだ楽しい思い出 (H) ・忘れたらよいのにと思うが、苦しかったこと (I) ・今さら過去へは戻れない (J) ・戦争で苦しかった時代があったことを孫に話す (L)	重篤な病気を経験した人は２人 (H,K)。共にこのような危機の経験により人生観が変化。Hさんは、健康のありがたみを実感し氏神さんに参ることが日課に、Kさんは、四国霊場巡りで生き方がプラスの方向に変化。 ⇧ **重篤な病気：** ・50代で1年近く入院。病気になったことで色々と思うところが。以来、健康のために氏神さんに参ることを日課に (H) ・顔面手術の経験、完治後３年かけて四国霊場巡り。人生観がプラスの方向に変化 (K)

類 型	コード(概念的カテゴリー)				
	無常観・死生観	宇宙的感覚 (命の連鎖)	共時的体験 (夢と現実の一致)	時間認識	空間認識
Ⅱ (中ＳＷＢ・高東洋的見方群)	３人（G,H,L)が無常観に共感を示す。死生観についても死は天命として受け入れており、恬淡としたところがある。Hさんは、他者とつながる魂の存在を感じている。 ⇧ **無常観：** ・生まれたものはすべて死ぬ。天国か地獄か、考えてもしょうがない（G) ・100歳より長くは生きられない。形はなくなるが、他者とつながる魂の存在は感じる（H) ・死ぬと「無」になるのは仕方ないこと。受け入れられると思う（L) **死生観：** ・草引きをしながらパタッと死ぬのが理想。仕方ないこと、亡き主人が近くにいる気がする。感謝（I) ・この世は仮の宿。縁があって居るだけ。あの世はもっと幸せかも。死は、それほど深刻に考えることではない（J)	月に親近感を覚える２人（H,J)は、人生の投影やその神秘性に、太陽に親近感を覚える２人（I,L)は、エネルギーの源として、また光と影の相補性に惹かれる。 Gさんは、東洋的な宇宙観を持つ。Hさんは宇宙の象徴として太陽を捉えている。 ⇧ **月に親近感：** ・月には自分の人生までもが投影されているように感じる（H) ・星の神秘性、夜空を見上げることが多くなった（J) **太陽に親近感：** ・農業をしているので太陽とともに生きている（I) ・光と影に惹かれる。生き生きとしている（L) **宇宙：** ・インドの思想では、宇宙は陰陽が関係。その大きさは脳の判断の結果（G) ・大きく赤い太陽に宇宙を感じる（H)	共時的体験を有する人はいない。	今をどう生きるかに関心があり、**現在**を重視する傾向があるが、**過去**については評価が分かれる。最も重視しているのはIさん、Lさんは**現在**と同レベルで関心があり、見ないようにしているのはJさん。**未来**については、３人（I,J,L)は関心が低い。Gさんは時間の実体は「無」と哲学的な捉え方をしている。 ⇧ G：過去・現在・未来は脳の判断によるもので実体は「無」 I:過去＞現在＞未来 J:現在をどう生きるかに関心、過去は見ないように、この歳で未来はない。 K：現在＞過去・未来 L：現在・過去＞未来	３人（I,K,L）が**近景**＞**中景**＞**遠景**となっており、自分や家族のことについて最も関心が高く、次いで、地域や文化、神仏や宇宙については関心が低い。 **中景**に最も関心が高い２人（H,J）は、地域との関わりが深い人たちである。 ⇧ H：中景＞近景・遠景 I：近景＞中景＞遠景 J：中景＞近景＞遠景 K：近景＞中景＞遠景 L：近景＞中景＞遠景

類型	背景的変数（属性等）												老年的超越下位尺度得点					
	性別	年齢	配偶者	同居既婚子	教育歴	居住地	交流頻度	暮らし向き	健康度	活動性指標	重篤な病気	人生の危機	ありがたさの認識	内向性	脱二元論	宗教・スピリチュアル	脱社会的自己	基本的肯定感
Ⅲ （高ＳＷＢ・低東洋的見方群）	男 3 女 2	85.6 (4.4)	有 4 無 1	有 0 無 5	中等2 高等3	都市4 農村1	11.6 (6.7)	普通 4 ゆとり1	健康4 不健康1	12.8 (0.4)	有 4 無 1	1.8 (1.3)	7.8 (1.6)	6.4 (2.1)	5.0 (2.5)	6.6 (1.9)	7.4 (3.0)	9.0 (2.5)

類 型	〈老い〉に対する東洋的態度の下位尺度得点									主観的幸福感		
	利他性	無為自然	＜老い＞の知恵	自然への親近感	運命の受容	＜老い＞の深まり	囚われのない自由	内面への旅	不二性		生きた時代	幸福観
Ⅲ （高ＳＷＢ・低東洋的見方群）	6.6 (1.1)	7.0 (1.4)	14.8 (3.6)	8.0 (2.2)	8.0 (1.2)	9.6 (1.1)	4.8 (1.8)	4.0 (1.6)	4.6 (0.5)	15.6 (1.1)	**年齢**：80代（M,N,O,Q）、90代（P） **少年時代**：軍国教育一色。外地での裕福な生活（M）、内地では空襲・爆撃の恐怖。天皇のために死ぬことも覚悟（P）。戦後の厳しい食糧難 **青春時代**：戦後の戦争批判、世間の変わり身の早さに違和感（P）。病気で高校進学を断念（M）。洋裁を学ぶため渡米（O）。勝敗だけにこだわるスポーツに疑問（Q）。全員職業（会社員、公務員、障がい者施設職員、研究者）を持つ。 **壮年以降**：仕事、ボランティア、「居場所」を始めた人も（P） **振り返って**：あんな時代はもう”コリゴリ”。戦後、世間の変わり身の早さに違和感（P）。戦後の厳しい時代のことを思えば少々のことは辛抱できる（M）。	戦争が終わって、自由に生きられる世の中に変わり、自らの意志で人生を切り開いてこれたことの充実感（M,N,O,P,Q） 家族や友人と仲良く過ごせることに喜び（M,N,Q） ⇧ ・健康で束縛なく好きな時間を過ごせること。今は一番幸せ（M） ・かつての仕事仲間との人間関係。家族の心配事があったときのほうが幸せ感があった（N） ・夢を実現させた米国での生活、親しいボランティア仲間。日々平和に過ごせること（O） ・自由に生きられること。自著が今も業界のテキストとして使われていること（P） ・妻子が近くにいてくれること。昔どおりのことを現在に望むことはない（Q）

類 型	コード(概念的カテゴリー)				
	性格・自己観・人間観等	無為自然	自然・芸術に共感する心	回想	人生の危機
Ⅲ (高ＳＷＢ・低東洋的見方群)	外向的な人が多く、物事に対して柔軟性があり固執しない。若いときには内向的であった人が様々な人生経験を積む中で外向的に変化してきたのが特徴 (O,P) ⇧ **外向的：** ・くよくよしない、何があってもしょうがない。明日になればまた変わる (M) ・若いときは劣等感に落ち込むこともあったが、渡米によって消失。あれこれ考えない、なるようになる (O) ・若いときは内向的、年寄りになって外向的に。フレキシビリティがあり、物事に固執しない (P) **未確認：** ・人とのトラブルを避ける習性、表立ったことはしない (N) ・神仏の力には懐疑的。この考えが人生観の背後に (Q)	イメージは「手術台に乗った気分」「あるがまま」 (M)、「自然体」 (P)、「無理に頑張らない」 (Q)。できなくなったことを嘆いてもしょうがない。できる範囲で楽しく、それで十分 (O) ⇧ ・手術台に乗った気分。「あるがまま」 (M) ・できなくなったことを嘆いてもしょうがない。できる範囲で楽しく、それで十分 (O) ・若いときに荘子に共鳴、自然体が良い (P) ・若い頃のようにはできない。無理して頑張る必要はない (Q)	演芸、音楽、アートを楽しむ人が多い。この年になって、本が好きになったという人 (O)、わからんなりに、ぼんやりと邦楽や洋楽を聴いているという人も (F) ⇧ ・もともと芸能好き。月に一度は演芸を聞きに行く (M) ・若い頃からアートに関心。展覧会によく行く。この歳になって、本が好きに (O) ・若い頃は絵画に関心。今はわからんなりに、ぼんやりと邦楽や洋楽を聴いている (P) ・昔は展覧会に行ったが、体調を崩してからは行けてない (Q)	過去回想が主で未来志向的な回想はない。 ⇧ ・意識的に楽しかったことを思い出すようにしている。未来指向の回想はしない (O) ・子供の頃の思い出を折に触れ懐かしんでいる程度 (P) ・過去のことを思い出しても、今さらどうしようもない (Q)	２人 (M、Q)は、がんによる手術の経験があり、Mさんは、ある種の覚悟ができており今を生きること楽しんでいる。Qさんは、術後30年近くになるが再発もなく医者が驚いている。 ⇧ **重篤な病気：** ・大腸がんの手術。健康のありがたさを実感。いつ何があってもしょうがないと思える。好きなことをしたい (M) ・60代でがんの宣告。諦めかけていた医者を”勉強してくれ”と鼓舞 (Q)

類型	コード(概念的カテゴリー)				
	無常観・死生観	宇宙的感覚 (命の連鎖)	共時的体験 (夢と現実の一致)	時間認識	空間認識
Ⅲ (高ＳＷＢ・低東洋的見方群)	死生観については、4.人(M,O,P,Q)に違いがあるが、死んだら無になるというMさん、好奇心がありこの行く末を見届けたいというPさん、ぽちぽち神仏に頼ることも考えなければというQさん。 時が来れば死を受容する態度は、おおむね共通している。 ⇧ **無常観：** ・まだ考えていない (N) **死生観：** ・死んだらお終い。なるべくなら長生きしたい。魂の存在を考えたことはない (M) ・10年ほど前は死を怖く感じたが、今は何とも思わない。自然に死を迎えられると思う (O) ・いずれ死ぬことはわかっているが、好奇心があるのでこの世の行く末を見届けたい (P) ・年をとったので、もうちょっと神仏に頼らないかんのかとも思う (Q)	月に親近感を覚える人は２人(O,Q)。Qさんは、「静」をイメージするが母性愛を感じることはないという。２人 (M,N)は太陽に親近感を覚える。 東洋的な宇宙観を持つ人はいないが、Pさんは、身近な経験として"見えないもの"の気配を感じることがあるという。 ⇧ **月に親近感：** ・(O) ・静かな印象。母性愛を感じることはない (Q) **太陽に親近感：** ・ (M),(N) **宇宙／見えない世界：** ・宇宙とのつながりを感じることはない (M,O) ・星を見て宇宙的な感慨にふけることはないが、歩いているとき、一人のときに、ふと肩を叩かれたように感じることがある (P) ・未知な存在である神仏には懐疑的 (Q)	共時的体験を有するのは0さんのみ。 ⇧ ・父の死も母の死も事前に夢で知った。母のときは、華やかな花の夢をみた。女の声で「お母さんが死ぬよ」と聞こえてきた。すると兄から電話がかかってきた。父のときは、棺に入れる花が夢に出てきて、死を知らせてきた。	３人 (N,O,Q)は**現在**を重視する傾向を示すが、**過去**と**未来**の捉え方が異なる。**未来**と**過去**を同じように重視するのがNさん、**過去**を重視するのが0さん、**未来**を重視するのがQさん。 **過去**を最も重視するPさんは、94歳であり**未来**はないという。 Mさんは、時々に合わせて身を任せてきたので、そのような時間認識はないという。 ⇧ M:過去・現在・未来を意識することはない。 N：現在＞未来・過去 O：現在＞過去＞未来 P: 過去＞現在、未来はない Q：現在＞未来＞過去（小さい）	２人 (N,P) が**中景**＞**近景**＞**遠景**となっており、自分や家族のことよりも地域や文化により関心が高い傾向を示す。 **近景**に最も関心が高い人が２人 (M,Q) いるが、重篤な病気（がん）の経験を持つ人である。 **遠景**に最も高い関心を持つ0さんは、海外ボランティアにも参加し、平和に過ごせることに幸福を感じている。 ⇧ M：近景あっての中景 N：中景＞近景＞遠景 O：遠景＞中景＞近景 P：中景＞近景＞遠景 Q：近景＞中景＞遠景

Ⅲ　総 合 的 考 察

第６章　総合的考察

6.1　考察

本研究の主たる目的は、Tornstam の研究や日本の先行研究において明らかにされてきた老年的超越の関連要因について、その連関を構造的に把握することであり、中でも東洋文化的な要因が及ぼす影響を検証することであった。本節では、まず老年的超越の関連要因について、本研究で得られた知見と、Tornstam の研究や日本の先行研究との関連を論じる。その上で、量的研究と質的研究の統合を試みる。

なお、以下の記述で量的研究の関連要因に関する個所は、原則として潜在変数を『　』で、観測変数を「　」で表記する。

(1)量的研究から

第1は、調査対象の高齢者 251 人(男性 140 人、女性 111 人)の SEM による多母集団分析の結果、男女間でほぼ同質の共分散構造(配置不変性)が認められたが、『老年的超越』に影響を及ぼす要因の規定力については、特徴的な違いが認められたことである。男性では、『老年的超越』への直接効果が認められたのは、『主観的幸福感』『東洋的見方』および『危機の経験』である。『活動性』と「暮らし向き」については、『主観的幸福感』を介して『老年的超越』に影響を及ぼす。「年齢」については、『老年的超越』への直接効果は認められないが、『東洋的見方』を介して間接的に『老年的超越』へ影響を及ぼしている可能性は否定できない。

一方、女性では、『老年的超越』への直接効果が認められたのは、『主観的幸福感』『東洋的見方』および「年齢」である。「暮らし向き」については、男性と同様、『主観的幸福感』を介して『老年的超越』に影響を及ぼす。『危機の経験』については、『老年的超越』への直接効果は認められなかった。

このように男性と女性では、影響要因の関わり方に若干違いが認められるが、直接的な効果という点では『主観的幸福感』と『東洋的見方』は共通しており、「年齢」については、女性では直接的であるが、男性では間接的に影響を及ぼしている可能性が示唆されることである。

このような「性別」「年齢」『危機の経験』による『老年的超越』への影響については、Tornstam (2005) の量的研究や日本の先行研究(増井他, 2010;増井他, 2012;増井他, 2019)でも認められているところである。

第２に、『主観的幸福感』と『老年的超越』との因果的な関連について双方向のパス解析を行ったところ、『主観的幸福感』から『老年的超越』へのパスのみが有意となり、この結果は Tornstam (2005) の量的研究や日本の先行研究(増井他, 2010)とは異なるものであった。ただし、Tornstam の量的研究では、生活満足度（現在の生

活の満足度を５件法で問う単項目尺度）が従属変数として用いられており、また、増井他の研究では、本研究と同様 PGC モラール・スケールを用いているが、クラスター分析の群分けの指標としての扱いである。

以上のように両研究は、PGC モラール・スケールで測定された主観的幸福感を従属変数としているものではないため本研究との比較は難しいが、SEM 分析の結果としては、男女ともに『主観的幸福感』が『老年的超越』を高めるという片方向の因果の流れのみが有意となった。この結果は、先行研究の知見とは異なるものであり、次節 6.2 の(6)でも考察する。

第３に、『老年的超越』への強い影響因となった『東洋的見方』と『主観的幸福感』に関しては、クラスターを独立変数とする一般線形モデルによる共分散分析の結果、クラスター２（中 SWB・高東洋的見方群）が『老年的超越』の６つの下位尺度すべてにおいて得点が高く、『老年的超越』を肯定的に捉えている群であることが確かめられた。クラスター２の特徴は、『主観的幸福感』が中庸のレベルにあることであり、この場合に『老年的超越』の得点が高いということは、東洋文化の影響を受ける日本人高齢者の幸福感には、「バランス志向的幸福観」（内田，2020,p.67）の特徴が反映されていることを示唆するものである。

以上は量的研究で明らかにされた諸点であるが、比喩的な言い方をすれば、量的研究の対象が「森」であるとすれば、この「森」からさらに 75 歳以上の後期・超高齢者を抽出し、インタビューを併用しながら個別の「木」の特徴を分析したのが質的研究であった。

(2)質的研究から

質的研究の対象となった 17 人は無作為抽出された標本ではないため、251 人の量的研究との統計学的な対比には問題もあろうが、それでも 17 人のデータの量的・質的分析からは量的研究を補完する有益な知見が得られた。

まず、17 人の量的データの分析では、次の三点が明らかとなった。

① 年齢と老年的超越との関連では、全体的に年齢の高い者は『老年的超越』の得点も高い傾向がうかがえ、特に女性ではその傾向は明らかである。この点は、関連要因の SEM 分析と同様の結果である。Tornstam(2005)の量的研究でも「宇宙的超越」に関しては、性別による発達の違いが指摘されているが、男性ではコホート（戦争経験）による影響のためか、後期高齢域では低下するとされる。

② 年齢と東洋的見方との関連では、全体的には年齢に対応した変化は認められないが、女性のほうが男性より『東洋的見方』の得点が高い傾向がみられる。一般的に戦前の女性では、性別役割分業の規範が強固な時代にあって、結婚して家に

入れば、周囲との関係性への適合（対立より調和を重視する傾向）に気を使うあまり〈受容的〉にならざるを得なかったことが背景にあるのかもしれない。

③　年齢と主観的幸福感との関連では、全体的に年齢に対応した変化は認められない。とりわけ４人の女性の『主観的幸福感』の得点が低かったことは、インタビュー時の印象とは大きく異なる結果であった。この点については、次節 6.2 の(5)でも考察する。

さらに、老年的超越への影響（効果）要因を質的に探ることを目的に、17 人のサンプルの中から『老年的超越』の得点が中位以上(251 人の平均値を基準)の 13 人（男性 3 人、女性 10 人）を抽出し、その類似点や共通点に着目してコード分析を行い、それらの結果を考え合わせて量的研究との統合を図った。

(3)量的研究と質的研究の統合

量的研究と質的研究の統合の目的は、量的データの統計分析により一般化された「森」の全体像に対して、フィールドワークにより、その「森」を構成する「木」の個別観察を行い、事象の内側から「森」全体の理解をより深めることにある。したがって量的研究と質的研究は互いに相補的関係にあるといえる。

抽出された 17 人のサンプルの特性は、①『老年的超越』の得点が高いこと、②15 人が 80 歳以上であること、③女性の構成割合（58.8%）が高いこと――から、量的研究で明らかにした老年的超越を高める要因の条件に対応しており、共通の主題に対する質的側面からのデータと位置づけることができるであろう。

図 6-1 は、老年的超越の関連要因について、量的研究と質的研究を統合し概念モデルとして示したものであるが、要素間の関連の基本構造をみるのが目的であるため、細部の関係は捨象して示している。

上段フレーム、すなわち「森」に相当する部分は、SEM 分析の結果から有意な要因間の関係を抽出しスケルトン図で示している。下段フレーム、すなわち「木」に相当する部分は、量的研究において『老年的超越』との強い関連が認められた『主観的幸福感』と『東洋的見方』について、質的研究の事例・コード分析における関連する内容（「文化的幸福観」と「東洋的見方」）を対応させており、枠内には発話内容の一部を示している。

下段フレームは、「文化的幸福観[1]」「東洋的見方」「文化的・社会的要素」の３つのカテゴリーで構成されるが、「文化的幸福観」と「東洋的見方」は相補的関係にあ

[1] 内田・荻原（2012）によれば、「文化的幸福観は、文化を構成する価値観や人生観を反映し、とりもなおさずその文化・思想的背景によりはぐくまれる」とされている。ここでは、研究協力者の発話の内容の多くが、内田（2020，p.67）のいう「関係・バランス志向的幸福観」の考え方に類似するものであ

り、さらに、これらの背景には「文化的・社会的要素」としての、その人が生きた時代の精神、文化を構成する価値観や人生観が反映される。

それぞれのカテゴリーは文化心理学（柏木他，1997）や「文化的幸福観」（内田他，2012）の考え方を参考に、次のような考え方に基づき構成している。

文化的幸福観　「幸福観」（ここでは、感情としての「幸福感」とは区別し、「幸せ」と感じるとき、ことなど、幸福の対象や前提、価値観を意味する）に関する 13 人の発話内容の一部を枠内に掲示しているが、男性・女性ともに、家族や友人など「身近な人とのつながり」や「地域とのかかわり」に楽しさや喜びを見いだしている人が多い。特に女性では、「日々平和に過ごせること」「この年まで生きてこれたことに感謝(十分に生きた)」「生かされている感覚(内面の充実)」「自分らしく生きられれば、それで十分」「健康で束縛のない生活」「便利になった今の生活」「子供の成長」と、幸福を感じる対象が多様である。

内田（2021）は、これまで自身が行ってきた日本人の幸福に関する調査で回答の多くが、他者との関係性や家族との穏やかな生活が占める割合が非常に高いものであったことを紹介している（たとえば、平和で安定的な暮らし、ささやかな日常の幸せへの気づき、他者から感謝されること、自然の恵みに感謝すること、など)。そして、このようなときに感じる幸福を「関係志向的幸福」と呼んでいる。この定義からすると、先に挙げた人たちの「幸福観」は、ほぼこの定義にあてはまると考えてよいであろう。いずれも戦争という厳しい経験を経て心の奥深く「身体化」（上野，2008）された思いが言葉となって表われたものであり、この意味でも、「文化的幸福観」といえるであろう。

東洋的見方　この図では、老年的超越が高い者との関連が認められた５つのコード（概念的カテゴリー）［自然・芸術に共感する心、無常観・死生観、宇宙的感覚（命の連鎖)、時間認識、空間認識］と、Tornstam の老年的超越理論の「宇宙的次元」との対応関係（矢線の右に対置）を示している。＜宇宙との一体感＞＜神秘性の気づき＞＜死生観の変化＞＜時間定義の変化＞などは、第３章で詳述した東洋的見方の特徴と通じるものがある。

また、「無為自然」は、老子哲学の中心をなす概念であり、「あるがままに生きる/頑張りすぎない/足るを知る」などは、「文化的幸福観」の「この年まで生きてこれたことに感謝（十分に生きた）/生かされている感覚/自分らしく生きられれば、それで十分」などのバランス志向的な幸福と通じるものがある。

るため、「文化的幸福観」という用語を使用した。

文化的・社会的要素　17 人に共通するのは、少年・少女時代あるいは青年時代の戦争体験である。また、終戦直後の社会の混乱と価値観の激変は、彼ら・彼女らが否応なく影響を受けた歴史的に共有する体験である。この「身体化」された思いが、その後のものの見方や人生観に大きな影響を与えていることは容易に想像できるであろう。特に女性は、戦争に対する厭戦感は強く、高齢になった今も戦争の悲惨さを後世に伝えるべく記憶の伝承や平和活動を行っている人もあり、このような活動は、その人たちの「生きがい」にもなっているようである。

また、年を重ねるなかで意識が内面に向かい、人間は生かされていることをしみじみと感じるようになったという人、長い人生経験から「生きることは死ぬこと、死ぬことは生きること」と生死を超越的に捉えるように考え方が変わったという人もいる。

戦中の軍国主義教育から戦後の民主主義教育への価値観のドラスチックな変化を経験してきた人たちの「性格・自己観・人間観等」は、自分たちが「生きた時代(コホート)」の文化的・社会的要素（価値観、人生観、宗教・倫理観など）と相互に関わりをもつことで作り上げてきたものであると言えるであろう。

このように老年的超越は、背景にある「文化的・社会的要素」の体系に沿って反応する「文化的幸福観」や「東洋的見方」と深く関わる（影響を受ける）ことで発達するものである。なお、「文化的幸福観」の枠内の内容については、Tornstam の老年的超越理論では「自己の次元」や「社会と個人との関係の次元」に通じるものも多い。

見落としてはならないのは、量的研究の２変数相関分析では、『主観的幸福感』と『東洋的見方』のそれぞれの下位尺度間には有意な相関関係はほとんど認められなかったが、質的研究では、「文化的幸福観」と「東洋的見方」には相補的な関連が認められたことである。このことは、「幸福」の感じ方には背景にある文化に根ざす価値観が反映されるということであり、分析結果の解釈にあたっては、この前提をふまえて慎重に判断する必要があるであろう。この点については、次節 6.2 の(5)において考察する。

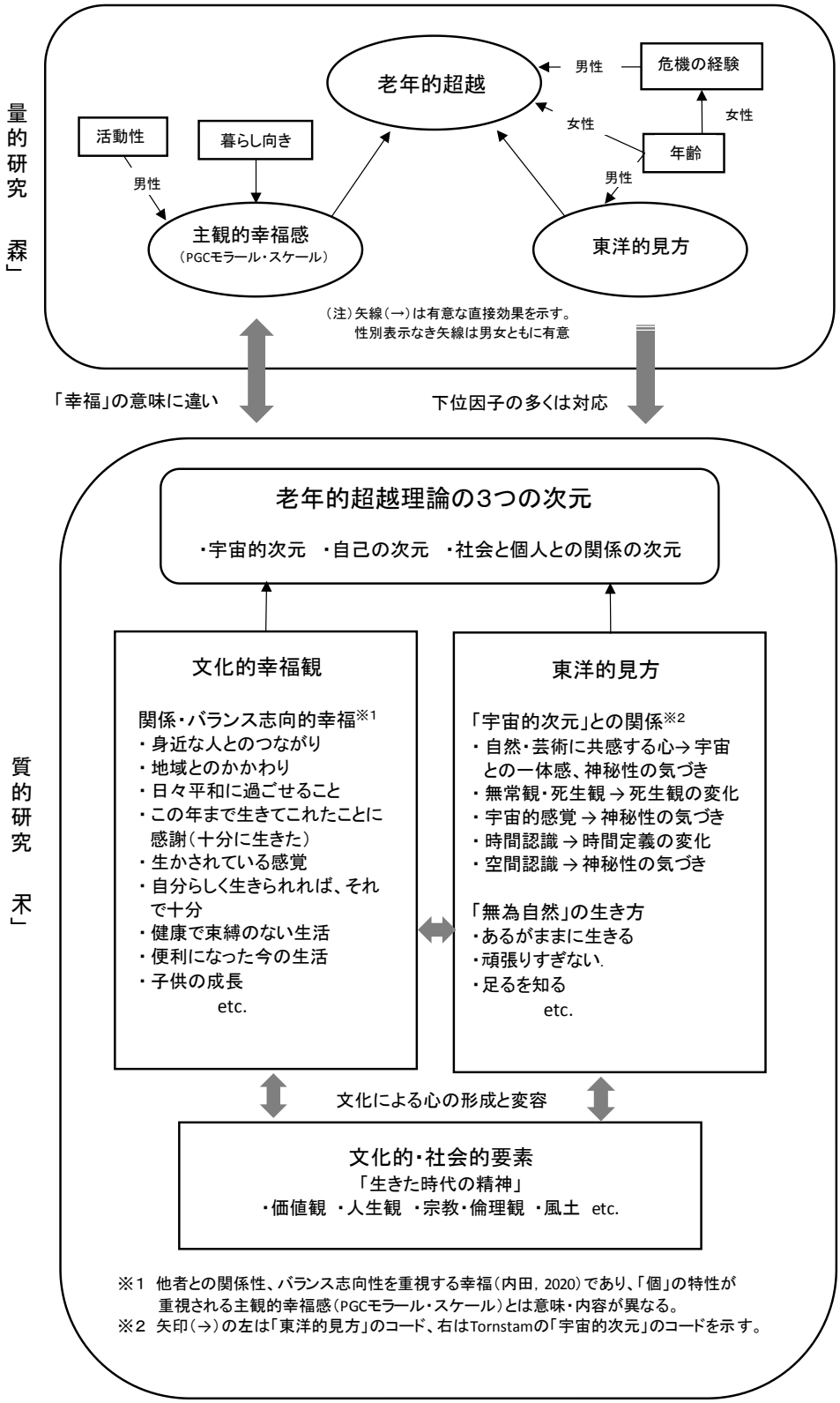


図6-1 量的研究と質的研究の統合：要因関連の概念モデル

(4)結論

本研究における課題は、(1)日本版老年的超越質問紙改訂版（JGS-R）の再現性の検証、(2)老年的超越が幸福感に及ぼす影響の分析、(3)老年的超越の関連要因、中でも東洋文化的な要因による影響の分析、(4)当事者研究の視点をふまえた分析、であった。ここでは、前記の(2)(3)(4)の三点に絞って結論を記すこととするが、そのエッセンスは、**図 6.1** の要因関連の概念モデルで示したとおりである。

まず第１に、『老年的超越』に影響を及ぼす要因間の関連では、「性別」による違いが認められた。男性では、直接効果が認められたのは『主観的幸福感』『東洋的見方』『危機の経験』であり、『活動性』「暮らし向き」については、『主観的幸福感』を介して『老年的超越』に影響を及ぼす。「年齢」については、『老年的超越』への直接効果は認められなかったが、『東洋的見方』を介して間接的に影響を及ぼす可能性は否定できない。一方、女性では、『老年的超越』への直接効果が認められたのは『主観的幸福感』『東洋的見方』「年齢」であり、「暮らし向き」については『主観的幸福感』を介して『老年的超越』へ影響を及ぼす。

このように、影響要因の関わり方に性別による違いがみられるが、直接効果という面では『主観的幸福感』と『東洋的見方』であり、「年齢」については、女性では直接的であるが、男性では間接的に影響を及ぼしている可能性が示唆された。

第２に、75 歳以上の後期・超高齢者のインタビュー調査の結果であるが、全体的に年齢の高い者は、『老年的超越』も高い傾向がうかがえ、特に女性ではその傾向は明らかであった。しかし、地域活動に積極的な女性の『主観的幸福感』が低いのは、インタビュー時の印象と大きく異なる結果であった。

また、同じサンプルの事例・コード分析からは、先行研究（増井，2013）で日本人には明確に現れないとされていた Tornstam（2005）の老年的超越理論の「宇宙的次元」に関わる内容が多く抽出された。これらは東洋思想とも関連するもので、多くは『東洋的見方』の下位次元に相当するものであった。

第３に、**図 6.1** の要因関連の概念モデルから、『老年的超越』が最も高いクラスター２の『主観的幸福感』が中庸のレベルであること（6.1 節（1））の理由が説明できる。すなわち、後述するように個人の「認知・短期」的、「感情・短期」的な要素によって評価される『主観的幸福感』ではなく、「文化的幸福観」に着目することで、東洋の関係・バランス志向的な「求めすぎない/ほどほど」に価値を感じる幸福観の特徴が読み取れるのである。クラスター２の人たちの『老年的超越』得点が、いずれも中位以上となっていることは注目すべき点であろう。

第４に、主観的幸福感の測定に PGC モラール・スケールを用いたが、この尺度は 1970 年代に米国で開発されたもので、これまで幸福な老いの測定尺度としてもっとも広く用いられてきたとされているが（古谷野他，2011，p.141）、東洋文化の影響を受

ける日本人高齢者のバランス志向的な幸福感の測定に相応しい尺度であるのか、半世紀近くを経た今、改めて検証が必要なのではないかと思われる（次節 6.2(5)）。

6.2　本研究の問題点と今後の課題

(1)調査対象者の特性について

本研究の調査対象者(質問紙を配布した総数 363 人)は、高齢者大学の受講生が約８割を占め、多くは健康で生きがい意識の高い層であると推察される。また、インタビューを行った 17 人の高齢者についても、一般の同年代の高齢者と比べて健康度が高く、暮らし向きは普通以上、現在も地域活動にかかわるなどポジティブな意識の持ち主が多かったように思われる。したがってサンプルの特性としては、一種のバイアスがかかった標本となっていることは否めず、一般の高齢者を対象にした場合には分析結果が異なる可能性は十分にありえよう。

(2)分析方法について

関連要因の SEM 分析では、『老年的超越』と『東洋的見方』の下位次元を観測変数として扱ったが、これらを潜在変数として分析する方法もある。しかしこの場合は、モデルの構造が非常に複雑になり、自由母数の数が多くなると、識別不能の問題や意味のある解を得ることが難しくなることが予想された。今回、SEM を用いた理由は、老年的超越という多次元の心理的現象に影響を及ぼす多くの変数を制御し、できるだけ少ない変数で要因間の関係を記述するためであった。したがってモデルは、構成概念の考え方を導入し、細部の関係は捨象したシンプルな構造となっている。

分析結果をみる限りでは、モデル構築上の技術的な制約もあり多少は問題のある部分もあるが、先行研究などの実質科学的な知見からみても、大筋では妥当なモデルではないかと考えている。なお、『老年的超越』の下位次元ごとの因果関係を詳細に分析するのであれば、下位次元を潜在変数とする分離モデルを構成し、その分析結果を全体モデルの分析結果と照合しながら総合的に解釈する方法もあるかもしれない。

本論文で示した男女モデルのパス解析図は、サンプルが異なれば違った結果となることは十分にありえよう。今後、同様の多母集団分析を行うとすれば、サンプル数をさらに増やし、性別に加えて年齢別（74 歳以下/75 歳以上）に区分するモデルが考えられる。また、外生的な潜在変数（『活動性』と『危機の経験』）については、量的なことだけではなく、たとえば『活動性』では、日本人の幸福感に影響を及ぼす重要な要因とされる「ソーシャル・キャピタル（つながりの力)」（内田，2020，p.111）の質的側面を測定する工夫が必要であろう。

(3)JGS-R の信頼性について

JGS-R について確認的因子分析を行ったところ、増井他（2013）の研究と同様、「脱二元論」の信頼性係数は低い値（α=.43）であった。「脱二元論」という考え方は、本来、東洋的なものの見方であり老年的超越にとっても重要な下位次元である。JGS-R の開発者も「脱二元論」だけでなく JGS-R については、「下位概念を構成する要素の内容、項目間の相関の強さ、そしてどの程度の項目数が必要かを詳細に検討していくことが、今後も必要である」（増井他，2013）とし、改善の余地があることを指摘しているところである。

(4)「東洋的見方」の測定尺度について

「東洋的見方」については、これを測定するための既存の尺度は見当たらなかったため、本研究において「<老い>に対する東洋的態度」と称する尺度を作成した。この尺度の信頼性および妥当性については、一定程度保たれていると判断したが、この結果も本研究の調査対象となった高齢者データに基づくものであり、他の高齢者サンプルでも同様の結果が得られるのか検証が必要であろう。

なお、JGS-R の下位尺度である「無為自然」や「脱二元論」も、東洋的思考の特徴を示す概念であることから、試みに、両尺度の計 62 項目（JGS-R；27、<老い>に対する東洋的態度；35）を一括して探索的因子分析を行った。設定条件（固有値≧1、因子負荷量≧.35）のもとで繰り返し試算したところ、SPSS の限界（因子数が最大 14 まで）を超える因子の存在が予想されたが、途中、14 因子 51 項目の因子負荷量行列が出力された。これをみる限りでは、JGS-R と「<老い>に対する東洋的態度」の下位因子の被りはほぼ認められなかった。厳密な統計的合理性に基づく判断ではないが、一つの見方としては、JGS-R と「<老い>に対する東洋的態度」の弁別性は一定程度保たれていると言うことはできるであろう。

(5)「幸福感」の測定尺度について

本研究では「幸福感」の測定に PGC モラール・スケール[2]（**表 6-1**）を用いた。この尺度は高齢者の主観的幸福感を測定する尺度として、これまで多くの研究で使用されてきたものである（古谷野，1996）。

古谷野（1996）によれば、PGC モラール・スケールによって測定される主観的幸福感は、George（1981）のいう２軸（「認知/感情」と「短期/長期」）の組み合わせで評価すると、３つの下位因子のうち、「老い対する態度」は「認知・短期」的、「心理的動揺」と「孤独感・不満足感」は「感情・短期」的な要素の総合として概念化されるとしている。このように、PGC モラール・スケールは、「短期」的な要素で主観的幸福

[2] Lawton によって開発されたモラールの測定尺度で、1972 年に 22 項目 6 因子の尺度として開発されたが、1975 年に 17 項目 3 因子の尺度に改訂された（古谷野，1996）。

感を定義し、生活満足度尺度（LSIA）のように「認知・長期」的な要素（たとえば、“人生をふりかえってみて満足できるか”など）を含まないのが特徴である。質的研究において、類型Ⅰ・類型Ⅱに分類された４人の女性のPGCモラール・スケールの得点が明らかに低いことを指摘したが、幸福感の「長期」的な側面が評価されていない可能性が高いのである。

古谷野（1996）によれば、PGCモラール・スケールについては、日本の研究でもLawtonが報告しているのと同様に上に述べた３つの下位因子の存在が報告されている。しかし、質問項目をみると逆転処理（17項目のうち12項目）がなされるとはいえ、〈老い〉をネガティブに捉える表現形が目立ち、背景には1970年代の欧米社会における〈個〉を重視する価値観(自立心、自尊心、活動性、役割、健康、若さなど)が色濃く反映されているように思われる。

このような価値観は、現代日本においても文化を超えて普遍的に共通するものなのであろうか。さらに、設問に対する回答も二項選択（「はい/いいえ」「そう思う/そう思わない」）の構造となっており二元的で、第３章で述べたように、「あいまいさ」を許容する東洋人の思考様式（たとえば、ものごとを陰陽の相補的関係で捉えるなど）には馴染みにくい面があるように思われる。

本研究では、先行研究との比較という意味合いと、老年学の分野では主観的幸福感の測定尺度として多くの実績を有する、との理由からPGCモラール・スケールを使用したが、結果的には、上に述べたような「幸福」についての文化的な価値観に関わる問題点が浮き彫りになった。

ところで、幸福感には個人差だけではなく、一定の文化差も存在するとして、幸福感のメタ理論ともいえる「文化的幸福観」が注目されている（内田他，2012)。内田(2020,p.64)は、満足感・幸福感の規定因は歴史的に構築された様々な文化的・社会的要因によって大きく異なるとして「協調的幸福尺度」（**表6-2**）を開発している。

この尺度は、高齢者を対象にしたものではないが、日本人のものの見方の根底にある陰陽思考や関係志向の価値観を反映するもので、「日本だけではなく、他の国でも一定の妥当性をもっていることが確認されている」（内田，2020,p.29）と述べている。特に、「老年的超越」と「幸福感」との関連を分析する場合には、「幸福感」については、短期的な評価だけではなく、生きる意義や自分の人生を振り返ってどう総括し評価するのか、といった長期のユーダイモニア（eudaimonia[3])的な幸福の視点が重要となってくるであろう。

今回の研究においても、幸福感の測定に「PGCモラール・スケール」ではなく、「協調的幸福尺度」(高齢者を対象にした尺度ではないため、そのまま使用できるかどう

[3] 第５章の脚注15による。

かの検討は必要であろうが…）のような東洋的な価値観が反映された尺度を使用しておれば、「老年的超越」と「幸福感」との因果関係については、また、違った知見が得られた可能性は十分ありえよう。

表 6-1　PGC モラール・スケールの項目　改訂版

＜心理的動揺＞
今年になって前よりもささいなことが気になるようになりましたか [a)]
心配だったり、気になったりして眠れないことがありますか [a)]
いろいろなことを心配しますか [a)]
以前より怒ることが多くなりましたか [a)]
物事を深刻に考える方ですか [a)]
ちょっとのことでオロオロする方ですか [a)]
＜孤独感・不満足感＞
淋しいと感じますか [a)]
友人や親戚によく会いますか
生きていても仕方がないと思うことがありますか [a)]
悲しいことがたくさんありますか [a)]
生きることは自分にとって大変なことと思いますか [a)]
現在の生活に満足していますか
＜老いに対する態度＞
年をとるほど物事は悪くなると思いますか [a)]
去年と同じくらい元気ですか
年をとるにつれて役に立たなくなると思いますか [a)]
年をとるということは若い時に考えていたよりも良いと思いますか
今、若い頃と同じくらい幸せと思いますか

[a)] は逆転項目。「はい」「いいえ」、「そう思う」「そう思わない」などの２件法で回答。
出典：SONIC 研究　第１波調査報告書（2017, p.20）

表 6-2　協調的幸福尺度（Hitokoto & Uchida, 2015）

１．自分だけでなく、身近なまわりの人も楽しい気持ちでいると思う。
２．周りの人に認められていると感じる。
３．大切な人を幸せにしていると思う。
４．平凡だが安定した日々を過ごしている。
５．大きな悩み事はない。
６．人に迷惑をかけずに自分のやりたいことができる。
７．まわりの人たちと同じくらい幸せだと思う。
８．まわりの人並みの生活は手に入れている自信がある。
９．まわりの人たちと同じくらい、それなりにうまくいっている。

「１．全くあてはまらない」「２．あまりあてはまらない」「３．どちらともいえない」「４．ややあてはまる」「５．非常にあてはまる」の５件法で回答。　出典：内田（2020, p.28）

(6)老年的超越と主観的幸福感および東洋的見方との関連について

関連要因分析では、『老年的超越』と『主観的幸福感』との間に双方向の因果関係の存在を仮定して分析を行ったところ、『主観的幸福感』から『老年的超越』へのパスが有意となった。一方、クラスターを独立変数とした共分散分析では、『老年的超越』の下位尺度得点が最も高くなるのは、『東洋的見方』の下位尺度得点が高く、かつ、『主観的幸福感』は中庸のレベルにある場合であった。この点をどう考えるかであるが、理由の一つは、『老年的超越』から『主観的幸福感』へのパスをみると、男性では、統計的には有意ではないが負の値（-0.20）となっており、『老年的超越』と『主観的幸福感』との関係にある種の均衡点が存在する可能性がうかがえることである。他方、クラスターを独立変数とした共分散分析は、性別区分を設けずに『主観的幸福感』と『東洋的見方』に特化して『老年的超越』への複合的な効果を確かめたものであるが、『主観的幸福感』の効果は限定的であることが示唆された。これらの知見は、老年的超越が生活満足度（本研究では主観的幸福感）を高めるというTornstam(2005)の仮説とは異なる結果であった。東洋文化の影響を少なからず受ける日本の高齢者の幸福感を測定するのに、1970年代に米国で開発されたPGCモラール・スケールが本当に相応しいのか、今一度検証が必要なのではないかと思われる。

老年的超越研究は同時に「幸福な老い」の研究でもあり、「老年的超越」と「幸福感」との関わりを解明することは極めて重要な研究課題である。その際、内田（2020,p.64）が指摘するように、人が幸福を感じることを意味する「幸福感」と、その前提となる文化的な視点に着目した「幸福観」との関係性をふまえて議論することが肝要であろう。

(7)その他

質的研究の対象となった17人の高齢者は、全員少年・少女時代あるいは青年時代に戦争を経験しており、コホートという面ではサンプルに偏りがあることは否めない。したがって、戦後世代を対象とした質的分析を行った場合には、結果が異なることは十分ありえよう。

第３章で紹介したように、百寿者(100歳以上の13人)にとっての幸福感の構成要素を記述することを目的とした質的研究（安本他，2017）があるが、この論文では５つのカテゴリー（「前向きな気持ちで生きること」「制限の中で生きること」「他者とのよい関係を築くこと」「人生の充足感を感じること」「あるがままの状態を受け入れること」）が抽出されている。これらのカテゴリーは、本研究の質的研究でも表現形には違いがあるもののほぼ同様に確認された内容であり、両サンプルの年齢構成には違いはあるが、「幸福」についての認識には共通するものがあり、やはりコホート（主には戦争経験）が大きく影響している可能性は十分に考えられる。

なお、本研究は、基本的には横断研究である。老年的超越が加齢に伴う心理的発達の現象であることからすれば、この研究の結論については、前提として特定時期の横断データであることをふまえて解釈しなければならないであろう。しかし、インタビュー調査の対象となった 17 人の高齢者では、生きた時代や、山あり谷ありの人生経験を経て「身体化」された幸福観、人生観、死生観、時間・空間認識など、その「語り」のなかには、長期的な縦断変化が含まれていると考えることもできるであろう。

量的研究の関連要因分析で『老年的超越』との因果関係が明らかとなった『主観的幸福感』『東洋的見方』および『人生の危機』については、加齢とともに変化する時間的要因であることは疑う余地はなく、理想としては縦断研究が望ましいが、これは今後の研究課題としたい。

本研究は，高齢化が世界でも類をみない速さで進む日本の高齢者を対象とした老年的超越の実証研究であった。

加齢によるポジティビティ傾向（年齢が高くなるにつれ、幸福感が肯定的になる傾向）に注目して、欧米や日本の先行研究をレビューし、その比較研究を行った唐澤（2012）は、幸福とエイジングの関係については、文化を超えて一貫した結果が得られなかったとした上で、「陰陽のバランスを幸福と考える日本文化の分析が、世界の幸福研究に寄与する可能性がある」と結んでいる。

今後の日本における老年的超越研究においては、これまで繰り返し述べてきたように、「幸福観」と「東洋的見方」との相補的な連関、加えて「幸福感」と「老年的超越」との因果的な関係性について、東洋の文化的視点をふまえて様々な角度から知見を積み重ねていくことが、日本人の「幸福な老い」の要因を明らかにしていく上で重要になってくる。

本研究は、平成 30 年度植田安也子学術振興基金大学院生等研究奨励事業の助成を受け実施した。記して感謝の意を表する。

参考・引用文献

赤瀬川 原平（1998）．老人力　筑摩書房

秋山 弘子（2000）．21 世紀の高齢社会と老年社会学のフロンティア――日本の老年社会科学から欧米へ向けての発信――　老年社会科学，*22*(3), 338-342.

天野 正子（1999）．老いの近代　岩波書店

有吉 佐和子（1972）．恍惚の人　新潮社

Baltes, P. B. & Baltes, M. M. (1990). *Psychological perspective on successful aging: A model of selective optimization with compensation. In P. B. Baltes & M. M. Baltes, (Eds.), Successful aging: Perspectives from the behavioral sciences*. New York: Cambridge University Press.

Baltes, P. B. & Mayer, K. U. (Eds.) (1999). *The Berlin Aging Study: Aging from 70 to 100.* Cambridge University Press.

Beauvoir, S.（1970）．*La Vieillesse. Editions Gallimar*.（シモーヌ・ド・ボーヴォワール. 朝吹 三吉（訳）（1972）．老い（上・下巻）　人文書院）

Cumming ,E., & Henry,W.（1961）．*Growing old: The process of disengagement.* New York: Basic Books.

Erikson, E. H., & Erikson, J. M.（1997）．*The Life Cycle Completed : A REVIEW.* Expanded Edition. New York: W.W.Norton & Company.（エリクソン, E. H.・エリクソン, J. M. 村瀬 孝雄・近藤 邦夫（訳）（2001）．ライフサイクル, その完結 ＜ 増補版＞　みすず書房）

Erikson, E. H., & Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q.（1986）．*Vital Involvement in Old Age.* New York: W.W.Norton & Company.（エリクソン, E. H.・エリクソン, J. M.・キヴニック, H. Q. 朝長正徳・朝長梨枝子（訳）（1990）．老年期――生き生きしたかかわりあい――　みすず書房）

石原 房子・長田 久雄（2011）．Tornstam の老年的超越尺度の構造の検討　応用老年学，*5*(1), 20-27.

George, L. K.（1981）．Subjective well-being ; Conceptual and methodological issues. *Annual Review of Gerontology and Geriatrics, 2*, 345-382.

健康長寿研究（SONIC）（2017）．SONIC 研究　第１波調査報告書　健康長寿研究会

権藤 恭之（2019）．超高齢期の心理的特徴――幸福感に関する知見――　健康長寿ネット, tyojyu.or.jp/net/topics/tokushu/koureisha-shinri-chokoureisha.html（更新日:2019 年８月６日 13 時 30 分）

権藤 恭之・古名 丈人・小林 江里香・岩佐 一・稲垣 宏樹・増井 幸恵…鈴木 隆雄（2005）．超高齢期における身体的機能の低下と心理的適応――板橋区超高齢者訪問悉皆調査の結果から――　老年社会科学，*27*(3), 327-338.

蜂屋 邦夫（2013）．NHK100 分 de 名著　老子　NHK 出版

日野原 重明（1986）．老いの意味するもの　伊東 光晴・河合 隼雄・副田 義也・鶴見 俊輔・日野原 重明（編）　老いの発見 ２　老いのパラダイム（pp.13-38）　岩波書店

Hitokoto, H. & Uchida, Y.（2015）．Interdependent happiness: Theoretical importance and measurement

validity. *Journal of Happiness Studies, 16*, 1-29.
深沢 七郎（1957）．楢山節考　中央公論社
福永 光司（訳）（2013）．老子　筑摩書房
井上 俊・上野 千鶴子・大澤 真幸・見田 宗介・吉見 俊哉（編）（1997）．岩波講座　現代社会学第 13 巻　成熟と老いの社会学　岩波書店
伊東 光晴・河合 隼雄・副田 義也・鶴見 俊輔・日野原 重明（編）（1986-1987）．老いの発見（１～４巻）　岩波書店
五木 寛之（2008）．林住期　幻冬舎
Jung, C. G., & Pauli, W.（1955）．*The Interpretation of Nature and the Psyche.* New York: Bollongen Foundation.（C. G. ユング・W. パウリ．河合 隼雄・村上 陽一郎（訳）（1976）．自然現象と心の構造――非因果的連関の原理――　海鳴社）
神谷 美恵子（2004）．神谷美恵子コレクション　生きがいについて　みすず書房
狩野 裕・三浦 麻子（2007）．グラフィカル多変量解析　増補版　現代数学社
柏木 惠子・北山 忍・東 洋（編）（1997）．文化心理学――理論と実証――　東京大学出版会
唐澤 真弓（2012）．幸福なエイジング――文化比較研究からみえてくること――　心理学評論, 55(1), 137–151.
河合 隼雄（1967）．ユング心理学入門　培風館
河合 隼雄（1977）．無意識の構造　中央公論社
河合 隼雄（1997）．「老いる」とはどういうことか　講談社
河合 隼雄（1997）．母性社会日本の病理　講談社
河合 隼雄（1999）．こころと人生　創元社
河合 隼雄（1999）．中空構造日本の深層　中央公論新社
河合 隼雄（2006）．対話する生と死――ユング心理学の視点――　大和書房
河合 隼雄（2010）．＜心理療法＞コレクションⅤ　ユング心理学と仏教　河合 俊雄（編）岩波書店
河合 俊雄（2018）．NHK100 分 de 名著　河合隼雄スペシャル　NHK 出版
河合 俊雄・中沢 新一・広井 良典・下條 信輔・山極 寿一（2016）．＜こころ＞はどこから来て、どこへ行くのか　岩波書店
川喜多 二郎（2017）．発想法――創造性開発のために――　中央公論新社
児玉 清（2010）．日経シニア・ワークライフ・フォーラム 2010　日本経済新聞　12 月 18 日朝刊.
国立社会保障・人口問題研究所（2017）．日本の将来推計人口（平成 29 年推計）
厚生労働省（2017）．平成 29 年度 国民生活基礎調査
古谷野 亘・柴田 博・芳賀 博・須山 靖男（1989）．生活満足度尺度の構造――主観的幸福感の多次元性とその測定――　老年社会科学, *11*, 99-115.
古谷野 亘・長田 久雄（1992）．実証研究の手引き――調査と実験の進め方・まとめ方――　ワールドプランニング

古谷野 亘・柴田 博・中里 克治・芳賀 博・須山 靖男（1987）．地域老人における活動能力の測定――老研式活動能力指標の開発―― 日本公衛誌，*34*(3), 109–114.
古谷野 亘・柴田 博（1992）．老研式活動能力指標の交差妥当性――因子構造の不変性と予測的妥当性―― 老年社会科学，*14*, 34-42.
古谷野 亘（1993）．老後の幸福感の関連要因――構造方程式モデルによる全国データの解析――理論と方法, *8*(2), 111–125.
古谷野 亘（1996）．QOL などを測定するための測度（2） 老年精神医学雑誌，*7*(4), 431–442.
古谷野 亘（2002）．幸福な老いの研究――研究の歴史と残された課題―― 生きがい研究（一般財団法人 長寿社会開発センター），*8*, 48–70.
古谷野 亘・安藤 孝敏（編）（2011）．改訂・新社会老年学 第２版 ワールドプランニング
京都大学こころの未来研究センター（2016）．こころの未来，*15,* 36-39.
京都大学こころの未来研究センター（2017）．こころの未来，*16,* 2-14.
京都大学こころの未来研究センター（2018）．こころの未来，*18,* 7-18.
Lemon, B.W., Bengston, V. L., & Peterson, J. A.（1972）．An exploration of the activity theory of aging. *Journal of Gerontology, 27*(4), 511-523.
Lewin, K.（1936）．*Principles of Topological Psychology.* New York: McGraw-Hill Book Company.（レヴィン, K. 外林 大作・松村 康平（訳）（1942）．トポロギー心理学の原理 生活社）
Lewin, K.（1951）．*Field Theory in Social Science : Selected theoretical papers.* New York: Harper & Brothers.（レヴィン, K. 猪股 佐登留（訳）（1956）．社会科学における場の理論 誠信書房）
Markus,H.R.,& Kitayama,S.（1991b）．Culture and the self : Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review 98*,224-253.
前田 忠彦（1995）．日本人の満足感の構造とその規定因に関する因果モデル――共分散構造分析の「日本人の国民性調査」への適用―― 統計数理，*43*(1), 141-160.
増井 幸恵・権藤 恭之・河合 千恵子・呉田 陽一・高山 緑・中川 威…藺牟田 洋美（2010）．心理的 well-being が高い虚弱高齢者における老年的超越研究の特徴 老年社会科学，*32*(1), 33-46.
増井 幸恵・中川 威・権藤 恭之・ 小川 まどか・石岡 良子・立平 起子…高橋 龍太郎（2012）．地域高齢者における老年的超越の関連要因の検討 日本心理学会第 76 回大会発表論文．doi.org/10.4992/pacjpa.76.0_1EVB33
増井 幸恵・中川 威・権藤 恭之・ 小川 まどか・石岡 良子・立平 起子…高橋 龍太郎（2013）．日本版老年的超越質問紙改訂版の妥当性および信頼性の検討 老年社会科学，*35*(1), 49－58.
増井 幸恵（2013）．老年的超越研究の動向と課題 老年社会科学，*35*(3), 365–373.
増井 幸恵・中川 威・権藤 恭之・ 小川 まどか・石岡 良子・小園 麻里菜…稲垣 宏樹（2015）．地域在住高齢者における老年的超越の縦断的変化の検討 日本心理学会第 79 回大会発表論文．doi.org/10.4992/pacjpa.79.0_2AM-116
増井 幸恵・中川 威・権藤 恭之・ 小川 まどか・石岡 良子・稲垣 広樹…石崎 達郎（2019）．地域高齢者の精神的健康の縦断変化に及ぼす老年的超越の影響の検討―― 疾患罹患・死別

イベントに対する緩衝効果に注目して――　老年社会科学，*41*(3), 247-258.
内閣府（2021）．令和３年版高齢社会白書
中川 威・増井 幸恵・呉田 陽一・高山 緑・高橋 龍太郎・権藤 恭之（2011）．超高齢者の語りにみる生（life）の意味　老年社会科学，*32*(4), 422-433.
中嶌 康之・小田 利勝（2001）．サクセスフル・エイジングのもう一つの観点――ジェロトランセンデンス理論の考察――　神戸大学発達科学部研究紀要，*8*(2), 255-269.
中島 義明・安藤 清志・子安 増生・坂野 雄二・繁桝 算男・立花 政夫・箱田 裕司（編）(1999)．心理学辞典　有斐閣
中村 元（1991）．人生を考える　青土社
中根 千枝（1967）．タテ社会の人間関係　講談社
Nisbett, R. E.（2003）．*The Geography of Thought.* New York: A Division of Simon & Schuster.（リチャード・E・ニスベット．村本 由紀子（訳）（2004）．木を見る西洋人　森を見る東洋人――思考の違いはいかにして生まれるか――　ダイヤモンド社）
大橋 明（2019）．日本人高齢者を対象とした宗教性およびスピリチュアリティ研究　老年社会科学，*41*(1), 67-76.
大橋 保夫（編）（1979）．構造・神話・労働――クロード・レヴィ＝ストロース日本講演集――みすず書房
奥村 幸雄（2014）．高齢者の「生きがい」についての研究（第Ⅰ部）――幸福な老いに関する研究のレヴューと生きがい感創出システムの構築――　京都府立大学福祉社会研究，*15*, 225–239.
奥村 幸雄（2016）．高齢者の「生きがい」についての研究（第Ⅱ部）――共分散構造モデルによる関連要因の影響度分析――　京都府立大学学術報告（公共政策），*8*, 145-174.
小塩 真司（2005）．事例研究で学ぶ SPSS と Amos による心理・調査データ解析　第２版　東京図書
小塩 真司（2019）．SPSS と Amos による心理・調査データ解析――因子分析・共分散構造分析まで――　第３版　東京図書
Progoff, I.（1973）．*Jung, Synchronicity and Human Destiny: Noncausal Dimension of Human Experience.* The Julian Press.（イラ・プロゴフ．河合 隼雄・河合 幹雄（訳）（1987）．ユングと共時性　創元社）
Ryff, C. D.（1989）．Happiness is everything, or is it ? Explorations on the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology,* 57,1069–1081.
佐藤 郁哉（2008）．質的データ分析法――原理・方法・実践――　新曜社
佐藤 眞一・高山 緑・増本 康平（2014）．老いのこころ――加齢と成熟の発達心理学――　有斐閣
佐藤 眞一・権藤 恭之（編）（2016）．よくわかる高齢者心理学　ミネルヴァ書房
柴田 博・芳賀 博・長田 久雄・古谷野 亘（編）（1993）．老年学入門　川島書店
思想の科学研究会＜老いの会＞（編）（1987）．老いの万華鏡　御茶の水書房
Stock & France Culture.（1980）．*Science et Conscience.*（フランス・キュルテュール．竹本 忠雄

（監訳）（1984）．科学と意識シリーズ１　量子力学と意識の役割　たま出版）
システム科学研究所編（1982）．システム考現学――社会をみる眼――　学芸出版社
末田 啓二（2019）．我が国の高齢者への「老年的超越」概念の適用に関する問題点　甲子園短期大学紀要，*37*, 1-7.
鈴木 大拙（1997）．新編 東洋的な見方　上田 閑照（編）　岩波書店
鈴木 大拙（1972）．日本的霊性　岩波書店
鈴木 大拙（1987）．禅　工藤 澄子（訳）　筑摩書房
多田 富雄・今村 仁司（1987）．老いの様式――その現代的省察――　誠信書房
竹田 恵子・太湯 好子（2006）．日本人高齢者のスピリチュアリティ概念構造の検討　川崎医療福祉学会誌，*16*(1), 53-66.
田崎 美弥子・松田 正巳・中根 允文（2001）．スピリチュアリティに関する質的調査の試み――健康および QOL の概念のからみの中で――　日本醫事新報，*4036,* 24-32.
富沢 公子（2009）．奄美群島超高齢者の日常からみる「老年的超越」形成意識　老年社会科学，*30*(4), 477-488.
Tornstam, L.（1989）．Gero-transcendence; A meta-theoritical reformulation of the disengagement theory. *Aging: Clinical and Experimental Research*, *1* , 55-63.
Tornstam, L.（1997）．Gerotranscendence in a Broad Cross-Sectional Perspective. *Journal of Aging and Identity, 2*(1), 17-36.
Tornstam, L.（2005）. *Gerotranscendence : A Developmental Theory of Positive Aging*. New York: Springer Publishing Company.
豊田 秀樹・前田 忠彦・柳井 晴夫（1992）．原因を探る統計学――共分散構造分析入門――講談社
豊田 秀樹（1998）．共分散構造分析［入門編］――構造方程式モデリング――　朝倉書店
豊田 秀樹（編）（2003）．共分散構造分析［疑問編］――構造方程式モデリング――　朝倉書店
豊田 秀樹（編）（2007）．共分散構造分析［Amos 編］――構造方程式モデリング――　東京図書
都築 学・白井 利明（編）（2007）．時間的展望研究ガイドブック　ナカニシヤ出版
鶴見 俊輔（編）（1997）．老いのいき方　筑摩書房
上野 千鶴子（2008）．やさしい経済学「21 世紀と文明」　日本経済新聞　7 月 18 日朝刊.
内田 由紀子・萩原 祐二（2012）．文化的幸福感――文化心理学的知見と将来への展望――　心理学評論, 55 (1), 26–42.
内田 由紀子（2020）．これからの幸福について――文化的幸福感のすすめ――　新曜社
内田 由紀子（2021）．日本における幸福と生きがい　生きがい研究（一般財団法人 長寿社会開発センター），*27*, 26-41.
山折 哲雄（1995）．死を視ること帰するがごとし　講談社
山折 哲雄（2010）．わたしが死について語るなら　ポプラ社
安岡 正篤（1979）．老荘思想　新版　明徳出版社
安岡 正篤（1960）．易學入門　明徳出版社

安元 佐織・権藤 恭之・中川 威・増井 幸恵（2017）．百寿者にとっての幸福感の構成要素
老年社会科学，*39*(3), 365-373.
横山 紘一（2017）．NHK こころの時代　唯識に生きる　NHK 出版
鷲田 清一（2015）．老いの空白　岩波書店
和辻 哲郎（1935）．風土――人間学的考察――　岩波書店

謝 辞

本研究を進めるにあたっては、多くの方々にご協力を賜りました。

特に、石田正浩准教授には、京都府立大学大学院公共政策学研究科の博士前期課程を経てこの論文をまとめるまで、長年にわたり懇切なご指導を賜りました。石田先生のご指導なしに、この博士論文を完成させることはできませんでした。ここに深甚なる謝意を表します。

また、京都府立大学大学院公共政策学研究科の先生方には、博士前期課程時代より大変お世話になりました。特に、本論文の主査をお引き受けくださいました森下正修教授、また、副査をお引き受けくださいました服部敬子教授と村田隆史准教授に、心より御礼申し上げます。

加えて、今回の研究では、老年的超越の因果モデルを構築する上でレビンの「場の理論」の考え方を援用しましたが、下準備として力学の知識が必要となり、人間環境学部の春山洋一教授の「基礎物理学」などの講義が大変参考になりました。他学部の院生にもかかわらず聴講や受講をお認めいただいたことに感謝申し上げます。

日々の研究生活をともに過ごした院生仲間の皆さまにも、心より感謝の意を表します。ほぼ半世紀ぶりの学生生活で戸惑うことも多々ありましたが、皆さんに温かく接していただいたお蔭で、この歳になっても楽しく充実した研究生活を体験することができました。また、学務課の松本慶子さんには日々の研究活動を円滑に進める上で、何かとご支援を賜りました。この場をお借りして御礼申し上げます。

そして、何よりも今回の研究において多大なご協力をいただきました公益財団法人京都ＳＫＹセンターをはじめ、ＳＫＹシニア大学受講生の皆さま、知人・友人の方々、その他にもインタビュー調査にご協力をいただいた皆さまには、大変回答のしづらいアンケートや質問に丁寧に答えていただき、貴重なご意見やデータを提供していただきました。この方々のご協力がなければ、とてもこの研究は成就させることができなかったと思います。ここに深甚なる謝意を表します。

ところで、私が老年的超越研究を行う契機となったのは母の存在です。彼女は 78 歳のときに脳腫瘍で生死の境を彷徨う手術をし、一命はとりとめたものの、その後、認知症を患いました。2019 年に 93 歳で亡くなるまで、一人の人間が老いて死に至る姿をまじかで観察することになりました。本研究における研究協力者 17 人のうちの一人は母です。

確実に失われていく過去の記憶、これまで当たり前にできていたことができなくなっていく無念さや絶望感。そして、「早くお迎えが来てほしい」と願う心境。日野原重明さんや五木寛之さん、瀬戸内寂聴さんの著書を愛読し、「老いる」ということにそれ

なりの理解と覚悟ができているはずであったにもかかわらず、いざ当事者となると、動揺し、悲嘆にくれ、絶望する。まさに、エリクソンの第８段階(統合対絶望)における心理的状態を目の当たりにするようでした。

しかし、不思議なことに、90 歳を超えた頃だったでしょうか、周りの人（家族や介護施設の職員さん）に対する感謝の気持ちをしばしば口にするようになり、「昔のことは何もかも忘れてしまったけれど、皆によくしてもらって今がいちばん幸せ」と、穏やかに今在る状況を受け容れ達観しているように感じられました。超高齢者特有の「セロトニン的多幸感」なのか、それはわかりませんが、確かに老年的超越に向かっているようには思えました。特に「死」については、軽々に話題にすることは難しいテーマですが、母とはこの問題について何度も語らい、まさに当事者研究の有力な協力者の一人であったことに感謝しています。

加えて、この研究のもう一人の協力者は長女の涼子です。質問紙調査の統計解析では、大量のデータの入力が必要となりましたが、彼女が仕事で培ったプロの技術を活かし、この作業を代行してくれたお蔭でタイポのストレスから解放され、分析に集中することができました。予期していた以上の効果で、その労を多とします。

2023 年 3 月

奥村 幸雄

資 料

１．質問紙

２．インタビューデータ：事例──コード・マトリックス表（要約版）

質　問　紙

整理番号＿＿＿＿＿＿

問１　あなたの現在の健康状態についてお伺いします。あてはまると思われる番号に〇をつけてください。

１．健康でない　　２．あまり健康ではない　　３．まあ健康だ
４．健康だ

問２　次の質問は、あなたの毎日の生活（動作面）についてお伺いするものです。あてはまると思われる番号に〇をつけてください。

１．バスや電車を使って一人で外出できますか	１．は　い	２．いいえ
２．日用品の買い物ができますか	１．は　い	２．いいえ
３．自分で食事の用意ができますか	１．は　い	２．いいえ
４．請求書にもとづく支払いができますか	１．は　い	２．いいえ
５．銀行預金・郵便預金の出し入れが自分でできますか	１．は　い	２．いいえ
６．年金などの書類が書けますか	１．は　い	２．いいえ
７．新聞を読んでいますか	１．は　い	２．いいえ
８．本や雑誌を読んでいますか	１．は　い	２．いいえ
９．健康についての記事や番組に関心がありますか	１．は　い	２．いいえ
10．友だちの家を訪ねることがありますか	１．は　い	２．いいえ
11．家族や友だちの相談にのることがありますか	１．は　い	２．いいえ
12．病人を見舞うことができますか	１．は　い	２．いいえ
13．若い人に自分から話しかけることがありますか	１．は　い	２．いいえ

問３　次の質問も、あなたの日頃の生活（心理面）についてお伺いするものです。あてはまると思われる番号に〇をつけてください。

１．共感しあえる親密な間柄の友人がいますか	１．は　い	２．いいえ
２．信頼できる友人がいますか	１．は　い	２．いいえ
３．人間関係にストレスを感じるほうですか	１．は　い	２．いいえ
４．多少妥協しても、人間関係を優先するほうですか	１．は　い	２．いいえ
５．身の回りの環境とうまく折り合っていくことができますか	１．は　い	２．いいえ
６．対外的に行う活動をうまく調整できますか	１．は　い	２．いいえ
７．チャンスがあれば、活かすことができますか	１．は　い	２．いいえ
８．自らの必要や価値観に合った関係を選択したり、築いたりできますか	１．は　い	２．いいえ

問４　次の質問は、あなたの日頃の対人関係（親せき、ご近所、友人）についてお伺いするものです。①では、人数を記入いただき、そのような人がおられない場合は０(ゼロ)としてください。また、②では、あてはまると思われる番号に〇をつけてください。

①　訪問・手紙・電話・電子メール等により<u>１カ月に１回以上交流のある人</u>は何人いますか。

１．親せき　（約　　）人　　２．ご近所（約　　）人
３．友　人　（約　　）人

②　心配ごとや悩みごとを聞いてくれる人はいますか。

１．親せき	１．い　る	２．いない
２．ご近所	１．い　る	２．いない
３．友　人	１．い　る	２．いない

問５　次の項目は、＜老い＞を生きるうえでのあなたの信念や態度、さらには感情についてお伺いするものです。あなたのお考えやお気持ちにあてはまると思われる番号に○をつけてください。

［５－１］	そうでない	どちらかといえばそうでない	どちらかといえばそうだ	そうだ
１．楽しむことがいちばん、嫌なことは放っておく	０	１	２	３
２．自分の思いを相手に押しつけるのは摩擦しか生まない	０	１	２	３
３．理屈の正しさよりも、自分の感覚がいちばん大事だ	０	１	２	３
４．何事もしがみつくのをやめると新しい道が開ける	０	１	２	３
５．全部はできない。こだわりを捨てれば気持ちよい	０	１	２	３
６．ものごとには、「テキトー」のほうがうまくいくこともある	０	１	２	３
７．許すことで自分の心が癒される	０	１	２	３

［５－２］	そうでない	どちらかといえばそうでない	どちらかといえばそうだ	そうだ
１．年をとれば世間のしきたりにしばられない心の自由が大事と思う	０	１	２	３
２．余計なものを削ぎ落とすと、身も心も軽くなるように思う	０	１	２	３
３．年をとったことを楽しまなければ損だ	０	１	２	３
４．年をとると衰えるものばかりではなく、深まってくるものもあると思う	０	１	２	３
５．「老」という言葉には、尊重・尊敬の意味があると思う	０	１	２	３

	そうでない	どちらかといえばそうでない	どちらかといえばそうだ	そうだ
6．年をとって芸術的なものにより関心が向かうようになった	０	１	２	３
7．社交的なつながりの多さより、少人数でも共感できる人と過ごす時間のほうが大事と思う	０	１	２	３
8．人間は自然物だから、自然体で生きればよいと思う	０	１	２	３
9．その年になってみないと分からないことがあると思う	０	１	２	３
10．これからの人生の時間は、自分のために過ごしたい	０	１	２	３
11．自分のための時間を過ごせる〈老い〉の場所があればよい	０	１	２	３
12．夢と現実が偶然一致するような体験をしたことがある	０	１	２	３
13．人生後半になって、自分の内面に目を向けるようになった	０	１	２	３
14．外見より内面的な豊かさに価値を感じる	０	１	２	３
15．還暦を過ぎると、また、新たな人生が始まると思う	０	１	２	３
16．人生には「苦と楽」が共にあるから、人は生きていけるのだと思う	０	１	２	３
17．対立するものも「陰と陽」のバランスで考えると、収まりがよい	０	１	２	３
18．どっちつかずの「ぼんやり」したことは嫌いだ	０	１	２	３
19．日本文化の根底には、無常の感覚があると思う	０	１	２	３
20．桜の花には、日本人の気質が象徴されていると思う	０	１	２	３
21．自然の猛威には、ある種の諦念（あきらめ）を感じる	０	１	２	３
22．意のままにならないことは、受け入れるよりしょうがない	０	１	２	３
23．自分の感覚を超えたものは、運命にまかせるより仕方ない	０	１	２	３
24．夜空に浮かぶ月を見ると、宇宙への親近感を覚える	０	１	２	３
25．身近にある自然（草、花、木、鳥、石など）も自分の人生を支える大事なものだ	０	１	２	３

	そうでない	どちらかといえばそうでない	どちらかといえばそうだ	そうだ
26. 自然の中にいると、自分がその一部であるような気がする	0	1	2	3
27. 死は、「すべてを失った無の状態に至ること」だと思う	0	1	2	3
28. 人間は、「老病死」から逃れられないのは分かっているが、できれば考えたくない	0	1	2	3
29. 死んだら身体も魂も自然に還り、宇宙のさまざまなものと一体化されるように思う	0	1	2	3

［5－3］	そうでない	どちらかといえばそうでない	どちらかといえばそうだ	そうだ
1．人のありがたさを実感している	0	1	2	3
2．ひとりで過ごすのはつまらない	0	1	2	3
3．死後の世界があると思う	0	1	2	3
4．つい見栄を張ってしまう	0	1	2	3
5．振り返ってみると、「自分はよくやってきた」と思う	0	1	2	3
6．生かされていると感じることがある	0	1	2	3
7．過去のことでまだこだわっていることがある	0	1	2	3
8．良いことも悪いことも、あまり考えない	0	1	2	3
9．良いことがあると、他の人のおかげだと思う	0	1	2	3
10．私の気持ちは昔と今を行ったり来たりしている	0	1	2	3

	そうでない	どちらかといえばそうでない	どちらかといえばそうだ	そうだ
11. 自分のことより人のことをまず考える	0	1	2	3
12. できないことがあってもくよくよしない	0	1	2	3
13. 周りの人の支えがあるからこそ私は生きていける	0	1	2	3
14. ひとりでいるのも悪くない	0	1	2	3
15. 善悪の区別をすることは難しい	0	1	2	3
16. 神様や仏様のような人智を超えた存在があると思う	0	1	2	3
17. 人がやっていることに、つい口を出したくなる	0	1	2	3
18. 自分がいなくなっても、未来に何かが伝わると思う	0	1	2	3
19. 人の気持ちがよくわかるようになった	0	1	2	3
20. もう死んでもいいという気持ちと、もう少し生きたいという気持ちが同居している	0	1	2	3
21. 他の人のことを羨ましいと思うことがある	0	1	2	3
22. 自分の人生は意義のあるものだったと思う	0	1	2	3
23. 昔より思いやりが深くなったと思う	0	1	2	3
24. ひとりで静かに過ごす時間は大切だ	0	1	2	3
25. ご先祖様との繋がりを強く感じる	0	1	2	3
26. 毎日が楽しい	0	1	2	3
27. 細かいことが気にならなくなった	0	1	2	3

問６　次の質問は、あなたの現在のお気持ちについてお伺いするものです。あてはまると思われる番号に〇をつけてください。

１．年をとるほど物事は悪くなると思いますか

　　１．そう思う　　２．そう思わない

２．去年と同じくらい元気ですか

　　１．は　い　　２．いいえ

３．淋しいと感じますか

　　１．感じる　　２．感じない

４．今年になって前よりもささいなことが気になるようになりましたか

　　１．は　い　　２．いいえ

５．友人や親せきによく会いますか

　　１．は　い　　２．いいえ

６．年をとるにつれて役に立たなくなると思いますか

　　１．そう思う　　２．そう思わない

７．心配だったり、気になったりして眠れないことがありますか

　　１．あ　る　　２．な　い

８．年をとるということは、若い時に考えていたよりも良いと思いますか

　　１．良　い　　２．悪　い

9．生きていても仕方がないと思うことがありますか

1．あ　る　　2．な　い

10．今、若い頃と同じくらい幸せと思いますか

1．そう思う　　2．そう思わない

11．悲しいことがたくさんありますか

1．あ　る　　2．な　い

12．いろいろなことを心配しますか

1．は　い　　2．いいえ

13．以前より怒ることが多くなりましたか

1．は　い　　2．いいえ

14．生きることは自分にとって大変なことと思いますか

1．そう思う　　2．そう思わない

15．現在の生活に満足していますか

1．は　い　　2．いいえ

16．物事を深刻に考える方ですか

1．は　い　　2．いいえ

17．ちょっとのことでオロオロする方ですか

1．は　い　　2．いいえ

問７　最後にあなたご自身についてお伺いします。以下はここまでのご回答を分析するために必要な質問ですのでよろしくお願いします。

① 年齢：　＿＿＿＿＿歳

② 性別：　０．男性　　１．女性

③ 配偶者はいらっしゃいますか：　０．い　る　　１．いない

④ 既婚の子どもとは同居されていますか：　０．同居している　１．同居していない

⑤ お住まいの地域を下記のように**２つに区分**するとすれば、どちらの地域に属しますか。

０．都市または都市近郊地域　　１．農村地域

⑥ あなたにとって、「人生の危機」と思われるような病気の経験はありますか。〔　〕内に記載するような病気の経験がある方は、個々の病名を１つとして加算し、その合計に該当する番号に○をつけてください。

〔 脳血管疾患（脳梗塞、脳出血等）、心臓病（心筋梗塞、狭心症等）、肺疾患（肺炎・気管支炎等）、がん、その他の難病 〕

０．な　い　　１．１つある　　２．複数ある

⑦ おおむね過去５年の間に、あなたにとって「人生の危機」と思われる下記のような経験をされたことはありますか。該当するすべての番号に○をつけてください。

１．自身の重い病気　　２．親しい友人・近親者の重い病気
３．親しい友人・近親者の死　　４．大切な人との別れ
５．その他（　　）

⑧ あなたが最後に卒業なさった教育機関は、次のどの区分に該当しますか。あてはまる番号に〇をつけてください。

１．尋常小学校・高等小学校・国民学校、新制の小学校
２．旧制中学校・高等女学校・実業学校、新制の中学・高校
３．旧制高校・専門学校・高等師範学校・師範学校・大学、新制の専門・高専・短大・大学・院
４．上記１～３の例示に該当するものがない場合　（　　学校）

⑨ あなたの今の「暮らし向き（家計）」について、現時点で評価するとすれば、どのように感じておられますか。あてはまると思われる番号に〇をつけてください。

１．大変苦しい　　２．やや苦しい
３．ふつう　　４．ゆとりがある

以上で質問は終わりです。

〇調査へのご意見・ご感想がありましたらご自由にお書きください。

調査へのご協力をどうもありがとうございました。

ご回答の記入もれがないかお確かめのうえ、同封の返信用封筒（あなたのご住所・お名前の記入は**不要**です）に入れてご返送ください。

インタビュー データ：事例 ― コード・マトリックス表（要約版）

ID	研究協力者	類型	背景的変数(属性等)												老年的超越下位尺度得点								〈老い〉に対する東洋的態度の下位尺度得点							主観的幸福感
			性別	年齢	配偶者	同居既婚子	教育歴	居住地	交流頻度	暮らし向き	健康度	活動性指標	重篤な病気	人生の危機	ありがたさの認識	内向性	脱二元論	宗教・スピリチュアル	脱社会的自己	基本的肯定感	利他性	無為自然	＜老い＞の知恵	自然への親近感	運命の受容	＜老い＞の深まり	囚われのない自由	内面への旅	不二性	
1	A	I	女性	92	いない	いる	中等	都市	2	普通	不健康	3	あり	3	8	8	9	12	11	8	7	9	15	4	9	10	6	3	4	11
3	B	I	女性	75	いない	いない	高等	農村	16	普通	不健康	13	なし	0	8	5	9	11	7	7	7	9	21	10	7	11	5	6	5	8
6	C	I	女性	88	いない	いる	中等	農村	10	普通	健康	13	あり	2	9	9	6	6	12	12	8	3	12	12	9	10	0	3	6	13
7	D	I	男性	84	いる	いない	高等	農村	6	普通	健康	13	なし	2	6	5	6	6	5	8	6	5	12	8	6	8	4	6	4	12
12	E	I	女性	88	いない	いない	高等	都市	5	普通	健康	11	あり	2	7	7	4	7	4	10	6	7	17	7	9	10	3	4	4	11

ID	研究協力者	類型	コード(概念的カテゴリー)					
			生きた時代	幸福観	性格・自己観・人間観等	無為自然	自然・芸術に共感する心	回想
1	A	I	・青春時代は戦争一色。楽しい思い出は一つもない。 ・戦後は食糧難。ところが警察署には十分な食べ物が。世の中の理不尽さを実感。 ・終戦直後に結婚したが、家族を養っていくのに必死。子供がいたからやってこれた。	・3人の子供が社会人になってからは家計も楽になり、よく旅行に行っていたと聞かされるが、今は記憶にない。 ・現在施設に入所、みんな良い人なので、喧嘩もなく幸せ。子供や孫が会いに来てくれると嬉しい。 ・3人の子供が家庭を持ってくれたこと。今は幸せ。	・楽天的 ・ボケ防止に新聞をよく読んだが、今は目が悪くなって読めなくなった。 ・日野原、五木、寂聴さんの本をよく読んでいたので、「老い」を受け入れる心構えはできていたつもり。しかし難しいこと。	・「あるがまま」ということかな。 ・尤も何かやろうとしても、この体ではどうしようもない。	・自然が好き。野の花が好き。青い空・白い雲、変化があって見飽きない。 ・山や風景写真を見ることが好き。	・自らすすんで思い出に更けるようなことはない。
3	B	I	・実家は医者。よく父の往診に同行。 ・家には、いつも食べるものがあり、戦争のつらい記憶はない。 ・栄養士の資格をとり、父の往診の手伝い。 ・父は分け隔てなく人と接することができる人。 ・いつも家族会議。父が意見を述べ、母がまとめる。この習慣が今の自分にも生きている。	・子供の頃は気づかなかったが、長男を生んだときに幸せを感じた。 ・主人が死に郷に帰ったが、父母も死に13年後にまた丹後に戻る。人も自然も温かく迎えてくれ嬉しかった。 ・年とともに力が衰えてきたので、ささやかなことにも幸せを感じるようになった。	・医者としての父は人を差別しなかった。自分は父の性格、やり方を受けつぐ。 ・嫌なことは忘れる。良いことだけを覚えておく。 ・わがままなので、良い忠告は受け入れるよう務めている。 ・役を引き受けたからには責任を果たす。		・丹後の海には励まされる。 ・父とよく山を歩いたので自然が好き。 ・絵画には昔から関心あり。話題になったものは遠くても展覧会に行く。	
6	C	I	・実家は信仰寺。賽銭で生活。 ・子供の頃、父から強く叱責されとき、母が機転をきかせ助けてくれた。 ・大水害のとき母が人と接する態度をみて、子供心に人のことを心配する人間になった。 ・いくら見識は高くても行動が伴わない人間になりたくないと思ってきた。	・宗教人なので、人の幸福を考える立場。押しつけでなく、どう生かしていってあげようかと考える。弱い者はかばう。 ・人から慕われる人間でありたい。 ・自分の夢は、来てくれた人に安心感を与え、喜んで帰ってもらうこと。 ・人と親しく接し、楽しい人生を送りたい。 ・自分の時間を過ごせる場所が欲しい。	・自分で自分の欠点はわからない。人から言われて反省するもの。 ・区別するから問題が起こる。ものごとは、"ぼんやり"させた方が、陰陽の対立が避けられる。	・無為自然というのは、自然体でいい場合もあるが、ときには積極的にこれを受容し状況を変えていくことが必要な場合もある。	・芸術的なものには、若いときから関心あり。老いて、なお熟成させていく心境。	
7	D	I	・小学校卒業のときに真珠湾攻撃。まさに軍国教育の世代。戦中・戦後は食糧難。 ・戦中は人間としての知的な欲望が満たされず。 ・戦後は精神文化が否定され行き過ぎもあったが、科学的になり明るくなった印象。	・安定した経済基盤の上に、第一は健康、次は欲望に従って行動できること。 ・年相応、体力に応じて、楽しみをみつけていく。 ・人間関係も重要、人との交流を通して刺激も受ける。	・外向的 ・戦前教育の影響が残るのか、革新的な思想も心底からは精神的なベースとはなり得ず。 ・優柔不断というのか、人間が甘いのかも。悪口を言われることがない。 ・今になって思うと、父より母のほうが人間的には偉かった。よく働いて家庭を守っていた。	・「がんばらない」ということには共感。 ・"そうがめつく働かんでも"とは思うが、坊さんみたいな悟りは難しい。	・この年になって、共感する心は増してきたように思う。	・子供を1歳で亡くしたこと、親しい友達を亡くしたこと、時々思い出すと悲しい。 ・未来志向的な回想をすることはない。
12	E	I	・小1のとき(S12年)二・二六事件を経験。 ・学校では好戦的な教育。戦争に負けるなど思わなかった。 ・病院で子供が機関銃に打たれて死ぬのを目撃。ショックだった。先生からは口外を禁じられ、それ以来、友達同士でも人を疑うようになった。		・戦時中でも、"がんばれ"とは言わず、"君たちはかわいそうだな"と言いながら大きなアゲハチョウの絵を食堂の壁に張った先生がいた。当時、意味は分からなかったが、自分が教師になって、それが戦争の悲惨さを象徴する映画(「西部戦線異状なし」)の一場面であることを知った。 ・戦争の最中にこのような勇気ある先生に接したことが私の誇りであり、心の支えにもなった。		・小学生のときの引っ越しがきっかけで自然に触れたことから理科好きに。 ・自然につながる体験はその後の自分の考え方にも影響。	

ID	研究協力者	類型	コード(概念的カテゴリー)					
			人生の危機	無常観・死生観	宇宙的感覚 (命の連鎖)	共時的体験 (夢と現実の一致)	時間認識	空間認識
1	A	I	・色々あったと思うが(2回の大手術)、思い出せない。 ・子供がいたから乗り越えられたと思う。	・死は怖くないといえば嘘になるが、誰にでも訪れるもので受け入れるよりしょうがない。 ・早くお迎えが来てほしいと思うこともあるが、あの世はどんな所かわからないので不安を感じることもある。	＜問い:各欄共通＞ 「太陽」と「月」、どちらに親近感を覚えるか? ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ・「月」に親近感。月が丸いこと、夜空に浮いていることが不思議。 ・世代(両親・子供)との繋がりを強く意識することはない。	・ない	＜注釈:各欄共通＞ 過去:これまで生きてきた時間 現在:生きている今 未来:このあと生きるであろう時間 自己評価:サークルの大きさ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ・過去のことは、ほとんど忘れた。今のこともすぐに忘れる。未来のことなど考えられない。情けない。 ・何をしているのかはわからないが、退屈と感じることはない。	＜注釈:各欄共通＞ 近景:自分や家族の問題 中景:地域や文化 遠景:神仏や宇宙などの聖性 自己評価:サークルの大きさの順 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ・見当識障害あり。
3	B	I	・5歳の女の子を亡くした悲しい思い出。	・仏教には関心がある。無常感がないと人は生きていけない。 ・一人で家にいると、"このまま死ぬんではないか"と思うこともある。車に乗るので、ダンプにぶつかれば即死。主人が守ってくれている感覚。 ・主人の死、娘の死、はっきりと記憶に残っている。	・「月」に親近感。 ・月や星をよく見る。心が安らぐ。		・過去・現在・未来との間に境界は感じない。	・中景を重視
6	C	I	・S字状結腸癌で手術。人工肛門を自分で処理できる間はよいが、将来は不安。 ・身障者は交通費が半額。このチャンスを使っていろんなことを習得した。 ・三十三観音巡りでは、みんなに助けられて、"お陰さま"を実感した。	・人は死んだら仏になる。 ・神仏の加護はあり、人は助けてもらっている。	・神は宇宙に存在するもの。だから、自分が宇宙に包まれている感覚がある。		・現在を重視。 ・過去は苦労した思い出。母親のしつけに感謝。 ・未来のことはわからない。	・中景＞近景・遠景
7	D	I	・現役時代、脳内出血で1週間、記憶を失う。 ・前立腺がんの治療を経験したが、今は緩解。	・社会や人生はそういうものと思う。 ・まだ死にたくはないが、病気を自然に受け入れる覚悟はできている。 ・80年生きてきたので、今さら人生観が変わることはない。 ・「風にそよぐ葦」のような生き方。底流で自分の人生観・死生観にも影響している。	・月に親近感。月は日本人の心の底流にあるもの。 ・魂の存在を思うこともあるが、自分は無神論者。しかし、信心を馬鹿にしたり、軽蔑したりはしない。人智の及ばないものはあると思う。	・現実的なのか、明恵上人のような正夢の経験はない。	・現在＞過去＞未来	・中景＞近景・遠景
12	E	I	・H6年頃、がんの宣告を受けた。ところが実際はそうではなかった。 ・30代の終わりに腎臓病を罹患。これも、寝ていたら治った。 ・骨折してもすぐ治る。病気には強い体質なのかも。					

ID	研究協力者	類型	背景的変数(属性等)												老年的超越下位尺度得点								〈老い〉に対する東洋的態度の下位尺度得点							主観的幸福感
			性別	年齢	配偶者	同居既婚子	教育歴	居住地	交流頻度	暮らし向き	健康度	活動性指標	重篤な病気	人生の危機	ありがたさの認識	内向性	脱二元論	宗教・スピリチュアル	脱社会的自己	基本的肯定感	利他性	無為自然	＜老い＞の知恵	自然への親近感	運命の受容	＜老い＞の深まり	囚われのない自由	内面への旅	不二性	
15	F	Ⅰ	女性	88	いる	いない	高等	都市	12	普通	健康	13	なし	2	8	5	6	7	4	10	7	5	15	11	7	8	8	7	4	9
平均				85.8					8.5			11.0		1.8	7.7	6.5	6.7	8.2	7.2	9.2	6.8	6.3	15.3	8.7	7.8	9.5	4.3	4.8	4.5	10.7
SD				5.9					5.1			4.0		1.0	1.0	1.8	2.0	2.6	3.5	1.8	0.8	2.4	3.4	2.9	1.3	1.2	2.7	1.7	0.8	1.9
2	G	Ⅱ	男性	86	いない	いない	高等	都市	9	普通	健康	10	なし	1	8	4	4	6	10	9	7	8	17	10	5	7	5	7	6	17
5	H	Ⅱ	女性	94	いない	いない	中等	農村	13	普通	健康	13	あり	1	8	9	7	10	11	11	7	9	17	10	9	12	8	9	5	14
8	I	Ⅱ	女性	81	いない	いない	中等	農村	21	ゆとりがある	健康	13	なし	1	7	6	7	8	8	10	6	3	17	11	7	9	5	7	6	16
9	J	Ⅱ	男性	81	いる	いない	中等	農村	22	普通	健康	12	なし	0	6	6	6	8	8	6	2	8	16	10	9	10	7	3	4	13
10	K	Ⅱ	男性	79	いる	いない	高等	農村	5	普通	健康	13	あり	1	7	5	5	8	7	6	6	6	16	8	6	7	5	4	4	12

ID	研究協力者	類型	コード(概念的カテゴリー)					
			生きた時代	幸福観	性格・自己観・人間観等	無為自然	自然・芸術に共感する心	回想
15	F	Ⅰ	・父は実業家で裕福、幼少のときは幸せな家庭。 ・小5のとき大東亜戦争が始まる。大分の中津に疎開、ここでも空襲、女学生も動員。 ・爆撃の恐怖。絶対、戦争してはいけない。 ・戦後、東京の上級学校へ。NHKに受かったが父から許可が出ず四国で先生に。PTA活動に参加。 ・この時代の者は、皆波乱万丈の人生を生きてきた。	・自己解放感(ありのままの自分を見せることができるようになった解放感)。 ・物質的ではなく、格好つける必要もないという意味での幸福観。 ・古典文学が専門、謡を習った。この趣味は主人とも同じ。	・外向的 ・合理的で、物事を計算して考える。 ・自由に育ったため人の気持ちがわからなかった。思いやりがなかった。この年になって、人間は生かされているんだな、としみじみと思う。 ・"わがまま"ではない今が、気持ちの上でも心地よい。	・学生時代、老子、荘子、孟子を勉強。 ・老子はすべてを含む。孔子より老子が好き。孔子は、あまりにも道徳的。	・若いときは、テクニックや曲の作り方の素晴らしさに感心したが、今はどんなことにも感動する。全部を吸い込めるようになった。 ・下手でも一生懸命やろうとする心に感銘を受ける。原始に帰った気がする。	
平均 SD			―――	―――	―――	―――	―――	―――
2	G	Ⅱ	・幼少年時代は戦争。 ・中1の夏に終戦、食糧難。 ・戦後教員になるため英文科へ進学。 ・人を教える立場になって、便利・物・金を求めて競争ばかりしている文明のあり方を考えるようになった。	・今は一人で生活。健康に不安はあるが、今が一番幸せ。 ・幸福観は文化を大事にする生活のなかにあるのではないか。文化とは共同社会での人々の生き方だから。	・生きることは死ぬこと、死ぬことは生きること。 ・人間、発生源を辿れば「ホモサピエンス。なのになぜ殺し合う。戦争はいずれ地球を破滅させる。		・西洋の自然は征服の対象、日本は六根清浄、山紫水明、自分には自然に対する親近感がある。 ・年とともに芸術的なものへの共感力は増している。	
5	H	Ⅱ	・幼少の頃、実家では分け隔てなく生活。人情のありがたさはその頃に身についた。 ・戦時中は、女学校が終わってすぐに女中に出される。楽しい思い出など何もない。 ・お金があっても食べるものがない。父に言われるまま農家に嫁入り。実家は裕福だったが、ここに来てからは大変だった。 ・今も戦争があちこちで頻発、戦争を経験した者が黙っていてよいのか。平和な生活につながるようにとの思いから、80歳になったときウイングス(女性の会)を立ち上げた。	・幸福観は、時々の状況によって感じ方は変わるが、根っこは同じと思う。自分は十分に生きた、今は幸せ。 ・母は家の中をまるく収める人だった。私は母の背中を見て育った。「川を逆さまに流すことはできん」。母が教えてくれたこと。気持ちが楽になった。 ・毎朝、氏神さんに参る。信仰心の強い母の思いを引き継いでいる。 ・今は一人で生活、皆が大事にしてくれる。	・外向的。「手は握っていては何もつかめない、開くのが先」。相手の立場に立って考えてみると、世の中うまくいく。 ・若い頃から、しかけたことは途中で止めなかった。頼まれた役を断ったことはない。 ・人とは思いが違うことがあっても、自分はどう生きるかを考える。そうすれば、何が来ても、どうということはない。	・なるようになる。 ・先のことは色々言っても、人の力なんかしれたもの。自然の力、災害、あんな恐ろしいことが現実に起こる。	・自然はいい、親近感がある。山に行くと、木があり、この木が元気で、花が咲いたりすると、そこで対話ができる。 ・今でも展覧会があればよく見に行く。 ・年をとってより共感するようになった。 ・2年前には三味線を始めた。	・子供の頃のこと。みんなと仲良く遊んだ楽しい思い出。
8	I	Ⅱ	・子ども時代は朝鮮で戦争経験。1年生のとき釜山から下関へ引き上げ。魚雷の怖さが身に沁みた。2年生で終戦。 ・終戦から物のない時代を経て、やっと高校に入れてもらって両親に感謝。 ・農家に嫁いで子供にも恵まれ、一生懸命働き、やっと自分の人生が来た。 ・終戦直後の食糧難。だからこそ物を大切にし、家族を大切にしてきた。今ある人生に感謝。	・戦争の辛い経験が今の幸せを実感。 ・健康であることを宝物として幸せに暮らしている。食べたいものが作れる幸せ。 ・草引き、庭木の剪定、生活の目標ができた。 ・体の変化は受け入れて、流れに沿ってやっていくよりしょうがない。自分の思いを状況に合わせて変えることで喜びにつながる。	・内向的。人見知りが激しい。つき合いが下手。つい後ろを向く。それでも以前よりは柔らかくなった。 ・積極的ではないが、地域とのつき合いはする。 ・自分が「そうなりたくはない」と思う年寄りにはならないように心がけている。	・もう「がんばる」のはごめん。できることだけをすればよい。	・40代の頃、コーラスが好きで合唱団に憧れた。3年ほど前まで続けてきた。 ・若い頃は洋楽のコンサートにも行っていたが、今は、日本的なものの方が気持ちが落ち着く。	・よくする。苦しかったことの回想が多い。忘れたらよいのにと思うのだが…
9	J	Ⅱ	・戦時中は労働力不足で、子供も農業の手伝い。 ・戦後、家族分以外の食べ物はみな供出。 ・戦争はこりごり。とても良き時代ではなかった。 ・戦後の解放感。自然が子供の遊び場。けんか、悪さ、魚とりくらいしかすることがなかったが、良き時代だった。	・月に一度の仲間との飲食が楽しみ。 ・80歳は一つの峠。心身ともにどうにもならんこともあるが、この年まで来れたことは幸せなこと。 ・この先、長生きすることが幸せなのかわからない。あとは病院から施設へ、そこで死を迎える。家族と離れるのは寂しいもの。 ・自分らしく生きられれば、幸せを感じられるのでは…。	・若い人が一生懸命やってくれるよう、年寄りは角が立たんように気を使っている。	・できないことは成り行きに任せる。 ・お迎えが来ればしょうがない。自然界の摂理、自分だけあがいてみても何もできない。	・終戦直後は、田舎の学校では芸術文化に触れる機会はなかった。	・振り向いたところで過去へは戻れない。前を見て進めということ、過去を嘆いても始まらない。
10	K	Ⅱ	・S15年生まれ。終戦直後は、学校は厳しかった。家に帰ると桑の木の皮むき、田んぼでずい虫取りをさせられた。 ・遊びは、山の中を走り回っていた。 ・食べるものは、サツマイモ、茎、葉っぱ。	・昔と比べ生活が格段に便利になったのは、幸せなこと。 ・仲間との飲み会が楽しみ。	・現役時代の感覚が抜けきらない。 ・引退後は人間関係が大事。			

ID	研究協力者	類型	コード(概念的カテゴリー)					
			人生の危機	無常観・死生観	宇宙的感覚 (命の連鎖)	共時的体験 (夢と現実の一致)	時間認識	空間認識
15	F	Ⅰ	・子供は優秀だったので苦労はなかったが、学術調査中のケニアでひき逃げに遭う。ロンドンに搬送・手術、ダメなら自分も死のうと思った。	・どんなにお金があっても、結局は人間は死ぬんだな、と思うと安心する。だから、今の幸せ感が強い。 ・まだ死を受け入れてはいないが、生きているということが素晴らしく思える。 ・死んでしまえば終わりと思うが、私を人々が忍んでくれるということが、魂が残るということ。残された人の記憶に定着したものが魂。だから、ちゃんと生きなければと思う。	・人間は宇宙の一員で、一体のもの。 ・古典文学のテーマは月。スペインのトレドで見た満月も日本で見る「月」も同じ。	・息子がケニアで事故に遭う前々日に赤ちゃんになっている夢をみた。それから3日後に事故の電話がかかってきた。 ・偶然には意味があると思う。夢をおろそかにはできない。	現在＞過去＞未来 ・10年前に「居場所」を始めたので、近未来のことは気になる。	・中景＞近景＞遠景
平均 SD			―――	―――	―――	―――	―――	―――
2	G	Ⅱ		・生まれたものはすべて死んでいく。 ・死んだら地獄か天国に行くと人は言う。しかし、帰ってきた人はいないし、考えてもしょうがないこと。	・「月」に親近感 ・宇宙は陰と陽が関係していて、インドの思想を思わせる。 ・宇宙の大きさも、脳の判断による。だから脳が判断を誤れば大変なことになる。		・過去・現在・未来、そんなものはない。脳が区別して感じているだけ。実体は「無」。	
5	H	Ⅱ	・54歳のとき11か月入院。病気になったことで色々と思うことがあった。 ・健康のために「歩く」ことを始めた。今でも続けている。	・人は、100歳より長くは生きられない。いつかは死ぬ。 ・形はなくなるが、魂の存在は感じる。(一身近な人だけではなく、他者との繋がり)	・「月」に親近感。月には、自分の人生までもが投影されているように感じる。 ・インドネシアで見た大きく赤い太陽に宇宙を感じた。			・中景＞近景・遠景 ・母の影響が大きい。
8	I	Ⅱ	・健康に恵まれたので、そういう経験はない。	・先月、姉を亡くす。順番が回ってきていると感じる。仕方ないこと。 ・車に乗るので、いつ事故に遭うかもしれない。最近は自然災害も。 ・理想は、麦わら帽を被って草引きをしながらパタッと死にたい。 ・10年前に亡くなった主人が近くにいるような気がする。腹の立つこともあったが、今は感謝の気持ちで一杯。	・農業をやってきたので太陽とともに生きている。「太陽」に親近感。	・ない	・過去＞現在＞未来	・近景＞中景＞遠景
9	J	Ⅱ	・持病はあるが、入院したことがない。 ・死生観というほどのものはない。 ・親の死に際しては、何もできなかった無念さが残る。	・この世は仮の宿。たまたま縁があって居るだけ。死は、それほど深刻に考えることではない。 ・魂は残ると思う。この世にあるか、あの世にあるかの違いだけ。生と死はスパッと断ち切れるものではない。 ・人が亡くなると情けが移る。あの世ではもっと幸せなことがあるかもしれない。	・「月」は身近にある感じ。 ・星には神秘性があり、夜空を見上げることが多くなった。		・現在をどう生きるかが中心 ・過去は見ないようにしている。この年になると未来はない。	・中景＞近景＞遠景
10	K	Ⅱ	・顔面手術の経験、完治後3年かけて西国霊場巡り。以後人生観がプラスの方向に変化。 ・酒を飲むだけだった生活から、飲んでも悠々と構えておれるようになった。				・現在＞過去・未来	・近景＞中景＞遠景

ID	研究協力者	類型	背景的変数(属性等)												老年的超越下位尺度得点								〈老い〉に対する東洋的態度の下位尺度得点							主観的幸福感
			性別	年齢	配偶者	同居既婚子	教育歴	居住地	交流頻度	暮らし向き	健康度	活動性指標	重篤な病気	人生の危機	ありがたさの認識	内向性	脱二元論	宗教・スピリチュアル	脱社会的自己	基本的肯定感	利他性	無為自然	＜老い＞の知恵	自然への親近感	運命の受容	＜老い＞の深まり	囚われのない自由	内面への旅	不二性	
16	L	Ⅱ	女性	82	いる	いない	高等	都市	13	普通	健康	13	なし	2	6	8	7	6	9	7	8	3	17	8	6	11	2	8	6	11
平均				83.8					13.8			12.3		1.0	7.0	6.3	6.0	7.7	8.8	8.2	6.0	6.2	16.7	9.5	7.0	9.3	5.3	6.3	5.2	13.8
SD				5.5					6.6			1.2		0.6	0.9	1.9	1.3	1.5	1.5	2.1	2.1	2.6	0.5	1.2	1.7	2.1	2.1	2.3	1.0	2.3
4	M	Ⅲ	女性	82	いる	いない	中等	都市	18	ゆとりがある	健康	13	あり	3	8	5	1	8	12	7	6	8	16	5	8	10	5	3	5	17
11	N	Ⅲ	男性	81	いる	いない	中等	農村	13	普通	健康	13	あり	1	8	4	5	8	4	9	7	6	11	9	6	9	3	4	5	15
13	O	Ⅲ	女性	86	いない	いない	高等	都市	8	普通	健康	13	あり	2	9	8	8	8	7	12	7	6	20	8	8	11	3	2	5	16

ID	研究協力者	類型	コード(概念的カテゴリー)					
			生きた時代	幸福観	性格・自己観・人間観等	無為自然	自然・芸術に共感する心	回想
16	L	Ⅱ	・S11年東京生まれ。父がすごくかわいがってくれた。 ・5歳のとき弟が誕生。このときが父の3回目の出征となり、背広を着て寂しく雨の中を歩いて遠ざかっていく後ろ姿を今でも覚えている。 ・2年生の終わりに学童疎開、寂しかった。 ・3年生で終戦。満員の夜汽車で京都へ。リックを盗まれ食べ物なし。 ・21年夏に父戦死の連絡。この頃から、戦争は二度としてはいけない気持ちが芽生えた。 ・京都では馴染めなかったが、学校の先生に作文を褒めてもらったことが嬉しかった。 ・手に職をという母の思いを受け、結婚後も看護師の仕事を続けてきた。	・仕事では、何事もなく勤め上げられたことが喜びであり充実していた。 ・退職後は、シニア大学に通い、立原道造詩人の会では東京の友達もできて幸せを感じていた。 ・夫とよく行った上高地も多くの思い出がある。 ・夫が体調を崩してからは、老老介護はしんどいと思うこともある。	・内向的なほうだが、専門的なことに対しては外向的。看護師は天職と思っていた。 ・合理的に考えるほうだが、主張しすぎて対立するのは好まない。 ・苦労して3人を育ててくれた母には尊敬の念がある。	・無為自然ということには共感する。 ・何事もがんばりすぎないように心がけている。	・若いときから、詩、文学に関心があったが、今もそれは変わらない。 ・立原道造の『村暮らし』を今でもそばにおいて読み返す。情景が心に浮かんできて、いいなと思う。	・戦争中のことを孫に話す。苦しかった時代があったことはちゃんと伝えておかなければと思う。 ・主人とは時々戦争の話をすることがある。
平均 SD			―――	―――	―――	―――	―――	―――
4	M	Ⅲ	・11歳のとき、上海から引き揚げ。上海では裕福な生活だったので、戦争の厳しさの実感はない。 ・しかし帰国後の生活は大変、厳しい食糧難 ・中学のときに肺結核を罹患し高校進学を断念。高卒に負けたくなかったのでよく勉強した。 ・青春時代は良いことは何もなかったが、結婚してからよくなった。 ・戦後の厳しい時代のことを思えば、少々のことは辛抱できる。	・60歳で定年になってからは、好きなように楽しんでいる。人のまねはしない。 ・夫婦そろって健康で、お金の心配もなく過ごせるのは幸せなこと。なんの束縛もなく、好きな時間を過ごせる現在は一番幸せ。毎日、予定がいっぱい。	・外向的。くよくよしない。何があってもしょうがない。明日になったらまた変わる。 ・子供の頃の経験は性格に影響。少々のことではめげなくなった。 ・頼まれたことは引き受ける。"あんたならできる"と言われると、つい調子に乗ってしまう。 ・お寺とのつき合いはするが、信仰は持っていない。	・「あるがまま」ということ。あとは野となれ山となれ。 ・「どうにもできない手術台に乗った気分」かな。もう経験したくないが…。	・趣味はコーラス。もともと芸能は好き。大衆演芸の追っかけをやったこともある。 ・月1回は、演芸を聞きに行く。	・ほとんどしない。
11	N	Ⅲ	・S13年生まれ。子供の頃は百姓の手伝い。 ・通学途中に空襲警報、あんな時代はもう"コリゴリ" ・S19年小学校入学。終戦直後は、食糧難で校庭にも食べ物を植えた。 ・戦後はスパイ上がりの先生がいて、面白い話をよくしてくれた。	・勤めていたときの人間関係を大事にしている。ゴルフ、酒を飲みに行くこと。今はそれくらいしかすることがない。 ・夫婦二人だけになると、心配することがない。家族の心配事があったときのほうが幸せ感があった。	・仕事柄、人とのトラブルを避ける習性が身に沁みている。表立ったことはしない。	・まだ、そういうことを思わないが、80歳になる頃が境目となるかも。	・あまり関心がない。	
13	O	Ⅲ	・5歳のとき父の織物工場がつぶれ、みんな働きに出たので、自分だけ家に残され寂しい思いをした。 ・何とか高校は卒業。洋裁が好きだったので自立しようと思い、大阪の乳児院に勤めながら、夜は洋裁学校へ通った。 ・戦後、学校では土地の者でないのでのけ者にされた。今日一日が過ぎれば、明日は何とかなると思っていた。 ・洋裁学校に入りたくて、S30年代にアメリカへ渡る。行きたいと思ったら止まらない。 ・5年後に帰国、洋裁は興味がなくなり公設の保育園で10数年働く。その後は、知的障がい者の施設や重度の養護施設で働いた。昼も夜もなかったが苦にはならなかった。 ・退職後は好きなことをしようと思い、高齢者支援に関わるボランティアに応募。	・戦時中でも、親がいるから辛くはなかった。 ・アメリカでの生活は夢がかなって楽しかった。これが本当の民主主義、日本はなんと勝手な国かと感じた。 ・ボランティアでパキスタンにも行った。子供がかわいい。世界中、人はみんな一緒。今は友人もでき日々平和に過ごせて幸せ。何も辛いことがない。	・小さいときは内向的。だんだん外向的になった。抵抗なく切り替えができるタイプ。そうすると自然と道がつながる。 ・若いときは劣等感で落ち込みがひどかった。アメリカに行ったことで人生を変えることができ、劣等感が消えた。 ・友達に支えられつつ一人でやってきたので、一人でいるほうが気が楽。周りの人との人間関係は大切にしている。 ・結婚はせず必死でやってきたが、恥ずかしいことはしていない。 ・性格は父に似ているのか、心配性ではない。あれこれと考えてもしょうがない。なるようになる。	・できなくなったことを嘆いてもしょうがない。今を大事にして、人に迷惑をかけないように生きていく。 ・自然に任せて、自分にできる範囲で楽しく、それだけで十分。	・若いときはアートに関心。今は、共感する友達と見に行くことも。 ・この年になって、本が好きになった。	・楽しかったことを思い出す。嫌なことは思い出さないようにしている。 ・未来志向のための回想をすることはない。

ID	研究協力者	類型	コード(概念的カテゴリー)					
			人生の危機	無常観・死生観	宇宙的感覚 (命の連鎖)	共時的体験 (夢と現実の一致)	時間認識	空間認識
16	L	Ⅱ		・「あるがまま」でよい。 ・死ぬと「無」になるのは仕方がないこと。死を受け入れられると思う。 ・戦争になって人が死ぬのは困る。私が死んでも、子孫には「おばあちゃんがこんなこと(戦争の悲惨さ)を話していたな」と思い出してほしいと願う。	・「太陽」に親近感。その光と影に惹かれる。 ・月はロマンティックだけれど、太陽は生き生きとしている。		・現在・過去＞未来 ・今はしんどいので、「現在」のサークルが大きい。	・近景＞中景＞遠景
平均 SD			―――	―――	―――	―――	―――	―――
4	M	Ⅲ	・大きな病気を経験し、健康のありがたさを実感。このことでむしろ元気になった。 ・いつ何があってもしょうがないと思える。だから何でも好きなことをしたい。 ・ここまで生きるとは思わなかったが、今となっては、90歳へ欲が出てきた。	・死は、まだ先きのこと。いまだに物を買っている。 ・死んだらお終い。寝込んだら1か月くらいで死にたい。いつ死ぬのか、予感はまだない。なるべくなら長生きしたい。 ・魂の存在など考えたことはない。	・月にロマンチックな思いがないわけではないが、「太陽」に親近感。 ・宇宙とのつながりを感じることはない。	・ない	・取り立てて意識することもない。 ・その時々に合わせて身を任せてきた感じ	・近景あっての中景
11	N	Ⅲ		・まだ、そういったことは考えていない。 ・人間は儲かることなら何でもする。文化がつぶれ、人間が変わる。世の中、何か間違っていないかと思う。 ・死ねば灰になり、土に還るのは自然なこと。	・「太陽」に親近感。	・ない	現在＞未来・過去	中景＞近景＞遠景
13	O	Ⅲ	・人生の危機の経験はあまりない。 ・自身に起こるかもしれないと怖がったり、人を恨んだりといったようなことはない。	・10年ほど前は死を怖く感じたが、今は兄弟も亡くなったので別に何とも思わない。自然に死を迎えられると思う。	・「月」に親近感。 ・宇宙的な感覚はない。	・父の死も母の死も事前に夢で知った。 ・母のときは、華やかな花の夢をみた。女の声で、「母が死ぬよ」と聞こえてきた。すると兄から「母が死んだ」と電話がかかってきた。 ・父のときは、棺に入れる花が夢に出てきて、死ぬ前に死を知らせてきた。 ・私は小さいとき結核に罹患した。そのとき、すでに結核で亡くなった姉が出てきて、「あんたも死ぬよ」と言ったので、母が「連れて行かんといて！」と叫んだのを覚えている。	・現在＞過去＞未来	・遠景＞中景＞近景

ID	研究協力者	類型	背景的変数(属性等)												老年的超越下位尺度得点								〈老い〉に対する東洋的態度の下位尺度得点							主観的幸福感
			性別	年齢	配偶者	同居既婚子	教育歴	居住地	交流頻度	暮らし向き	健康度	活動性指標	重篤な病気	人生の危機	ありがたさの認識	内向性	脱二元論	宗教・スピリチュアル	脱社会的自己	基本的肯定感	利他性	無為自然	＜老い＞の知恵	自然への親近感	運命の受容	＜老い＞の深まり	囚われのない自由	内面への旅	不二性	
14	P	Ⅲ	男性	92	いる	いない	高等	都市	17	普通	不健康	13	なし	0	5	6	5	4	8	6	5	6	15	11	9	10	7	6	4	16
17	Q	Ⅲ	男性	87	いる	いない	高等	都市	2	普通	健康	12	あり	3	9	9	6	5	6	11	8	9	12	7	9	8	6	5	4	14
平均				85.6					11.6			12.8		1.8	7.8	6.4	5.0	6.6	7.4	9.0	6.6	7.0	14.8	8.0	8.0	9.6	4.8	4.0	4.6	15.6
SD				4.4					6.7			0.4		1.3	1.6	2.1	2.5	1.9	3.0	2.5	1.1	1.4	3.6	2.2	1.2	1.1	1.8	1.6	0.5	1.1

ID	研究協力者	類型	コード(概念的カテゴリー)					
			生きた時代	幸福観	性格・自己観・人間観等	無為自然	自然・芸術に共感する心	回想
14	P	Ⅲ	・S2年京都生まれ。大学まで京都。 ・戦時中は、「天皇のために死なないかん」と思っていた。 ・終戦後、世間では簡単に戦争批判。人間の気持ちというものは、ごろっと変わるものと実感。 ・日本初のウレタン繊維を作る会社の責任者を務めた。 ・ドイツでウレタンの研究開発。定年後は、中国、韓国でも仕事をした。 ・文化博物館で英語ボランティアを20年間務めた。その後は、老人のための「居場所」を妻と10年近く続けている。	・自由に生きられるというのは、見方によっては幸せなこと。 ・終戦後、謡をやりはじめて、今は長唄、三味線が趣味。能を見るのも楽しみの一つ。 ・自分の書いたウレタンのテキストが、今でも業界の教科書になっているのは嬉しいこと。	・若いときは内向的だったが、年寄りになって外向的に変化。 ・今はフレキシビリティがあり、物事には固執しない。	・若いときは荘子に共鳴、自然体が良いと思う。 ・化学をやってきたが、自分の思想(人生観)とは関係がない。	・若いときは絵に興味があり、『芸術新潮』を読んでいた。いつの間にか、わからんなりにぼんやりと邦楽、最近は洋楽も聴いている。	・断片的な思い出ぐらいで、深い回想はしない。子供のときの思い出を折に触れて懐かしんでいる程度。 ・回想には、父も母もたまに出てくる。
17	Q	Ⅲ	・S6年香川県生まれ。子供の頃は軍国教育一色。飛行場の建設現場にも動員。高2で終戦。 ・終戦後は、天皇が普通の人間になって全国を回る。何が何だかわからなかった。 ・戦後、スポーツが奨励され、テニスを始めた。しかし、大学に入ると、勝ち負けだけにこだわるテニスに疑問を感じてやめた。 ・会社に入ってからは、ゴルフ、卓球、野外スポーツを楽しんだ。 ・リタイヤー後もスポーツを続けていたが、2年前に骨折してやめた。67歳の頃、SKYに入り書道を始めた。	・この年になると、妻や子供が近くにいるのは幸せなこと。このようなことは、若いときには感じなかった。 ・いくら元気でも、年相応の後退があるのはやむを得ない。自分にできる範囲のことをすればよい。「そんなに力んでどうするの」。昔どおりのことを現在に望むことはない。	・高校時代まではテニスに熱中していたので勝負にこだわるところがあった。神や仏の力で勝つとは思えない。この考えが人生観の背景にあるのかも。 ・昔は外向的ではなかった。50歳の頃、営業に出るようになってから外向的に変わった。 ・仕事しているときはよく怒ったが、仕事を辞めてからは(無駄なエネルギーを使うので)怒らんようになった。	・何事も若い頃のようにはできないから、ある程度のことでしょうがない。無理に力を入れて頑張る必要はない。	・展覧会にはよく行った。体が悪くなってからは出かけなくなった。	・回想はしない。過去のことを思い出しても今さらどうしようもない気持ちが先にある。
平均 SD			――	――	――	――	――	――

ID	研究協力者	類型	コード(概念的カテゴリー)					
			人生の危機	無常観・死生観	宇宙的感覚 (命の連鎖)	共時的体験 (夢と現実の一致)	時間認識	空間認識
14	P	Ⅲ		・父は97歳まで生きたので、悲しい、惜しいという気持ちはない。年をとれば「しょうがないなぁー」との思いが強い。 ・偉そうな意味で言うのではないが、死は何とも思っていない。いずれ死ぬことはわかっている。ただ、好奇心というものがあるので、そのために長く生きてみたい。	・歩いているときや、一人でいるとき、ふと肩を叩かれたように感じることがある。 ・星を見ていて宇宙的な感慨にふけるようなことはない。		・「過去」のサークルが大きい。 ・「現在」は僅か。「未来」はない。	・中景＞近景＞遠景
17	Q	Ⅲ	・60代で前立腺がんの宣告を受けた。ステージ4。ショックだった。医者が諦めていたので、「最初から諦めるのはやめてくれ。もっと勉強してくれ」と言ってやった。その後20年近く生きてるので医者も驚いている。	・神は影も形もわからないので、救いを求めることはなかった。年をとったからには、もうちょっと頼らないかんのかなとは思うことも。	・太陽はカッカしているだけ、月は静かな印象。しかし月に母性愛を感じることはない。 ・長くスポーツをやっていたせいか、神や仏のように存在するのかどうかわからないものには疑問を感じる。		・現在＞未来＞過去(小さい)	・近景＞中景＞遠景
平均 SD			―――	―――	―――	―――	―――	―――